

丹波徳
免岡所
卷四

京都府立総合資料館所蔵



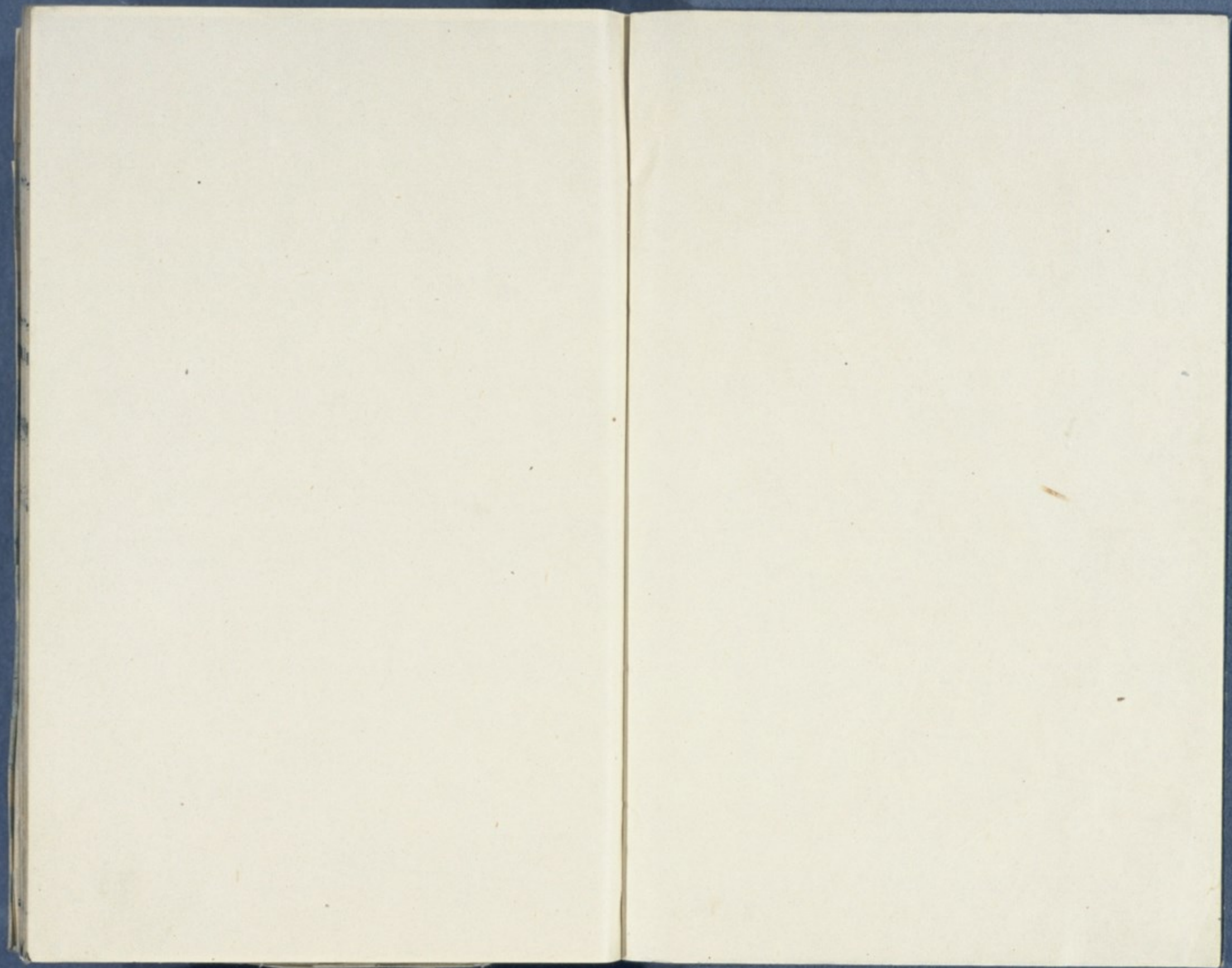
特
992
31
4

○北村先生編 丹波誌 一部拾五卷
先生に請ひて二部を淨寫し
京都帝國大學圖書館と京都
府立圖書館に各一部を寄託
す

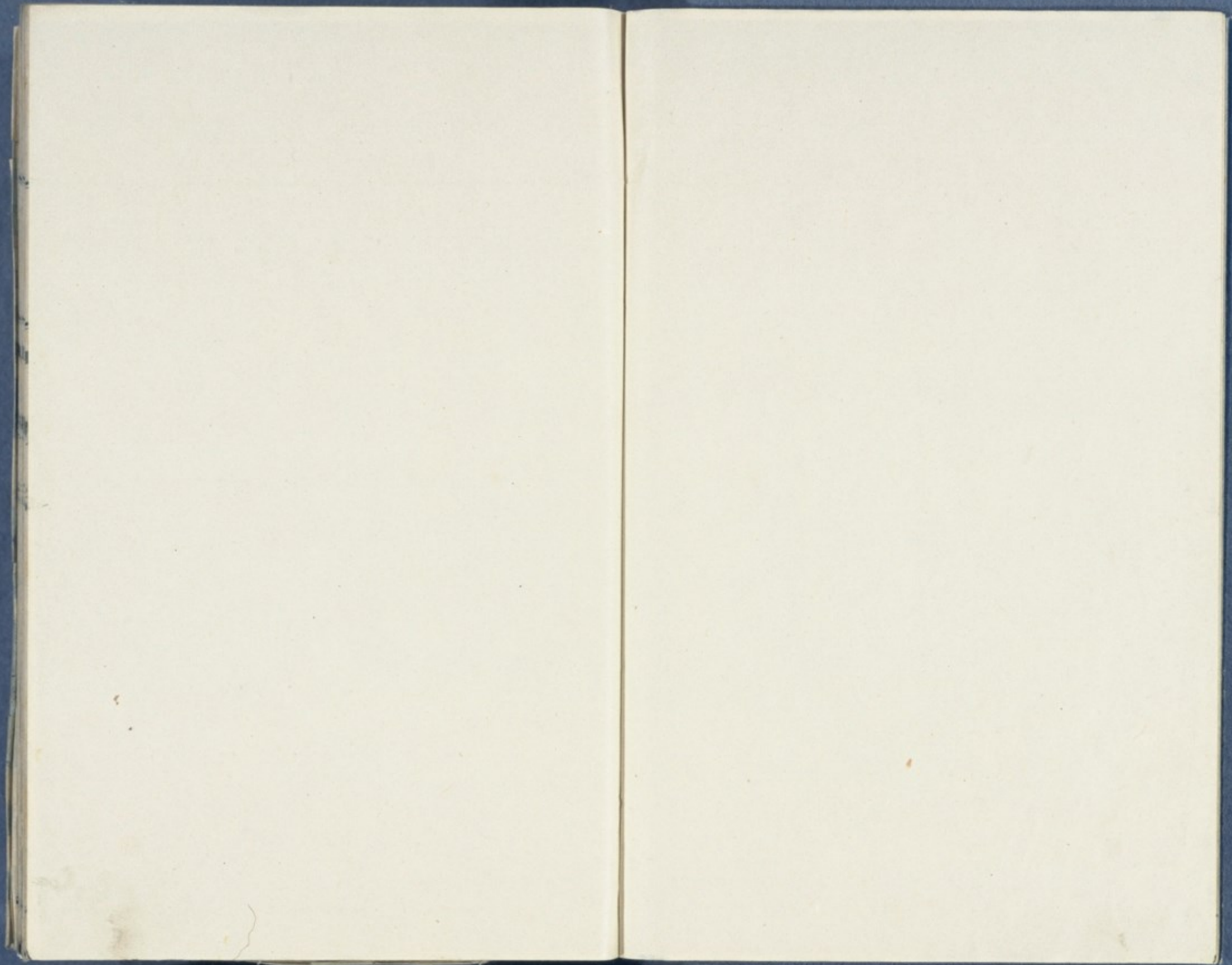
大正拾四年七月一日

北村龍象先生喜壽會

(北村先生喜壽會結末報告書を添附す)



京都府立総合資料館所蔵



京都府立総合資料館所蔵

龜岡町	大字猪坂町	東登町	西登町	古世
突抜町	横町	京町	吳服町	上矢田
田	下矢田	矢田町	旅籠町	新町
本町				
塩屋町	柳町	紺屋町	西町	荒塚
内九町				
北町	安町	追分	安町村	河原町
余部				
宇津根				
町ハ北緯三十五度一分西經四度十二分三十秒ノ				
地位ニ在リ郡ヨリ視レハ中央ヨリ稍々良位ニ偏				
シテ北ニ大溪流ヲ占メテ其ノ便ヲ得加フルニ鐵				
道ノ通ズルアリテ運輸ノ便大ニ開ケタリ				
東西				
二十二町				
南北三町				
市坊二十				
戸數千六百九				
十二				
明治二十九年				
口七千五百五十八				
日辛				

京都、六里六町 福知山、十六里三十三町 篠山、九里三十町 園部、四里二十町 綾部、十三里二十町
 和漢三才圖繪ニ曰ハク龜山巽方至京師五里 坤至篠山九里 乾至福知山十五里 艮至若狹小濱二十五里
 鐵道 嵯峨、六哩二十五鎮 八木、五哩 七條、十三哩二十五鎮 園部、九哩
 矢田神社 走田神社 形原神社
 郡役所 町役場 收稅署 警察署 郵便電信局
 區裁判所出張所 龜岡銀行 南東銀行 其ノ他二三 小學 高等小學 女學校

一町數祭ナリシヲ維新後一祭トナシ十月二十五日ヲ例祭トス
 城址 高樓粉堞一地方ノ童鎮美觀ナリシモ今ハ荒廢シテ其ノ蹟ヲ留メズ

京都府立総合資料館所蔵

亀岡町



- イ 郡役所
- ロ 郡議事堂
- ハ 町役場
- ニ 警察署
- ホ 高等小學校
- ヘ 尋常小學校
- 古 寺院
- ト 郵便電信局
- チ 區裁判所出張所
- リ 天理教會
- ル 龜岡銀行
- レ 南桑銀行
- ハ 中西商店

京都府立総合資料館所蔵

亀岡ハ地勢ヨリ見レバ國中ノ東南ニ偏シテ局促
ヲ免レズト雖ソノ昔ハ國中ニ通スルノ起點トシ
且當時幕府カ心ヲ京都ニ指キ必須要用ノ所トシ
テ支家ヲ封建シタルモノトス
亀岡ヨリ東行ニ山城ノ國ニ達スル道路ト亀岡ヨ
リ西北ニ向ヒ丹後ニ達スル道路トハ之ヲ山陰道
トシ平均ニ間幅位ノモノトス大名ノ通行スルニ
駕服ノ士ト駕ト三行ニ並ブ能ハザル所往々コレ
アリキ迂曲蜿蜒タリシハ申ス迄モ無シ
亀岡ヨリ西行シテ篠山ニ赴クモノヲ但馬西街道
ト呼バリ但馬國朝來郡和田山村界迄十里餘コ
レヲ西街道トシ豊岡街道トス往古ノ山陰道コレ

ナリ桑田船井ノ沼澤ヲ避ケテ此ノ道ヲ往還シタ
 ルモノナラシ前ノモノニ比スレバ道幅狭シ
 龜岡ヨリ西岸ニ走リ以テ摂津ニ達スルモノヲ池
 田街道トス大阪ニ通不道幅一間内外ナリシ
 龜岡ヨリ北行シテ北桑田郡ニ赴キ以テ若狹丹後
 ニ達スルモノ謂ハエル若狹街道ニシテ道幅三尺
 乃至五尺ニシテ甚悪シカリシ
 三蓋松 龜岡ノ極東三宅ノ橋ナル並木東堤ニア
 リ橋ヨリ北三本目ナリ上部ハ女松ニシテ中部ヲ
 五葉トス而シテ其ノ下ハ雄松ナリ長八間周圍大
 凡八尺

茨木線 改修大正十年ニ起マル 北桑田郡 紀論 参看



地名ヲ龜山トシ山名ニ蒼ノドキヲ用ヒ而シテ陰陽師安倍
安行ガ居住セル所ト其ノ星名岩及ビ其ノ墳墓ヲ存
スルハ龜ト蒼占ニ由縁アリト知ラル山安行山一名西
大宇余部天守臺安所邊コソ龜山ナレ
野橋立ハ天橋立ニ擬シタル名稱ニシテ年谷川ニ沿ヒ
所ノ東端ニ在リ龜岡堤一帶ノ連松ト篠村堤一帶ノ
連松ト相對シ沙川ヲ夾ミ南北ニ聯互ス知ラズ命名
シタルハ誰ノ
追分ケ古ハ尾宿ト書ケリ追分トハ岐路ニテ牛馬ヲ
諸方面行路ハ追ヒ分ケ行キタル所ニテ諸國ニ之レ
アリ太平記將軍都落ノ條ニ別條ニテ尾宿ヲ宿を過
ミミミ玉ミふミトアルハ此ノ所ニテ今ハ小字トナリテ

北所ノ裏ニ在リ俚歌

招く尾花はほ、よむ小萩こ、ハ追分どちり行く

明治以後ハ汽車ノステイショント成リテ乗降客ノ

追分トナリクルモ可笑シ

釋迦^ニ牟尼^ノ佛^ノ邸^ノ址^ニ下天田ニ在リ今ハ釋迦ノ出放ト

呼^ビ釋迦^ノ牟尼^ノ佛^ノ邸^ノ址^ニが鬼ヶ城ニ籠モリソルト天田

郡菴我村ノ部ニ出タス

持養舎ハ心學道場ニシテ石田梅岩が講席ヲ開キタ

ル所ナリ梅岩ノ傳ニ紺屋^ヤ所^ト居^リノ^コトヲ載ス東別院

村梅岩ノ傳記ニ出タス

火災 元和六年三月二十六日大火斬數不詳享保二

百年河原所六十二戸焼天寛永十一年二月四日不詳

龜山城ノ創始ハ判然セズ傳説ニハ并河太左衛門ナル

人ニ由リテ繩張セラレタリト云フモ年紀傳記詳ナラ

ズ永正八年將軍足利義植來リ兵ヲ齊ヘテ山城ノ舟岡

山ニ向ヒソル記事マレド城寨ノ有無ハ知リ難シ明

智光秀ガ築城シタル以前七十年ニ有リタリトモ云フ

其ノ龜寶城ト命名シタルハ光秀ニシテ東ニ篠村ハ幡

アリ南ニ桑山明神アリ西ニ穴穂觀音アリ北ニ愛宕權

現アリ維レ福寶ノ地相ナリトテ斯クナシ呼ビ出タセ

シナリトカヤ

岡部長盛九層樓ヲ造ル事慶長年間ニ在リ曹溪寺條

下参考ス可シ坪數貳萬八千

五層天主閣ハ金吾中納言造ル高ナ十四間四分九釐

下層ニ疊ヲ敷ク其ノ數百六十七枚八分最上層ニハ
二十一枚九分六釐ヲ敷ク

石垣高ナ西北角二間ニ尺五寸東南角三間三尺五寸
ナリ

城地ハ川人郷矢田庄ニシテ西方ハ荒塚村東方ハ古
世村ナリ本丸西九ハ荒塚ニシテ東出九古世門雷門

保津門ハ百世村ナリ
明智門ハ篠村字森ノ國恩寺ヨリ引ク其ノ元ハ光秀

ノ時ノ城門ナリシモノ
雷門ハ國分寺ヨリ引ク

天守閣ハ一城ノ威嚴ヲ代示シテ司令塔ノ用ヲ為ス
本丸ハ天守閣ト相待ツテ一城ノ生命ト為ル

二ノ丸ハ本丸ノ聯絡機關ト為ル

三ノ丸即外廓ハ皮膚ニシテ外護機關ト為ル

古時ハ城主及ビ一門天守閣ニ住居シ貴重品軍器ト
共ニ此所ニ在リシガ其ノ不便ナルヨリ別ニ邸宅ヲ
構ヘ其ノ側ニ在住ス

龜山城

中嶋漁傳ニ出リ下

崇禎位々護皇州池有神龜靈瑞浮借問當年安太史封
疆ト得幾千秋 轉結ニ句ノ意ハ安行山ノ部ニ出
タ大見ヨ

あふけたる、あふ危山の殿造王

荒川燾

さつちさつはりさろりさり以り

燾ハ龜山藩士ニシテ文學アリ天保年間ノ人

龜山小判 黄金壹サ三及八分ノモノ
第一圖大サ圖ノ如ク不恰ノモノ
第二圖豐臣時代ノモノ

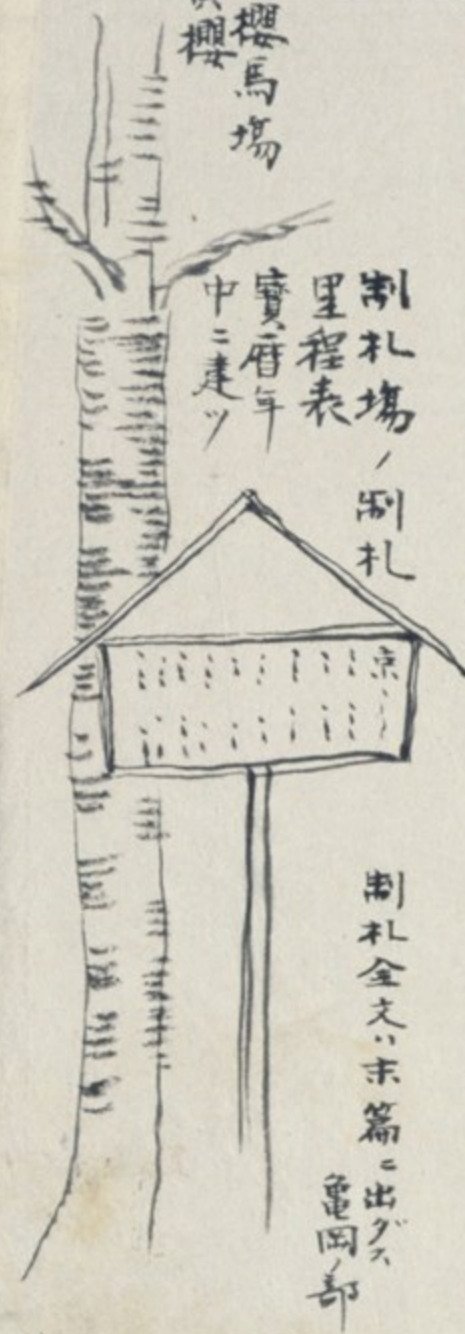


第一圖



第二圖

古世門東櫻馬場
古木淺黄櫻
文政年中
二枯



當時通用判金 即大判小判
通用種類 沙金 鍊金 大板小板ト毛書ク
延金 板金 竹流金 其石金 金九

龜山工金



龜山小判



鬼ヶ城印金 位三歩



割札金文ハ末篇ニ出ク
重岡部

京へ五里	大津へ八里	江戸へ百廿八里
嵯峨へ四里半	伏見へ六里	宇治へ七里半
奈良へ十三里	山崎へ五里	枚方へ八里
芥川へ七里	高槻へ七里	大坂へ十三里
池田へ七里	有馬へ十二里	三田へ十二里
麻田へ十二里	笹山へ九里	黒井へ十三里
生野へ三十里	綾部へ十二里	出石へ廿四里
城崎へ三十里	峰山へ廿七里	福知山へ十六里
田邊へ十六里	山家へ十三里	宮津へ廿三里
愛宕へ三里	若狹へ廿三里	園部へ四里
須知へ六里		
以上		

龜山城合戦 及び其ノ傍近ノ戦記 龜山城當時ノ名ハ圓岡城後ニ龜田城ト呼り高樓粉塚愛宕山ノ十景中ニアリ今ヤ七レ愛宕山一景ヲ失フ天正年間ニハ將軍室町家衰へ陪臣三好松永氏權勢ヲ振ヒ天下復メ足利氏アルヲ知ラズ況ヤ皇室アルオヤ是ニ於テ國土ヲ有スルモノハ四方ヲ制服シ領土ヲ擴メント圖リ千才ノ縲繼纏ユルヲ無シ故ヲ以テ管領波多野秀治ハ丹波ノ國境ニ猛將勇卒ヲ配附シ攻守ノ勢ヲ講シケルガ東丹波ハ京都ニ接近シ近年織田信長ノ勅興スルヲ聞キ捨置クバキニ非ルヲ以テ常備ノ外ニ其ノ第二階堂伊豆守秀香ヲ以テ東方防禦ノ全權ヲ委之ヲシテ

圓龜城ニ赴任セシム秀香来リテ地勢ヲ相シ更ニ
西山ニ一砦ヲ築キ之ヲ矢織ノ砦ト名附ケ相禪正
忠守廣以三千五百餘人ヲ以テ城砦ヲ併セ守レリ
果セル哉織田方ヨリ織田七兵衛尉信澄ヲ大將ト
シ附キ隨フモノニハ瀧川左近將監一益ヲ始メト
シテ明智十兵衛光秀以下大軍ヲ以テ攻来ル十兵
衛ハ美濃ノ人ニシテ大名土岐ノ分族ナリ祖父ハ
十兵衛光繼ニテ父ヲ光綱トス早ク死ス光秀幼ニ
シテ孤ナリ四方ニ流寓シ遂ニ織田氏ノ臣トナリ
永祿年間曾テ奥丹波ニ入り黒井ヲ攻メ赤井直政
ト戦ハリ天正二年三月從五位下叙シ日向守ニ任
ジ唯任氏ヲ冒サシム信長ノ意蓋シ後日九州ヲ制

服シ光秀ヲシテ前ノ國守ノ氏名ヲ稱セシメ以テ
其ノ國ニ當ラシメント欲セシナリ之ヲシテ先ツ
丹波ヲ取ラシメントシ六年五月命アリテ軍ヲ西
向セシム是ヨリ先キ信長播磨ノ三木ヲ屠ラント
スルヤ木下秀吉之ヲ諫メテ曰ハク播磨モ今ハ半
國御手ニ入りタレドモ三木城ハ容易ク下ルベフ
モ覺ハ候ハズ急ニ攻メバ死傷多カラン光秀カ征
スル所ノ波多野赤井ノ族モ急ニ平ケ可ラズ役等
若シ援兵ヲ毛利ニ乞ヒ光秀ニ對セバ光秀必敗レ
ン紀伊ノ土冠及ビ石山一向ノ徒ト一ニナリ丹波
ノ人ヲ以テ嚮導トシ愛宕山ヨリ京師ヲ窺ハバ實
ニ吾ガ大患ナリ請フ三木ニ向フ軍ヲ收メ丹波ヲ

征伐セント斯ク秀吉カ言上シタルハ己一人ニシ
テ山陽道ノ一ニ當リ居タルニ信忠カ来ルニ因リ
其ノ功ヲ奪ハル、ヲ厭ヒ師ヲ班ハサシメタルナ
リトカヤ六年五月中旬信長京都ニアリ光秀ヲ召
シテ曰ハク汝進シテ丹波ニ入レ長岡兵部大輔ヲ
以テ先鋒タラシメシ光秀命ヲ領シテ西洞院ノ第ニ
歸リ窓ニ丹波龜山在ノ山本村ノ住人宇野勘右衛
門古世村ノ菱田今次郎トヲ召シ寄セ宇野ヲ以テ
地理ヲ調査セシメ菱田ヲ以テ要害ノ手配ニ着手
セシム二人曰ハク丹波ニハ地侍ナレモノアリハ
上ノ城ニ荒木山城守アリ黒井ノ城ニ赤井悪右衛
門アリ高見ノ城ニ赤井五郎アリ八木ノ城ニ内藤

備前守同河内守アリ高山城ニ内藤出羽守アリ矢
田ノ城ニ釋迦牟尼佛觀負助アリ古世ノ郎ニ某（自今）
荒塚村ニ村上五兵衛穴太ノ城ニ赤添加賀守アリ
並河ノ城ニ並河掃部佐アリ本目ノ城ニ西藏院ア
リ加舎ニ森義作守アリ松尾城ニ中澤又五郎アリ
餘部城ニ福井因幡守アリ太田ノ城ニ松井越後守
舎第式部太夫アリトテ地勢要害攻戰ノ方畧ヲ陳
述シケレバ光秀大ニ喜ビ其ノ臣明智左馬助光昌
進治作左衛門溝尾勝兵衛ヲ召シ戰爭方略ヲ授ケ
タリ信長モ亦秀吉ニ命ヲ下シ西丹波ヨリ入り應
援セシム是ヨリ先既ニ小戰數回アリテ三年ヨリ
四年ニ至リシナリ八木ノ内藤舟枝ノ井上等ノ手

京都府立総合資料館所蔵

薄ナルヲ以テ本目ノ八田叔井ノ勢塩川園部ノ勢
交代在番ノ勢ヲ配附シテ秀香ヲ助ケントセシモ
圓岡城ハ已ニ二三ノ域構ハ衆落サレ本丸ノ三裸城
トナリ今ハ是迄トナリケル所ニ傳奏司日野廣橋
ノ二卿来リテ敕命ヲ傳ヘ御和談アリ播州ノ別所
長治ハモ宣命アリ秀吉當時書寫山ニ在陣セシガ
信長ノ命ヲ受ケ管領家ハ懇意ヲ通シ和議ニ定マ
ル是ニヨリ近國無事ナリ之ヲ丹波管領毛利家別
所家ノ假和談ト稱ス是ハ丹波家ヨリ織田氏ヲ油
斷セシメントテ手ヲ入レ宣命マテ申レ下シタル
ナリ信長之ヲ聞キ大ニ怒リ丹波家ヲ惡ムト太甚
シク其ノ根ヲ絶テ其ノ業ヲ枯ラセト命ゼシ所以

トカヤ光秀即チ兵ヲ進メ桂川ヲ渡ル桂川ハ宇野
菱田ノ手ニテ橋ヲ架ケタリ之ヲ天正六年六月朔
日ノトトス相從フ人々ニハ明智左馬之助同治右
衛門尉光忠進治佐左衛門溝尾庄兵衛藤田傳吾齋
藤内藏助松田太郎左衛門村越三十郎堀尾與次郎
三尾孫十郎妻木主計助奥田宮内比田帶刀ヲ始メ
トシテ其ノ勢三千餘騎ト注セラレヌ本陣ヲ古世
ノ菱田方ト定メ先鋒諸手到着シケレバ久下七郎
左衛門中澤越後守并河四郎左衛門釋迦年仁佛靱
負助河田甚右衛門等ノ地侍ハ各ソノ居館ヲ捐テ
、鬼ヶ城高見城ナドハ菱ミケル六月六日光秀ノ
陣ハ篠村ニ着シ鳥居前ニ集マリ軍議ス龜山城主

内藤忠行(サキニ龜山城主トナリシ人)ノ族人迎ヘ降ヲ乞フテ
曰ハク忠行去冬暴死ス遺族及ビ臣下ノ者降ヲ乞
フ請フ容レヨ光秀之ヲ許シ進ニテ龜山ニ入ル國
人并河島家四方田政孝及ビ萩野波々伯部尾石中
澤酒井加沼等相尋ギ降ル餘部ノ福升因幡守降ラ
ズ光秀が篠村ニ看セシ時ヨリ攻城シテ五百餘ノ
勢モテ三手ニ分レ安行鷺山宇津根雜水川ヨリ四
手ノシナヘ馬標押立テ攻入ラントスルヲ因幡守
ノ第孫次郎ハ大カノ強ノ者ナルガ中桐小左衛門
木村ハ兵衛星崎刑部左衛門以下百五十騎ヲツテ
出テ明智左馬助ノ三百騎ト戰フ福升方ノ士福升
與市同新兵衛以下カ疲レテ退ク之ヲ聞キ將因幡

守出テ、戰ヘドモ衆寡敵スベクモ有ラズ退キ城
ニ入り密室ニ妻女ヲ呼ビ之ヲ手刃シ屏風障子ニ
火ヲ掛ケ腹ヲ割キ死ス殉死スルモノ戰死スルモ
ノ計ア可ラズ將ノ子福市九十一歳徳光丸八歳ナ
ルヲ父太郎藤太郎ノ二人之携提扶持シテ辛クモ
保津山ニ遁ル宇津右近太夫兵四百ヲ引キ船井ヲ
發シ来リ援ハントスルヲ細川方コレヲ途ニ邀撃
シ銃丸右近ノ身ニ中リ死ス波多野勢モ亦八上ヲ
出テ東行セントスル半途コノ敗聞ニ接シ引キ返
ス
七年五月九日ヨリ西丹波ノ戰始マリ羽柴秀吉ノ
先陣羽柴秀長大功ヲ立テ秀吉ハ疾ク其ノ地ヲ引

京都府立総合資料館所蔵

キ揚ゲタリトノ報ニ接シ光秀イラダチ細野本目
ヲ攻メシメセ七日丹波勢一千五百餘ヲ味方ニ得
コレヲ先手トシ三千二百餘騎桐ノ庄八木等ノ諸
砦ハ押寄ス八木ノ守將ハ五百餘騎戦ヒツ、落チ
延ヒタレバ光秀奥丹波ハ突行セントシ村越三十
郎講尾庄兵衛ヲ呼ビ之ニ龜山城普請ノ奉行ヲ命
シ其ノ用材用石ハ近傍ノ神祠佛殿又ハ民家墓地
等ヲ毀壞シ之ヲ取り来ラシメ人シテ云ハシムル
様コレハ暫時借用申スナリ某コノ國ノ主タラバ
新ニ建立申スナリトテ一々證文ヲ與ヘタリ左馬
助ハ其ノ用材ノ輯マルヲ見テ古世ノ平地ニ繩張
シ人夫工師五千餘山ニ截リ林ニ伐リテ土石ヲ積

ニ木材ヲ組ミ矢狭間ヲ狭ク切リ明ケ本丸ニノ丸
ニ天守矢倉平屋倉廩三ノ丸ニ壕土居大門木戸モ
ノスサマジク取り設ケ妨礙トナル民家ハ取拂ヒ
纒ノ日數ニヒタシ敷クモ造リ揚ケ龜寶城トブ
名付ケタル
斯クシテ光秀ハ一時江州坂本ニ返リ十年五月龜
山ニ至ル青山奥三君命ヲ齎シ来リテ曰ハク出雲
石見ヲ以テ汝ヲ封ゼン恣ニ切り取りニセヨト光秀
ノ初志ハ一手ニテ丹波ヲ取り此ノ地ニ主タラン
ト既ニシテ秀吉ノ西丹波ニ入ルヲ聞キ信長ノ心
ヲ疑ヒ今又秀吉ノ功多キヲ以テ面目ヲ失ヒ嫉怨
一時ニ發シ光俊光忠近範賢政孝家等ノ腹心股肱

ニ之ヲ告ク皆其ノ命令ノ意外ニ驚キ丹波ヲ經營
スルダニ大事業ナルニ半途此ノ大艱事ニ當ルハ
及ブベクモ非スト前途ヲ想フテ憮然タルアリ落
膽スルアリ扼腕スルマリ如何ニ君命トハ云ハ今
ハ忍ブ可ラザル境畧ニ陥レリト其ノ場白ラゲテ
見エニケル光秀ハ之ヲ見テ釣閑齋及ビ三宅秀朝
齋藤利三等ヲ別室ニ延キ相議決シ陽ニハ君命ヲ
甘受スルモノ、如クニシ令ヲ出カシテ曰ハク晦
日ヲ以テ會期トシ龜山ニ於テ勢揃ハセント二十
七日愛宕山ニ登リ西ノ坊威徳院ニ舎シ金錢ヲ散
與シテ山下ノ里人ヲ集メ溪間ノ竹木雜草ヲ採伐
セシメテ一長逕ヲ開通セシム开ハ間道ヲ取り以

ヲ西ノ坊威徳院
曾ト云フ百韻ノ連
歌ニテ徳謀成就
就ノ祈願トリトハ紹
巴ノ外ハ知ル者ナ
ハ無シ後ニ諸人ニ
知レ渡レリ

テ偵察ヲ避ケ潛ニ兵ヲ進ムル準備トゾ而シテ世
八日京都ノ聯歌師里見紹巴ヲ召シ登セ一座ノ連
歌ヲ興行シ光秀ノ出カセル句ニときハ今あめガ
下知ル鼻月アなトアルヲ聞キ紹巴ハ早クモ光秀
ニ容易ナラヌ企テノアルヲ看破シ請フテ曰ハク
願クハ白中ノ下ノ下ニ改メテ下なるニセント時
ハ光秀ノ本姓ニシテ天下ヲ己ガ物ニセントノ
底意ヲ察シテ諷諫シタルニ光秀聞クヤ否叱シテ
曰ハク坊主何ヲカ知ラント當時俳諧師ハ頭髮ヲ
剃去シ身ニハ十徳ヲ着スルヲ以テ僧形ナレバ斯
ク坊主トハ言ハルナリ紹巴惶懼シタル面地シ執
筆ニ目クバセシ字數ヲ改メニカト云ヒ復タ吟セ

シメスレテ第二ノ皮句ヲ西ノ坊主僧行祐ヲ促セ
 カシム其ノ句ニ曰ハク水あげまさる庭乃夏山
 紹巴ハ一座ノ宗匠トシテ第三ノ句ヲ附ケテ曰
 ハク花茂つる池乃涼れをせきとめてト暗々裏ニ
 落花流水ノ無常觀ヲ顯ハシ諷諭諫止ノ意ヲ寄セ
 タルモ省用セラレズ坐客中其ノ深意ヲ知ルモノ
 アリヤ無カリシヤ光秀ハ中席率爾問フテ曰ハク
 本能寺ノ壕深ク幾許ゾト坐客其ノ問ノ奇ナルニ
 驚ケトモ亦深ク心ニ留メガリシカ後數日ニシテ
 思ヒ當ル所アリシトカヤ此ノ夜ハ僧坊ニ宿シタ
 レドモ通宵寢ネモヤラデ數ノ嘆息ノ音ヲ漏ラ
 セシカバ紹巴以下モ安眠シ得ズ曉ニ徹ス宿直ノ

一書ハ
 流ルル事とせしこ
 め々

モノ何事ヲカ嘆息シ給ヒシゾト尋ネケレバ光秀
 叱シテ曰ハク小臣ノ知ル所カハト常ニ無キ罵聲
 ヲ發シ衆人ノ疑懼ヲ招ケリトカヤ翌朝早々龜山
 ニ返リ光俊光昌又光春トモ云フヲ天主閣ニ呼ヒ卒然及意ヲ打
 明ケ急ニ折テ立ツバキ旨ヲ告ケ光俊暫シアリテ
 對フル様ハ右府ガ君ヲ逆待セラル、由臣亦反カ
 ニ之ヲ耳ニセリ然レ氏君ニ給スルニ大封ヲ以テ
 シ君ニ委スルニ大任ヲ以テス此ノ恩此ノ義切リ
 ニ背ク可ラズ願クバ思ヒ止マリ給ヘト光秀曰ハ
 ク然ラバ他日ノ事トセント光秀尚又溝尾茂明齋
 藤利三明智光忠藤田行政ヲ呼ヒ前件ヲ再陳シテ
 其ノ意ヲ問フニ諫止スルヲ光俊ノ如シ光秀其ノ

勢ノ不可ナルヲ察シ乃チ四人ニ此ノ事必ス漏ラ
ス可ラズト誓言ヲ立テシメテ相別レ六月朔日ノ
夕又光俊ヲ召シ之ニ四老ノ諫止セシ所ヲ告ク光
俊驚キ對ヘテ曰ハク吁一危イ哉コレヲ他人ニ
漏ラシ給ヘルト四老ノ一人ニテモ君ノ右府ニ於
ケル如キアラバ事必ス漏レン若シ漏レナバ右府
ノ君ヲ處スル如何ンヲ知ラズ事己ニ迫ル一日モ
猶豫ス可ラズト辞色共ニ勵レ光秀默然夕リ氷上郡黒井村
參着セヨ利三ノ言ニ多少ノ差アリ光俊ヲ強フ即チ臥床上ニ密議ス少時ニ
シテ光俊蚊嚙ヲ押シ退ケ急ニ諸將ニ令シ腰兵糧
ヲ携ヘシメ夜半城門ヲ開キ方畧ヲ示シテ曰ハク
京都ニ入り軍容ヲ右府ニ見セ而シテ後ニ備中ニ

赴キ木下秀吉ヲ助クルナリト惣勢ニ萬人別ツラ
二隊トシ光俊政廢範賢及ビ村上清國三宅秀朝ヲ
一隊ノ長トシ本道ヲ取り進マシメ光忠及ビ藤田
行政并河易家伊勢貞興松田政近ヲ一隊長トシテ
續キ發テシメ光秀ハ光近行童及ビ諏訪盛直奥田
景弘御牧兼頭等ト別ニ一隊ヲ率ヒ大川ヲ渡リ保
津山中新開ノ道ヲ取り火光ヲ照ラシ曉ル頃衣笠
山趾ニ進ス前發ノ二軍急行シテ己ニ此所ニ在リ
三軍相會シテ桂川ヲ渡ル衆情頗疑フ光秀馬鞭ヲ
揚ゲ東方ヲ指シ疾呼シテ曰ハク我が敵ハ本能寺
ニ在リ務ムルモノハ重ク賞セント衆始メテ其ノ
謀及ナルヲ知ル此ノ時右大臣信長小隊ヲ以テ

館シ防備無シ之ヲ圍ム數重遂ニ之ヲ殺ス光俊乱
軍中ニ尸骨ヲ搜索ス并河金右衛門一首ヲ見ルニ
白綾コレヲ包ム光俊曰ハク白綾ハ是レ右府ノ衣
袖ナルベシ之ヲ匿ス可シ金右衛門其ノ已レカ功
ヲ匿スヲ怒ル光俊曰ハク否々右府前年甲斐ニ勝
チ勝頼ノ首ヲ得テ之ヲ辱カシメ人々ノ誹謗ヲ招
キタルハ衆ノ知ル所ナラズヤ今吾ガ君ニシテ此
ノ首ヲ視バソノ虚待ソレヨリモ太甚シカラシ且
ツ辱ヲ後世ニ遺スルヲ虞ル足下ノ功勞ハ我コレ
ヲ證セン枉ゲテ吾ガ言ニ從ハト涙數行ニ及ブ金
右衛門大ニ培リ其ノ首ヲ光俊ニ托シ其ノ所分ニ
任ズ光俊コレヲ携ヘ僧西譽ヲシテ容ニ之ヲ斂葬

セシム光秀コレヲ知ラズ士卒ニ命ジ徧ク求メシ
ムルニ獲ズ利三ヲシテ光俊ヲ詰ラシメテ曰ハク
汝先手トナリテ深入シ多クノ首級ヲ獲タリト聞
ク而ルニ右府ノ死生ニ對シ一言ノ證明ナキハ我
コレニ疑無キ能ハズ若シ彼ヲシテ窮ニ脱出セシ
メタラシニハ大事忽チ失セシ如何ト光俊己ムヲ
得不實ヲ首ス利三亦焦餘ノ白綾衣ヲ搜シテ之ヲ
獻ズ光秀意始メテ解ケ其ノ衣ヲ刺ス丁三度ニシ
テ大聲ニ令シテ勝哄ヲ揚ケシメ更ニ信忠ヲ二條
城ニ攻メテ自殺セシメ光俊ヲシテ安土ノ留後ト
シタルガ光秀殺サルト聞キ奔リ坂本城ニ入ラ
ントシテ粟津ヶ原ニ到ル秀吉ノ先鋒堀秀政ニ過

京都府立総合資料館所蔵

大津打出ノ濱ニ戰ヒ敗レテ坂本ニ入ラントシ
テ能ク光忠ト共ニ死ス光忠ハ光秀ノ從父弟ニシ
テ八上ノ城主タリニ條城ヲ圍ムニ與リ銃瘡ニ苦
ミ坂本ニ療養中此ノ度ノ凶變ニ逢ヘルナリ光秀
ノ子十兵衛光慶慶モ亦病ニ龜山ニアリ父ノ敗死ヲ
聞キ疾劇ヲシテ死ス此ノ兒才智アリ光秀其ノ諫
言セシトテ恐レ謀計ヲ秘シ親族ナル隱岐守ヲシ
テ附ケ人トシ四國出兵ト云ハシム其ノ將軍宣下
アルヤ之ヲ披露シ其ノ心ヲ喜バシメントシタル
ニ弑逆ノ罪適ル可ラズトテ悲泣悶絕シ遂ニ起
ス北桑田郡宇津村ノ部參音アルハシ

光繼—光綱—光秀—光慶

光安—光春

光忠

龜岡古世ノ聖林菴ニ信長ノ墓アルト次文ニ出
ス寺院ノ部ヲ參看セヨ
光秀ノ平素敬事セル毘沙門天像ハ同菴門前ノ堂
内ニ在リ菴記ハ末文ニ出タス
前田云以小傳 前田宗向入道云以一ニ云法印ハ前
田利家ノ族人ニシテ姓ヲ菅原トス一ニ云フ鎮守
府將軍利仁ノ後裔齋藤伴豫入道云基ノ後ト宗向
叡山ニ入り僧トナル出デ、織田信忠ニ事ヘ民部
卿法印ニ叙セラレ德善院云以ト稱シ又半夢齋ノ
語アリ天正十年六月信忠ニ從ヒニ條城ニ在リ明

丹波志

智光秀ノ軍急ニ来リ攻ム信忠ヲノ子三法師丸ヲ
玄以ニ托シテ曰ハク汝コノ兒ヲ懐キ疾ク去リ父
祖ノ敵讎ヲ報ビシム可シ是レ汝ガ殉死ニ百倍ス
ルモノナリト玄以命ヲ奉ジ乃チ擁シテ岐阜ニ歸
リ復奉ジテ清州ニ奔リ衆ト共ニ擁立シテ主トナ
シ以テ扶翼ス 玄以幼ヨリ操行ヲ守リテ色慾ナ
ク止觀窓ニ入りテ圓頓教ヲ學ビ頗ル有識ヲ以テ
知ラル豊臣秀吉ノ関白ニ拜セラル、ヤ玄以擧ゲ
ラレテ奉行トナリ丹波八上城ニ居リ五萬石ニ食
ム龜山ニハ文祿三年ヨリ慶長五年ニ至ル年間居住ス當時耶蘇教徒年ヲ逐フテ増加ス秀吉コレヲ憂
フ玄以曰ハク耶蘇ノ像ヲ繪ニシ人民ヲシテ之ヲ
踏マシメヨ踏マザルモノハ其ノ教徒ナルヲ以テ

龜山ニハ文祿三年甲午
ヨリ慶長五年ニ至ル
年間居住ス

之ヲ刑セシ耳ト秀吉之ニ從フ謂ハ所ル繪踏ノ法
ナリ十六年秀吉天皇上皇ニ請ヒ聚樂第ニ幸アリ
時兵乱ノ後ヲ承ケ朝儀欽タルト多シ秀吉玄以ノ
典故ヲ語シタルヲ以テ特ニ命ジ事ヲ司ラシム玄
以其ノ命ヲ奉シ後小松天皇后花園天皇ガ足利邸
、行幸ノ故事ヲ參采シテ之ヲ增損ス儀衛騶從ノ
盛ニナル近古スレテラズ觀ルモノ相謂フテ曰ハ
ク吾等久シク行幸アルヲ聞ク圖ヲサリキ今日茲
ニ此ノ盛儀ヲ觀ントハト慶長中所司代トナリ京
都ヲ巡行ス東寺ニ抵リ車牛ノ巷路ニ横タルヲ看
テ怒ル曰ハク畜生ト雖モ非禮ナリト之ヲ斬ラシ
ム聞見スル者曰ハク牛馬且免レズ吾等法ヲ犯サ

丹波志

バ大刑ヲ免レズト相誠ノ令ヲ犯スモノ無シ市
街ノ瓦葺藁葺ノ不秩序ナルヲ改メ高低出入ナカ
ラシム秀吉見テ大ニ喜ブ慶長五年關ヶ原ノ事ヲ
關東ニ報シ三成ノ運署ニ玄以ノ名アルモ押印自
署ナキヲ以テ免ゼラレ七年五月十七日卒ス年六
十四ニ子アリ秀則宗利 秀則ハ三成ニ黨シ東軍
ニ降ル玄以卒シテ家ヲ繼ギ幾ナラズシテ喪心シ
人ニ逢ヘバ輒チ害ス京ニ入り乱行シ囚ヘラレ國
除セラレ 宗利ハ茶事ヲ千利休ニ學ビ宗旬ト稱
ス
城郭ニ付キ藩士某ノ物語
今日ナレバ社吾ガ藩ノ城郭ニ付キ御話モ出来マ

スガ封建時代デハ秘中ノ秘デ我々ノ口カラ出ス
ヲハ出来マセン其ノ秘中ノ秘タル所以ハ内情ガ
敵方ヘ洩レル虞ガアル故デス 敵デスカ封建時
代ハ大名相互皆敵視シタモノデス 左様内情ト
申スハ城郭ノ弱點ガ主點デス如何ナル城郭ニモ
此ノ點無キモノハアリマセマ若コレ無シトスレ
バ夫レコノ難攻不落ノ形容詞ガ用ヒラレマスガ
其ノ様ナモノハ古来絶無ト云フテデス 天正年
間ノ戰ニ當國ノ城々ガ相次ギテ陥落シタノモ夫
故デス 當城ノ如キハ御覽ノ通り四外ハ皆山デ
近傍ニハ城ヨリ高ク山ガアリマス ソレガ爲ニ
城内ニハ松樹ヲ多ク植工底實ヲ見セマ様ニシテ

丹波志

アルモ其ノ屯據ノ所ハ西山ナル安行山ト保津ノ
金毘羅山トデス 若シ敵ヲシテ此ノ山ニ據ラシ
ノ望遠鏡ヲ以テ俯看セシメナバ勝敗ノ數ニ於テ
多大ノ利ヲ專取セラレタモノトナリマス 故ニ
松平家ニテハ保津郷士五苗ナルモノヲ優遇シタ
ノデス五苗ノ勢力ハ古來歴史ヲ有シ武功モアツ
タモノ故保津村ノ分
考者ス之レヲシテ戰時ニハ金毘羅山保
守ノ任ニ當ラシムルノ策ガアツタノデス其ノ統
率者ハ藩士ノ中ヨリ出ス筈ナノデス 周圍ノ堀
デスカ是レハ屯據ニ足リマセヌ水ハ常ニ涸レ
マス又敵ニ涸レサレマス 左様藩中文デハ城
ニ嬰カルニ不足デス 左様其ノ時ハ後詰ノ兵ヲ

待ツヨリ外ハアリマセヌ 現今デハ京都所司代
ノ命令ヲ奉スルノデス 故ニ園部ヨリ一備トカ
淀ヨリニ備トカ言フ如ク近傍諸藩ノ兵ヲ受ケル
ノデス 勿論本丸ハ渡シマセヌ其ノ外ノ部分ヲ
夫々割り當テルノデス 所司代ガ入城スルト
カ公儀ノ御代官ガ入城スルトカニ成リマスレバ
主君ハ第二ノ丸ニ下リ本丸ヲ讓リマス 左様仰
セノ通り保津峽ヲ堰キ止メタナラバ水攻ニモ成
リマシヤウガ左様ニナリマスルト攻手モ亦陣
所カ水攻同様ニナリマスルノデ先ツ出末又相談
デシヤウ 成ル程其ノ御尋ハ吾々ノ急所デス昨
日モ御案内致シマシタ兵糧藏ノ迹デス僅々三十

丹波
志



間ニ足ラヌモノガ一棟ヨリ以下ノモノガ二棟デ
 アツク様ニ思ヒマス 是ニ充滿セシメタ所デ千
 石ニ千石具ノ内ヨリ千人ノ士卒ト具ノ家族ノ扶
 持米ヲ渡シ其ノ上後詰ノ食料ヲ給シテ幾月支ヘ
 得マシヤウ實ハ副食物トシテノ梅干澤菴漬ニ至
 ル迄ヲ貯藏シテ井ル諸藩ハ僅々デス 左様敵ヲ
 城マデ近ツケマシテハ先ヲアレ迄ト見ネバナリ
 マセヌ
 武徳會支部 舊藩文武ノ学校ナル邁訓堂ヲ以テ之レニ充ツ
 日露戦役記念博物館ハ第一小学校内ニリ
 忠魂碑 顕字山縣有朋元帥 郡内出身戦死者ヲ祭ル 明治四十年三月
 ノ建設 各宗ノ祭祀年々執行

龜岡

宇

西

東

藏

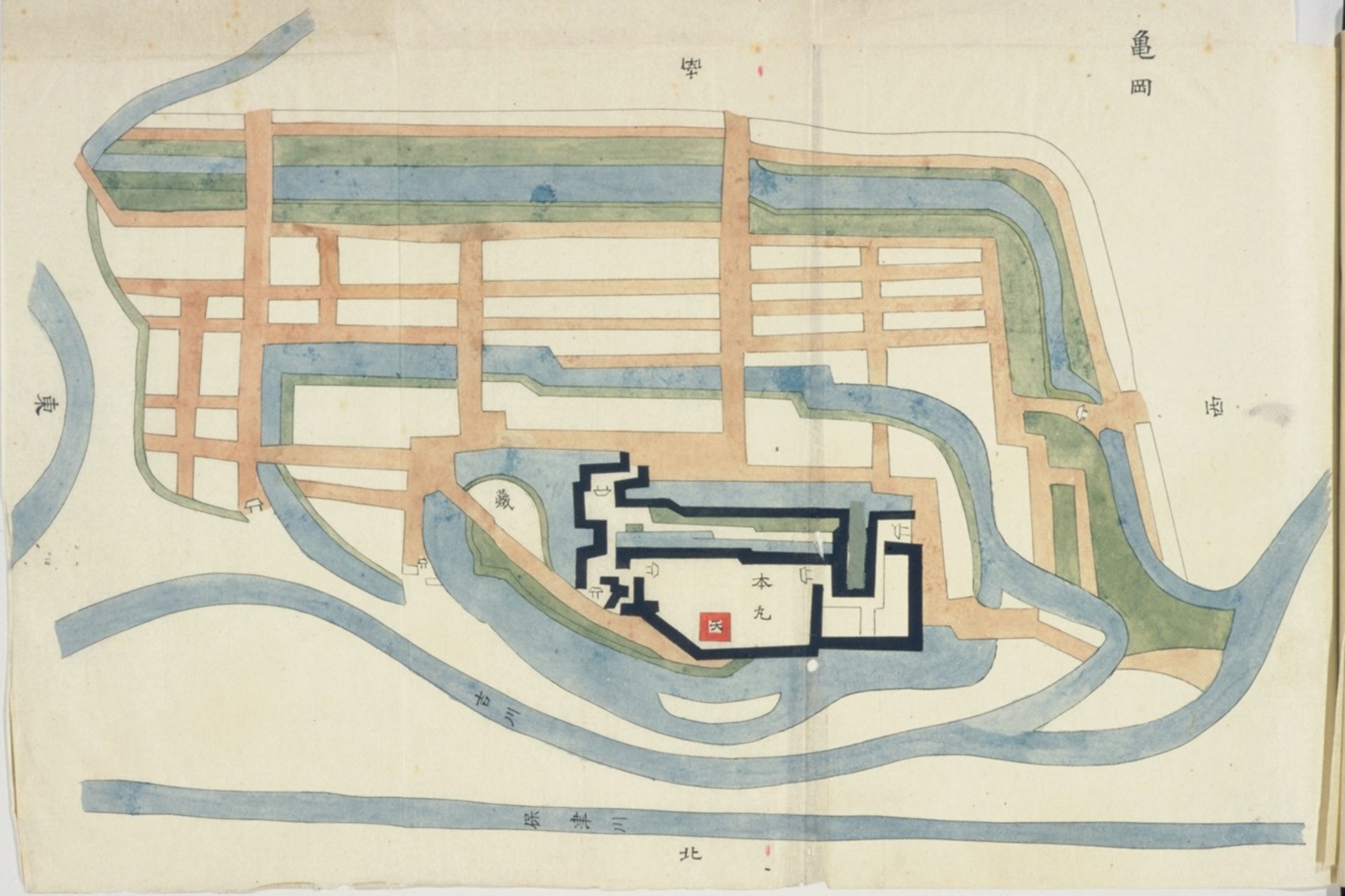
本丸

加川

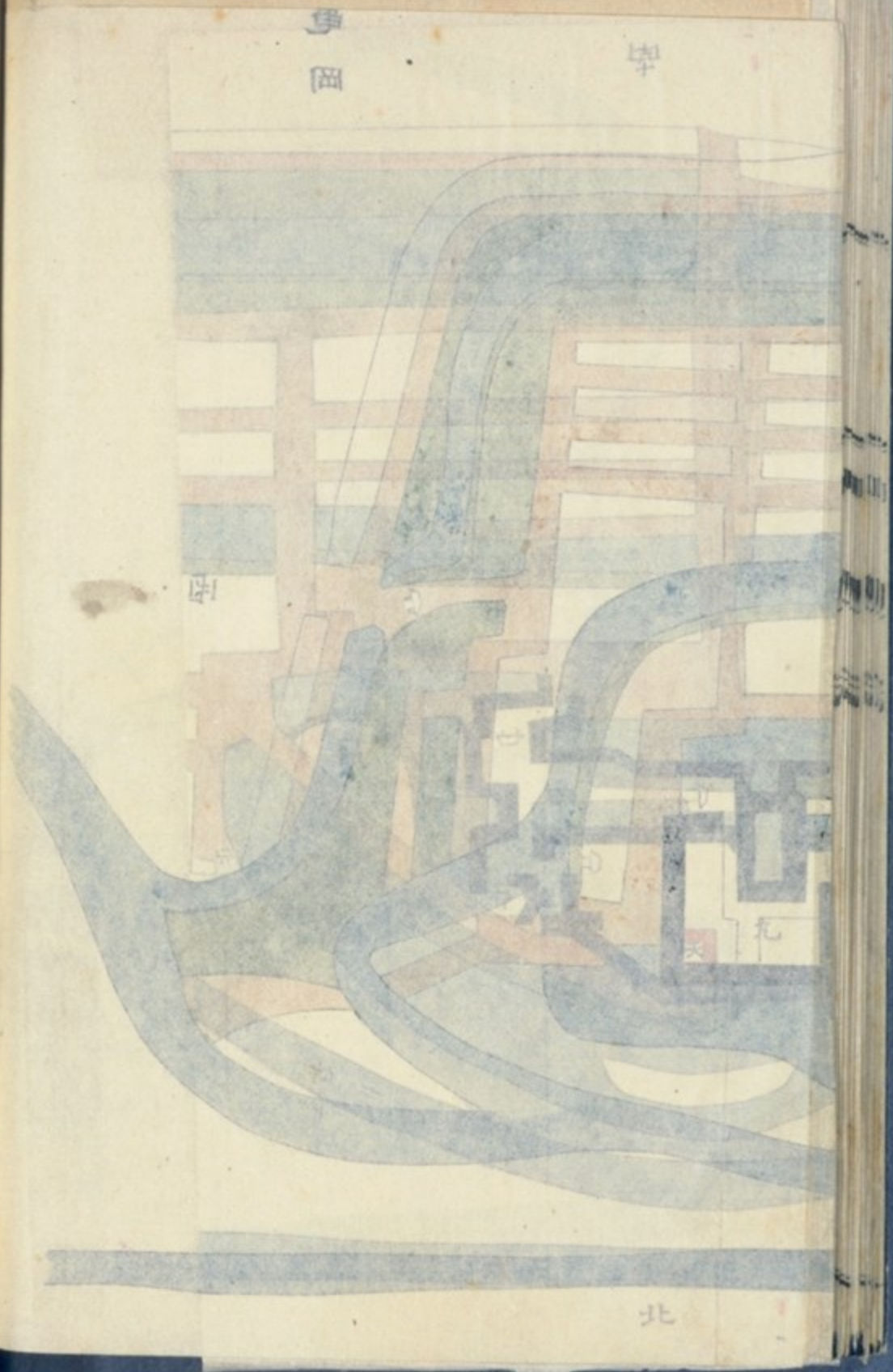
三井川

北

京都府立総合資料館所蔵



愛宕山十景之内
龜山夏雲



京都府立総合資料館所蔵

龜山領主沿革

王政時代ニ於テハ守介ニ由リテ治ナラレ京都蓮華
王院ノ下知ヲ受ケタルトモアリ一轉シテ華山院家
ノ領地トモ為リ源平争奪ノ世ト為リテハ豪族ノ割
據スル所トナリ永正年間ニハ武田信親同信繁ナド
云ヘル者居住シタリ同期間武田一族ハ京都ノ戦争
ニモ關係シ室所將軍義植ノ為ニ京北船岡山ノ役ニ
兵カヲ以テ奮闘シテ先登シ三好方ノ兵ヲ追ヒ退ケ
船岡城ヲ陥レタリ永祿年間ニハ内藤源左衛門居住
シ二十萬石ノ地ヲ取り子飛彈守如安ニ傳フ如安十
六歳ニシテ東行シ織田家ニ事ヘ隱居致仕シテ徳菴
ト號シ又出テハ西攝津守行長ニ事ヘ朝鮮ノ役ニ

總論參看

媾和使トシテ明國ニ赴キ往返措辭々後ニ加藤主計
頭清正ノ家ニ容居シ五千石ヲ給セラル慶長四年前
日利長ニ臣事シ四千石ヲ給セラレ客待セラレタリ
然ルニ其ノ邪蘇教ヲ信奉スルヲ以テ國內ニ居ル
ヲ得ズ流刑ノ身トナリ呂宋ニ放逐セラレ二年ニシ
テ其ノ地ニ歿ス父子共ニ丹波ノ産ナルモ其ノ郡村
ヲ詳ニセズ如安ヲエキヤスト呼ベドモ實ハ耶蘇教
徒ノ名ニシテ音讀シジヨント呼バシノタリト云フ
其ノ永祿ノ際ニ於テ波多野氏與丹波ニ起コリ其ノ
勢カ永上郡ヨリ此所ニ及ビ城郭ヲ築キ管領ノ權威
ヲ揮々ニ第秀尚秀香ヲシテ更ハルク居守セシム
管領トハ誰ソ波多野秀治ナリ

水工郡船井郡其ノ他
所々ニ出ク参考

ヨ其ノ餘勢將ニ京畿ニ及バントシ家臣叔并越中
守等又更ニ來リ治ス福井因幡守貞政ハ西端ノ余
部ニ築城シテ波多野氏ノ屬將トナル天正年間東
軍織田勢ヲ防キ五年ニハ明智方ニ攻メ落トサレ
近國ニ名ヲ得タル圓岡城モ茲ニ廢墟トナル
天正四年六月荒塚山ハハ山ニテ今時ニ砦ヲ構ヘ居
タル地侍近藤内藏永秀政ハ織田方ニ心ヲ寄セ光
秀ニ言ハセケル様ハ貴殿ノ思シ召スガマ、當國
ハ御下知ニ從フナラシモ百姓野共ガ不意ニ
押シ寄セ古世ノ廣場ヨリ攻メ掛カリナハ防戦モ
覺東無カラシ荒塚山ハ少シノ要害ハアレト地面
狭少ニシテ御人數ヲ納ルニ不足ナリ御油斷了

丹波志

ル可ラズ光秀曰ハク國中ノ兵卒モ夥シク波多野
赤井等ノ勢強クシテ勝負決セズ氷上ノ方モ討死
手負少カラズ此ノ上又敵ニ圍マレテハ事難儀ナ
リ暫ク要害ニ立テ籠モリ士卒ノ勤勞ヲ慰ノ馬ノ
足ヲ休メ其ノ内ニ大臣家信長ヲヨリ御加勢ヲ受
ケ東西ヨリ攻メ入ラバ勝利疑ニ無シ然レバ此ノ
郡内ニ於テ場所ヲ取リ立テ城郭ヲ構ヘ其ノ上沙
汰ス可シ秀政曰ハク荒塚山ハ貴殿ニ御任セ申ス
可シ早々此所ヲ城地ニ取リ立テ屯テ堅クシ玉フ
可シ某ハ古世ヲ附ケ城ト致レ隨分相勤ム可シト
光秀入ニ喜ビ曰ハク貴殿ノ曰ハル所一々理ニ
當タレリ然ラハ仰セニ任セテ此ノ地ヲ某申シ受

ク可シトテ早速村越三十郎滿尾庄兵衛ニ普請ノ
次第ヲ申シ渡シ繩張り人夫ノ招集等ニ着手シ穴
太ノ觀音ヲ始メ近邊ノ神社佛閣ノ巨大ナル者ヲ
取り調べ苟モ城普請ニ有用ナルモノハ社寶タル
ト寺寶タルトテ問ハズ格子遺戸敷石堀土ニ至ル
マテ運搬シ來ラシメテ曰ハク是レハ暫時神佛ヲ
リ借用仕ルナリ其此ノ國ノ主トナテハ御堂穴太
スナラ始メ神社佛閣ヲ改造シ各自靈地ニシテ返
シ申サントエ匠六百ニ夫五千ヲ督促シ高キヲ削
リ深キヲ埋メ天主閣矢倉大門木戸堀工居等日敷
少許ニシテ就ル繩張役并河太左衛門普請惣差図
役明智左馬助等ニ賞賜シ軍事ハ光秀コレニ當テ

京都府立総合資料館所蔵

リ民治ニハ内藤五郎兵衛コレニ當タル信長是レ
ヲ聞キ光秀ノ願ニ從ヒ羽柴秀吉丹羽長秀瀧川一
益高井順慶等ノ兵合セテ三萬餘騎ノ加勢ヲ送ル
五年ノ半ニ至ルマデ國內ノ一揆大半片付キタレ
ハ東軍歸陣シ麓ヲ取り前後ヲ定メ秀吉殿軍ニ篠
村ニ至リ不意ニ起コレル敵軍アリ堀尾茂助大ニ
働キ小勢ヲ以テ復々味方ノ前軍ニ榎原ニテ追ヒ
付キ東歸ス與丹波ノ軍事巨多アリ天正七己卯八
九月ニ至リ丹波全部ヲ平定シ三重ノ天守二重ノ
深壕數百ノ將卒ハ東丹ノ重鎮トナリ是レナレバ
丹波ハ何時マデモ無事平安ナリト萬民喜悅ノ願
ヲ開キケルニ思ヒモ寄ラヌ事コレ起コリタレ頃

ハ天正十年六月一日光秀自身大軍ヲ督シテ龜山
城ヲ發シ二日ノ曉天右大臣織田信長ヲ京都ノ旅
館本能寺ニ攻メテ之レヲ弑シ惡聲ヲ掩ヒ美名ヲ
銜ヒ京都市ノ戸租地稅ヲ免シテ龜山町ニ及ビ表
通りノ惣面左右横筋三町ニ涉リテノ地稅ヲ免シ
タルモ徒ニ幾許ノ世望ヲカ贏テ得タル小栗栖ノ
竹槍ニ露ノ命ヲ消シ一説九州カニ逃遺ス所ハ自後
年々孟蘭盆會ニ當タリ當地及ビ福知山町周山村
ノ人々ガ高燈籠ヲ高竿ニ吊ルシ其ノ報恩トシテ
供養スルニ止マル同山村ノ福知山記事北条田郡
十年六月十二日山崎合戰後ノ會議ヲ尾張清洲ニ
開キ信長ノ遺地ヲ諸大臣ニ頒カテ柴田勝家以下

丹波志

各取ル所アリ秀吉ハ辭シテ受ケズ丹波ノ國ト
シテ主將無キヲ以テ之レヲ領シ其ノ臣堀尾茂助
ノ吏材アルヲ認ノ之レニ托スルニ政治ヲ以テシ
自分ハ姫路城ニ入ル惟任氏ノ遺臣佐治新助猶固
ク守リテ秀吉ニ下ラズ細川忠興羽柴氏ノ命ヲ受
ケ來リ攻ノ一朝ニシテ之レヲ落トヌ十年壬午ハ
堀尾山城守吉春茂助居守シ之レヲ羽柴秀勝ニ傳
フ秀勝ハ信長ノ第四子幼名秋丸トモハ次丸一ニ
ハ繼丸ト云フ前年秀吉申シ乞ヒ子養シタルモノ
長ジテ後立位下丹波守ト為リ尋ヤテ侍從左近衛
少將トナル丹波少將ト呼ブ内野行幸ニハ美々敷
ク粒アラ供奉シ人目ヲ引ケリ其ノ年少ニシテ政

治ヲ親施スルヲ能ハガレテ以テ前田德善院主以
法印代ハリ執務ス此ノ仁ハ軍功トテハ之レ無ク
更材アルヲ以テ秀吉ニ識ラレ法衣ヲ脱キ帳簿ヲ
手シ收稅事務ヲ專任シテ後世ノ貢法ヲ創製シ三
百餘年間徳川氏ノ習用スル所トナレリ謂ハ所ル
殘高ヲ以テ毛ヲ見毛附ヲ以テ米ヲ取り定メノ外
ニ諸懸カリ詰メ込ニ納高コレヲ收納ニスト云フ
モノ是レナリ煩ハレキヲ以テ畧ス後世ノ免狀五
ケ年ノ貢法實ニ之レニ基ク此ノ法印ハ豊臣氏ノ
帷幕ニ居ルヲ以テ丹波ノ事務ハ兼掌テリ高五萬
石當地ニテ給與セラレ文録四年ヨリ慶長五年マ
テト云フ同苗左近大夫在城シテリトモ云フ丹波

少將ハ十一年ヨリ十三年乙酉マデ三ヶ年在城
 シクリト云フ一説セケ年ニシテ甲斐國へ轉封シ
 秀吉ノ甥ルニ三好少將秀秋入城ス十九年ヨリ文
 祿四年マデ五ヶ年ト云フ高十七萬四千石三好山
 城守康長ノ養子トナリ中納言ニ任ゼラル世呼ン
 デ丹波中納言トモ丹波黄門トモ云フ又コレヲ金
 吾中納言ト呼ブハ唐官金吾ガ本邦ノ左衛門督ニ
 當タリ秀秋ノ官名ガ左衛門督ナリシ時ニ呼ベル
 ナリ猶中納言ヲ黄門トスルガ如ク漢學習用ノ弊
 ノニ堀尾吉春城中ヲ修理シ天主閣ノ三重ナルヲ
 増築シテ五重トス余部城郭ノ遺材遺石ヲ用ヒテ
 完成ス前田修理大夫主膳正トモ云フ外濠穿掘ノ役ニ就

キ城池ノ面目スニ草マル秀秋筑前名鳴ニ改封セ
 ラレ後見人山口玄蕃頭代ハリ治ム而シテ前田左
 近同修理大夫交代施治ス慶長四年戸川達安花房
 職之坂部成正岡貞細角田隼人楯村監物等同志ノ
 輩其ノ主君ナル浮田秀家ノ許ヲ去リ此ノ城内ニ
 客居シ又出デ、加賀ノ前田氏ニ客タリ玄以コレ
 等ノ名士ヲ徳川氏ニ薦メ其ノ臣籍ニ入ル慶長六
 年北條左衛門大夫入國シ十年權田小三郎来リテ吏
 配シ玄以五萬石高ヲ以テ鎮將トナリ入城ス丹ハ
 前年兵ヲ備後ヨリ招集シ関原ノ役ニ與リテ功勞
 アリシヲ以テナリ細川玄旨丹後ニ在リテ徳川軍
 ノ催促ニ應ジ西軍ニ抗シ熈和シテ田邊鶴ノ辨

京都府立総合資料館所蔵

ヲ退去スルヤ來リテ此ノ城ニ入ル東軍関ヶ原ニ
大捷スト聞キ其ノ輕退ヲ耻ゲ此ノ城ヲ出デ高野
山ニ入ル慶長十四年岡部内膳正長盛入城スルヤ
徳川氏西北諸大名ニ課シ城郭ヲ増築ス藤堂高虎
篠山築城竣功シタルヲ以テ來リテ助役シ其ノ私
財ヲ以テ層樓ノ加エヲ全成ス長盛領地高三萬五
千石其ノ父正綱徳川氏ニ奉へ軍功アリ長盛初名
彌次郎年十六長湫ノ役ニ功アリ羽柴秀次ノ軍ヲ敗
リ初陣ノ名ヲ揚ゲ文祿慶長ノ間ニ織田信雄ヲ助
ケ羽柴軍ニ抗シ又真田軍ニ抗シ會津軍ノ押ヘト
シテ羽黒ニ屯シ伏見城守衛ノ任ニ當タル等功勞
少カテガレテ以テ從五位下ニ叙シテ任官シ前示内

邑ヲ下總國山崎ニ賜ハリニ萬石ヲ給セテ更ニ
此ノ城ニ玉タリ其ノ造築ニ係カルモノハ
二ノ丸ノ北櫓 三ノ丸取廣ケ 大牟門 古世
門 西門 雷門 保津門 町家境界線ノ堀
等或ハ新設或ハ修繕慶長十四年ヨリ元和七年ニ
涉ルト云フ其ノ北櫓ヲ岡部櫓一名安堵天倉ト云
フ并ハ大坂城落去シテ天下安堵ストノ義トカヤ
右五門ノ材料多クハ伏見城破壊ノ物件ヲ引キ用
エ天守閣修築ノモノハ伊豫令治ヨリ引ケリトソ
對面所ノ廣間モ此ノ時ノ新造ナルガ後世城主ノ
住所ト定マリ今明治年間ニ至ル
元和元年大坂陣ニ兵賦五百ヲ出ダシ長盛ハ此所

京都府立総合資料館所蔵

ハ果シテ大坂ノ徵募ニ應ゼルモノアリテ福知山
方面動搖シテ飛報日一日ヨリ急ナリ徳川氏命ヲ
下シ篠山城主松平康重ヲ將トシ岡部宣勝ヲ副ヘ
赴キ鎮メシム隣邑篠村ニ人數集合シ不穩ノ狀ヲ
ルヲ以テ城兵ヲ出ダシ之ヲ鎮メシム人民騷動
シ今ニモ合戦アルベシトテ其ノ野ヲ合戦野ト呼
ベリ長盛施政中城下ノ街衢ヲ正整シ河堤ヲ修理
シ民治ニ於テ見ル可キモノ少カテ大川ノ一堤
ニ内膳堤ヲ後世ニ残シテ遺愛ノ迹ヲ思ハシメ
リ天田宮兩社ノ下林泉菴創立ノ下ハ後文ニ記ス
可シ天田宮ノ部ヲ十三年福知山城主トナリ寛永元

年大垣城主トナリ九年卒ス當地ノ人民コレヲ聞
キ碑ヲ林泉寺ニ立ツ攝津國曾根崎ニ賊徒蜂起ス
康重兵ヲ送リテ之レヲ平ゲ首級三十ヲ持テ返リ
テ此ノ城下ニ梟ス看ル者堵ヲ為ス居ル下十三年
ニシテ岸和田ニ往ク松平左近將監參河西尾ヨリ
来ル大坂夏陣ノ賞トシテ三萬三千石ニ封セラレ
元和七年西ノ年ヨリ寛政十一年迄十四年在城ス
左近將監名ハ成重當城ニ卒シ子忠昭嗣ギ一年ニ
シテ豊後ニ遷リ松平石近將監盛重来リ城主トナ
リ二萬五千石ヲ給セラハ卒シテ弟主稅成昭相續
ス一説七年ヨリ五年間松平主稅頭在城スト十二
年菅沼織部正定芳入城ス膳所ノ城主ヨリ轉封シ

京都府立総合資料館所蔵

四萬一千石餘ヲ給セラル定芳銳意治ヲ圖リ地方
制度ヲ立テ地積檢舉ヲ行ヒ租稅方改良号更革施
為頗リノ功績ヲ奏シ舊染汚風ヲ一洗シ天田西社
カ御手洗ノ東方平地ニアルヲ移シテ西山新開地
ニ安キ神田ノ寄附ヲ為シ今ノ如ク高崇ニ為セリ
城附高三萬八千石出高五千七百五十七石三斗三
升ニ合惣高四萬三千七百五十七石三斗三升ニ合
ト為シ寛永二十一年卒ス享年五十四百世ノ宗堅
寺ニ葬ル其ノ墳塋存ス定芳或ハ定房ニ作ル其ノ
兄定仍ノ子左近大夫定昭嗣グ提封三萬八千石外
ニ同苗越中守領邑三千石合セテ四萬一千石此ノ
年城樓ニ報時鐘ヲ設ケニノ九ヨリ正午ヲ報ス慶

安年間京都大火ノ報ニ接シテ之レヲ打チ鳴ラシ
タルトアリ元録年間久世重之吳服町ニ望火櫓ヲ
新設シテ城中ヨリ移シ町民ヲシテ非常ノ報知ニ
セシメタリ

高ハ三尺一寸 外度ニ尺八分 内度一尺六寸

四分 銘丹波桑田郡龜山城警時鐘

寛永二十又一年甲申四月十六日

城主管沼左近大夫源定昭 新命治工是鐘

元録十六年青山下野守忠重入城ノ四月十六日大
火ノ降此ノ鐘燒ケ正音ヲ失フ

正保元年系譜改ノ命アリ定昭コレヲ幕府ニ奉送
ス定昭繪畫ニ巧ニシテ風致往々専門家ヲ凌駕ス

京都府立総合資料館所蔵

四年九月急病ニ罹カリ廿一日卒ス嗣無ク城地ヲ
 失フ弟定實ニ三河ニ於テ一萬石未滿ノ地ヲ新城
 設_地樂郡ニ賜フテ江戸定位ノ旗本トナル松平仔賀
 守忠晴慶安元年戊子入國三萬八千石ヲ給セラレ
 忠晴ハ松平仔豆守信吾ノ第二子幼名藤井與吾郎
 四松平中ノ藤井松平ナルヲ以テ氏トシタルナリ
 形原_皆松平竹谷松平深溝松平母ハ松平信一ノ女ニ
 シ慶長三年下總ノ市川ニ生マレ兄忠國ト共ニ二
 代將軍秀忠ノ前ニ於テ元服シ諱ノ一字ヲ賜ハリ
 忠晴ト命名ス兄ハ父家ニ居リ弟ハ別家シテ將軍
 ノ扈從トナリ大阪ノ兩役ニ隨ヒ元和元年正月廿
 七日從五位下ニ叙シ仔賀守ト稱ス五年常陸國新

治郡ニ於テ采地ニ千石ヲ給セラレ小姓組頭ニ任
 ゼラレ九年書院番頭ニ進ミ奏者ヲ兼テ更ニ大番
 頭トナル食祿三萬八千石ヲ以テ當城ニ在リ慶
 安元年閏正月十五日領地桑田船井水工多紀四郡
 ノ村落調査アリ
 忠晴一日持俣殿ニ入り焼香セントス傍ニ汚物ア
 リテ狼藉タリ之レヲ諦視スルニ鮫餘ノ臙肉ナリ
 大ニ愕キ近侍ニ命ジ之レヲ檢視セシムルニ庭狹
 ノ所為ナリト知レタリ忠晴赫怒シテ曰ハク如何
 ニ無知畜生ノ為スナレバトテ所モ有口ウニ予
 ガ祖先ノ牌前ニ於テ斯カル無禮ノ振舞ヲ為シテ
 予ニ耻辱ヲ與フルハ何事ゾ今ハ堪忍ナリ糞シ

京都府立総合資料館所蔵

明日ハ早曉起キ出テ城内ノ狐ヲ獵リ盡サシ其ノ
用意セヨト近侍ノモノヲシテ命ヲ傳ヘシム士卒
コレヲ聞キ我コソ數匹ヲ打取リ君候ノ感賞ニ與
カテント各自勇ミ立テ翌朝遲シト待テ居タリ然
ルニ其ノ夜更ケ人音モ無キ與殿ニ異常ノ物音ア
リケレバ奇怪ナリトテ忠晴手燭ヲ持テ近侍ニ戸
ヲ開カレノ邊ヲ見廻ハスニ斯ハ如何ニ一老狐ガ
伏訴スル様ニテ二狐ヲ葛モテ縛シ其ノ兩端ヲ嚙
ヘ階下ニ伏ス忠晴ハ之レヲ看テ曰ハク殊勝ナル
トヨ其ノ狐ハ汝ニ取ラスルゾトアリケレバ老狐
ハ嬉シゲニ二狐ヲ即坐ニ喰ヒ殺シ再三伏首シテ
深林ノ方ヘ逃ゲ去レリトカヤ

忠晴ノ尊神敬佛家ナルトハ其ノ社寺ニ寄附義捐
シタルトニテモ知ラル、ナリ致任シテ忠山ト稱
シ居城ニ十二年寛文九己酉ノ年三月廿五日卒ス
年齒七十三謚跡前伊州大守忠山大居士伊賀守忠
昭嗣ギ父子在龜ノ間ニ矢田兩社ノ祭祀ヲ興コシ
大守家臣ヨリ祭器社具等ノ寄附アリ城樓ノ大鼓
ヲ作ルヨリ城地町村ノ改良ニ心ヲ用ヒタリ貞享
元年鐵砲改アリテ當城ニ在ル所ノ砲銃證明書ヲ
差出ス同年常陸國笠間ニ改封セラレテ行キ天和
三年癸亥五月四日卒ス久世出雲守重之當城ノ主
トナリ貞享元年ヨリ元録十年ニ至ル貞享三年十
二月四日日本町麴屋ノ失火延キテ三宅ニ及ベリ當

時町々ノ界ニ木戸門アリタルガ此ノ火災後廢止
トナリ町形一變シ後前士民混居止ミ新ニ士人住
居ノ町成ル

元録三年大雨天田一ノ堰崩ル人夫一萬餘ヲ役シ
テ竣功ス賃米一人一日ニ升領主ヨリ給付ス

元録十年井上大和守正峯入城ス非常警報吳服町
鐘樓成ル十二年三月十三日西町大圓寺出火西町

北町紺屋町ヨリ城内ニ及ビ西九士郎類焼巨多
同年又鐵砲改アリ

青山因幡守忠重交替シテ末リ高五萬石元録十六
年ヨリ享保七年ニ至リ子因幡守忠知俊重同年ヨリ十
五年ニ至リ子因幡守忠知同年ヨリ俊重寛延二年ニ至

ル事迹篠山藩記事ヲ參看スヘシ 同年城地交換ノ
幕命アリテ松平紀伊守信岑ハ篠山ヨリ末リ忠朝

ハ當城ヲ去リテ篠山城ニ入ル松平ハ五萬石高ニ
シテ青山ハ六萬石高其ノ領工ニ廣狹アルハ固ヨ

リ當城屬地ハ諸方ニ散在シテ備中ニ及ガニ反シ
篠山領ハ過半城下ニ在リ施政調稅等ノ煩簡勞逸

大ニ逕庭スルヲ篠山記事ヲ見テ知ルベシ
信岑在城十五年寶曆十三癸未年逝去十二月八日

保津川原ニテ葬送ス謚希宏源院殿同譽德旌道慧
大居士松平家記事寶曆十三年朝鮮使ノ接伴タリ

將軍德川家治新ニ立ツテ以テノ賀使ニ文化十三
年癸酉十二月十八日後櫻所院崩御ニ付キ御陵所

京都府立総合資料館所蔵

泉涌寺ノ警衛ヲ命ゼラシ相役加藤備中守ト共ニ
勤ノ物頭一人士卒數十人ヲ率ヒ伏見街道ノ人家
ヲ借用シテ陣所トス幕府ノ代官石原莊左衛門木
村惣石衛門等年代^テ下^テ代官^ニ附^テ數名小者
數十名ヲ出張セシノ事ニ當テラシム
紀伊守信道ハ天明八年養老寺社奉行ヲ命ゼラレ
紀伊守信義ハ弘化三年同様ニ役ヲ命ゼラレ安政
五年ニ大坂城代トナリテ大坂ニ在城シ萬延元年
ニ左中トナリ文久三年ニ至ル十數年間在役シタ
ルニ由リ領地ニ在ルノ日少ク國邑ニ在ル臣民ハ
君主ノ面ヲ見ルモノ僅クナリ
明治二年六月十九日龜岡ヲ改稱シテ龜岡ト為ス

幕府ノ舊規ニ同名ニ藩アレバハ藩ノ方ヲ改稱セ
シムル例ニ由リ此ノ事アリタルナリ當時伊勢國
ニ龜山藩アリテ其ノ高六萬石領主ヲ石川主殿頭
トス當藩ヨリ高一萬石ノ多キヲ以テ當藩ヲ改メ
テ龜岡トシ地名モ亦從テ改マレリ此ノ外ニ田
邊ニ藩アリ一ハ紀伊國ニ在リ一ハ丹後ニ在リ是
レ亦ハ藩ノ方ヲ改メ舞鶴トス丹後ノ舞鶴コレナ
リ是等ハ徳川時代ニ於テ法規通り改ム可カリシ
ヲ在再コ、ニ至リシナリ併シテガテ數年ヲ出テ
スシテ藩名ノ廢止ニ逢ヒ地名ノ改革ノミノトト
ハナリヌ
明治一新封建制度ハ廢タレテナカラ大名旗下ノ王

京都府立総合資料館所蔵

師ニ抗セザルモノハ各自其ノ領地大名知行所旗
本ノニ歸位シ大名ハ藩知事トナリ旗本ノ士ハ安
居ス之レハ明治二年六月前後ノ事トス既ニシテ
大名ハ華族ニ列セラレ朝廷ノ公卿ト共ニ公侯伯
子男中ニ爵セラレ東京住居トナル當藩主モ亦同
ジク子爵トナリ圖書頭ナル名稱ヲ止ノ單ニ松
平信正ト稱ス之レヲ當城最後ノ領主トス信正ハ
大名ニ稀ナル採算家ニテ大藏省出仕ヲ命セラレ
國會開設ニ際シ部長トナリ國家ノ財制上能ク適
當ノ所見ヲ陳述シテ採用セラレ、丁多ク多年ノ
ノ職ニ當タリテ人望アリ
藩高五萬石 其ノ實收豊凶平均三萬石ト云フ幕

割ニ高ハ四掛ケナリトス然レバ五萬石ハ二萬石
ナルベキニ實收三萬石アルハ此ノ家ノ幸ナリ
幕割ニ十萬石以上ヲ大名トシ以下ヲ小名トス然
レバ此ノ家ハ小名ノ中ニ在リ
幕割ニ累代ノ臣家ヲ普代譜代トシ新附ノモノ
ヲ外臣トス檢ト呼フ外然ルヲ以テ此ノ家ハ譜代ノ
中ニ在リ
奏者寺社奉行大坂城代京都所司代老中等ヲ命ゼ
ラレ、家格トス
臣下ノ勤務トシテ幕府ヨリ命ゼラレ、モノハ江
戸ノ消防京都ノ消防處々ノ警衛築城水利堤防勅
使接待朝鮮人琉球人阿蘭陀人來朝來聘等ノ丁ニ

母 波 志

閑スル事務等ナリ

江戸參觀毎年一回東海道公程里數百二十八里
多_二村入_一里數ノ旅程ニ就ク一年ハ往キ一年ハ返ヘル
往クハ公方家ニ勤ムルナリ返ヘルハ國政ヲ視ル
ナリ

京都ノ防火隊ハ高槻藩波藩膳所藩郡山藩ト相互
一箇月交替ニテ五月ヲ間テ、從事ス物頭三名
士卒數十名防火夫數十百人コレニ當タル防火夫
ハ五藩共用ニシテ謂ハ所ル無宿モノナリ小火災
ニハ一隊ヲ出タシヨリ以上ノ大火災ニハ二番隊
三番隊ヲ出タス五藩ノ京都ニハ望火樓アリテ晝
夜當直望火夫ヲ置ク

當番月ニハ重役一名在京シテ事ヲ視ル

防火隊出張列ハ一番隊トシテ

經軍用ノ馬印ニ同ジクシテ梯子ヲ竹製ソノ内ニ石
騎士_ノ帶ノ馬_ヲ織_テ火_車ノ_頭野_務大團扇_{紙製墨澁塗白}
防_グノ_役人_ヲ持_テ參_シテ消_シ謝_留ノ_所立_テ置_ケ標_ニ置_キ
足_輕汲_水道_夫井_ノ命_ヲ供_ヒシム_掌リ水_鍤砲_夫附_キ
隨_テ水桶_{飛口}崩_壊用_ニ番隊_三番隊_大抵_同シ
出_テ唱_ヘテ演習スルコトアリ二三ヶ月ニ涉リテ
火災無キ時ニ於テ方向ヲ定メ行進シ歸途ニ整列
シテ其ノ威嚴ヲ視ノス鈴音石音ヲ聽ク之レヲ看
シガ為ニ奔ルモ、毎ニ多シ

此ノ消防人夫ヲ火方ト唱ヘ市民ノ患苦ヲ惹ケ开

ハ無籍ノ無賴者ニテ日夜飲酒賭博ヲ是レ事トシ
囊中ノ寒キ時ハ市中ニ出テ喧嘩口論シテハ金錢
ヲ強奪シ錢緡錢九十六囊六製ノ細電ヲ買クヲ造リ之レヲ人
家ニ強賣ス之レヲ買ハサレバ喧嘩シテ商業ニ妨
害レ或ハ家屋ヲ損害ス故ニ大家巨商ハ火方ノ頭
方ニ盆暮二季ノ贈遺ヲ為レ此ノ弊ヲ豫防ス然ラ
サレバ其ノ家ノ近傍ニ火災アルニ際レ故ニ火ヲ
引キ其ノ家ヲシテ危殆ナラシムルトナトアリ所
司代ニモ此ノ火防人夫アリテ孰レモ其ノ弊ヲ知
ラザルニ非ズ只コレヲ如何ントモスル能ハザル
ナリ

大名ニハ江戸ノ見附、勤番ト云フ一役アリ内外郭
門ノ守衛ニシテ番頭士分卒伍等多人數一ヶ月交
代ニテ費用モ多分ヲ要スル所ナリ見附三十六門
三十六大名ニ賦課セラル、モノトス然ルニ當藩
ハ右四藩トモ京都ノ勤役アルヲ以テ見附役ハ免
ゼラル、ナリ

本藩ノ領地ハ此ノ國ニ於テハ南北糸田郡ニ涉リ
船井郡氷上郡ニ及ビ備中國ニモ是レアリ離隔ノ
地ニ於テハ政治上不便多キヲ以テ代官ヲ置キ事
ニ當クテシム氷上郡黒井村ニ陣屋ト呼ブモノヲ
設ケ高一萬石ノ支配ヲ為サシノ備中玉嶋ニモ亦
同様ノ設ヲ為シ藩士中吏材アル者ヲ撰ミテ赴任
セシメ數年交代セシム

献上物ニ付元禄
 二年九月達
 諸藩献上物華
 美ニ流るゝを以て
 其臺上杉檜無用
 三何木よても用い
 みかきお軽くいたし
 足槍杉ノ外何木も
 とし二重なりニおき
 ひきくお仕り指臺
 ともすかしおむす
 繪換様無用
 籠ニ入れ不若との
 ハ籠と一用

幕府一ノ公定献上品目

孟臺 正月三日 漬松茸 三月 葛粉 六月 山椒 八月
 栗子 十月 肴ニ種一荷 參觀江戸着ノ日

龜山十七箇村(町)ノ一

古來西村ノ名稱アリテ農商ノ區分ハアリタレド
 町家ニ農戸ヲ雜ヘ農多ク商少ク工人ニ至リテハ
 尤少シ

役人ガ人民ヲ呼ビ出ダスニハ古世町ヲバ古世町
 村果罷リ出テヨト叫ビ荒塚ノ者ヲ呼ビ出スニハ
 荒塚町村果罷リ出テヨト叫ブラ例トス故ニ名ハ
 町ニシテ高アリ租米ヲ收メ米麦收穫期ニハ街工
 ニ違ヲ延ベ製装シ依納シ純然タル農村ノ風ナリ

新田源氏末流參河國寶飯郡形原郷松平氏

家紋九ノ内ニ利ノ字 元ハ九ノ内ニ三葉ノ葵ナ
 リシガ本家徳川ノ紋ニ同ジキヲ以テ避ク利ノ
 字ヲ用ル所以ハ下文ニ出ダス從前萬丁子等ヲ
 用ヒタルヲ改メ萬丁子ハ支家ノ紋トス

清和天皇第六皇子貞純親王五世ノ孫源義家八幡

義國新田三郎又足利式部義重新田鎮守府將軍義季八幡

徳川四郎上野國新田野良田彌四郎人上野國義重新田鎮守府將軍義季八幡

義一彌次郎政義石京亮親季修理亮有親左京

親氏松平太左衛門徳河彌俊山徳翁泰親衛門秀

岸祐信光和泉寺崇藏院八子テリ第四子與副ハ即

此ノ松平氏ノ元祖タリ

母 波 志

三 日 辛 道 悟 名 大 安 院 長 女 助 平 馬 二 男 堀 川 養 子	德 譽 道 悟 名 大 安 院 長 女 助 平 馬 二 男 堀 川 養 子	子 三 男 松 平 助 十 郎 次 女 將 衛 家 寄 中 四 男 藤 九	籍 三 女 輔 兵 部 太	入 籍 三 女 輔 兵 部 太	康 信 子 十 人 長 女 直 松 平 市 正 長 男 典 信 和 守 駿 河	守 母 八 水 野 出 雲 守 重 中 信 松 女 慶 安 十 二 年 十 一 月	二 男 昭 信 松 平 丹 後 守 院 學 信 松 女 慶 安 十 二 年 十 一 月	次 男 昭 信 松 平 丹 後 守 院 學 信 松 女 慶 安 十 二 年 十 一 月	羊 九 郎 長 女 石 川 左 次 女 馬 永 開 但 三 女 土 屋 相 模	四 女 模 守 妻 五 女 書 頭 妻	典 信 子 十 人 長 男 信 利 守 重 宗 主 膳 正 母 八 年 十 一 月	二 信 十 八 日 年 成 名 洋 光 院 次 男 信 孝 丹 後 守 院 學 信 松 女 慶 安 十 二 年 十 一 月	一 養 子 女 子 八 人 前 松 平 丹 後 守 院 學 信 松 女 慶 安 十 二 年 十 一 月	室 真 田 采 女 正 信 音 室 至 永 升 伊 賀 守 直 少 被 宣 辰 棟
--	---	---	---------------------------------	--------------------------------------	--	---	--	--	--	--	---	---	--	---

平 相 模 守 三 男 信 庸 九 十 郎 豐 前 守 紀 伊 守 資 宗	昭 貞 妻 三 男 信 庸 九 十 郎 豐 前 守 紀 伊 守 資 宗	四 女 延 寶 九 年 兄 退 職 享 保 二 年 五 月 十 日 卒 不 戒 名	亮 清 院 切 譽 揚	信 庸 子 十 一 人 長 子 信 岑 母 八 十 郎 平 又 飛 郎 守 紀 伊 守 資 宗	寶 曆 十 三 年 十 一 月 二 十 日 卒 大 原 社 名 宏 院 周 譽	得 道 琴 龜 山 城 主 始 祖 方 原 社 名 宏 院 周 譽	次 子 庸 倫 次 子 出 三 子 庸 親 早 世 郎 長 女 早 世 四 子	庸 昌 登 戶 田 備 後 守 庸 二 女 廣 信 甲 斐 守 三 女 永 升 伊	信 治 子 下 野 守 七 子 金 十 郎 早 世	信 岑 子 二 人 長 女 政 信 山 備 前 守 次 女 本 多 淡 路 守 忠 弘	庸 倫 三 郎 監 物 宮 內 伯 春 守 信 嚴 守 母 不 戒 名 映 德 院
---	--	---	----------------------------	--	--	---	--	---	---	--	---

母
皮
志

見警觀水既成

信直 豐五郎又七郎 明六年十月其日卒 計頭從五位下

院寬譽興仁雙峯 十五子長女 全豐前守 次女

嫁七三女 早世 四女 直溝口 相摸守 長男 信道 出次 子

次男 信愛 同姓 淡路守 三子 光弘 戶田 但馬守 四子

利和 至親 六左衛門 五子 成保 實成 野ノ工 匠 頭 六子 直

溫 寛政三 五女 郎 田 錢 五 七子 貞幹 臣 下 松平 但馬

八子 重教 忠彦 九 養子 衛 九子 直義 寛政 五 六女 早世

右ノ内直温以下 皆庶子ナリ 寛政三年八月 十八日卒 文二

信道 又七郎 采女 正平 若狭守 紀伊守 實政 三年 八月 十八日 卒 文二

名 誠 院 天譽 四子 長女 羊天 明六 長男 信彰 出次 子

次女 寛政 元 三女 同 三年 死 文二

信彰 金次郎 又七郎 紀伊守 道宣 院 高譽 賢勝 一子

信志 長喜 内又七郎 紀伊守 從五位下 同姓 監物 庸孝 江

平 泰 中守 定信 榮 比 翁 十 三 年 四 月 十 八 日 卒 加 藤 遠 名 江

守 德 院 稱 譽 十二子 長子 早世 七郎 長女 次女 三女

殊 持 無 稱 譽 十二子 長子 早世 七郎 長女 次女 三女

共 世 四 女 飛鳥 丹侍 從 次子 郎 早世 九 十 五 女 早世

六女 直短 右 妻 三子 信豪 出次 子 早世 九 十 五 子 早

世 六子 信賢 信友 丹後守 院 慶應 元年 十月 信豪 二 英 之 助 紀 伊 守 國 書 頭 從 五位 下 慶 應 元 年 十 月

丹波志

四子世早五子世早三女世早四女世早五女世早五子世早六子世早
世六女世早七子治之八子富五郎七女範橋政八女
世九子信陵又七郎

信義慶應二年正月十七日卒五子長女土岐車人正
長男世早次女信實次男信敏早世早實子慶應二年三男信

信正富五郎又七郎圖書頭信豪實子慶應二年
寛延元年ヨリ明治二年マデ百二十一年

信岑十五年寛延二年ヨリ至ル
信直十年安永元年ヨリ至ル
信道二十年寛政三年ヨリ至ル
信彰十二年寛政三年ヨリ至ル

信志十五年享和二年ヨリ至ル
信豪二十七年文化十三年ヨリ至ル
信義二十三年天保四年ヨリ至ル
信正四年慶應二年ヨリ至ル

御朱印 并 領知目録
領知目録 表書

丹波國桑田郡之内五拾六箇村
上矢田村 以下畧
高藪萬千三百九十七石九斗九升三合
氷上郡之内二十六箇村
中村 以下畧
高臺萬藪千五百八十六石九斗六升八合

船井郡之内三十八箇村

中野村 以下畧

高九千六百貳十壹石七斗五升二合

多紀郡之内五箇村

中原山村 以下畧

高四千四百十四石二斗六升六合

備中國淺口郡之内七箇村

上船尾村 以下畧

高壹萬貳千三百六石七斗一升八合七勺

都合五萬石

外七千五十七石六斗九升七合七勺

是者新田改正之

右今度被差工郡村之帳面相改及

上聞所被成下 御朱印也此儀兩人

奉行依被

仰付執達如件

松平大隅守

安政七年三月五日

親良印

松平右京亮

輝德印

松平豊前守殿

右二人ハ御朱印改役ナリ

料紙

大奉書

領知目錄

御朱印

丹波之國桑田郡之内五拾六箇村
氷上郡之内貳拾六箇村船井郡之
内三十八箇村多喜郡之内五箇村
備中國淺口郡之内七箇村高五萬
石_{別録}在事充行之訖依代々之例
領知之伏如件

安政七年三月五日 御朱印

松平豊前守より

因ニ記ス城主ニハ御朱ノ間カ在ル大抵玄関ヨリ
二間目カ三間目カニアル長持ニ入レラル、カ又
ハ皮製ノ脊負ニ成ル様ノ作り方ニテ非常ノ時ニ

ハ脊負フテ走ル為ナリ御朱印番トテ上士ニ三人
下士四五人常ニ之レヲ護ル此ノ前ヲ通行スルノ
禮法嚴重ニシテ君主モ膝ヲ疊ニ著ケ臣下ハ一拜
ス御朱改アル時ハ之レヲ江戸ニ護送スニ十數人
コレニ随行ス大藩以下人數ニ多少ノ差アリ
書面ノ式

大名旗本相互往復ノ禮狀ハ一筆啓エト時候寒暖
ヲ書シ一字ヲ揚ゲテ公方様益御機嫌能ク云マテ
書シ其ノ下文ニ次ニ貴様彌御健勝云々ト書シ末
文ニ先方ノ名ト此ノ方ノ名ト實名華押ヲ書スル
ヲ常法トス臣下ニ對スルニハ自分ノ名ノミヲ書
シ上封ニノミ臣下ノ名前ヲ入ル、杯ノ例アリ又

御朱印

先方ヲ貴ブノ意トシテ其ノ姓氏ノ一字ヲ欠クノ
 禮アリ松平紀伊守殿ヲ松紀伊守殿トシ佐々木氏
 ヲ佐トスルガ如シ此ノ事遂ニ自分ノ苗字ヲ略ス
 ルトト為リ臣下ニ下ス文書ニモ及ベリ左ニ出ダ
 ス所ノモノ是レナリ
 本文氏名月日ハ祐筆コレヲ書シ之レヲ月番年寄
 家_ノ差出ス年寄用人等コレヲ點檢シテ君主ノ
 前ニ提出ス君主ハ之レヲ見テ月日ノ下ニ實名
 ト華押ス臣下ニ與フルモノニハ實名モ一字ニシ
 姓氏ヲモ一字ニスルコトアリ左ニ示スモノヲ見テ
 知ルベシ

又七後重_ハ海_ハ公_ハ也

松平如月_ハ海_ハ公_ハ也

大今ノ康ニモナリハ教

又七後重漸公

嘉慶如月海公

竹林公

別業公

甘美公

松紀

九

信

十

力

亦

一

一

一

松紀侯書

一

下
壹口切々茶車
其力...
...

者一抄心来

飲也...之山

七〇

紀傳

青...
壹口切々茶車

我善婚姻

為嘉美月

到東館

此

信

信

信

京都府立総合資料館所蔵

此ノ家系ヲ釋スルニ本宗ヲ德川氏トス大將軍家
 康六世ノ祖信光ハ和泉守ト稱シ削髮シテ和泉入
 道ト號ス其ノ第五子彦太郎興嗣ハ佐渡守ト稱シ
 參河國寶飯郡形原ニ住ス形原一ニ形ガ原トモ呼
 ブ故ニ此ノ家ヲ形ノ原松平トモ形ガ原松平トモ
 呼ビ以テ竹谷松平ヤ深海松平ヤ具ノ他ノモノニ
 別カテリ松平ハ地名ニシテ其ノ内ノ岩津ハ家康
 ト出生ノ厩里トモテ親善ノ所タリ當時此ノ家ノ
 領有スル所ハ中山七里七百貫ト稱ヘ其ノ字ヲ今
 村ヤツキ田口岩屋カクサキ中久保須山コフ大
 川蓬生形ノ原トス此ノ形ノ原コソ藩祖旗場ノ

テシ名ノ奇ヲスルノ

松平家ノ事共
 此ノ家系ヲ釋スルニ本宗ヲ德川氏トス大將軍家
 康六世ノ祖信光ハ和泉守ト稱シ削髮シテ和泉入
 道ト號ス其ノ第五子彦太郎興嗣ハ佐渡守ト稱シ
 參河國寶飯郡形原ニ住ス形原一ニ形ガ原トモ呼
 ブ故ニ此ノ家ヲ形ノ原松平トモ形ガ原松平トモ
 呼ビ以テ竹谷松平ヤ深海松平ヤ具ノ他ノモノニ
 別カテリ松平ハ地名ニシテ其ノ内ノ岩津ハ家康
 ト出生ノ厩里トモテ親善ノ所タリ當時此ノ家ノ
 領有スル所ハ中山七里七百貫ト稱ヘ其ノ字ヲ今
 村ヤツキ田口岩屋カクサキ中久保須山コフ大
 川蓬生形ノ原トス此ノ形ノ原コソ藩祖旗場ノ

形原
 松平
 家系
 志

地ナレ此ノ地ハ藩祖ガ旗揚ノ時ニ宗家ヨリシテ
加賜セラレタル所トス藩祖佐渡守興嗣卒シテ光
忠ト諡シ寺ヲ建テ之レヲ祭リ光忠寺ト名ツク
後世封地列ニ處ニ光忠寺アルハ之レニ是レ由ル
子親忠嗣ガ立テ亦佐渡守ヲ名乗ル戦功アリ卒シ
テ長子親忠立テ父名佐渡守ヲ襲稱シ亦戦功アリ
卒シテ長子家廣立ツ初名セ七郎後ニ紀伊守薩摩守
ト名乗ル乃屋城主水野右衛門太夫忠政ノ長女ヲ娶
リ子三人ヲ擧グ忠政ノ二女ハ徳川廣忠ノ妻ニシ
テ後年傳通院ト呼バル、人ニシテ離縁セラルル
ハ忠政ノ子信光ガ叛キテ尾張ノ織田方トナリ今
川氏ニ楯付クヲ以テナリ當時徳川氏ハ駿河ノ今

川ニ倚リテ國ヲ立ツ故ニ家廣ガ徳川家ニ對シテ
ノ遠慮ニテ妻ヲ歸ヘシタルナリ此ノ女ノ腹ニテ
三子ヲ得男子ハ紀伊守家忠ニシテ次女ハ鳥居彦
右衛門石川伯春守ニ嫁ス繼室ノ腹ニ三女一男ア
リ叔其ノ離縁ノ様ヲ聞クニ持使ヲ以テ曰ハセル
ニ信光ガ為ス所ハ吾ガ本家徳川ノ為ニナラハル
故己ムトヲ得ズ是迄ノ縁ヲ切り婦人ヲ歸ラシム
ノ意ヲ以テシ日ヲ期シテ婦人ヲ輿ニ載セ士卒コ
レヲ昇キ護衛兵ヲ附シ約束シタル地ニ於テ之レ
ヲ止ノ居タルガ數時ニシテ水野家ヨリ受取人列
リタレハ之レヲ渡シ共別レノ悲哀ナル口エテ演
ベテ引キ別レタルハ如何ニ物哀レナリニケン婦

人ハ始終涙痕ニ顔頰ヲ霑シ送り来レル腰元女中
士人等ニ一言ノ詞モ出デザリシハ最ニモト想ハ
ル、物語リナリ此ノ時ニ當リ今川織田ノ兵半ハ
年トシラ之レ無キハ莫ク松平氏モ從テ其ノ鋒
ヲ西向セガルト得ズ形ノ原ノ地タルヤ幡豆ト吉
田ニ狹マレ此ノ兩地ハ駿河ニ屬スルヲ以テ數度
危急ニ迫マリ其ノ勢獨立ス可ラザル故己ウヲ得
ズ證人ヲ送り一日ノ命脈ヲ續ガザルヲ得ズ家廣
末子鶴千代ヲ以テ之レニ當テ駿河ニ送ル今川義
元大ニ喜ビ之レヲ其ノ臣小原肥前ニ託シ參河吉
田ニ置キ肥前ヲシテ曰ハシメケル様ハ貴方ヨリ
人質ヲ送ラレタル以上ハ必然吾ガ家ハ同心セラ

ル、ナル可シ念ノ為ニ一應相尋テル所ナリ云々
ト家廣答ヘシムル様ハ人質ノ故ヲ以テ譜代主君
ノ許モ受ケズニ御味方申ス條コレ無シ或ハ之レ
ニ由リ主君ニ弓引キ申ス下ノ無シトモ申サレズ
云々義元コノ答ヲ聞キ大ニ怒リ人質ヲ小舟ニ載
セ形原近キ海濱ニ漕キ出サセ井ノ尾ト曰フ所ニ
テ之レヲ串殺シタルハ如何ニモ慘刻ナル所行ニ
コソ永祿三年夏五月徳川氏が今川義元ノ催促ニ
由リ尾張ニ入ルヤ大高城ニ兵糧ヲ運入スルノ難
役ニ付キ家廣與リテカアリ天正元酉八月二十四
日近江小谷攻ニハ織田方トシテ戦功ヲ立テ美濃
攻伊勢攻ニモ亦從軍セリ

母
披
志

頼進ニ来リ諸軍潰エ家忠壘若八所ニ往未督戦シ
防禦大ニ勦ム甲州陣ニハ紀伊守又セ父子出軍シ
家忠最後ノ戦家信初度ノ戦トス

紀伊守家忠生齡三十六形ノ原ニ卒ス法名(澤雲)ニ
子アリ兄又ハ八郎忠利弟紀伊太郎家信

天正十年壬午徳川軍甲州新府ハ出軍スル時家信
ハ酒井ノ配下クル元ノ如シ諏訪ノ神官法印高嶋

城ヲ守リ使ヲシテ和ヲ議セシノヲ開城セズ却テ
夜討ス我が陣卒善ク防戦シ松平但馬松平新祐坂

部茂兵衛以下切ヲ立ツルモノ許多而シテ家信ノ
獲タル所ノ十三級中甲首一級アリ其ノ日戦未始

マラガハ内ニ二舟諏訪湖エテ艘ゲ但馬看テ以為

ヘテク漁舟ナラズ敵ニ謀アリ陷ル可ラズト即チ

令シテ曰ハク兵糧ヲ遣フテ待テ馬ニハ秣ヲ與ヘ

鞍ヲ置ケト夜ニ入ルテ陣所ヲ代ヘ家信ハ高丘ノ

上ニ但馬以下ハ平地ニ在リ果シテ夜襲アリ撃ツ

テ之レヲ歎ル一陣其ノ器畧ニ服ス

又ハ郎ハ慶長元年本宗將軍秀忠ノ諱一字ヲ賜ハ

リ忠利ト名乗ル文祿元年壬辰朝鮮陣ノ觸書来リ

其ノ船手ヲ命セラルモ海事ニ慣レガハ以テ

之レヲ辭シ相當ノ御用相勤ノ申シ度キ旨言上

シタルモ本家執事本多佐渡守ノ忠告ニ由リ強ヒ

テ受書ヲ出タシ工事ニ就キ夫卒ヲ發シ工匠ヲ督

シ江戸ニ於テ數十隻ノ戦艦用運送用ノ船舶ヲ製

出シテ釜山浦ニ漕致シ家信ハ二月九日江戸ヲ發
途シテ陸路ヨリ内海ニ内海ヨリ九州ニ涉リ行營
ニ於テ關白ニ謁シ事ヲ竣リ二月歸邑ス
慶長五年庚子宗家ノ軍東北ニ入り家康之レヲ將
井上杉景勝ヲ伐リ石田三成其ノ後ニ起コリ徳川
勢ヲ狹撃セントスルヤ徳川軍其ノ鋒ヲ西轉シテ
石田軍ヲ伐テ忠利ヲシテ小見川ヲ守ラシム忠利
辞シテ曰ハク臣ガ父祖相傳ヘテ常ニ軍ニ從フ臣
獨何シゾ一隅ヲ據守スルニ堪エン願ハクハ前隊
ニ列シテ以テ一臂ノ勞ヲ致ワント家康曰ハク景
勝ハ勦敵ナリ小見川ハ其ノ衝ニ當タル之レヲ守
ル汝ニ非ズンバ不可ナリト再請スレドモ計サレ

ズ乃チ小見川ニ攻シ敵ヲ待リ至ラズシテ事成グ
二月深溝地方ノ加賜アリ九年夏從五位下王殿頭
ノ任叙アリ冬ニ至リニ萬石ノ地ヲ吉田ニ賜ハリ
寛永九年卒ス年齒五十一謚號松壽院殿超山源越
子忠房嗣グ
紀伊太郎家信ハ又七郎トモ名乗ル忠利ノ弟ニシ
テ天正十年甫ノテ十四甲斐信濃ノ亂ルガ為ニ
兵ヲ出ダシ青木又四郎ノ砦ヲ攻ム又四郎和ヲ乞
フ由リテ質子ヲ出ダシメテ歸ル又高嶋城ヲ攻
メ武田信玄ノ遺地ヲ畧取シ之レヲ宗家ニ納ル時
ニ酒井忠次徳川氏ノ為ニ信濃ヲ守ル諏訪頼忠ッ
ノ命ヲ受クルヲ欲セバ曰ハク我ハ徳川ノ味方ヲ

丹波志

コソスレ酒井左衛門尉が被官タラシト思ヒモ寄
ラスト城ヲ固ノテ敵對ノ色ヲ示スヲ以テ家信之
レニ備フ七月十七日果シテ來リ襲ヒ伏ニ陷リ十
餘人斬殺セラレ信濃ノ人情斯クテラシニハ又モ
ヤ叛者アラシ歟トテ總ベテ此ノ地ノ侍ハ徳川ノ
被官タルベシト觸レサセテ事無キヲ得タリ是レ
忠世ノ策畧ヨリ出テタル所ト云フ其ノ時ノ感
晴現存ス曰ハク

諏訪郡一族今夜ニ掛ニ所盡
杉骨追拂ニ由無比類ハ彌多油
可申行奉肝要ニハ取ニ信云

七月廿九日 家系判

松平又セリ及

同十三年長湫ノ戰アリ尾張羽黒ニ於テ池田勝入
ノ家臣野呂孫十郎ヲ獲タリ孫十郎孫七ト云ヒ又
即右衛門助左衛門ノ數名アリ尊豪多カノ士ナリ
左ニ此ノ戰記ト高名ノ概畧ヲ叙ガ可シ
當時織田信長ノ攻男北畠中將信雄ハ羽柴秀吉ノ
野心ヲ憤リ之レヲ疎シシテ相交ハラズ秀吉大軍
ヲ以テ攻メ來レ信雄獨力支フ能ハズ援ヲ徳川氏
ニ乞フ家康赴キ助ケ時ニ家信病メ家忠ニ代ハリ
往ク衆曰ハク子ノ年弱シ請フ辭セヨ曰ハク我年
已ニ十六後軍セザレバ軍令ニ背クナリ衆之レヲ
徳川氏ニ白ス許サレズ家信意志燃ユルガ如ク晏

如トシテ家居スル一能ハズ竊ニ出テ後者二人ト
軍後ヨリ進ミ私ニ本多正信ノ陣ニ入り正信ニ憑
リ願意ヲ叙ガ家康具ノ志ヲ納レ召シ見ルニ勇氣
凜ニタリ問フ甲冑アリヤ對エテ曰ハク無シ馬ア
リヤ曰ハク無シ乃左右ニ命ジ小旗五旒ノ一ヲ取
ラシノ之ヲ與フ書シテ利即是ト曰フ又具足ヲ取
ラシノ之ヲ與フ朱實ト呼ブ所ノモノ鹿毛ノ馬ヲ
引キ来ラシノ鞍鐙ヲ加フ亦朱色ナリ家信喜悅言
フ可ラズ命ヲ奉ジ先鋒大須賀ノ陣ニ加ハル既ニ
シテ致螺相應ジテ甲軍進ミ至ル家信曰ハク甲州
勢ニ一泡吹カセ以後甲斐侍ニロヲ利カセマジキ
ゾト徳川軍ノ先驅次第ヲ以テ進ム家信先ヲ驅ケ

樂田ノ堀際土橋ノ上ニテ敵ノ剛ノ者ニテ年ハ三
十二三歳計リ容貌壯大其ノ手ニハ大身ノ槍ヲ提
ゲ黒絲織ノ具足ヲ着ケ馬ヲ躡ラセテ昔ガ陣前ニ
名乗リテ揚ゲ野呂孫十郎コトニ在リ我ト思ハシ
者ハ早ク来リテ勝負セヨト叫ブ其ノ音聲モ只十
テバ家信身ヲ以テ之レニ當リ斫リ合フコト三四
回相組ニテ兩馬ノ間ニ墜ソ揉合フ所暫シニテ野
呂遂ニエニナリ家信危急ナリ右ヨリ家臣堀部茂
平松山右衛門次郎左ヨリ岡田ハ右衛門相進ミニ
進ミ其ノ首ヲ擡キ落トス之レヲ見テ野呂九郎兵
衛ト名乗リ籠人待テト叫ビ進ミ來ル家信又コレ
ニ當タル九郎兵衛モ亦剛ノ者家信又危急ナリ

九郎兵衛孫十郎ノ子
ナリトモ云フ

丹波志

甲川勢矢野某吾が軍ニ在リ家信ノ側ニ家臣無ク
危難ノ迫ルヲ看テ走り来リテ之レヲ討テ斃ス已
ニシテ味方勝利戰鬪止ミ鯨波ハ揚ガリ功名ナセ
シモノハ孰レモ大本陣ニ集マリ各自獲得シタル
敵首ヲ提ゲ大將ノ旗下ニ踰キ次第ヲ守リテ實驗
ニ供ス家康一々點檢シ野呂ノ首級ニ至リ訝リテ
曰ハク彼レハ音ニ聞コユシ剛ノ者又七郎生年十
六其ノ腕モテ彼レノ首取リタル不審ナヨト家信
一揖シテ進ミ拜謝シテ曰ハク御不審ノ通りニテ
候ア郎等共ガ落テ合ヒテ候ヘバコソ打テ取レタ
ルニテ候フ今日ノ高名ハ全ク私ノ手柄ニテハ候
ハズト叙ベテ退ク家康其ノ率直謙讓ヲ賞揚シ其

ノ場ニテ祐筆ニ命ジ感狀ヲ書カシメ自署シテ之
レヲ與フ其ノ文ニ曰ハク

今度尾州長久手於羽黒野呂孫十郎打取
首ハ條無比數仕合及於首湯感思百々也

天正十二年甲辰三月十七日家康○

松平又七郎及ハ

文面ニテハ宗家ノ臣下ヨリ與ヘタルモノ、如ク
ニシテ家康ノ署名押判アリ疑フベシ
家信ガ功ヲ家臣ニ歸シテ謙讓シタル事ノ奥床レ
ナヨ宣ナル哉君臣ノ情誼終始膠漆膏ナラサリシ
ト十九年陸奥出羽ノ士民亂ヲ起コレ領主伊達
正宗コレヲ鎮撫スルヲ能ハサルノミカ却テ之レ

丹波志

ヲ煽動シ以テ自利セントス隣侯蒲生氏郷等コレ
ヲ治メ兼テ援兵ヲ徳川氏ニ乞フ徳川家ヨリ結城
秀康其ノ臣柳原康政以下數人ヲシテ兵ヲ率ヒ赴
キ攻メシム秀康ノ家康ノ子ニシテ豊臣家ニ養ハ
レ結城姓ヲ冒スモノ勇氣諸將ニ抽シズ而モ之レ
ヲ以テ十分ナラトシ將ニ親征セントシ岩槻ニ
至ル家信追ヒ隨フ亂成クヲ以テ與ニ共ニ途ヨリ
回ル十五年後五位下紀伊守任叙十九年大坂陣ア
リ命ヲ受ケ駿府留守クリシガ急命アリ召カレテ
大坂ニ出軍シ大本營茶臼山ニ在陣ス翌年夏ノ
役ニハ命アリテ宿陣在營總ヘテ昨年ノ通りヲ守
ラシムルニ家信疾ノ為ニ出軍スル能ハス由リテ

嫡子若狹守康信ヲシテ代ハリ出軍セシノ事休ミ
江戸ニ歸府ス元和初年江戸留守居トナリ五千石
ヲ賜ハル前領ヲ合ハセ一萬石始メテ大名列ニ加
ハル留守居トハ將軍不在ノ時ニ於テ守城スベキ
か如キモ實ハ然ラズ千代田城ノ守護ニテ將軍ノ
在不在ニハ関セズ頗重任ナリ五年命アリ舊邑形
原ニ歸住更ニ大和ニ移封セラレ高槻城主トナリ
二萬石侯トナリ寛永十二年下總佐倉四萬石侯ト
ナリ十五年正月十四日佐倉城中ニ卒ス齡七十四
妻二人前妻ハ松平上野介ノ女ニシテ二子ヲ産ミ
後妻ハ信康以下二人ヲ産ム猶五子アリ末女ハ將
軍ノ内命ニテ井伊兵部大輔へ嫁ス井伊ハ江州彦

丹波志

根藩主ニシテ三十五萬石侯タリ是ノ後再度ノ縁
組アリテ大ニ此ノ藩ノ内助トナレリ
若狹守康信ハ嫡子ヲ以テ嗣ガ慶長五年封地五升
ニ生マル幼名又七郎十四年出府年甫ノテ十歳ニ
年ヲ經テ茶番トナリ左右ニ給事シテ二代將軍ニ
仕ヘ同年ヨリ未一年ヲ經ナルニ叙任シ後五位下
若狹守トナル母ハ公卿日野大納言輝資ノ女ニ弟
アリ助十郎勝信又秀勝トモ云フ次ハ新九郎忠信
後ニ民部少輔氏信又修理亮トモ云フ此ノ二人ニ
亡父ノ遺領ヲ分與スル一各三千石コレニ由リ本
家ノ高一島四千石ニ減ス十九年大阪ノ役ニ井上
主計頭正就ニ屬シテ父子後軍シ翌年歸陣ノ際ニ

ハ父ニ別レ兵名ニ於テ暇ヲ受ケ形ノ原ニ入り翌
年夏ノ役ニハ父病々ノ故ニ陣代トナリ紀伊大納
言頼房ノ陣列ニ入り戰畢リテ歸邑ス十六年卯丑
月廿八日大坂城番トナリ翌年辰八月十日ニ至ル
更メテ高槻三萬四千石城主ニ封セラレ往キ政治
ヲ執行シ江戸ニ還リ致仕隱居ス二十年午九月特
召登城ニ升大炊頭閣老トシテ台命ヲ傳フ江戸留
守居勤務安房團長狹郡東參村横須賀村八邑村高
五千石増祿ノ事アリ二十一年ノ上洛隨行ヲ命セ
テ歸東シテ八月荒井番所勤番ノ命下リ士卒數
十百名ヲ派ス九月父子召ハレ高五萬石ノ朱印ヲ
下賜セラレ以來維新ニ至ル若狹守ハ部屋住分ト

叫 岐 志

シテ別ニ五千石ヲ給セラレ特恩ニ出ツト云フ寛
永元年正月十五日禁中火災天皇白川へ行幸アリ
白川御警衛ノ命ヲ受テ勤務累月慶安二年七月命
アリ丹波篠山ニ移封セラレ明暦元年九月十三日
朝鮮來聘使途中饗應ヲ命ゼラレ同三年丁酉江戸
大風大火邸第焼失スルヲ以テ參觀免セラレ銀二
百貫匁ヲ賜フ然ルニ中屋敷下屋敷ノ存スルヲ以
テ歸邑ヒズ勤番幾年ニ涉ルモ之レヲ辭セズト言
上シ將軍ノ嘉賞スル所トナリ且又諸藩ノ模範ト
ナル而シテ西九大守門番トナル一三箇年ニシテ
賜暇歸邑ス寛文六年上使青山大膳亮大目付黒川
丹後守臨邸台命ヲ傳フ幕副上使ノ臨邸ハ特例ナ

邸門内外白沙ヲ敷キ三ツ重キノ長手桶ニ水ヲ滿タ
セ竹箒ヲ加ヘ禮服禮装シテ待ツオハ前日留守屋敷
ヘ内命アリタルニ由リ之レヲ前知シタレバナリ已
ノ刻上使入邸君主玄關ニ迎ヘ先導シテ坐敷ノ上段
ニ昇ラシメ下坐シテ拜ス白命ニ曰ハク丹後國宮津
城主京極丹後守事上意ニ背クノ次第アルニ由リ受
城使トシテ出張スベシト傳命了リ對坐談合少時ニ
シテ去ル丹後守名ハ高國父安知ト和セズ性強暴ニ
シテ國法ヲ犯ス丁再三此ノ年父安知ノ上言ニ由リ
嚴罰セラレテ城地取上テ盛岡ニ配流盛岡藩主南部
氏ニ保管セラレテ高規以下男女數人諸國ニ放置セ
ラル之レニ由リ六月一日篠山出城君主以下士分ノ

京都府立総合資料館所蔵

吹貫大馬印細引一人士士小馬印細引一人手代馬
 卒騎馬旗奉行若黨草履取騎士若黨草履取馬若黨草履取大鼓手負
 番騎馬若黨草履取卒使番騎馬若黨草履取大鼓手負
 打方一鈕掛首弋銃槍士同合四十五人大將槍士同合
 二十六人茶坊主茶辦當士狹箱手明中間二十二人
 槍兜同石卒使番騎馬若黨草履取同樣騎馬十人從者
 祐筆騎馬從者醫者騎馬從者同騎馬同上騎同上
 馬同上外科醫者步行從者同槍兜同石騎馬同上醫從者
 大將具足二個槍兜馬卒賄人騎馬從者槍兜同石賄同上
 人騎馬從者槍兜馬卒騎馬普請奉行從者同槍兜同石騎馬普
 請奉行從者普請方役人十二人銃槍同馬同槍兜馬同石
 卒小荷駄奉行騎馬從者小荷駄同同以上

竹田宿陣翌二日一番大敷用意二番大敷朝兵糧三番
 大敷出陣同夜梅迫宿陣三日例ノ如ク出陣田邊幹鶴
 宿陣五日官津着本丸着陣松平主殿守忠房ノ一軍着
 城二ノ丸ニ入陣小出修理亮吉里着城是亦二ノ丸ニ
 在陣シ三軍滞城二十四ケ日幕令アリ水野左京亮ニ
 授城セシム即日水野軍入城受授ノ式アリテ其ノ日
 三軍出城相互別離ノ式ヲ舉ケ本軍ハ出陣同様ノ行
 軍式ヲ以テ氷上郡國領村一宿晦日篠山着城十月出
 城東行顛末言上儀辞アリ從五位下ニ叙セラルル三年
 六月十八日大坂震雷城地破損スルヲ以テ玉造口ヨ

リ京橋口ニ至ルノ矢倉門塀修繕ノ役ニ就キ七月江
戸出發十一月中就役七年丁未十二月二十八日四位
ニ叙セラレ時ニ六十八歳九年九月二十九日隱居願
聞キ濟ミ即日陰髮シ別峯ト號ス閏十月八日出願日
光社參ノ許可アリ江戸出發數日ニシテ歸府隱居ノ
身ナルヲ以テ扈從小數ニシテ簡單ナリ天和二年六
月十三日老病ヲ以テ江戸下屋敷ニ卒ス年齒八十三
一説七十四歳寛永十五寅年ニ卒スト篠山ニ歸葬シ
光忠寺ニ收埋ス謚號大安院殿德譽別峰大居士
駿河守典信ハ康信ノ長男寛文九年九月立ッ母ハ紀
伊ノ老臣水野和泉守重仲ノ女同四年六月三日將軍
在判ノ朱印五萬石ノ證券ヲ下賜セラレ謂ハ所ル御

朱印ニテ第一寶物タリ參觀歸國ノ際ニハ之レヲ唐
櫃ニ入レテ列前ニ加ヘ數人之レヲ卑キ數士之レヲ
衛リ江戸邸及ビ城内ニハ御朱印ノ間アリテ之レヲ
床ノ間ニ保安シ工士以下當直數人コレヲ守ル此ノ
前ヲ通過スル時ハ君主臣下皆坐拜ス五年將軍ノ家
門即チ徳川家ノ分家及ビ諸大名ノ質トシテ江戸ニ
在ルモノ皆釋放シ在府在國隨意タテシムルノ法令
出ツ然レドモ本藩ハ歸國セシメテ_國藩_領事_負
享四年東山天皇御即位ニ付キ幕命アリ銀三枚ヲ
五萬石高ノ國侯皆同ジク獻納奉賀ス寛文十二年
十一月二十日江戸邸ニ卒ス齡四十四篠山光忠寺
ニ歸葬ス忠嚴院殿松譽源榮大居士ト謚號ス

延寶五年兄三嗣子
八年叙爵元祿六年
延寶七年與詔九
年近習十年所見代侍
從正徳四年老中
十辭職享保元五年
十月卒

主膳正信利ハ典信ノ通長子寛文十二年相續シ延寶
四年十一月二十八日卒去齒十八一云十九子無シ弟九
十郎信茲ヲ子トス浮光院殿法譽源受大居士ト謚號
ス
豊前守信茲年十二延寶五年二月相續シ名ヲ信庸ト
改ム登城將軍ニ謁見スル一常例ノ如シ同八年將軍
嚴有院ノ薨去ニ香銀三枚ヲ贈奉スル一例ノ如シ元
祿八年九月十日將軍綱吉土屋政直ノ第ニ臨ムヤ信
庸ニ命ヲ下シ經書ヲ進講セシノ陪從大名旗下ノ士
ヲシテ聽聞セシム將軍側向ノ勤務見習ヲ可シトノ
台命アリ更ニ側用人ト為シ側用人ノ職タルヤ輔弼
ノ重任ニシテ才学アル者ヲ選任スルノ例ナリ九年

十月後四位下ニ叙シ紀伊守ト改稱ス十年四月十九
日京都所司代ト為リ侍從ニ進ミ正徳四年江戸ニ召
還シ老中ト為リ天下ノ政務ニ參シ享保元年三月病
ヲ以テ辭シ二年五月十日卒又年五十二亮清院殿功
譽揚傑乾英大居士ト謚號ス言行ノ傳フベキモノ歟
カラズ尤ニ之レヲ摘記ス
其ノ所司代タル時ニ當タリ攝家ノ一ナル近衛氏ニ
相庭カラガレ行為アリ升ハ將軍文昭院家宣ノ舅氏
タルヲ以テ他ノ四攝家ニ比シ權威アリ且多少武家
化シテ勤スレバ舊套ヲ脱出スルノ虞無キニ非レバ
何日カハ之レヲ矯正セガレ可ラス此レ其ノ當局ノ
任ナルヲ以テ一日參殿シ話事ヲ此邊ノ方ニ向ケテ

呼皮志

レバ近衛公得邑アリ武事ノ嗜ニアリトテ自負ノ邑
ヲ顯ハシ武器愛翫ノ事ニ及ブ信庸機ヲ昏テ其ノ藏
品ヲ拜觀セント乞フ公欣然トシテ直ニ侍臣ヲシテ
庫内ノ甲冑ヲ持テ来ラシム信庸コレヲ看ルニ皆新
製ニシテ美飾至レリ盡クセリ且附屬品悉皆具備ス
乃驚ツ邑ヲ作シテ曰ハク御當家ニ斯カル武器ヲ貯
藏遊バサレ何ノ為ニ成リ申スヤ兵ハ凶器ナリトモ
申セバ無用ノ御事ト存ジ奉ル私兵コソ斯カル品持
ツ者ナレバ御預ケ置カレ下サレ度シ御用ヒアラシ
時ニハ御戻シ申レ上ゲ奉ラントテ御返答ノマダ有
ラサル内ニ侍臣ヲシテ之レヲ己ガ連レ来レル家來
ニ渡サシメノニ條城北ノ所司代邸ニ持テ歸ラシメタ

レバ公ハ茫然トシテ一語無シ信庸悠然ト暇乞レテ
辭シ去レリ爾來公復武事ヲ口外セズ蓋所司代ノ職
タル京畿ヲ鎮撫シ宮中掖庭ヲ監査シ幕府ヲシテ西
顧ノ虞無カラシムルニ在レバ信庸ノ此ノ一舉措能
ク宮臣ヲシテ肅整セシノクリ
故事ニ御修法トテ例年紫宸殿ニ護摩壇ヲ作り東寺
ノ僧侶行法ヲ為スアアリ之レヲ執行スルニハ朝廷
ヨリ議奏官ヲシテ所司代ニ達セシメ所司代ヨリ江
戸ニ傳ヘ老中承諾スレバ其ノ旨ヲ所司代ヨリ東寺
ニ達シ初メテ執行スルノ法例ナルガ靈元天皇ノ御
不豫ニ際シ臨時御修法ヲ執行シ御平癒ノ御祈願ア
ラセテ度キ内勅アリ議奏官コレヲ所司代邸ニ申

シ送り急ニ其ノ義ニ及ハシテハレム信庸對ヘ
 テ曰ハク速ニ行フ可シ御祈禱ノ下延引ス可ラズ時
 日ヲ經過シテ玉體ニ變違アラハ悔エトモ及バジ先
 行フテ後コレヲ江戸ニ報センノミト廷臣舉テ其
 ノ果斷ト忠心トヲ稱揚ス

御所ノ外郭ハ練堀又ハ公卿ノ邸第ヲ以テ周圍ヲ為
 ス其ノ郭門合セテ九個アリ練堀ヲ御築地ト云ヒ其



裏面ノ書

安永五年十二月
 十六日從五位下
 行甲斐守源重威
 奉

ノ内ハ禁裏御附ト云フ役人ニ名ト與カニ十騎仙洞
 附役人ニ名與カ六騎同心合セテ八十人コレヲ掌リ
 治々御附役人ハ旗本ニシテ江戸ヨリ交代シ来ル九
 門ノ中六門ハ執次ト呼ブ御所役人コレヲ支配シ餘
 ノ三門ハ禁裏附與カノ支配ニテ乘馬往來ヲ許サズ
 常ニ之レヲ監視ス下馬牌ハ九門外ニ皆建ツ之レヲ
 犯ス者アレバ捕縛シテ町奉行所ニ送ルノ法アリ頃
 ハ寛永五年三月八日御所ノ内ニ火起ヨリ宮中ニ及
 ハントシニ條城内ノ望火樓警鐘ヲ亂打シ宮中ノ危
 急ヲ報ズ所司代邸宮城ヲ距ルニ十餘所信庸火事裝
 束シテ一鞭急到其ノ危殆ヲ視テ中主賣門ヨリ入ラ
 ントスルニ下馬牌アリ下乗徒走セン乎主上ノ危急

下馬牌

一説ニ天明大火ノ時
 コレヲ奥平與三左衛
 門カ紀伊守信直ヲ
 シテ南カ爲サレタリ
 ト傳フ與三左衛門ノ
 傳別ニアリ

ヲ如何ニセシ乗リ入ラシテ法ヲ枉グルノ罪アリ即
 羅沙ノ外套ヲ脱シ侍臣ヲシテ下馬牌エニ覆ハシメ
 更ニ一鞭シテ唐門ヨリ入ル果セル哉侍従女官ハ
 皇路阻スルノミ信庸主上ノ在ス所ヲ問ヒ進謁シ天
 皇ヲ負ヒ奉リ侍臣ヲシテ皇后ヲ守衛セシメテ己ニ
 從ヒ走ラレメ疾聲御輦ヲ呼ビ駕輿丁ヲ促シテ宮外
 ニ供奉シ御媛ノ追ヒ到レル者ニ托シ奉リ更ニ消防
 隊ヲ督シテ防火ニ從事シ幸ニ大火ニ到ラズシテ己
 ミタルモ其ノ舉措ノ敏捷ニシテ臨機ノ當ヲ得タル
 ハ識者ヲシテ賞揚措ク能ハワラシメタリ自後宮城
 ノ變災アルニ會ヘバ所司代禁裏附役人等ハ下馬牌
 ノ空文ヲ拘守スルニ及バズトノ令ヲ出ダセリ一説

だんだら幕

江戸拜領屋敷五ヶ所
 上屋敷 外櫻田
 中屋敷 本所
 下屋敷 雑子橋外
 同 田所
 同 巢鴨
 大九一ヶ所五ヶ坪



家寶

- 一 朱胴具足 家信(拜領ノ事)前記参照ノ事
- 一 丁字櫓 鯨尺九尺寸
- 一 十文字櫓 同 七尺六寸
- 一 馬印 同 一丈
- 一 長柄 同 一丈〇四寸
- 一 木像 若狹守彦信別峯
- 一 馬印ノ頭 茶壺トシテ
- 一 旗數旒
- 一 信岑九歳ノ書一幅
- 一 源氏貞卿筆 心似貫霜竹

天明八年トシテ記載ス然レ信道ノ為メ所ト曰フ可
 シ松平家ニ拜領ノ下馬札アルハ之レニ是レ由ル
 十二年四月廿八日ニ歴朝山陵修營工事成ルヲ以テ
 之レヲ上奏シ又之レヲ江戸ニ上申ス合シテ六十六
 陵其ノ垣牆ヲ存スルモノ十二湮没スルモノ二十二
 アリト云フ
 従前三上皇アリテ御費用モ多カリシガ仙洞御一方
 トナラセテ御領ノ大ニ減セシテ以テ却テ御融通
 悪ク御不如意ニ渡ラセラル、ヲ察シ奉リ幕府ニ上
 申シテ御領地一萬石ヲ獻納スルヲ周旋盡力セリ
 此ノ事ヲ傳奏司ニ由リ上奏セシメタレバ真ノ御太
 刀千載和歌集及ヒシタシテ幕ノ御下賜アリ

東山
 後
 志

江戸本邸ニ於テ來賓アリ其ノ歸ルヲ送リテ信庸コ
レヲ云閑ニ送リ還ル平素客ヲ送レバ還リ直ニ燕室
ニ入ル此ノ日ハ故アリテ客室ニ還ル斯クトハ知ラ
サル近習輩其ノ殘菓ヲ盜食シ相率ヒ相奔ル主君ノ
入ルヲ見テ皆俯伏シ為ス所ヲ知ラズ信庸微笑シテ
曰ハク菓子ハ惜ム所ニアラズ器具ハ之レヲ損敗ス
ルト勿レト事ヲ了シ談話スルテ常ノ如クニシテ又
燕室ニ入ル

京儒松崎祐之ヲ聘シテ藩禮ヲ定メ廟制ヲ建テ文公
家禮ヲ參酌シ高祖以下昭穆ノ序列ヲ以テ祭祀スル
ノ制度成リ明治初年マデ此ノ制度ヲ用ヒソリ従前
區々ノ私法私禮大ニ改良セラレタリ祐之ニ實用ノ

材學アルヲ認メ之ヲ政務ニ用ヒシム
大坂城修築總督ノ任ニ就キ將ニ命ニ赴カントス老
職合議シテ上申ス大坂ハ繁華ニシテ遊ブベキ所多
ク殊ニ江戸京都ニ違ヒ妓樓娼家市中ニ散在シ到ル
處嫖客ヲ牽キ往々士卒ヲシテ放蕩ナラシム請フ出
入ヲ嚴ニシ門制ヲ立テ一藩ノ品行ヲ豫防セント信
庸曰ハク田舎侍ニシテ都市ニ入ル公務ノ餘暇ヲ以
テ平常ノ勞苦ヲ慰ムホ可ナラスヤ老臣曰ハク仰セ
ノ如シ然リト雖曩ニ尼ヶ崎侯ソノ誠ヲ發シ御城代
中藩士ヲ訓戒セラレタリ請フ之レニ倣ハン信庸曰
ハク彼レハ其ノ故アリテ爾ガセシナリ吾ガ思フ所
ハ彼レニ異ナリ假令ヒ一篇ノ訓令ヲ下ストモ犯ス

母
支
志

者無シト云テ可ラズ訓令ハ往々煩瑣ニ涉ル小數不
正ノ者ノ為ニ多數ノ正者ヲ束縛スルヲ欲セス只常
規ニ照ラシテ犯者ヲ罰スルヲ後前ノ如クニシテ可
ナラシノミト家老年寄感銘唯々シテ退ク在郎ノ士
卒コレヲ例聞シテ皆相互君德ニ感激シ下吏賤卒ニ
至ルマデ數年間一犯者ナカリシトゾ
所司代クルト十八年御所向キ九ベテ事無ク畿内亦
平穩ナルヲ以テ幕議其ノ交替ヲ命ゼス久シク其ノ
職ニ在ラシメト欲シクルモ急流勇退ノ心今ハ止ム
可キモアラズ將軍吉宗深ク之レヲ惜ミ今後二年ヲ
經テ二十年ニ及ハバ四位少將ニ進メシト思ヘドモ
其ノ詮無シト云ヒ心ナラズモ其ノ志ヲ納レ正徳ニ

年六月廿七日子九十郎信岑ガ佐渡守タリシヲ紀伊
守ト改稱セシメ家督相續ノ台命ヲ發シ一ニ云フ享
保二年ナリ
奏者奇社奉行ヲ兼務セシム是レ父蔭ニ由ルナリ
享和九年三月松平甲斐守吉里ノ領所郡山城地受取
出陣 圖アリ

寛延元年紀伊守信岑ハ篠山ヨリ來リ當城主ナル者
山因幡守忠朝ハ篠山へ移封交代ス之レヲ國替ト云
フ實ハ所替ナリ其ノ情況繁冗紛雜容易ノ事ナラス
徳川氏始政以來ニ三代將軍ノ時ハ戰時情勢ノ形迹
ヲ存シテ轉地移封百里ヲ遠レトセズ渡海赴任モ容
易ノ行為ナリシニ治平數十百歳ヲ經テ天下養平士
女其ノ御土ニ安住レ氏神ナリ檀寺ナリ墳墓ナリ永

丹波
志

久相離レ雞キ關係ヲ為レ國曆ノ一ハ只昔話ニ之レ
ヲ聞クノミ假令之レヲ聞クモ不義不法ノ罰トシテ
之レヲ命ゼラル、トト思ヒ居タルニ今ハ己ガ身上
ニ迫マリテ驚愕悲嘆ノ情狼狽周章ノ體聞クニツケ
見ルニツケ最、恰レナリトカヤ況テ信岑ハ父信庸ノ
蔭ヲ以テ寶曆八年ニハ四位ニマデ進ミ是如タル地
位ニ在リシオヤ然ラバ此ノ擧ノ胚胎原因ハ如何ニ
ゾト釋ヲレバ青山家ニ智謀ノ士アリ主家ノ為ニ深
ク圖リ遠ク慮リタル結果ト云フ升ハ龜山領土ハ屬
地所々ニ分在シテ施政ニ便ナラス收租上煩勞少カ
ラズ篠山ハ城下ニ數萬石ノ地アリ飛地領分比較上
鮮少ナルヲ以テ換地シテ大利益アリトシ密々江戸

ノ權臣ニ囑托内願シテ成功シタルナリ其ノ内部ニ
ハ路遺ノ有リタルトハ曰フ迄モ無シトハ當時世上
ノ傳フル所タリ
所替ニ付青山家ヨリ奉行ヲ以テ村々庄屋ニ達シ尚
又人民心得書ヲ出ダス丁左ノ通り

覺

一先達而申觸候通り笹山ハ御所替之儀可得其意
候村々子有候汚林ハ一切主入申間敷候勿論
御山守汚林寺等御所々可相廻事
一 村々持山林ニ竹木等伐取意申間敷事
一 兼而之仰出汚法度ニ趣痛相慎火ニ用心別
而入念申可相守事

丹波
志

一 於村：村境田地并屋敷境等に至り迄不寄何事
以前に通取置新規に併一切致間敷事

一米穀他所へ少し出さ間敷事
右に趣堅相守可申若狼藉に者於有にハ急度可申付
候御尺輕日之相廻りハ間可得其意候

此觸書村に寫置ハ百姓以下迄可申候村書下
庄屋名印仕先々ハ早々相廻留村より會所へ可相
廻候以上

産土神社ハ其ノ儘ニシテ菩提寺院ハ之レヲ新領土
ニ遷ス君主先代ノ墳墓ハ銅棺埋葬ニシテ移轉し得
ベキ様作成シテレハ輪塔角塔ヲ問ハズ之レヲ牛馬
車カニテ運搬ス臣下ノモノハ重臣タリトモ爾セズ

舊領民ニシテ特別ノ關係アルモノハ願ノ上之レニ
從ヒ行クモ有リ

元和八年ノ幕令ニ曰ハク

一 其具諸道具を替地へ持ち越すべし事

一 竹木一切翦伐をべし事

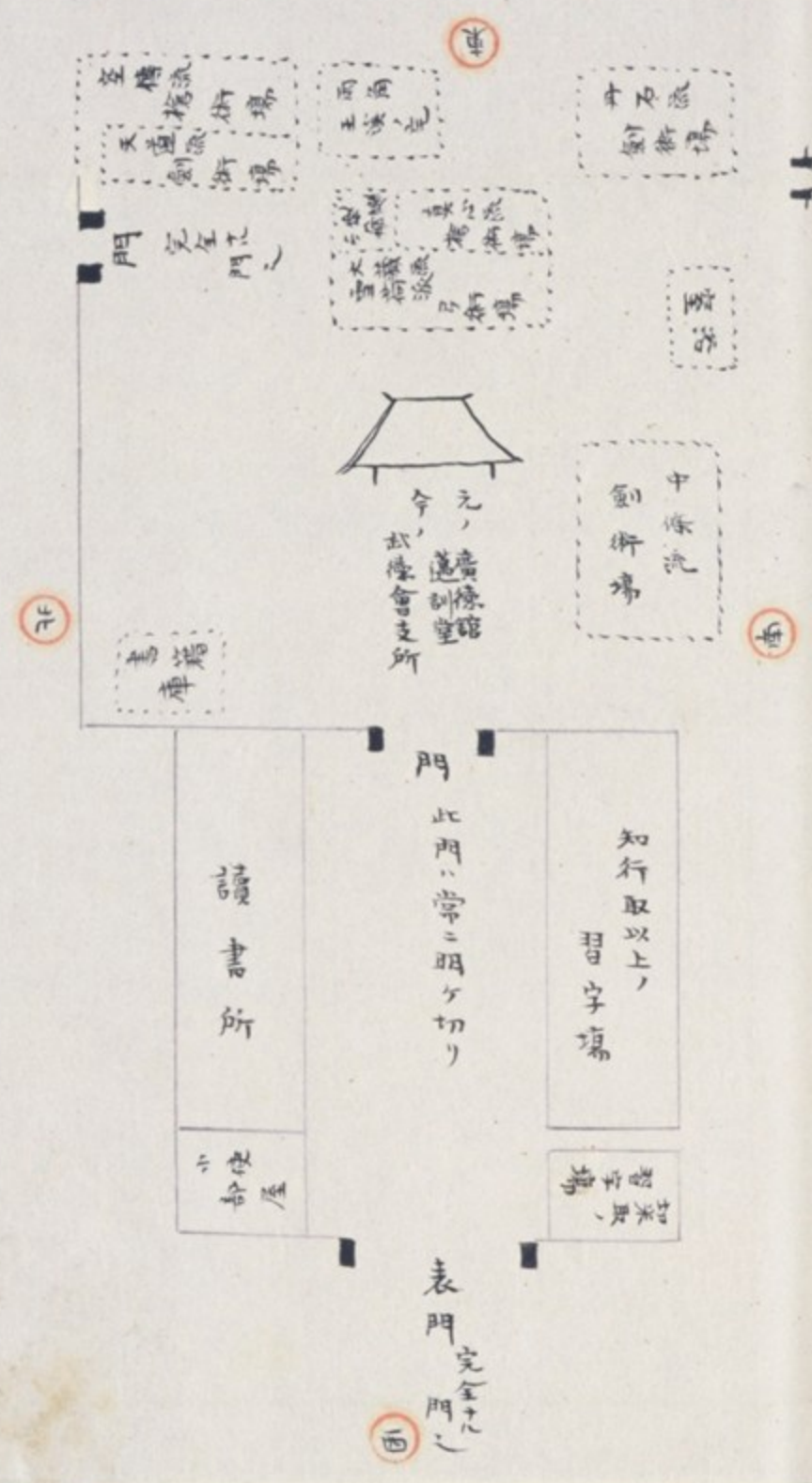
一 家僕石連れ行く事勝手たるべしも譜代ニ非る
とのハ主從ヲ相談勝手なるべし事

一 百石ニ付きてハ陸ハ一疋一人より二日路相送
るべし先納ハ返却をべし其ノ年ハ切米取りた
るとのハ約束り如く奉公相勤むべし

松平家青山家共右ノ法令ニ從ヒ第一ニ官物公品ヲ
運搬シ第二ニ臣下ノ物品ニ及ブ日子數十人數々千

運搬シ第二ニ臣下ノ物品ニ及ブ日子數十人數々千

京都府立総合資料館所蔵



牛馬車數十途上相互絡繹文錯又先着ノ屋敷割當役
 人ノ指揮ニ從ヒ各自々分々々ノ標札ヲ貼附シテ
 邸宅又ハ長屋ニ入ル
 信庸ハ郡奉行大目付以上ノ政務ニ與ル者ハ論語ノ
 意義ヲ略解シ得ガル可クマシテ令レ學政ハ家老年寄
 ヲ以テ管掌セシメタリ元祿正徳ノ間ニ於テ幕府ハ
 文教ヲ以テ政治ヲ補翼スルノ目的ヲ達センガ為ニ
 諸藩ヲシテ學校ヲ建テシメタルヲ以テ藩校ハ江戸
 聖堂ノ教規ニ則リ四書ヲ經トシ五經ヲ緯トシ漢唐
 註疏ヲ宗トシ存經ヲ加ヘ左國史漢ニ宋明代ノ語録
 類ヲ兼讀セシメ陽明學ヲモ文ハ詩文課ヲ加ヘタリ
 第六世信岑移封以來文武兼修ノ法ヲ設ケ優等ノ者

家^御 劍^御 婦女子^御 エレラ
學^御 習^御 ス

ヲ 技擢シテ 藩政ニ 參與セシメタリ

禮式 小笠原流

弓術 大藏流 雪荷流

馬術 大坪流

劍術 天道流 中條流 丹石流

槍術 空傳流 真心流

柔術 佐々流

軍學 甲州流 越後流

小笠原流ハ 藩士及川家ノ 傳テル所ニシテ 馬禮弓禮

衣服禮ヨリ 茶花ニ及ビ 進退坐作ニ及ブ 君主以下士

分ノモノ 悉ク習修ス

軍學ハ 家老一人 軍師一人 之レヲ 管掌教養ス 馬廻リ

丹波志

以上ノ有志者コレヲ學習ス

弓馬槍ハ主トシテ士分ノ者コレヲ學ブ

柔術一名柔道又ハ體術ト云テヤハテトモ呼ブ同心

ノ者コレヲ專習ス犯罪者ヲ捕縛スルニ必要ナレハ

ナリ犯者ヲ京都町奉行同心ニ附シ又ハ他領ノ犯者

ヲ受ケ取ル時其ノ手繩ノ解除ト改縛トノ巧拙ニ由

リ先方役人ノ稱賛ト嘲笑ヲ受クルモノトス

軍學修業ハ其ノ專門家ニ於テ板臺ノ上ニ土沙ヲ盛

リ築城ノ法ヲ講ジ人形又ハ木片ヲ以テ隊伍ヲ立テ

進退開閉シテ攻守ノ勢ヲ作り演習ニ際シテハ之レ

ヲ實地ニ活用セシム

第十一世 信豪ハ文武兼習ノ便益ヲ規圖シ校内ニ演

武場ヲ兼テ設ケ外祖父松平樂翁前系系圖ヲノ命名

門ニ於テ習字ヲ教テ武術習鍊所六個ヲ設ケ習鍊セ

レノタリ 邁訓堂ノ額ハ樂翁ノ書ニシテ廣徳館ノ額

ハ藩老松平新祐ノ書ナリ共ニ龜岡小學校ニ保有セ

ラル

信豪ハ文武兩修ノ君ニシテ臣下ノ鍊習ニ心カヲ用

ク文武ノ一科ヲモ修習セザル者ハ馬廻リハ勿論中

小姓徒士ニナハ登庸セシメ且其ノ家祿削減ヲナ

ヘ銜行シ用人ヲシテ家老ヲ相ケ文政武務ニ當タテ

シノ尚文武ノ師範家ニ就キ入門入學スルヲ得ル

便方ヲモ設ケタリ此ノ政ニ槍劍家ニハ其ノ道場ヲ

丹波志

一冊
馬術家ニハ馬場アリ文武習學生ノ俊秀ナルモノ
ハ藩賈ヲ以テ外遊セシメ又出願外遊スルモノハ自
賈ニテ國外ニ赴カシメタリ
十三世信正ニ至リ時世ノ進歩ニ鑑ミ經書ノ程朱詁
ニ拘泥スル弊害ヲ授ノ王陽明劉念臺倪元旦等ノ說
ヲ折衷セシメ歐米交通後ハ船載ノ書旨ヲ參酌シ各
國語學ニ習熟シタルモノヲ開成所ニ就學セシメタ
リ開成所ハ幕府所設ノ歐米諸國ノ學者ヨリ成ル所
ノ學校ナリ

龜山人物畧載

與平與三左衛門名ハ廣胖字ハ潤卿六世ノ祖ヲ松平
康定トシ兄ヲ好景トス康定ノ子ヲ廣永トス世々學
ヲ傳ヘ丹波ニ家ス廣永出テ篠山藩臣トナル藩侯
家信延キ客卿トス子廣方ニ至リ辭シ臣列ニ就キ主
家ト同氏ナルヲ避ケ外家ヲ冒シ與平ニ改ム子廣武
主家ノ轉封ニ龜山ニ隨ヒ輔導忠至子廣知ニ至リ家
老ニ擢任シ廣問又能ク勤メクルト父廣知ニ劣ラズ
子廣胖六歳ニシテ廣問死ス祿七百石ヲ襲ク寛政十
二年々寄トナリ享和二年番頭ヲ兼メ文化三年會計
總管トナル年甫ノテ二十四此ノ時ニ當タリ藩政大
ニ弛ミ倉庫府庫ノ共乏ヲ告グ廣胖之レヲ患ヘ松平

丹波
志

新祐出別領ト共ニ年倚西脇其ヲ助ケテ改正ニ従事
ス而シテ舊閑家ノ喜バサルアリテ謗言盛ニ行ハ
レ讒言亦乗ジテ興コリ西脇退職シ廣胖罷ノテレ藩
是亦大ニ敗ル廣胖之レヲ目睹スルニ忍ビス新祐時
ニ江戸ニ祇役スルヲ以テ廣胖一書ヲ裁シ國事ノ日
ニ非ナルヲ報ジ歸國シテ之レヲ救治セシトテ求メ
且又夫人氏豪奢ノ事ニ及ブ夫人ニ密告スルモノア
リ夫人怒リ之レヲ其ノ父白川侯松平定信樂翁ニ告
ゲ廣胖等ヲ攘ハントテ請フ定信嘆ジテ曰ハク是レ
忠臣ナリ大ニ用フ可シト文化八年前職ニ復スルノ
命出ヅ固辭再三シテ就カズ同十三年信豪甫ノテ十
七政法愈碎ケ國用日ニ窘々白川侯藩臣ニ内命シテ

所見ヲ獻言セシムルニ各自其ノ異見アリ而モ採用
スベキモノヲ見ズ只廣胖ノ陳告スル所ニ耳ヲ傾ケ
翌年勘定ノ事ニ與ラシノテ効ヲ見ル文政二年番頭
ヲ兼ネレハ疾ヲ以テ辭スレドモ許サレズ諸老手ヲ
東ネテ策無シ一同相圖リ廣胖ニ委スルノ外無シト
シ之レニ謀ル廣胖黙シテ一語ヲ發セズ一同其ノ家
ニ就キ懇請ス廣胖曰ハク諸君吾ガ為ス所ニ一任ス
ルノ度量アラシキ我強クテ後ハンノミト諸老諾ス
白河侯其ノ顛末ヲ聞キ大ニ喜ビ曰ハク龜山ノ藩事
復憂アルニ及バズト廣胖此ニ於テ松平西脇ヲ起コ
シ大ニ革新スル所アリテ政治ニ幣務ニ面目ヲ一新
ス就職五年ニシテ家老ニ昇テレ佩刀ヲ賜フ其ノ為

丹波志

丹波
所ハ自身大坂ニ赴キ金銀ヲ豪商ニ借リテ一時ノ窮迫ヲ凌ギ國用ヲ節シテ不急ノ事ヲ輟メノ藩人ヲシテ亦勤儉カ行シテ公役ニ就クニ勗メシノ民カヲ藉ラズシテ土功ヲ成サシムルヲ徳川家初代ニ試用シタルガ如クニシタルハ諸大臣モ幸テ祿米ヲ獻ジ費用ヲ助クルニ至ル之レヲ聞キ領民ノ獻銀スレモノ陸續トシテ倉庫充テ府庫盈ツ乃大坂ノ返金ヲ為シ餘金ヲ士民ニ分與シ其ノ勞志勿勤ニ報キタリ十二年祿二百石ヲ加賜セラル時ニ日本三家老ノ目アリ一ヲ姫路藩ノ河合隼之助トシニヲ桑名藩ノ土方縫殿之助トシ三ヲ與平與三左衛門トス其ノ一二三ハ人物ノ高下ニ非ズシテ藩ノ大小ヲ以テ立テ

シルナリ事ノ難易ハ當藩ヲ以テ難中ノ難トスベシト云フ此ノ時ハ己ニ白川侯ヲ喪ヒ權臣憚ル所無ク治道復死ミ政事ニ門多シ前文信豪ヲ名君ト云ハルハ文政兩道ニ通ジタル政ナリ偶廣胖疾ニ罹カリ起テ不護訴又作コリ忠謙ノ士屏居シ廣胖不快ノ念ヲ齎シ天保八年死ス年五十四百姓中感泣スル者アリ士林中飲泣スルモノアリ子廣淵父ノ咎ニ罹カリ終身ヲ禁錮セラレ次子廣厚僮ニ家ヲ繼ゲテ得タリ評者曰ハク資質忠厚加フルニ皆川淇園ニ師事シ學ブ所ヲ行フテ凶禍ニ罹カル亦悲シカラスヤ龜山藩中一個ノ明目無キ乎ト山脇東洋名ハ尚徳字ハ玄飛一ノ字ハ子樹本姓ハ清水父ヲ東軒ト云フ母ハ駒井氏龜山ニ生マル東軒ハ

丹波
志

醫術ヲ山脇玄修ニ學ブ玄修ハ法眼ニ叙セラレ朝廷ノ醫官ナリ東洋幼弱ニシテ俊偉母氏訓育嚴正ナリ七歳ノ時句讀ヲ鄉師ニ受ケ十三能ク文ヲ屬ス十八ノ歳ニ父ヲ喪ヒ爾後只母訓ニ從フ弟アリ共ニ書ヲ樓上ニ讀ム母氏其ノ指子ヲ徹シ飯食ト行廁ノ外ハ滯ニ下ルテ許サズ兄弟相扶ケ母訓ニ是レ後ノ玄修コレヲ聞キ駒井氏ニ乞フテ子養ヌ由リテ山脇氏ヲ冒ス時ニ享保十一年ナリ翌年玄修死シ東洋襲グ齡十三儒醫兼修シ博覽強記ナリ一日儒家林東溟ノ塾ニ於テ史記ノ輪讀アルヲ聞キラ臨場シ感興シテ其ノ文ヲ諳誦背讀シテ諸生ヲ驚カセ談話梅花ノ詩ニ及ブ東洋曰ハク不肖梅花癖アリテ其ノ詩ヲ知ル

ト少カテズト衆其ノ言ノ矜誇ナルヲ疑ヒ之レヲ吟誦センテ望ム東洋聲ニ應ジ譽グル所和漢古今ニ涉リ二百首ニ無ントシ坐客ヲシテ驚倒セシメタリ其ノ儒道ニ於ケルマ初ノハ宋儒ノ性理說ニ心醉シタルガ醫術研究上其ノ說ノ齟齬アル所ヲ發見シ遂ニ六經ヲ溯リ諸子ヲ探リテ其ノ要諦ヲ求尋シ一旦豁然トシテ開悟ス時ニ年三十餘以來古學ヲ主トシ醫道ニ於テモ漢ノ張仲景ノ古方ニ從ヒ治方施療神助アルガ如シ門下ヨリ吉益東洞長富嘯菴ヲ出ダヌ後藤良山香川秀菴香川牛山稻若水ノ如キ大家モ抗衡スルテ能ハザリト云フ著書ニハ醫則一卷臚志ニ卷齊世能言三卷文集六卷アリ臚志ハ寶曆四年官

ニ之ニ死囚ノ遺體ヲ解剖シタル實驗談ニシテ古來ノ虛構空論ヲ一蹴シ去リテ世醫ノ迷宮ヲ打開セリ評者曰ハク東洋ノ長所三ツ曰ハク古學唱道曰ハク古書翻刻曰ハク解剖實驗ト同十二年八月十三日歿ス享年五十八深阜ニ葬ル

松崎白圭名ハ堯臣字ハ子允觀瀾ト號ス俗稱左舌父嘉吉松平家ニ臣事シ篠山ニ住ス嘉吉材幹アリ擢ンテラレ老職ト為ル白圭ハ公子亮清ノ傳ト為リ嚴ラ以テ憚ラルル年三十二ニシテ父ヲ喪ク喪除キ父祿ヲ賜ク侍臣ト為ル常ニ讜言ヲ進メ東照公遺訓ニ從テテ啓導ス諸老大臣ノ進見少キヲ憂ヒテ上言シ法制例證ヲ采リ進言スレドモ容レラレバ却テ同僚ニ忌

マル其ノ政ヲ執ルニ當タリ中傷セテレテ職ヲ失フ時弊ヲ極言セン平禍難測ル可ラズ沉默セン乎中心安ンセス乃チ之レヲ筮ス換_{三三}ノ坎_{三三}ニ之クニ遇フ自占テテ以為ヘラク吉ナリ換散ノ時ニ遇ヒ身坎險ニ處ル速ナラント欲スレバ功無シト自後沉晦隱默ス之レヲ久クシテ國老ニ補セラレ前寛全除シ讒者ハ逐ハル偶幕府君侯ヲ以テ寺社奉行トシ兼ネテ郡國ノ事ニ當タラシム白圭此ノ間ニ在リテ志ヲ勞シ身ヲ疲ラセ退職自養セン_一ヲ乞ヒ允ルナレ隱居シテ著作ヲ以テ樂ム正言君道最要鈔史材乾坤小説經世五論窓裏須佐美中庸管見觀瀾小説儒學傳三勇傳岐岨紀行窓下集白圭集等アリ其ノ少年ノ時ニ中野撫

誦ノ塾ニ入りテ宋學ヲ修メ又伊藤東厓荻生咀味ニ
從學シ王陽明ノ說ヲ研鑽シテ別ニ一家言ヲ作ス寶
曆三年江戸ニ歿ス年七十三麻生元真寺ニ葬ル子觀
瀾襲ク

松崎觀瀾 名ハ維時字ハ若修一ノ字ハ子黙通稱才藏
八歳ニシテ父ヨリ大學章句ヲ授誦シ孜々學修レ強
記經倫應對慧敏十三歳父ニ從ヒ東遊シ大寧春臺ニ
從學シ高麗亭ノ詩名ヲ戀ヒ其ノ會ニ入り詩賦數十
首ヲ連吟シ師ヲ驚カシメ神童ノ名ヲ都門ニ馳ス春
臺ハ業ヲ荻生咀味ニ受ケ名教ヲ以テ自任ス觀海ハ
豪爽快活議論風發シ常ニ氣象ヲ以テ同門生ニ加フ
ル所アリシガ一旦師德ニ感マレル所アリテ急ニ節ヲ

折リ言行ヲ苟且ニセバ實用ノ學ニ志ヲ投ジ年十九
ニシテ六術ヲ卓シ師ニホス一ハ下情ニ通ズ二ハ貨
財ヲ通ズ三ハ米價ヲ平ニス四ハ穀ヲ貴ブ五ハ風俗
ヲ變ズ六ハ章服ヲ定ム春臺曰ハク當今ノ實生ナリ
ト經書子類武篇詩集文集通讀セザルハ無シ其ノ詩
文ハ忌諱ニ觸ル所多キヲ以テ藏匿シテ出ダサス
出テハ將タリ入りテハ相タリ多クハ熊澤蕃山ニ
私淑シタル所トス延享二年父白圭老退シテ其ノ職
祿ヲ襲ギ武騎隊ニ入り使番トナリ明和九年歸國シ
テ執政ノ列ニ加ハリ翌年東行シテ世子ノ傳ト為リ
侍講ヲ兼テ番頭ト為リ安永四年疾ニ嬰カリテ危シ
侯命アリ高祿ヲ給シ家老ニ比シ身ヲ養ハシム年五

高祿ヲ給シ家老ニ比シ身ヲ養ハシム年五

十一歿ス同年十二月二十三日ナリ麻生天真寺ニ葬
ハ觀海集ハ門人菊池金谷玉川南山等ノ上梓スル所
トス劇職ニ在リテ教育ニ孜々クルハ希ニ見ル所ノ
世ナリト云フハ當評ナリ

松崎蘭谷名ハ祐之字ハ子慶其ノ弟ハ蘭谷一ノ弟ハ
甘白通稱多助延寶三年生マル父ハ醫ニシテ伏見ニ
住ス蘭谷幼ニシテ學ヲ好ミ伊藤仁齋ニ師事シ博覽
ニシテ時事ニ通ズ藩主松平信庸京都所司代タル時
仁齋ニ謀リ之レヲ得テ京都郎留守居役トス此ノ間
草隸ヲ修習スルト二十餘年細井廣澤之レヲ評シテ
曰ハク書體ノ正整ナルト林道榮高天嶺佐文山ノ上
ニ下リト文章亦美ニシテ雅ナリ陽明學ニ入り本草

科ヲ修マル等多識ニ居ル享保二十年七月九日六十
一歳ヲ終焉トス本朝歴史徵同目錄膝下問答刀袋鏡
袋訓彙銘古漫録史論奇鈔唐詩河海言志録甘白雜錄
山陰隨筆蘭谷集等ノ著アリ歴史徵ハ上神武天皇ニ
起コリ後奈良天皇天文十一年ニ至ルノ史乘ニシテ
本文ハ漢文ニシテ引證ハ多ク和文其ノ儘トシ皇朝
歴史ノ真髓ヲ失ハシノズ名實相協ヲモト云フベ
シ父子ノ墓ハ藤山玉地山ノ北方立町三昧ニ立ツ一
ヲ蘭谷^生ト刻シ一ヲ文雅南泉之墓ト刻ス
南泉ハ蘭谷ノ子幼名萬作幼時父ノ學ヲ受ク弱冠伊
藤仁齋ノ學ヲ受ク正徳三年藤山ニ生マレ享保十五
年歿ス年齒十八仁齋ノ子東屋ノ文アリ曰ハク

蘭谷志

松崎千之字萬作南川其殆也父曰祐之任蔭山掌文
學事千之夙稟英邁遊學京師寓于舍踰年與病歸本
鎮卒不起時享保十五年庚戌七月九日也享年十有
八嗚呼惜哉
伊藤長胤書

予與乃翁甘白兄托文字之契過四十年矣近令生寓
于塾學今茲抱病歸鄉竟不起矣器夙成最所惋惜莫
以一律
東庄

病來仍攤書滿床鴻雁影中歸梓鄉桂水風凄分夕露
大江峯矗趁秋陽玉樓忽倩錦囊手黃壤長埋白壁光
蘭焚尚惠嘆切天倫團聚那何傷

莊田琳菴名ハ静字ハ子默通稱萬右衛門琳菴ハ其ノ
號ナリ寛永十二年武藏國ニ生マレ幼時谷一齋ノ門

ニ學ブ知識才辯アリ松平伊賀守忠晴其ノ通鑑ヲ講
ハルヲ傍聽シタルアリ人ヲシテ之レヲ聘セシメ
祿百五十石ヲ給シ侍講トス時ニ二十八歳寛文十年
侯卒シ嗣子伊賀守忠昭立ツヤ柄臣專權ノ弊見ルニ
忌バズ之レヲ攢斥センラ云ニ且エレニ向フテ面
折シ却テ中傷セラレ寃獄ニ陷リ延寶二年十月死刑
ノ處分ヲ受ク其ノ宣告ヲ聞クヤ從容南向シテ先侯
ノ靈ヲ默拜シ東向シテ江戸ニ在ルノ母氏ヲ遙拜シ
詩ヲ吟シテ曰ハク

向慕胡忠簡英名萬石流浩然同一氣一笑墮儂頭
神色依然從容刑ニ就ク年三十六見聞スルモノ多ク
ハ飲泣ス獄吏問答ノ著アリ

丹波志

皆川淇園名ハ愿字ハ伯恭通稱文藏淇園ハ其ノ號ナ
リ有斐齋節齋ノ別號アリ父名ハ盛慶號ヲ春洞トス
通稱ハ淇園ニ同ジ京都ニ居テ骨董ヲ商フ淇園生マ
レテ四五歳早クモ字ヲ識ル父亦多少文字ヲ知ル試
ニ唐詩ノ秋興八首ヲ書シ之レニ與ヘ且讀方ヲ授ク
ルニ日々テズシテ一二首ヲ誦ス乃師ニ就カシム師
其ノ敏捷ヲ賞シ文章ヲ授ク亦能ク誦ス十五歳ノ比
詩文大ニ進ム韓客ノ來聘スルニ會ヒ之レヲ路ニ要
シテ筆談シ其ノ雋異ナルヲ賞譽セシメ遂ニ聲譽ヲ
海内ニ馳スルニ至レリ平素字學ニ心ヲ潛ノ意義ヲ
象形ニ求メ音韻ニ微シテ名物ノ義ハ聲音ニ生シ聲
音ハ易經ニ基ヅクヲ知リ易詩書周禮儀禮四書等ノ

釋解ヲ作り以テ一家言ヲ立ツ時ニ年二十六ナリ寶
曆九年己卯私塾ヲ開ク弟子未リ集リ終ニハ三千ニ
至ル平戸侯ノ知遇ヲ受ケ其ノ聘アリタルモ之レヲ
辭シ松平信岑ノ賓節トナリ遂ニ其ノ臣籍ニ入ル其
ノ妻ハ松平支系松平某ノ女ナルヲ以テナリ而シテ
祿ヲ受ケ京都留守居役トナル其ノ書畫ニ巧ニシテ
古物監識ニ長ズルハ遺傳ニ出ヅ性溫厚沈毅能ク人
ヲ容レ親屬ニ厚シ其ノ祿以テ衣食スルニ足り贈與
東條以テ酒興ヲ遣ルニ足ルヲ以テ酒肆妓樓ニ登リ
日一日太甚シク黃白ノ眩惑又年一年太甚シク儒流
ノ指彈ヲ受ケ門人ノ私議スル所トナルハ惜ムニ
足レリ然リト雖モ其ノ需求ハ愈多ク坐側ノ文具翫澤

ヲ盡クシ釋奠ヲ私塾ニ行フヤ祭具ヲ備具シ前古儒
 家ノ為シ能ハル所ヲ為セリ而モ且職務工所司代
 又ハ措紳家ニ出仕スルニハ上下着服帶刀乘輿シテ
 俗式ヲ行フハ世儒ノ笑罵ヲ如何ントモスルコト能
 ハガリキ著書ノ多キハ世儒ノ及バ能ハサル所ノ
 數三十餘種記載ニ違アラス字書類ハ大ニ書生ニ歡
 迎セラレクソ文化四丁卯病死々年七十四子尊齋名
 ハ允字ハ君猷通稱通藏家學ヲ繼述シ父ニ代ハリテ
 平戸侯ニ遊事シ文政年間死ス

公川雪樓 公川雪樓



中嶋雪樓名ハ漁字ハ潛史雪樓ハ其ノ號通稱仙太夫
 世々龜山藩儒ニシテ家系中拔萃ノ人タリ初ハ岡白
 駒ニ師事シ業成リ帷ヲ下シテ京都ニ假居シタルヲ
 本藩ニ召還シ校務ヲ執ラシム其君ニ歴仕シ文政八
 年乙酉三月八日歿シ城下ノ誓願寺ニ葬ル其ノ學諸
 家ヲ折衷シ兼ネテ詩又音樂ヲ學習シ共ニ其ノ興ヲ
 窮ム興來レバ獨酌一醉陶然笙笛ヲ弄シ詩ヲ作り歌
 フ咏ジ且又俳典ニ涉ルヲ以テ能ク淡泊自持シ以テ
 足レリトス晩年脚疾ニ罹カルヲ以テ家人門人其ノ



母 友斐齋 志

醫治ニ就カントラ勸ムレバ曰ハク四大假合醫藥ノ

及ブ所カハト死歳八十一偈アリ曰ク

講學得壽 八十一年 適歸何物 非聖則賢

嘗人アリ慧可斷臂ノ圖ヲ出ダシ贊ヲ乞フ其ノ評ニ

曰ハク 庖丁手裏發研刀不就全牛視一毛面壁九年何所得

徒令慧可空甲榮

此ノ一贊以テ其ノ禪味ノ輕淺ナラガルヲトスベレ

松平新祐 諱ハ敏字ハ子求號ハ東谿長澤惟政ノ次子

年八歳ニシテ松平格房ノ養嗣トナル君主信道ノ命

ズル所ナリ其ノ學アリ識アリ氣概アルヲ以テ擢

シテレ年齒十七ニシテ國政ニ參與シ功績ヲ見

ル寛政二年庚戌國用給セズ財政殆ンド敗レ君主

紀伊守信志スニ之レヲ憂ヒ婦翁白川樂翁ニ謀ル

樂翁新祐ヲ識リ之レヲ江戸ニ呼ビ藩政ノ更新ヲ

謀ル新祐所見ヲ叙ベテ容レラル即時歸藩シ同志

數人ト合議シ急ニ節儉律ヲ嚴令セントシ中途病

ニ罹カリ病々半月ニシテ家ニ卒ス享年四十七惜

ム可シ然レドモ其ノ懷抱施行セント欲スル所ノ

實施セテレタルニ由リ其ノ靈ヲ慰ムルニ足ラン

歟塩屋町専念寺ニ墓アリ銘アリ以テ參看スベシ

初代松平新祐戰功ノ下ハ本家松平氏ノ記文中ニ

アリ紀伊守家忠以來ノ功臣ニシテ本家ト相終始ス

ルモノ

與平小太郎名、穉古海ト號ス、父枕山祖翁山家世々儒学ヲ傳フ、小太郎弱齡東遊シ、昌平學昌平府ノニ入り、小石川水戸藩邸弘道館ニ入り、藤森私菴ノ私塾ニ遊ビ、當時ノ豪俊ニ交ハリ、慷慨家ノ位伴ニ與シ、京ニ還リ、梁川星巖頼三樹ト論議シ、大ニ共ニ為ス所アリ、ラントシテ、藩老ノ詰問ニ遭ヒ、其ノ大志ヲ陳ベテ、屈撓セズ、終ニ囹圄ニ幽閉セラレ、煩悶遣ル所無ク、嘆嗟慨慨ノ聲往々壁外ニ漏ル、無聊ノ餘給與ノ塵紙ヲ捻リ、之レヲ塵紙ニ糊シ、以テ自作ノ文詩ヲ字形ニシテ一卷トス、名ヲ南冠集ト命ズ、往々端坐終日、終夜無言黙念スル、一アリ終ニ牢中ニ死ス、或ハ云フ、刑死ナリト

富松萬山、陽明學ノ大家ト呼バレ、ク、當時幕府ハ朱子派ヲ以テ海内ニ布教セシメ、ノタクニモ関ハラズ、小藩中ニ異學ヲ唱ヘテ、頭角ヲ顯ハシ、小數門下ノ内ヨリ春日潛菴ヲ出ダシ、春日ノ門下ヨリ西郷隆盛ヲ出ダセリ、春日ハ播紳家久我氏ノ世臣ニシテ、京都烏丸一條下ル所ニ住シ、薩摩藩邸ト相近ク、西郷ノ京ニ在ルヤ、常ニ相往來セリ、當時ノ薩摩邸ハ今ノ同志社大學ノ在ル所ナレハナリ、春日ガ富松ニ通學シ、クル逕路ハ詳ナラズ、杉菴志道ハ京都ノ人、天保年間龜山城内ニ客居シ、瑞穂傳ヲ作シ、大本教ノ言靈學ト唱フルモノハ此ノ書ニ據ルト云フ、何處郡綏下部ノ部ニテト

丹波志

藩儒中有名ナルモノハ松崎觀海同廟谷別ニ傳アリ見ヨ
三上龍三河南南畝荒川白雲壩和芳雷倉橋江聲兩
角王溪足立竹亭等ニシテ詩書並ビ能クヌ町民ニ
儒醫深海皆山アリ詩書画ヲ善クヌ

畫家ニハ石川枝山笠置丹嶺小谷文麟齊藤竹庵小
嶋夕霞日比拜山吉弘棗園アリ

歌俳家ニハ文旨舎芝蘭女史神門全瓦櫻桃菴北川
湧瀧天部節齋輕森野揚アリ矢部八郎兵衛節齋ハ

柔下漫録盥之魚等ノ著書アリ輕森代石衛門野揚
ハ誓顯寺ニ墓アリ釋圓壽ト刻ニ辭世ノ句ヲ鐫ル

曰ハク眼もあてたれハ三十日も月夜うな外ニ
丸ノ句アリ日にくれを寝てめろ月乃まうな

いさり見てもろり梅うな 火焼うな梅もろけ
り老り右 月乃うな夜ハ明くろり霧凧

松平家格式役割帳

重役獨禮ハ政治専務武事専務ニシテ年頭祝節凶時
ニハ一人ツ、君主ニ拜謁シ祝詞ヲ叙ベ弔辭ヲ呈ジ
専務ノ事ニ付キ君主ノ意見ヲ聞キ又自己ノ意見ヲ
述バル一ヲ得ル重要職責アルモノトス其ノ職名左
ノ如シ

城代家老 一名國家老ト云フ君主不在ノ時ハ君主ヲ代表ス

年寄家老 一年寄ト云フ城代家老ト共ニ政事ノ權ニ當タル

番頭 職務下文ニ出ダス

組頭 同上

公用人 畧シテ用人ト云フ 側用人

江戸留守居

母
史
志

國家走一戸祿高千石

年寄四戸祿九百石八百石七百石六百石、四等アリ

内一戸江戸常住 孰レモ世襲ニシテ式目ニハ

熨斗目麻長上下ヲ着用ス馬一頭ヲ飼ヒ旅行ニハ

長棒四人ノ六尺輿トニ駕籠ヲ昇カシメテ乗り君

主初入國ノ時ハ内一名伊達道具ヲ輿前ニ立テシ

ム鳥對毛又牽馬セシム

年寄ニ月番アリ當タリ月ニハ通常政務ヲ裁斷シ

大事ハ同役國家走ニ謀リテ處分シ最大事件ハ君

主ノ決斷ヲ仰グ

郡奉行ヲ支配シテ地方行政ノ方向ヲ指示ス

小姓ノ支配ヲ為シ君側ノ事務ヲ擔任ス

内役取締トナリ一藩ノ治安ニ任セ知行ヲ支配ス

平服ハ三ツ紋割羽織脊中ヨリ下平袴細キ着用

出勤ニハ繼上下下ト異ナルモ同ジナリ

番頭ハ表役ニシテ又ハ防火隊長トシテ城内ニ在ル

モノ京都屋敷ニ在ルモノアリ士卒ノ支配頭ナリ

組頭ハ足輕組ノ頭人ニシテ番頭ノ助役タリ表役ナ

リ

用人ハ年寄ヲ助ケ知行以下ノ内役ヲ支配ス主トシ

テ中小姓ノ進退ヲ為ス馬廻リ格ノ者之レヲ勤ム

側用人ハ君側一切ノ事ヲ掌リ其ノ責ニ任ズ用人ト

同シク馬廻リ三百石以下百二十石ノ家祿アルモ

ノヨリ出ダス

母城志

江戸留守居一名御城使ト呼ブ幕府ニ登ルヲ許サ
レ老中若年寄大目付等ヨリ命令ヲ受ケ之レヲ江
戸家老ニ傳フルトテ職トス又直ニ君主ニ申告ス
ルトテ得ル重任ナリ君主ニ代ハリ出願同届等ノ
トテモ為ス諸藩ノ留守居役ト毎月定期會合アリ
テ諸般ノ相談協議ヲ為ス之レヲ留守居寄合ト云
ノ幕府ノ機密ヲ知り得ルノ最大機関タリ
以下ヲエ士即知行取ノ資格ニシテ馬廻リ馬廻リ格
ノ者トス知行取トハ古昔知行所ヲ受ケタルニ由ル
旗奉行物頭長柄奉行ヲ表三役トシ上士中ヨリ撰任
セラル物頭ハ小者頭ニシテ足輕一組三十人ツ、
ヲ支配シ非常時ニハ之レヲ率ニ出張ス江戸見付

郎三十六城門中ノ在番ヲ命ゼラレタル時等ニ乘
馬行役ス君侯ノ傍側ニ侍シ登城又ハ出行ニハ
輿側馬側ニ隨衛ス旅行ニハ一槍一僕ヲ隨フ
旗奉行ハ軍中旗幟ノ進退ノ命令ヲ掌リ君主ノ命
ト物頭ノ令ヲ奉ス馬印ノ進退亦同ジ
長柄奉行ハ槍隊ノ長タリ職務大凡旗奉行ニ同ジ
惣禮格トハ獨禮ニ對シテ云フ所并ハ獨禮ノ一人ツ
、君主ニ式拜スルモノト違ヒ同格同役一同頭ヲ並
ベテ拜謁スルモノトス多クハ百石以上知行取ノモ
ノトス左ノ如シ
使番取次醫師大目付龜山留守居所奉行軍師供頭
徒士支配元締及副役吟味役作事奉行小奉行揚木

丹波志

奉行勘定吟味役世話役仲小姓賄方小姓頭櫓奉行
勘定組頭 是等ヲ肩衣勤ト云フ平日ハ縫上下ヲ
着服シ式日ニハ扇斗目麻工下ヲ服用ス
使番ハ軍役ニシテ命令傳達ヲ掌ル
取次モ軍役ニシテ持弓持筒ノ君主用武器ヲ支配
ス

龜山留寺居ハ城代ニ屬シ城郭諸門ニ關スル事ヲ
掌ル

町奉行ハ町民ノ訴訟新獄ヲ掌ル

軍師ハ軍謀ヲ掌リ物頭ノ顧問トナル甲州流越後
流アリテ武田信玄ノ軍方上杉謙信ノ陣法ヲ傳テ
平素自家ニ於テ行軍攻城築城等ノ法ヲ雜形ニテ

教授ス

供頭ハ君主出行ニ際シ徒士輿側十二人時トシテ

ハ十八人ノ支配ヲ為シ途中ノ全責任ヲ負フ

徒士支配ハ身分徒士階級ニ在ルモノヲ支配ス

元締副役等ハ出納ノ一ヲ掌ル勘定方皆同シ

世話役ハ文事武事具ノ他一事アレバー役ヲ置キ

其ノ事々ヲ掌ラシム

小姓頭ハ小姓ヲ支配ス小姓ト共ニ公用人物頭等

ノ上士ノ息子之レニ任ゼラル出テハ輿側馬側

ニ隨行シ入リテハ坐側ニ侍レ除髮結髮朝洗夕浴

衣服ニ刀劍ニ細大ノ奉仕出納遊戯ノ相手武技ノ

相手トナリ晝間君側ヲ離レズ

惣禮ノ惣禮ハ式日廣周ニ居並ビ君主通行ノ際ニ平
伏拜禮スルモノトス之レヲ切米取トモ云フ升ハ知
行取ト違ヒ一年幾度ト期ヲ切リテ祿米ヲ受ケ取り
タル古時ノ方法ニ由リテ名稱ヲ附レタルナリ知行
所ヲ有シタル古ハ領地アリクモ其ノ後ハ千石取
モ皆藏米ノ切米受取ナリ是等ハ中小姓以上士以
下ノ階級ニアルモノニシテ知行取ノ分家モアレハ
徒士ノ次三男ニシテ召シ出カレ一家ヲ成スモノモ
アリ平常割羽織平袴着用式日麻上下紋服着用
御流レ頂戴格ト云フガアル升ハ式日ニ君主ガ一口
飲ミタル盃ヲ以テ賜酒ヲ飲ム故ニ爾名ツケタルナ
リ切米取下等士分ニテ百石未満八石三人扶持ニ至

ル身分ノ者トス一人扶持トハ一日五米五合ヲ天下
ノ常法トスレドモ藩法ニ由リ往々一日三合トスル
アリ當藩モ亦三合ヲ定規トセリ其ノ職名左ノ如シ
祐筆代官江戸定番大午定番作事目付銀札場組頭
出納廣門帳付勘定人代言舊記方表醫師目付穀
物受渡方物書作事小奉行徒士山方揚木受渡役大
手中番庭方山方公事方留役表坊主茶道作事方賄
方杖突殿賄方乘役門番水道目付兼隱密方買便方
張物方午代役々時計問詰殺生方
奥坊主ハ等外ノ身分ニシテ貴賤間ヲ未往シテ其
ノ當用ヲ辨スルヲ任トシ茶坊主ハ茶事專務ニシ
テ君主ノ外行ニハ茶辦當ヲ掌ル平素ハ奥坊主ト

共ニ勤ノ君主ノ浴湯ヲモ掌ル

以下ヲ最下等ノ列トス

足輕 足輕ヲ九隊ニ分テ弓三組銃六組トシ智仁勇ノ端ヲ附シ物頭ニ隸屬セシム持弓持筒長柄組旗組等ハ別ニ之レアリ

中番押煮方刀差山見藏番大敷番拵取下番中間小使等ノ名目アリ小頭ハ足輕ノ頭ナリ同心モ足輕ヨリ出テ所村ノ警務ニ從事シ水道目付ニ屬ス

右等ノ者ハ式日羽織袴又ハ羽織ノミ着用シ頭役人ノ家ニ詣リ拜賀スルノミ

右標示スル所大抵世襲ニシテ特別ノ事情無キ者ハ二百年餘先業ヲ株守シクル而已

足輕同心等ノ祿ハ四石五斗ニ人扶持ヨリ遞減シテニ石五斗ニ人扶持ニ至ル

江戸勤番ヲ始メ諸方出役ハ私費經營トス下輩ニ至リテハ費用ニ堪エザルヲ以テ重臣ノ若黨トナリテ其ノ旅費ヲ助ク

城内居住ハ百石以上ノ家祿アルモノニ限ル然レドモ百石以上ニシテ城外ニ住居スルハ先代ヨリノ任來リアルモノニ限ル下士ハ皆城外ニ在リ馬政ニ管スルモノハ下士タリトモ城内厩側ニ居住ス

五百石以上ノ給祿者ハ絹物ヲ着用ス以下ハ綿服タリ案内ノ婦女モ之レニ準ズ人民ニシテ格式馬廻リ以上ニ當タル者ハ絹物着用ノ特典ヲ與フ

獨禮格ノ者ハ騎法ヲ習得セザル可ラズ公廩ノ馬匹
ヲ借リ馬術師範家ニ就キ公場又ハ師範家ノ馬場ニ
テ習業ス

藩飼ノ馬匹惣數四十五六頭三分ノ一ハ江戸邸ニ在
リ家老物頭師範家等ニハ各一頭ヲ養フ公馬老朽ス
レバ馬術師範役ヨリ年寄へ申告シ馬商ヨリ購入ス
馬匹検査ハ師範役コレヲ為シ其ノ撰ニ中ルモノハ
作金ヲ定メ高定奉行へ申シ送レバ高定方ヨリ馬商
ニ支拂フ

軍役 元和ノ制ニ由レバ馬工七十五騎鑄砲銃ノ百
五十挺弓三十張鎗八十本長柄持旗十本ト定メテレ
タルド藩カコレニ副ハズ此ノ三分一ヲ用フ

行列式 晴日ニハ徒士駕脇紋付服麻上下着用高股立
緒太草履雨日ニハ合羽草鞋 式外ニハ羽織袴高
股立

手代リ 狹箱 槍 徒士同同同 駕脇同同同供取ナリ 駕丁手代右同シ

手代リ 狹箱 槍 徒士同同同 駕丁同 駕脇同同同供取ナリ 右同シ

行列中最前ニ在リ狹箱ハ之レヲ先箱ト唱エ好格式
ヲ表スルモノ豊前守信義が大城坂代ノ勤功ニ由リ
持許セラレソル所
供頭ハ行列中ノ全責任ヲ負フ一行皆其ノ令ニ従フ

馬場志

獨禮格ノ者ハ騎法ヲ習得セザル可ラズ公廩ノ馬匹
ヲ借り馬術師範家ニ就キ公場又ハ師範家ノ馬場ニ
テ習業ス

藩飼ノ馬匹惣數四十五六頭三分ノ一ハ江戸邸ニ在
リ家老物頭師範家等ニハ各一頭ヲ養フ公馬老朽ス
レバ馬術師範役ヨリ年寄へ申告シ馬商ヨリ購入ス
馬匹検査ハ師範役コレヲ為シ其ノ撰ニ中ルモノハ
作金ヲ定メ高定奉行へ申シ送レバ高定方ヨリ馬商
ニ支拂フ

軍役 元和ノ制ニ由レバ馬工七十五騎鑄砲銃百
五十挺弓三十張鐵八十本槍持旗十本ト定メテレ
タルド藩カコレニ副ハズ此ノ三分一ヲ用フ

行列式 晴日ニハ徒士駕脇紋付服麻上下着用高股立
緒太草履雨日ニハ合羽草鞋 式外ニハ羽織袴高
股立

狭箱
狭箱
箆箱立傘
馬
押合羽籠同同同
押 押 押

行列中最前ニ在リ狭箱ハ之レヲ先箱ト唱エ好格式
ヲ表スルモノ豊前守信義が大城坂代ノ勤功ニ由リ
持許セラレタル所
供頭ハ行列中ノ全責任ヲ負フ一行皆其ノ令ニ従フ

馬
坂
志

徒士ハ前列ノ士ニシテ諸大名ノ槍又ハ挾箱ヲ見テ其
 ノ何藩侯何旗士ナルヲ知り關係アル者ト知レバ之
 一ヲ高聲ニ報告ス并伊掃部頭ノ槍ヲ見レバ君主ノ
 親縁アルヲ以テ并伊掃部頭サ一様ヲ引ト報シ園部
 侯ニ路ニ逢ハシ歟之ヲ報ジテ小出伊勢守サ一ト
 呼ブ之ヲ呼ブ徒士ハ徒士頭ナリ走鍊ニシテ過誤
 ナキヲ要スル故ナリ徒士ハ平常武鑑大名氏名高及
國所等ヲ記
 載スル所ノ書物ニ據リテ研究シ又大名骨牌トテ槍
 ト名ヲ記載シタルモノヲ歌カルタヲ取ルカ如クニ
 シテ大名ノ姓名ヲ言ヘバ其ノ槍ノ圖ノ骨牌ヲ取り
 槍ヲ擧グレバ其ノ大名ノ姓名アル骨牌ヲ拾フテ習
 得ス尚篠山柏原其ノ他藩々ノ條ニ出ダス

防火隊夫卒百五十四名餘ヲ出ダス 寛永二十年
 令 大名ヲ四組ニ分チ一萬石ニ三十人ノ割合ヲ
 以テ夫卒ヲ出ダシ一組十日代リニ之ヲ勤ム
 享保九辰年六月七日郡山城受取出陣式 高五萬
 石格式

徒士目付 草履取 棹 旗者 旗破 吹貫輪持 旗竿手替
 先陣 錢砲卒 大龍箱 持夫 持手 替 兩具
 徒士目付 草履取 棹 旗者 旗破 吹貫輪持 旗竿手替

口取 經支配兼 大目付 騎馬 草履取 沓籠 合羽籠 馬印 具足櫃
 口取 普請奉行 若堂 挾箱 小旗

呼 破 志

口取 若堂 要足輕 槍 黑羅紗履 鐵砲同同同同

鐵砲頭 國馬 草履取 沓籠 合羽籠 小頭 鐵砲同同同同 黑羅紗履

口取 若堂 要足輕 挾箱 鐵砲同同同同

手明束 同 鐵砲同同同同 手明束 同 小頭 玉藥箱 持夫

手明束 同 鐵砲同同同同 手明束 同 小頭 玉藥箱 持夫

手明束 同 鐵砲同同同同 手明束 同 小頭 玉藥箱 持夫

馬印 小頭 黑羅紗 鐵砲同同同同 手明束 同 鐵砲同同同同 小頭 玉藥箱

鐵砲同同同同 手明束 同 鐵砲同同同同 小頭 玉藥箱

鐵砲同同同同 手明束 同 鐵砲同同同同 小頭 玉藥箱

口取 若堂 要足輕 槍 鐵砲頭 騎馬 草履取 沓籠 合羽籠 足輕具足 雨具 幕

口取 若堂 要足輕 挾箱 鐵砲同同同同 手明 同 鐵砲同同同同

靱黑塗金紋附 子同同同同同同同 手明 小頭 矢箱 持夫 具足櫃 口取 要足輕

馬印 小頭 子同同同同同同同 手明 小頭 具足櫃 子頭 騎馬 水籠 要足輕

子同同同同同同同 手明 小頭 具足櫃 子頭 騎馬 水籠 要足輕

子同同同同同同同 手明 小頭 具足櫃 子頭 騎馬 水籠 要足輕

合羽籠 乘懸騎馬 足輕具足 雨具 馬印 小頭 黑毛 長柄 同同同同同同

合羽籠 乘懸騎馬 足輕具足 雨具 馬印 小頭 黑毛 長柄 同同同同同同

合羽籠 乘懸騎馬 足輕具足 雨具 馬印 小頭 黑毛 長柄 同同同同同同

馬印 杖 志

舟
沙
言

同同同同手明同同

小頭

具足櫃

騎馬長柄奉行

草履取 沓籠合羽籠

同同同同手明同同

口取

若堂

扶箱

長柄 具足兩具

馬印 具足櫃

旗奉行騎馬

草履取

口取

若堂

槍

口取

若堂

扶箱

合羽籠 騎馬 乘懸

旗箱

旗指

旗破

旗指 旗破

持夫手替

旗指

旗破

旗指 旗破

手替 旗指 旗破 手替 旗指

小頭 騎馬 旗者具足 兩具

手替 旗指 旗破 手替 旗破

手替

具足櫃 得道具

組頭騎馬

沓籠 乘物 合羽籠

口取

若堂

槍

扶箱

六尺同

口取

若堂

槍

草履取

六尺

具足櫃

騎馬

草履取

沓籠

合羽籠

騎馬 乘懸 同同

口取

若堂

槍

口取

若堂

扶箱

叫
皮
志

丹
洲
言

得道具

使役可勤
徒士

同同同 騎馬同同同同同同同同

番頭馬印

使役可勤
徒士

徒士

徒士 緋色羅紗袋
鉢砲

貝細袋入持手皆 貝役人 大鼓弁入持手皆 大鼓役人 雨具右三同 槍 弓立 鉢砲

若堂 手筒 若堂 口取

若堂同 槍 草履取 杖箱

具足櫃 騎馬番頭 杏籠 乘物

若堂 手筒 若堂 口取 若堂同 槍 杖箱

陸尺同

合羽籠 同同 騎馬同同

陸尺同

黑華霞 若堂 得道具 槍

中軍 馬印 具足櫃 鐵砲頭騎馬 草履取 杏籠

口取 黑華霞 若堂 要足輕 要足輕 杖箱

黑羅紗袋 鐵砲同同同同 手明同 束末

鐵砲同同同同 手明同 束末

合羽籠 小頭 小頭 小頭

黑羅紗袋 鐵砲同同同同 手明同 束末 鐵砲同同同同 手明同 束末

叫
岐
志

玉葉箱持夫 足鞋具足 雨具 馬印具足口取 長柄奉行騎馬若黨

得道具 槍 草履取 沓籠 合羽籠 小頭黑毛 長柄同同同同同 手明

得道具 挾箱 得道具 挾箱 小頭黑毛 長柄同同同同同 手明

雨具 組士得道具 草履取 合羽籠 同同同同同 具足櫃 得槍

得道具 若黨同 槍

道具 取次騎馬 草履取 沓籠 合羽籠 近習人數槍 弓立

具足櫃 若黨 手筒 若黨 口取 軍奉行年寄騎馬 沓籠 乘物

若黨 手筒 若黨 口取 若黨同 槍 挾箱 傘 六尺同

合羽籠 同同同 御用挾箱 持夫 具足櫃口取 使番騎馬 合羽籠

大砲箱二箱 大砲役人草履取 持昇棹 旗旋手替 具足雨具

大砲箱五挺入 大砲役人大筒持 同同 同同 持昇棹 旗旋手替 具足雨具

大砲箱五挺入 大砲役人大筒持 同同 同同 持昇棹 旗旋手替 具足雨具

丹波

貝持夫 手替 貝後人 大鼓持夫 手替 大鼓後人 兩具 御幕長持持夫 手替

馬印 具足櫃口取 持筒頭騎馬若黨 捨 草履 沓籠 合羽籠雜袋 鐵砲局 小頭右二局 鐵砲局

同同同 手明 束束 鐵砲同同同同 手明束

同同同 手明束束 小頭 小頭 鐵砲同同同同 手明束 小頭玉葉箱持夫 持夫

具足兩具 馬印 小頭 鞞青漆朱筋利紋同 弓同同同同 矢箱持夫 手替 具足櫃口取 持

弓頭騎馬若黨 捨 草履取 沓籠 合羽籠 具足 兩具 小頭若黨 捨箱 要足鞞 持筒

持長柄同同同同 同同同同同 手明同 小頭 長柄具足兩具

具足櫃 得道具口取 若黨 捨 使番騎馬 草履取 沓籠 合羽籠

一叫皮志

口取 若黨 扶箱

小籠下奉行兼

目付 若黨 草履取

旗者 旗碇 口取

小旗箱 持夫 手替

先馬 沓籠 同同同同

小籠下奉行兼 目付 若黨 草履取

旗者

口取 廐小頭

投鞘 手替

大鳥毛 手替

徒士

五段毛槍 手替

采幣箱 持夫 手替 甲立 持人 手替

投鞘 手替

大鳥毛 手替

黃羅紗履而高

手筒 同同 手替 同 玉藥箱 持夫 手替 二張立 手弓 持夫 手替 同 琴儀 手替 同

牽領

具足櫃 持夫 手替 用長持 持夫 手替 軍用道具 持夫 手替 床机 持夫 手替

袖無羽織

徒士 同同同同同同同

中小姓 同

大十文字 持夫 手替

長刀 持夫 手替

中小姓 同

同役人

徒士 同同同同同同同

徒目付

口取 小姓 兼役 小姓

具足櫃 持夫 手替

馬所

小姓

廐役人

手替

草履取

草履持

口取 小約戸 兼役 小姓

丹 皮 志

丹
波
言

扶箱

手替 手替

箕箱 持夫 手替

茶辨當 持夫 手替

菓子辨當 持夫 手替

沓籠 手替

扶箱

坊主

押

中姓同

徒士同同同同同

徒士目介 口取

沓籠

押 中姓役人中姓同

中姓同

徒士同同同同同

口取

一版小頭

陸尺

衆物 備馬司

胴勢

合羽籠

手明足輕

手明仲間

押

陸尺

手明足輕

手明仲間

押

小姓得道具

若黨 槍

具足櫃

合羽籠

小姓衆懸馬

醫師 衆物 陸尺三寸

長刀

小姓得道具

若黨 扶箱

草履取

草履取

藥箱

合羽籠同同

外科醫師 若黨 草履取

長刀

藥箱

針醫師 若黨

草履取

藥箱

合羽籠同同

外科醫師 若黨 草履取

藥箱

針醫師 若黨

草履取

右筆 若黨 草履取

同御用扶箱

物書 草履取

扶箱

坊主頭 草履取

坊主 草履取

丹

波

言

丹
沈
譜

馬醫
草履取
押

押

後軍
馬印具足櫃
鐵砲頭騎馬
草履取
沓籠
合羽籠

口取
若黨得道具槍
要足輕
口取
若黨得道具扶箱

要足輕

黑羅紗袋
錢砲同同同
手明束同

小頭
小頭
小頭

右
錢砲同同同
手明束同

小頭
玉藥箱
具足兩具
馬印
具足櫃
長柄奉行乘馬

口取
若黨
口取

得道具
槍
長柄同同同同同

草履取
沓籠
合羽籠
小頭
具足兩具

得道具
扶箱
長柄同同同同同

組士
槍
合羽籠同同同同
具足櫃
得道具
組頭騎馬

口取
若黨同槍
口取
若黨同扶箱

丹
皮
志

丹洲記

陸尺

皆籠 兼物 合羽籠 同 具足櫃 勘定方 草履取 勘定所長持 持夫 手替

陸尺

具足櫃

勘定人 草履取 買使 草履取 下役 料理人頭 草履取 料理人 草履取

板間者 中間 同

同 同 臺所役人 同 板間者 中間 小荷駄 作事方目付 草履取

板間者 中間 同

杖突大工 道具箱 鐵砲師 具足師 塗師 磨師 雨具

大工

草履取

草履取

草履取

槍

字領

若黨

武具頭 若黨 摺小荷駄 元締 具足櫃 得道具 若黨

摺箱

若黨

若黨 槍

草履取

六尺六尺

鑲砲 槍

取 陣場奉行騎馬 杏籠 合羽籠 同 兼物 鑲砲 槍

若黨 槍

摺箱

六尺

鑲砲 槍

呼皮志

丹波
洲
言

弓立具足櫃 若黨 手筒同
若黨 手筒同
口取 備家老 若黨同同同 槍
口取 草履取 拵箱
若黨同同同 槍 拵箱

口取 牽馬 沓籠 辨當籠 衆物 合羽籠 同同同同同
六尺六尺六尺
六尺同同

押 物書御用挾箱 目付 若黨 草履取
押 草履取

以上

壽姫標湯布常沙紙依とてと進

比丹波宮標は豊前守御旗
中々宮三枚取は五日

比安方標は豊前守御旗
中々宮三枚取は五日

交渉者 一乃

千五百七十
は堂子代三番
い上

弘化元年五月十日江戸本丸度夫ニ付獻金出願二年
十二月迄三度ニ納金ノ金額不詳少額ナラザルヘシ
嘉永二年以來外國軍艦ノ近海ニ遊ナスルモノ増加
シ海内穩ナラズ幕府ハ大名二十三家ニ意見書ヲ奉
ラシム二十三家ヲ四席ニ分ケ當藩主紀伊守信篤外
三侯脇坂淡路守本多中務大輔一席ト為リ封書ヲ奉
ル 同三年寺社奉行拜命 高百石ニ付キ金參兩ノ
半傳金ヲ勘定奉行所ニ納ム大名旗本一同ナリ嘉永
六年江戸城西丸造營ニ付金二千五百兩ヲ同所ニ納
ム高百兩ノ割ニ安政元年新將軍家定ハ誓書ヲ奉ル御
代替ハリノ奉書ト呼ブモノ將軍家慶堯シ新將軍立
ツヲ以テ舊例ニ從ヘルナリ 前年信篤大城代ト

ナリ滞坂シ萬延元年庚申ニ至ル
大坂城代ノ出テ薩山
江戸小川町三番原本邸落成ス五年燒失シタルナリ
萬延元年壬申トナリ東行ス當時開港鎖國ノニ論沸
騰シ尊王說勃興シ先中ノ勢力者内藤紀伊守久世太
和守罷ノテ内政外交ハ京都ノ鼻息ヲ窺フテ決テ
取ルノ時ナレバ前示意見書ノ穂和說採用セテ且
此ノ藩ノ朝廷ニ好評アルニ由リ水野和泉守板倉周
防守脇坂中務大輔ト共ニ政治ノ衝ニ當タレリ而モ
機軸ハ水野板倉ニ在リト云ヘリ
文久元酉年六月二十九日毎日ノ通り辰ノ刻即今ノ
午前八時頃大江戶城櫓大鼓ノ報時アルヤ路ヲ龍ノ
口ニ取ル具道ノ衝ニ當ル遠藤但馬守邸下廻リ角ノ

葎グ張リ茶店三軒ノ内孰レカヨリ一士跳リ出テ
大刀ヲ揮ヒ輿側ニ突進ス曩ニ櫻田ノ暴舉アルヲ
以テ兼テ警戒セルトテ輿側ノ從士抜刀シテ之
ニ向フ從士ノ市川大八前列ニ在リ退走シテ其ノ
腕ヲ扼シ之ヲ路傍ニ投ス數人コレヲ押ハ犯者ノ
刀緒ト大久保留次郎ノ刀緒トヲ以テ之ヲ緊縛シ
テ本邸ニ護送シ一行君輿ヲ擁シテ走り進ム前ニ
本多侯ノ一列アリ後ニ水野兩家ノ二列アリ驀進
シテ本多侯ノ行伍中ハ混入ス本多ノ列士其ノ故
ヲ知ラズシテ驚走ス水野ノ二列亦亂進シ四家ノ
士卒一團トナリテ城門ニ入ル門衛亦大ニ驚駭シ
テ守備ヲ嚴ニス之ヲ警クシテ事體ヲ知り得テ鎮

門
坂
志

静

犯者ハ水戸侯ノ臣ニシテ小石川水戸家本邸住落
合郷右衛門ノ倅落合籍之助三十二歳口供ニ由レ
バ逆上シタル而已ト云フ本邸ニテハ番卒ヲシテ
最重ニ守ラシメ之ヲ西奉行ニ報告ス奉行所ヨリ
同心十名来リ之ヲ携へ歸ル奉行所ニテ検査スレ
バ衣中ニ一通アリ斬姦状ニシテ豊前守カ井伴大
老直躬ノ女婿トシテ同腹心ナルヲ以テ國家ノ爲
ニ害臣ヲ誅罰スト書ケリトゾ自後執政者流ニハ
憂心忡々タリト云フ 大ハハ柔術ノ名人ナリ父
權太夫賞セラレ別ニ一家ヲ立テ大ハヲシテ分家
セシム

文久二年日光廟普請掛 勝手方用掛拜命 將軍
手自テ羽織ヲ賜フ

衆切登城勝手タルベキ令アリ自後行装ヲ廢シ衆
供ニ騎供番一人トス供番ハ幕城ノ下馬ハ先着ス
ルモノナリ 上使トシテ出行スルニハ一槍ヲ墮
ヘシム 藩中改革 側用人以上三ツ紋割羽織
肩衣廢止 知行中小姓以上無紋割羽織 紋付丸
羽織廢止 駕丁從僕(六尺半四ツ莖)廢止 翌亥年衣服ハ
復舊ス 九月十三日ヨリ阿部主計頭跡引度洞ヶ
峠ハ幡波街道ノ固メヲ勤ム三年亥九月四日病氣
ニ付加判ノ列(老中ノ下)願之通御免前々ノ通帝鑑ノ
間詰トナル 十月十七日洞ヶ峠番所ヨリノ注進

京都府立総合資料館所蔵

長州藩士數人通行ス次ノ固メ番所マデ送ル云々
番所番人問フ何方ノ御家来ナルカ 答フ長州藩
デコザル 問フ大膳大夫様ノ御家来ナレバ天子
様ヨリノ御沙汰ニテ松平肥後守様ノ御差圖ニテ
御氣ノ毒ナガラ御通シ申ス事相成リ難シ御引戻
シナサレ 答フ此ノ方共ハ京都ニ用事アレバ御
通シ下サレタシ 問フ左レバ京都ハ伺フベキニ
付其ノ間下宿ニテモ御扣アルベキ乎 答然テバ
江戸表ハ罷リ下リ申スベシトテ立テ去ル此ノ間
ニ番所ハ戦闘準備セリ
大阪大火浪人出沒スルヲ以テ嚴重ニ取締マルベ
ク所司代ヨリノ命アリ

一橋中納言(慶喜)諸ノ固メ番所前ヲ歩行ニテ通過
セウレタリ番所ヲ舉ゲテ皆知テ事ノ不敬ニ涉
ルヲ以テ私ニ謝罪シ事穩ニ了ス此ノ入費金十五
兩ト云フ

十二月十二日使番安達鏡市以下三十九人建白ノ
テアリテ謹慎ヲ命ゼラル

文久二戌年九月御坊主衆ヨリノ来翰

此ノ坊主ト謂フモノハ足利氏傳來將軍ノ再客
ナハガ徳川氏ニ於テハ主トシテ諸大名ノ使役
ニ供ヒラレ無格トシテ取扱ハレ將軍ニ侍スル
トモアリ下等ノ勞勤ヲモスルモノトス諸藩ニ
モ之アリ此ノ下ニ御陸尺ト唱フルモノニテ主

丹波志

有、昔學氣人より向少掛若子未感付也身又市井
人業も亦却抱付也此：台天下より不其斗室と
上々、又、其日直は多能行命少保は仰出の殿と
有るは其前以て河中以て及之有るは、其人あ
るは乃以一守之其仰付の旨、其語代記し其仰即
去る保子中且、其時其おし其能、不其は其志
証付也以上

九月二日

長州藩ヨリノ書状

四位少將拜命 四年 亥九月龍ノ口用軒老中屋敷返

上外櫻田牧野備前守軒ヲ賜フ
長州藩ヨリノ書状

普天ノ下迄

天恩を蒙りたり依

皇國今日ノ所危急座記其子不思此夜私其歎
到之趣別冊ニ在候リ其由心ノ其取入候
ハ子取入候ハ其外ニ其取入候ハ其取入候
承付候ハ、醜腐ハ其驕侮傲慢其子其子憂玉
士乃迄ノ新言以多し其言ノ候者之由、付不
其色一曰非常之覚悟為其候ハ其言及之候殿以
下其之人宰相父子候事
殿之、一途ノ通事ハ其言ハ其言ハ其言ハ其言
其言ハ其言ハ其言ハ其言ハ其言ハ其言ハ其言
大柳公房直ニ

京都府立総合資料館所蔵

敵兵通子に其家行ふ欲れ征表行に其職掌に
存 西田仲右立危兆一返後事に

敵兵通子安 宸襟の極 皇國に事若持身
年款款仕の儀して元より一身一家に儀して是

し何旨假初に心ま對
天於此不致中より、道理中より、遠く去り、根に踏致

し儀に、不仕に、其儀中何より、歸返取沙知仕て遠
御子思入の儀に、各御方遠方御立置中は其身

是儀御、其御上偏に
天於幕府に、其御方遠方御立置中は其身
御立置中は其身

七月

廣 島 高 島 守 一

松平豊前守御立置中

此御方に御立置中

同 文久三年 十月但馬銀山事件に付出張 九月一ヶ月に

テ 歸 城

物頭 馬廻り 奉行 大砲方 等一小隊 軍備出行

右ハ生野騷動トテ十月十日ヨリノ出来事ナリ

長洲藩士三十名計リ先觸ヲ以テ宿屋三木屋吉兵

衛方ニ止宿ニ更ニ多人数押掛ケ遠王寺中ニ入り

止宿ニ翌十一日夜四ツ時後九時銀山役所ニ闖入シ

公卿澤主水正ヲ大將トシ惣督平野次郎南八郎以

下三十餘名甲冑槍劔ニテ役所ヲ押領ス銀山代官

京都府立総合資料館所蔵

川上猪太郎不在ニ付手代某々應對ニ近傍所々ハ
注進又同國出石豊岡ニ藩出征軍ヲ出タス戰ハズ
シテ暴徒散走シ又ハ自殺ス 京都守護職松平肥
後守ヨリ篠山藩柏原藩福知山藩ハ連シアリ曰ハ
ク但馬國生野銀山邊ハ八月十八日脱走致シテ故
澤主水正事妙小路五郎丸ト改名以多一京都ハ内
願筋有之罷登リテ趣メテ去十一日夕同勢三十人
程生野御代官所ハ陣内借用方申出折節川上猪太
郎檢見留守中ニ有之殊ニ差拒ルハ、暴々敷可致
趣申聞不容易形勢ニ付仙石讚岐守ヨリ三藩手人
數追差出テ趣申越テ處此上亂妨所行ニ及ヒテ難
計都合次第人數差出テ様可被申合旨讚岐守ハ申

合置ハ間同人ヨリ左右次第人數差出テ様可被心
懸ル事

右澤主水正ハ文久三年八月十七日京都脱走七
卿ノ一ナリ時年二十八

七卿ノ内三條中納言ハ細川越中守ハ三條西中
納言ハ松平美濃守ハ東久世少將ハ有馬中務少
輔ハ壬生修理大夫ハ松平修理大夫ハ四條侍從
ハ松平肥前守ハ預ケトナリ錦小路右馬頭ハ死
去澤主水正ハ脱走シタリシナリ

元治元年子七月十八日京都南面御固五藩ハノ来
狀 藝州 柳川 福山 高松 龜山
弊藩亡命之徒於山崎表主人并ニ三條殿以下寛罪

攘夷之御國是共哀許歎願仕之處此度時勢切迫至
情不堪之餘

天幕、御願書差上猶御列藩、及御通達、而義兵
相舉、付於私も引纏遂一戰申度次第別冊之通
御座、爲國家天下之大不韙を漫々微哀御洞
察時、騷擾御恕免被成下猶

天幕御向御仁惠之御評議宜敷奉懇願度此段 御
主人様、程宜被仰上可被下々恐々謹言

子七月

松平大膳大夫家老

益田右衛門介

福原越後

國司信濃

龜山様

御留守居中様

元治元年八月十七日京都大騷動(別項參看總論)ニ付人数繰

出シ甲冑着用ニテ十九日夕刻京着廿七日迄屋敷

ニ滞同夜龜山歸城 此ノ役ニ於ケル賜金百九十

七兩二分

分家旗本松平友三郎上使トシテ仙臺下向先箱二

本道具 怒テ當藩ヨリ支辨

元治元年十一月大阪大火燒失ニ遭ヘル浪士京都

へ落来ルモ計ラレズ由リテ出張所渚村志水村へ

戒嚴スバク龜山表ニ於テモ用心スバク所司代ヨ

リノ達シアリ

て下延山由山

一 浪士先鋒ニ先初トヤ職持系り由

一 飯田加納山城下ニ如何ト論り七難ニ因り由

一 市丸口右田川を隔り新法ヲて向り進ニ罷り

一 尾少勢を田川、因メ山人救出之メり安太山ニ

一 寄り孤りて、不沙人殺引揚小枝トヤ安、区陣

一 由

一 甲少身近山籠り兵、浪士ニ入る人斗依谷ニ方

一 出い由是ハ一向不取止り由

一 祐一助ハ所知り今安りて一戦ニ有モ又却川ニ

ゆり

以上

慶應元年京都巡察ノ命アリテ京都街道所々ノ間道

視察ヲ為シ浪人ノ往來ヲ糾ス幕府目付巡察ノ為ニ

未藩シ謂ハレ無キ者往來セバ篤ト聞糾シ番ケ出ツ

ベシト令ス

同四年正月三日幕軍敗退 總論正月三日ノ戰 明治元

年三月二十一日御東征了ラセラレントシテ大坂行

幸アリ東本願寺津村別院ヲ以テ行宮トシ二十八藩

ヨリ御守衛兵ヲ出ダス可ク達セラレ本藩ハ士卒ニ

百人番頭コレヲ指揮シ大坂南御堂前ノ寺院ニ陣ス

命ヲ受ケ藝州藩兵松浦藩兵ト共同シテ洋式演習ヲ

為シ共同御警衛シテ京都還幸ノ供奉ス閏四月東方

賊勢大ニ衰ヘタルニ由ル

明治三年高一萬石五人ノ割ヲ以テ藩士ヲ東京兵部
 省へ差出スベク太政官ノ令アリ由リテ文武ノ才幹
 アリ且身體強壯ナルモノヲ撰拔シ十五名ヲ送ル
 四年廢藩置縣全ク成リ藩主圖書頭信正ガ藩知事ノ
 名稱ヲ止ノル如ク御沙汰書ヲ拜セリ

松平圖書頭

此度知後事被

仰付々處辭表ニ越全

皇國維持ニ衷情より生トハ儀

敬感被為在ハ得共人情時勢

御斟酌ニ上被 仰付々成ニハハ奉命可

有

御沙汰事

七月

行政官

城主在職年數概算

明智光秀	七年	堀尾吉晴	一年
羽柴秀勝	七年	金吾秀秋	二年
石田三成	一年	前田玄以	七年
前田主膳正	一年	北條安房守	一年
權田小三郎	七年	岡部長盛	十三年
松平成重	十三年	松平正昭	一年
菅沼定芳	十三年	菅沼定昭	四年
松平忠晴	十三年	松平忠昭	十四年
松平忠周	三年	久世重之	十二年

中 史 志

井工正峰	七年	青山忠重	十二年
青山俊重	十四年	青山忠知	十八年
松平信岑	十四年	松平信直	十八年
松平信道	十年	松平信彰	十年
松平信志	十五年	松平信豪	二十七年
松平信義	二十三年	松平信正	四年

以上

與カト云フニ付キ
大名ノ城下殊ニ士族ノ住居地ニハ役名身分名軍
器ヲ以テ字トシ町名トスルモノサカラス假令ハ
旗町槍町弓町ナドノ如ク足輕町徒町先手町同心
町與カ町ノ如シ中ニ就キ與カヲ以テ字トスルハ
蓋少シ然ル所以ハ純臣ニアラザレバナリ龜岡ニ
之アリ請フ九ニ之ヲ叙ベン徳川幕府ノ制度ハ言
フ迄モ無ク封建ニシテ身分役柄ヲモ併襲シ又ハ
大名小名ヲ一階級トシ其ノ中ニ三家三御ノ親藩
モアリ譜代アリ外様アリ第二級ヲ旗本トシ九千
九百石以下ノ祿ニシテ其ノ領土アルモノト之ナ
キモノトヲ論セス御目見以上ノ者ヲ以テ之ヲ組

丹波志

織シ其ノ次次階ヲ與カトシ三百石位ヨリ百石位
ノモノヲ以テ其ノ内ニ納レ第四級ヨリ以下ハ士
分ニアラズ故ニ茲ニ之ヲ畧ス故ヲ以テ與カナル
モノハ中階ニアリテ出ツルニハ馬ニ騎ルベク槍
ヲ携フベク其ノ儀裝ニ於テ小旗本ト差ナシ
與カ考ト云ヘル小冊子アリ京都町奉行與カ某ノ
撰ニ係ル之ヲ論ズル詳ナリ史記文中ノ與有力馬
ナドヲモ引キ来ルモ是ハ大名ヲ左傳中ノ美城之
大名也ニ齊シク漢藉家ノ支那風主義ニテ一説ト
見ルニ過ギズ大名ハ大名主ヨリ小名ハ小名主ヨ
リ起レルガ如ク與カモ必竟俗名ノニ其ノ義ヲ漢
藉ニ取ルモノハ與カニ次グヲ同心トシ其ノ名ノ

起リハ易经ニ出デタルヨリ與カノ文字モ亦漢文
ニ起因スト云フニ過ギズ
戰國時代ノモノヲ見ルニ寄騎ナルモノアリ是レ
ゾ與カノ本ナレ今茲ニ一隊ヲ組織セシニ旗下士
ニ命ズルニ其ノ將タルヲ以テス然ルニ其ノ臣ニ
シテ足ラズ故ニ騎士數名卒數十百ヲ寄リ合ハセ
テ之ニ授ケ以テ其ノ下ニ置ク故ニ與カハ其ノ臣
ニアラズシテ君家ヨリ寄テ預ケラレタルモノナ
リ
大名ハ其ノ家来コソアレ寄騎ナシ其ノ封セラレ
タル初ニハ或ハ之アランモ數十年ノ後ハ其ノ
臣トナリシナラシ幕府ニハ其ノ初ノヨリ之アリ

母
波
志

テ地方ニ住シ其ノ地ノ警衛ニ任シ其ノ地ノ訟獄
ヲ断ズル等百般ノ事ニ関與セリ是レニ依リ之ヲ
見レバ龜岡藩ニ與カアル可ラズ之アルハ或ハ其
ノ初封ノ時寄預セラレタルカ今之ヲ考フルニ矢
田神社鐘銘ニ家臣属士トアルヲ見レバ與カアリ
タルナリ
天正六年羽柴秀吉播磨ヲ撃タントシ信長ニ乞ヒ
谷齋好ヲ以テ寄將トナサントス信長曰ハク援將
トスバレト寄將寄騎ナドノ稱ノ戰國當時ニアリ
タルヲ見ルベシ
與カ同心ニ付キ
天領即チ幕府直轄地ト要港要所ニハ幕府ヨリ土

着ノ士卒ヲ置キ之ヲ守ラシム之ヲ與カ同心ト云
フ其ノ支配ヲ爲スモノハ旗下士ニシテ其ノ地
ニ出張シ三年五年ニシテ更ハル重キ事ナキ所ニ
ハ同心アリテ與カハ無シ京都ニ於ケル鐵砲組ノ
如シ故ニ之レガ支配ヲ爲ス旗下士モニ三百石高
ノ者トス此ノ鐵砲組ナルモノハ二條城内矢倉ニ
在ル鐵砲ヲ掌ルノ職ノミ
所司代與カハ五十騎アリ同心ハ百人アリ町奉行
禁裏附等或ハ三十騎ニ八十人二十騎ニ四十人ナ
ド多少ノ相異アルモ大抵ハ同ジ皆與カト同心ア
リ記者ハ其ノ禁裏附與カニシテ後ニ旗下士列ニ
加ヘラレタリ祿高ハ差等アレトモ二百石高ヨリ

町
支
志

六十石位ニ至ル孰レモ四ツ物成リトテ二百石ナ
レバ二四ノ八十石トス同心ハ十石三人扶持ヨリ
五石二人扶持位ニ至ル與カコレヲ支配ス一人扶
持トハ一日ニ云米五合ヲ給ス扶持米取ト云ハバ
賤位ヲ意味セリ

本陣脇本陣ニ付キ

大名旗下士以下幕府ノ役人又ハ大名ノ大臣等ノ
旅行休憩宿泊ニ給スル旅館ヲ本陣ト呼ブ其ノ根
起ヲ繹スレバ戰國時代ノ陣所宿所ニテ各自面々
ガ原野森林中ニ假設シタルモノヲ泰平ノ世トナ
リ惣テノ事驕奢ニ趨キ旅館專業ノモノニ一任ス
ルトナリ通常旅客ガ旅籠賃ヲ掛テテ食宿スル

ト一斑換ハル處ハ寢具食品ヲ携帯スルト飲食ノ
調理ヲ隨行ノ臣下ガ爲ルトノ別アルノミ夫レモ
旗本ヲ始メヨリ以下ノモノハ大抵本陣ニ一任シ
賃銭代物ヲ掛フモノトス脇本陣モ一驛ニ心一軒
アリ大驛ニハ二三アリ本陣ニ先着ノアル時ニハ
後者コレニ宿泊ス國ノ大小祿ノ高低ヲ論ゼズ勅
使ノ幕使ハ此ノ限ニアラズ後ニ來ルモ必ソノ本陣
ヲ取ル 大名ノ來ルヤ本陣主人ハ禮服着用ニテ
驛外ニ迎ヘ翌朝又驛外ニ送ル大名ヨリ目錄(鑿落)
ヲ賜フ往々謁見ヲ許サレ故ニ其驛村ノ領主ヨリ
徳望アルモノニ任カレト爲レリ而シテ其ノ寶
ハ株ト言ヒ之ヲ賣買ス館舎庭園器具頗ル綺麗ニ

事多ク禮典ニ據ル故ニ一個人ノ經營ニテ善クス
ベカラズ領主ノ庫中ヨリ補給スルアリ又扶持米
ヲ常給スルモアリ 當所ノ如キハ山陰道大名ノ
時々經過スルアルノミナレバハ規模ノモノタリ
然レド明治二十年頃其ノ賣却品目錄ニ美術品タ
ルベキモノ十數品アリキ中ニ就キ畫幅屏風漆品
ヲ多シトス

非常役場 非常役人 非常人足 事

非常役場ハ柳町ニアリ日夜役人當直交代シテ出
火洪水具ノ他非常ノ事アリテ領主ヨリ人足ヲ要
スルトキ之ヲ出ステ掌ル維新前ニハ安町ヨリ
金水具余部ヨリ小山具廣田ヨリ沼田具西町ヨリ

平田具等五六名出勤シテ更ハル 事務ヲ執レ

領分一戸ヨリ一匁二分ヲ出サシム之ヲ非常割ト
名付ク 非常人足タルモノハ非常人足株ヲ讓リ
受ケ一枚持ニ枚持ノ別アリテ役ニ出ツ株一枚ヲ
有スル者ハ玄米一斗七升ヲ得又中ニ半口ヲ有シ
八升五合ヲ得ルモノアリ出役中ノ飲食ハ領主ノ
賄ヒナリ **非常人足** 勘八 ナドノ札ヲ表口ニ貼ス役場
ヨリ町村ノ役人ニ幾名入用ト達スレバ村役人町
役人ヨリ出張ノ差圖ヲ爲ス非常人足ハ非常役場
ニ集リ茲被ヲ受ケ之ヲ着用シ新町門ニ入レバ具
所ニ士役人居テ出張場所及ビ勤務方途ヲ命テ城

丹波 志

門ノ出入ハ非常役場ノ監札ヲ以テ證スルナリ具
ノ人足賃錢ハ時ノ相場ニ由ル年貢納メノ時上納
米ニテ差引勘定ス故ニ非常人足賃錢多クシテ非
常割ニテ不足スルニ於テハ貢米中ヨリ引キ去ル
ナリ維新前後ノ如キ領主多重ノ際ニハ往々急劇
ノ出役アリテ従前ノ方法ニテハ遲緩ナル故鑑ヲ
鳴ラシテ呼ビ集メタリ安政文久元治ヲ經テ慶應
トナリ國家多事ニ際シ諸藩ニ守備ヲ命ズ之ヲ御
固ト呼ブ本藩ハ維新前ニハ諸方ノ御固ヲ經過シ
テ淀八幡方面ニ出陣シ又領分内ニハ藩地ノ固メ
ヲ爲シ浮浪人ノ取締リヲ爲サバブル可テズ士卒ノ
數ニ限アリテ用途ニハ限りナシ茲ニ於テ乎非常

人足中ノ有志ヲ募リテ足輕トシ之ヲ隊中ニ加ヘ
僅ニ其ノ用ヲ辨シタリ明治初年諸藩ニ令シ三代
相恩ノモノハ之ヲ上太夫中太夫上士中士下士及
ビ卒族ト爲ヒシニ藩々ニ於テ右非常人足ニシテ
足輕トナリタル者ヲ三代相應ナラズトシテ之ヲ
除外スルニ忍ビズ且一人タリトモ藩士卒ノ數ノ
多キヲ銜ハントスルノ傾モアリテ旁々此ノ輩
ヲ舊臣籍ニ列シテ届ケ出テタリ故ヲ以テ一時雇
入ノ者ニシテ今士族タルアルナリ旗下士ノ家来
ニ至ツテハ其ノ事無ク法令通りニ行ハレタリ他
國ハ知ラズ丹波ニ於ケル杉浦以下皆然リ故ニ旗
下士ノ臣ニシテ三百年間先祖代々士分ニアリタ

丹波志

衡

ルモノ、平民籍ニ入レラレタル時大ニ其ノ不權
衡ヲ許ヘシモアリタルガ泣キ寐入りニ了レリ
准下士及び其ノ子弟ハ學校ニ登ルヲ許サズ故ニ
志アルモノハ其ノ家々ニ就キ之ヲ學習ス 明治
二年十一月藩立小學校ヲ町内ニ設ケ平民ノ子弟
ヲシテ就學セシム然レドモ人民ハ未タソノ必要
ヲ知ラズ之ニ入ルモノ無シ且廢藩ノトアリ業ソ
ノ半ニ至ラズレテ罷ム
校式 讀初 正月五日辰ノ刻(今ノ午前八時頃)校門ヲ開
ク藩主以下麻上下ニテ入校ス給人以上ノモノ邁
訓堂ノ右階ヨリ下士ハ左階ヨリ昇ル就レモ藩主
ニ先ガナテ登校シ藩主ヲ玄關ニ迎フ 式場ニハ

權

孔子ノ画像ヲ掛ケ教授助教其ノ前ニ簋盞豆
ヲ奉シ時物ヲ薦ム 教授一名起ツテ聖像ニ一揖
シ藩主ヲ拜シ講座ニ就キ孝經ノ首章ヲ講釋ス
藩主起テ進シテ一拜ス 執政以下ハ祭場外ニテ
拜ス 上士下士次第ニ進ミ拜ス 等級昇ケレバ
聖像ニ遠ガカルヲ加ハル 式コレニテ終リ藩主
退校一同送ル 了リテ順次退校
藩主在城ノ時ニハ毎月十日二十日三十日月小ナ
レバ二十九日儒臣論語ヲ講ズ其ノ日登校セザル
臣下ハ其ノ理由ヲ届ケ出デシム
學校掛 執政一人 參政一人 大目付一人或ハ
二人

儒官ハ無給 功勞ニヨリ家祿ノ増加金員衣服ノ

賞賜アリ異數ノ拔擢モアリ 生徒 句讀受業生大凡貳百人 講義聽聞生大凡百人

經費 米百四十石 金百拾兩 内譯 百二十石 儒者四名俸給 高呼六百石之

高二百石一名 百五十石二名 百石一名 二十石 掃除小使給

金五十五兩 雜費 金三十兩 褒賞 金二十 五兩 修繕費

維新前教員 松崎正輔 百石奉行格 中嶋仙太夫 同 三上忠八郎 同 足立字助 同 兩角孫四郎 五兩 同 森田復助 十五兩 同 富松弁吉

維新ノ際 文學教員ヲ專務トス 經費米六百十 五石 金千二百五十圓 内譯 米四百九十五石

教員俸祿 百二十石 其ノ他ノ役人給 金二百五十圓 雜費 二百圓 褒賞 三百圓 修繕費 五百圓 書籍買入 授業料

ヲ徴セス 先例入學箱箱 下二編代藩札ニ分テ賦テ 學校掛 大參事一人 少參事一人 大屬一人

改正 教授二等 從米六石 定祿廿石ノ者二名 二十石ノ者一名 助教三等 從米四石 定祿廿石ノ者三名 十三石ノ者四名

句讀師四等 從米三石 定祿廿石ノ者各一名 十三石ノ者五名 鑛門館教員五等 從米三石 定祿十五石ノ者三名 十三石ノ者二名 掃除小使 五石ノ者四名

龜岡縣トナリ 明治三年世況一變シ 實用學術ヲ講

究スルヲ以テ生徒ハ京都中學ニ吸收セラレ藩校ハ閉鎖ス
經濟一斑 明治二年

一 現米貳萬八千三百二十五石七斗三升九合五夕

金貳百四十九兩二步一朱永四十六文六厘 丹波備中善鏡地

平均額 平均額 五年 內 壹萬五千石 公廳費 金二百四十兩餘 同上

内軍務費五千石 米二千八百石 松平家家祿 舊祿十分一

殘壹萬五百二石餘 內 四千七百七十九石 上等士族百九

十九人 舊祿千石以下十人扶持以上 平均廿二石宛 同 五百九十石餘 上等士族當

分舊祿半知渡シ十分一割合ヲ以テ増減スルモノ時勢斟酌の上己ムヲ

得ガレ處置 一 三千六百四十五石 下等士族三百五十三

人 內 十五石ツ、舊祿二十石三人扶持ヨリ 十三石三人扶持以上 內 十二石ツ、舊祿十二石 三人扶持ヨリ

扶持以上 內 十石ツ、舊祿七石二人扶持ヨリ 五石二人扶持以上 內 八石ツ、百

四十一人 舊祿四石五斗二人扶持ヨリ 一 貳百八十六石餘 部屋住

長男ニテ在役 百六人 二人扶持ツ、妻子持五十三人 舊祿十五石 三人扶持以下

二石二人 扶持以上 一人扶持ツ、獨身五十一人 一 十石 孤獨扶持

一 三千二百四十九石 卒族五百二十五人 內 六石五斗ツ、四百

十六人 舊祿五石二人扶持ヨリ 同 五石ツ、百九人 舊祿金七兩二人扶持 一石一人半扶持以上

メ 米壹萬千九百五十九石 千八百八十三人

差引千四百三十九石不足 此ノ不足ヲ生シタル所

以ハ公廳費用中ニ組入レラレタル軍務費ノ如キ

モノニテ安政以來幕命ニ由リ公役ニ從事シタル

結果 別項非常役場以下ノ 部ヲ參看スル 年ヲ逐テ高ニ要用ノ起ル毎

ニ 勘定方役人ヲ大阪ニ派出シ負債ヲ商人ヨリ爲

以テ一時ヲ濟フタル元利返葬ヲ爲セシモノ亦
其ノ一大件中ニ居ル藩士中十中八九ハ藩ノ經
濟ヲ知ラザルモノカラ此ノ結果ヲ見聞シテ一同
安キ心ナシ且ツ左ノ書付ヲ見ルヤ各自獨立シ一
家經濟ヲ立ラザル可ラズトノ念慮漸萌シ従前奴
隸視シタル町人百姓ニ向フテ暗夜具ノ指導ヲ乞
フモノ比々出デ来レリ書付ノ文句ニ云ハク
右取調書伺ニ相成候へ共年内御沙汰之程ハ難
計此般兼而心得居可申候事

巳十月

士族 維新明治ノ初政トシテ人智ヲ擧ゲ門閥ヲ
問ハザルノ制出デ百姓町人ノ外ニ一大變動ヲ起

コシ幕臣ヨリ藩臣ニ至ル迄常職ヲ解カレ家老モ
政治ニ容喙スルノ權利無ク足輕モ使役セラレ義
務無ク新任セラレタル官吏ノ外ハ一同茫然トシ
テ坐食シタリ其ノ初ノ上大夫中大夫下大夫上士
中士下士ノ階級ヲ建テラレタルガ是レモ一朝ニ
シテ止ノラレ一斑士族トナリ同等トナリ間ニ無
ク祿制ニ相應スルハ公債證書ヲ下附シ之ヲ賣レ
ハ衣食ノ料トスベク農高エトナルノ資トナルヲ
以テ士族ノ囊中一時ニ暖氣ヲ生シ或ハ單獨ニ或
ハ共同ニ民ニ伍シテ自由ノ身トナリ慣レヌ事ニ
手ヲ出シ獨高校工ノ惡手ニ罹リ公債證書ハ比々
債主ノ手ニ落チ偷安貪快ノ資トモナリ仆ル、モ

ノ百有餘家四方ニ離散シ生活ニ得ルモノ明治四十年ニ至リ只十有六戸アルノミ

藩對社寺 除地祿制寄附米及ビ免役

高百石 光忠寺 同五十石 圓通寺 米七石五斗

一行院 同五斗 極樂寺 五十人扶持 大智院

五人扶持 法圓寺 四石 寶藏 高三石 宗壁

寺 高一石二斗三升餘免稅 稱名寺 一石二斗

三升餘免稅 善久寺 高二十石 專念寺 高

一石一斗餘 嶺樹院 高一石 正誓寺 四

斗五升社頭東西十間 南北十四間半 八幡宮 社地東西五十間 南北七十間 此坪三千五百坪 余部

走田神社 高七斗 陽雲院 高二石并二 境内免

稅 天神宮ノ藏林院 高十七石二斗餘 宮山南北八町東西十町餘

上矢田 鐵山宮八幡宮 高七斗五升 境内共 崇蓮寺

境内東西四十間 南北十八間 西四十三間 北七十六間 普門寺 合千四百九十一坪 五

分 高一石九斗七升餘寺地迹ノ藏林寺 高五石餘寺間四方 境内共

八幡宮 社地東西四十三間 南北十八間 王子權現 湯料 胎

現米 一石半子安地藏堂 境内東西六十間 南北九十間 又東西三百間 南北二百五十間 五百四十一坪 七百七

保津 請田明神 米二石山投米 同 神護院 境内坪百

請田御旅所 領山南谷川 北東ハ谷際 西保津村 境 愛護山威徳院 境

内東西三十四間 南北四十四間 馬場三間 六十八間 勝林島 若宮權現 此坪千四百九十六坪 二

百。四坪 高五斗。六合 園分 觀音堂

境内東西二町 南北二町半 此坪一万八千坪 將軍地藏 境内東西二十五間 南北二十二間 此坪五百五十坪

日八幡宮 境内六町四方 此坪三十六坪 北中村 祇園寺 境内堅二町 橫一町半 此坪九十八坪

元明院

境内 三町半四方此坪 養濃田 柘尾明神社 同

段歩

猿樂田

地 東西十五間南北八間 同御旅所

境内 東西三町半南北

一町此坪一万

今宮明神

一殿歩 同猿樂田

境内 東西十二間南北同此坪百四

二殿 毘沙門堂

境内 二十五間四方此坪 山階 春日社

社領

二殿 四歩

以上南桑田郡

宗社大明神

境内 一殿二畝廿三歩 此坪三百四十 同御供殿 一畝

一畝歩 此坪三百

知惠寺境内高二斗六升六合

大辻神社

境内 東西三十三間南北廿五間 山林 東西十八間南北十九間 此坪三百

刑部 久留守社

東西十八間南北三十六間 刑部 住吉神社 東西十一間南北四十

六間此坪 五百六坪

地藏堂

東西十九間南北十八間 北廣瀬 大將軍社 東西四

南北五十六間此坪 二千四百六坪

八幡宮

東西四間南北三間 山室 野家守神社 東西

同 四十間南北八十間 八十二間 此坪四千九百坪 分五室

以上船井郡

森 國恩寺

高五石 日村山社 八幡宮 東西三十二間南北三十二間 此坪七百四坪

同 山林 東西七十間南北二百五十間 此坪一萬七千五百坪

淨法寺 子生觀音

東西三十三間南北三十一間 此坪六百七十二坪 同

屬地山林 東西四十五間南北四十二間 此坪千八百九十坪

同堂領 高一石八斗五合 同續地墓

所山林 東西八十五間南北三十間 此坪千七百坪

杉生 春日神社境内山林 共十間 東堂

南北二十間 此坪千坪

中廻 辨天社神宮寺

東西六十間南北二十間 此坪七千二百坪 田能 樞船

東西十四間南北十四間 此坪八百九十六坪

同 村支配山林

東西二町南北三百四十八間 此坪四萬八千七百二十坪 同

同 百姓支配大般若田

高六斗六升 同 百姓持堂田 高三石三斗九升九合

出灰 午頭天王

東西十四間南北二間 此坪二百八十坪 同山林 東西二十一間南北十四間 此坪二百九十四坪

二料 熊野神社三社

東西九十間南北百七間 此坪九百六十三坪 同 牛頭天王社

東西二十間南北一町餘 此坪二千四百坪

柘原 之大神宮社

東西三十間南北一町 此坪三千六百坪 同 熊

野社 東西五町室山内南北六町 此坪九萬坪

同 女宿明神社 東西五十間南北百二十

同 社領 高一殿三畝歩 此坪三百九十坪

小泉 好堅寺

東西十八間南北三十間 此坪一千八百坪 同 德

神明神社 此坪六百南三十七間 同村支配山内 東西百十間南北百八十
 八幡宮 東西九間半南北三間半 西條 八幡宮 東西十五間南北三
 山王社 東西百十間南北十六間 同山林 東西一町南北一町半 大餉
 天神社 東西一町南北一町半 穴川 惠美須 東西二十三間南北二十五
 道場 東西九間南北八間半 佐伯 神藏寺 高八石并
 八幡宮 東西五十五間南北五十三間 同 御靈社 東西六十五間南北二十
 若八幡社 東西六十間南北四十一間 春日社 東西四四方此
 西加舎 延福寺 高二斗六升并 同 大梵天王 東西二十四間南北十二
 同御旅所 東西加舎支配東西十五間南北十一間 宮川 神應山金輪寺
 高石五斗并 同 宮川神社 一町一段此坪 東神前支配 牛頭
 山林竹木 天王社 東西二十六間南北三十八間 西神前 佐々尾社 東西十八間南北三
 此坪九百八十八坪

以上南桑田郡

中野 八幡宮 東西三十五間南北十三間 若熊 道場 東西七間南北五間
 赤熊 日慈谷社 東西二十間南北二十四間 同 道場 長四十間南北
 十一坪半 若森 普濟寺 高四石六升 同 勝手明神社 東西十五
 十三間此坪 大内 明神社 東西五十三間南北八十間此坪 同
 百九十五坪 帝釋堂 東西五十間南北四十間 穀谷 四社明神社 東西五十間南北四十間
 廣瀨 廣瀨社 東西五間半南北七間 木原 春日社 東西七間南北六間
 同山林 東西三町四十間南北一町七間 上口人 八幡宮 三殿二畝此坪 同山
 林 一町九段此坪五千七百坪 同鏡社 八町九段此坪二萬 中口人 春日社
 別當神宮寺支配 山林 東西百間西五十間南北六十間北六十六間 下口人 吉備津 二畝四步此坪
 此坪四萬七千二百五十坪 同山林 東西二十間南北二十五間 黒田 熊野社 東西九間南北八間此坪
 同山林 東西四四方此坪 新水戸 天神社 東西十五間南北三十間 八田 辻 葛
 城社 三畝步此坪 同山林 三畝步此坪 西厩 稻荷社 東西十一
 九百坪

京都府立総合資料館所蔵

八幡此坪百八十
山林 三十間此坪五十間
須知 八幡宮社 東西五間南北四十間
此坪二十坪
市森 玉雲寺 山林并二間
同

大將軍社 十四坪
下齋生 八幡宮社 東西五間南北六十間
此坪三百坪山林共
塩田谷 岩山神社 東西七十間南北六十間
此坪二百坪

同社神主 高三石四斗余
塩田安井村 淨光寺 高一石三斗餘
并山林

鎌谷東股村 春日社 東西三十間南北五十間
此坪千五百坪
鎌谷中村 春日社 東西二十間南北三十間
此坪六百坪

四十坪 同高場 二間此坪三十間
此坪六十坪
以上船井郡

西野々村 天神社 東西六間南北十五間
此坪九十坪
中原山附 山王社 三畝十五坪
此坪百五坪

土田 柳神社 東西二十間南北二十間
此坪四百坪
小林 天神社 二十六間四方此坪
六百七十六坪

同御供田 一段步此坪
三百坪
高野林 大原社 東西十七間半南北二十九間半
此坪五百十六坪五步五厘

湯井 松尾社 東西三十五間南北二十二間
此坪七百七十坪
同 國主明神社 東西
十三

須輕明神社 東西十六間南北九間
此坪百四十四坪
十原 藤越

以上多紀郡

以上南桑田郡

中村 本妙寺 田畑三段四畝步山開茶畑
此坪千。二十坪
同 愛宕社 二畝二畝十二步此坪
六百七十二坪

同社領 山伏仲坊支配
高三石一斗四分
同 八幡社 一町三段四畝二十二步
此坪四千四十二坪
目山林

九畝十八步此坪
二百八十八坪
同 一宮 三段一畝十四步此坪
九百四十二坪
柚斗 大日堂 東西三
五間南北

十五間此坪三百
七十五坪
同 天、岩戸社 東西九十三間南北六十間
此坪五百五十八坪
同山林 東西二十間南北
六十間此坪千

二百坪西現寺
長谷 普藏寺 高三畝步此坪
九百坪
同山林 百間此坪七百坪
桐原 天

神宮 東西三十一間南北二十五間內五畝二步
此坪千五百六十五坪
同山林 二段步此坪
六百坪
野村 萬松寺

新田三畝五步
此坪千五百坪
同 惣社明神社 東西八十間南北十九
間此坪千五百二十坪

同 天神社 東西二十五間南北二十四間半
此坪六百二十二坪半
黒井 歌道寺 高三石二斗一升及寺中
竹木

同 兵主明神社 東西二百十五間南北五十間
此坪一萬九百六十五坪
平松 春日社 東西三十四間南北八間此
坪三百六十坪

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

旭村 天神社 東西六間南北六十四間 同 熊野社 東西十四間南北三十三間
 天王村 牛頭天王社 一町二段五畝二十五步 長見村 三十八社明神
 社 東西三十四間南北三十二間 此坪七百五十八坪 新大村 地藏權現社 東北十三間南北十六間
 此坪七百五十八坪 山田村 下王子社 山林東
 河内 加茂貴船八幡春日社 二段二畝十五步 西四十
 同南北七十間此坪 白毫寺 寺中十二坊衆僧 戸坂村 風森社 東西
 二百八十坪 同 一ノ宮 東西二十間南北二十九間 同 石不動瀧
 百二十八坪 同 岩窟 東西四十五間南北三十間 乙河内 熊野社 東西二十五間南北二十間
 同 天神社 東西三十二間南北三十間 同 三輪明神社 東西四十間南北六十
 同 同社 高石 酒梨 藥師堂 東西四十間南北五十間 教使村 地藏權
 現社 東西五十間南北四十間 同 熊野社 東西七十間南北三十間 多田
 加茂社 東西五十間南北百間 本智 阿陀岡社 東西五十間南北四十間
 同 千瀧山不動石佛 東西二町南北一町半 同 天神宮 東西三町南
 北二町半此坪

以上氷上郡

三千百五十 野上野 熊野社 東西七十間南北三十五間 同 御霊社 東西
 同南北五十間 此坪千坪 船尾村 黒木明神社 東西七十六間南北五十二間 同 御崎明神社
 東西五十四間南北五十間 同 王子社 東西八十間南北七十二間 長尾 八幡
 此坪二千二百五十坪 同 明王社 一段二畝十五步此坪 柳原 御前社
 宮 四段歩此坪 同 愛宕社 東西七十間南北六十五間 同 稻荷
 東西二十五間南北五十間 水江 同 社 東西二十間南北十五間
 此坪二千二百五十坪 此坪三百坪

備中國淺口郡

惣計米二百七十九石二斗九升七合
 御馳走トテ藩主ヨリ城下又ハ陣屋下ヲ通行スル
 大名旗下士ニ對スル禮式アリ町奉行一人禮服着

丹波志

之ヲ記シタモツ田畑
別御水帳ト云フ臺帳
同課税トス

（紋附麻）槍挾箱若黨草履取ヲ隨ヘ下目付ナドノ下役
附キ添ヘ産ネ平手桶ニ竹箒盛沙ヲ飾リ白沙ヲ敷
キ平伏スレバ通行ノ大名等ノ乗輿ニ向ヒ徒士ヨ
リ御馳走ト觸レル駕脇ノ士ハ駕ノ戸ヲ少シ引キ
明ケ其ノ君主ニ面接ヒシム通行ノ君主ヨリ目錄
ヲ賜フ

藩ノ租稅徵收方法并ニ沿革

正稅ハ米納トス田租ナリ 畑屋敷ノ稅モ正稅ト

シ銀納トス 其ノ徵收方法ハ地面石高ヲ附シ地

種ニ差等ヲ設ケ以テ石盛リヲ定メ之ヲ請ケ免ト

唱ヘ畧シテ免トモ云フ年限ヲ期シテ定免トス〇

小物成一各冥加金コレヲ細分シテ野錢山錢林錢

ト云フ民間ヨリハ運上ト云フ浮役トテ漢獵池河

ヨリノ上納銀アリ營業稅ナリ是ハ寛延年間ニ領

主柁平紀伊守カ新政ト共ニ發令シタルモノニテ

目次左ノ如シ惣テ銀納ナリ 町役銀ハ城下ノ町

人ヨリ上納ス亦地稅營業稅ヲ兼ネタルモノ

一山役 七月十二月ニ徵收ス野錢林錢亦同シ

一夫銀 同上

一柴銀 同上

一竹運上 三月四日川方係リノ指圖ヲ受ケ城内

又ハ城外ノ普請場ヘ現品ニテ上納ス現品不足

ノ時ハ代銀トス代銀收メノ時ハ十二月トス

一松茸 毎年現品上納ナレドモ不作年ニハ銀納

丹波
志

トス村々ニ於テ具ノ相場低落ノ日ヲ以テ目安
ヲ立テルナリ

一 藁 藩ニ於テ入用ノ時ハ現品上納ヲ命ズ否レ
バ銀納ス

一 緹 入用ノ時現品ニテ收メシム

一 筵 同上

一 菰 同上

一 糠 同上

一 塩 役 南桑田郡千原村ニアリ現今千代川村ノ
一部タリ當時此ノ處ニ塩市アリテ銀札二百匁
ヲ納メタル特別慣例ニシテ市罷ニタルモ徴
込ハ存セルナリ 氷上亦同ジ

一 茶 役

一 大豆 役

一人 足

幕府ノ制ニ年貢ハ四公六民トテ其ノ産額ノ四今
ヲ貢租トシ六分ヲ民利ト定メシガ封建制度ナル
ヲ以テ藩々多少其ノ制ヲ異ニセリ又田畑五分以
上ノ損ニテハ農民ノ諸役ヲ免ヌルノ制ナリシモ
是又藩々其ノ方ヲ異ニセリ當藩施政ノ方法タル
不作ノ年柄ニ逢ヒ人民ヨリ歎願アレバ代官コレ
ヲ取次キ奉行ハ進達ス奉行ニ於テ許可ス可ラズ
トセバ之ヲ却下シ許可セザル可ラズトセバ之ヲ
家老年寄ニ稟議シ用人一名大目附一名郡奉行ニ

丹波志

名巡村シ稻作大通リ見分ス其ノ後ニ於テ代官一人添代官一人小目附一人細見トシテ出張シ更ニ稻作ヲ調査シ坪刈ニテ其ノ熟不熟ヲ免合ニ引當ヲ精算シ一村平均ニ分通リノ損耗ニハ用捨セズ三分以上ノ損毛ニハ其ノ歩高應ジ年貢ノ引高ヲナスナリ

北組 二十九個村之ヲ町組ト云フ城下近傍ヨリ川東船井郡ニ及ブ道米一斗指米三斗小口下米七合七夕口米上七合七夕古高壹萬千八百八十一石一斗九升一合現高壹萬千八百六十一石八斗七升九合銀三貫九百二十九匁八分壹厘夫銀柴錢 同二貫九百八十七匁四分四厘二毛

町役銀 錢壹貫二百五十文 山役錢

但柴銀山役錢ハ閏月有之年ハ増シ出ル 山本村山錢六貫文ハ閏月無之 銀五十匁錢四貫文閏月増シ

引物成定收納 一畝米五十九石 一大豆五十七石五斗 一掛リ大豆五十六石五斗

南組 三十六ヶ村 多紀郡 船井南部 桑田南部等城下ヨリ南ニ當ル分

古高×九千四百八十七石九斗五升七合 現高壹萬八百十石六斗二升一合 銀六貫二百八十九匁七分一厘 夫銀柴銀山役錢 錢百九十二貫三百二十文 山役錢

但銀二百五十七匁七分八厘五毛 錢十五貫四百

九十文 閏月増

餅米 五十七石五斗 掛り大豆 六十三石五斗 但米八

斗二替

西組 三十八ヶ村 桑田郡西部 船井郡等

古高×七千七百八石二升四合 現高八千七百

九石二斗九升 銀四貫七十三匁四分二厘四

匁 夫銀柴銀塩役炭釜入炭銀 錢百四貫四

百五十七文 山役錢

但銀九十一匁六厘五毛 錢八貫七百四文 閏月増

餅米 二十石 掛り大豆 五十石五斗

氷上 二十六ヶ村 古高九千六百二十二石八斗

二升八合 現高壹萬二千三百三十石九斗五升

六合 銀六貫三百九十八匁八分八厘 夫銀柴銀

銀八十匁 塩役銀

但二百一十一匁一厘六毛 閏月増 定納大豆 百二十石

二斗九升七合

備中國浅口郡七ヶ村 壹萬二千石 銀九百九十八匁

一分九厘四毛 繩代 四二十九匁七厘四毛 口錢

右惣ノ高五萬石 現高五萬五千七百七十二石七斗四升六合

夫銀柴銀綿銀塩釜銀二十三貫二百五十四匁六分五厘

外二六百十六匁五分六厘二毛 閏月増 繩代

一九百九十八匁壹分九厘八毛 繩代

一三百五十七貫六百三十七文 山役錢 直造三組山役錢

別二二十八貫七百七匁

租命令書

午年免定

田年貢

池通庄在百姓之會

言下免割并前月

晦日限急度皆汚可

任心

魚平老助

坂部仙堂

山田源吉

隅田權三郎

金子元吉馬

神門平兵衛

- 一 餅米 百三十六石五斗
- 一定納大豆 五十七石五斗 此處三組
- 外ニ掛リ大豆 百六十九石同
- 一 餅米 百二十石二斗九升七合 氷上組
- 以上

其ノ徴收方法ハ先ツ村方ニ於テ精撰シタル米ヲ
 五斗俵ニ入レ之ヲ郷藏、運テ庄屋コレヲ受取リ
 米質量數ヲ檢シ合格ノ上シヤコウ米ヲ加フ一升
 乃至二升ニ止マル庄屋ノ思想ニ一任ス其ノ量數
 不足ノモノヲ察見スレバ定量ニ至ル迄ヲ加増セ
 シメ尚ソノ上ニシヤコウ米ヲ入レシム 穢多村
 ハ本村ニ隨屬シ庄屋ノ檢分ヲ受クルヲ前ニ同シ

俵ト繩及ビ具ノ裝置モ形ヲ均齊ニナシタル上コ
 レヲ運搬シテ城内ニ入レニ九ニ於テ藩吏ノ檢
 査ヲ受ケシム 藩ヨリ目付代官手代小頭同心等
 民治上關係アルモノヲ出ダシ手代專ラソノ事ニ
 當ラシム 手代ハ大差ト呼ブ竹筒ヲ俵ニ差シ入
 レ四五合ヲ取出ダシ三角盆ノ上ニ置キ細檢ス合
 格スルモノハ之ヲ倉庫ニ至ラシム 倉前ニ目付
 アリ又其ノ一二合ヲ抜キ取り細檢スルヲ前ニ同
 シ合格スルモノハ之ヲ倉庫ニ納レシムル時貫及
 改アリ又ハ契ヲ以テス
 前ノ採取リヲ大差ト言ヒ後ノヲ小差ト云フ此ノ
 米ハ共ニ元俵ニ入ルナリ 此ノ三檢査ニ合格セ

町 誌

ガレバ落第トナリ更ニ改納セシム此ノ時庄屋及
ビ納貢人ハ譴責セラル村役人亦同ジク叱責セラ
ル袖ノ下ト稱セラル、賄賂ハ此ノ時ニ行ハル
掛リ役人ハ面コソ違ハ心ハ同ジ所ナルヲ以テ一
人ニ行ハバ一般ニ行キ渡ルヲ以テ一人ノ認定ハ
領テ一般ノ許可ヲ買フ
此ノ俵改ハ每俵ニ行フニアラズ建米トテ村毎ニ
一俵ヲ抜キ以テ煩ヲ省ク故ニ一俵ノ建米ニシ
テ合格スレバ一村數十俵ノモノ數百俵ノモノ合
格シ之ニ及セン乎悉皆落第スルナリ其ノ建米
ヲ廻シ米トモ云フ多分ノ内ヨリ之ヲ撰抜スル
ハ小差役人ノ任トス之ヲ量ルハ其ノ村々ヨリ巧

者ヲ選ミ量リ出シノ多キヲ望ム若シ枿不足ノ
俵ヲ選マレタラレニハ力弱キモノニ抜キ取ラセ
之ヲ肩ニ揚ゲ故ニ仆レシム強カノモノ代リテ俄
ニ他ノ俵ヲ取ラセ之ヲ肩ニシ量リ場ニ差シ出ス
之ヲ見逃カスモ亦役人ニ袖ノ下アリト知ラルハ
ナリ種々ノ運動ツノ效ヲ奏セザルニ於テハ落第
全躰ニ涉リ每俵不足額ノ米ヲ補入ス斯クアラ
ン乎トテ補米ヲ預備スルモノカラ其ノ場ニテ數
十百千俵ニ補入スルモノトス此ノ建米納入者
ハ歸村ノ上庄屋ヨリ譴責ヲ受ク
例年初納メトテ九月(陰曆)ニ至レバ村高ニ應ジテ
歩通り(納租額)ヲ定メ之ヲ代官ヨリ達シ納米セシ

母
波
志

免狀
部出
總論
租稅

ム徴收上納ノ順序ハ一ニ前記ノ如クナルカ此ノ
初納ノ米ハ半數ヲ賣掛ヒ半數ヲ君用臣祿ニ充ツ
之ヲ初賣リ初渡シト云ヒ其ノ年ノ豊熟ヲ祝スル
儀ナドアリ 村々ハ此ノ初納ニ續キテ精製セシ
モノヲ適宜ニ上納シ十二月上旬ニ至レバ中助定
ト稱シ上納濟ノ石數ヲ改メ各村送米ノ遲速ヲ見
ルノ例アリ

藩廳ニ於テハ十月上旬ヨリ勅定後ヲ特任シ各村
へ下ゲ渡スベキ年度ノ補助救助ト上納スベキ米
銀トヲ對照シテ差引勅定ヲ爲サシムニヨリ誤
年ノ免狀ヲ製リ免狀成ルヤ大目附奉行及ビ特任
セラレタル御取リケ掛リ等署名押印シ十一月酉

西
八日
即
取
日

ノ日ヲ選ミ村々ノ庄屋ヲ白洲ニ呼出シ免狀ニ差
引勅定書ヲ附ケテ下ゲ渡ス大目付代官奉行等ノ
列座ニテ儀式嚴重ナリ 御取リケヲ定ムルニ酉
ノ日ヲ以テス古來ノ習慣上滑稽ナリ

袖ノ下ヲ行ハザルヲ以テ落第スル古來其ノ例
ニ乏シカラス著者が聞見シタルモノハ佐伯村ノ
落第ナリ明治二年ノ頃ト念フ 建米一俵ノ落第

ニヨリ其ノ日ニ佐伯ヨリ運ビタル數百俵ヲ城外
ニ運ビ出ス其ノ手間ト其ノ不面目ヲ如何ニセシ
ト庄屋ノ苦慮一方ナラズ之ヲ城下ノ仲仕頭ニ課

ル 一石ニ付キ二升ノ手間賃ヲ以テ其ノ完納ヲ
請負ヒ 目前ニテ繩ヲ掛ケ直シ更ニ之ヲ運ビ入

丹
波
志

レ役人果々ニ身打シテ通過シ庄屋以下ノ役人ハ
胸撫テ卸シテ歸邑シタリ 一程ノ簡便方アリ一
石百ニ三十匁位ノ相場ナレバ金ニテ貳兩位ノ時
十匁位直上ゲシテ切手ヲ買フ此ノ切手ハ飯米入
要ノ士家ヨリ出ダス又賣物入要ノ爲ニ米屋ヨリ
出ダス 之ヲ買フタル者ハ之ヲ庄屋ノ手ヨリ御
取リケ掛カリ役人ニ出ダス 直上ゲノ損アレド
省畧ノ便アリ且領主負擔ノ道米ヲ要セザルノ利
アリ 道米トハ領主ヨリ下ゲ渡サル、運送賃米
ニシテ遠近ニヨリ差アリ
十二月二十五日ハ例年々貢皆濟ノ日ナルヲ以テ大
目附奉行以下掛カリ役人早朝ヨリ出張シ送米着

城ノ順序ヲ逐フテ檢定收納ス 大目附ハ地方行
政吏ナラザルモ之ニ關係スルハ不正事件アラバ
之ヲ檢舉スベキ役ナルヲ以テ出張スルナリ 終
日ニシテ完納ニ至ラザレバ終夜之ヲ行フ尚ホ足
ラザレバ翌日ノ午前ニ至ル迄コレヲ行フ 役所
前ニハ高張挑灯ヲ照ラシ翌朝ニ至リ午時ニ至ル
モ灯ヲ消サズ蠟盡クレバ又蠟シ以テ夜ヲ装ヒ其
ノ前日ヲ長フス午時其ノ灯ヲ消スニ至リテ未納
ノ者アルヤ初メテ未納處分ヲ斷行ス 事コ、ニ
至レバ庄屋ノ罰トシテ手錠ヲ施シ宥預ケトナリ
歸村ヲ許サズ日數二十日ヲ過ケルモ村ヨリ送米
皆納セザルニ於テハ入牢ノ申渡シアリ皆濟スル

母
成
志

二於テハ直ニ出牢ノ申渡シヲ受ク 此ノ處分ハ
大目付ノ任トス 村方ニ於テハ年貢不納ノ者ヲ
呼出シ庄屋入牢ノ報知ヲ爲シ庄屋ノ困厄ハ救濟
セザル可ラズ納貢ノ義務ハ履行セザル可ラザル
説示シ強テ之ヲ督促履行セシム事實能ハザル
ニ於テハ親族中ヨリ代辨スベキヲ命ズ應諾セザ
ルニ於テハ庄屋ヨリ代官ニ訴フ代官ハ本人ヲ審
糾シ手錠村預ケノ刑ニ處ス日數二十日ヲ過ギ完
納セザレバ入牢トナリ皆濟スレバ赦免セラレ失
費一切村辨トカ本人ノ辨償トカトス
手錠トハ手鎖ニテ犯人ノ兩手ヲ前ニ合セ之ヲ施
シテ動カス能ハザラシムルモノナリ鎖ハ錢モテ

作ル當時人情朴淳ニシテ手鎖ヲ畏ル、ト太甚ク
聞クモノヲシテ身ノ毛ヲ聳タシメタリ故ニ家主
村長ガ宿預ケトナリ村預ケトナルニ於テハ相互
相扶ケテ刑ニ罹ラシメテ止ミヌ 村内ニ於
テ廿五日夕ニ至リ完納セザル者アルヲ知レバ庄
屋具ノ家ニ就キ組頭親戚故舊等ヲ集合セシメ納
租ノ方金策ノ談ヲ講ズ其ノ不可能ナリト認ムル
ニ於テハ家屋敷財産ノ資力限りヲ賣却シ猶納額
ニ充タザレバ一時ノ取替ヲ爲シ走リテ藩吏ノ前
ニ提供ス其ノ者後日庄屋ニ返辨スレハ善シ能ハ
ザルニ於テハ其ノ損失往々庄屋ニ歸ス 庄屋ノ
職務ヤ煩シキト此ノ如シ而モ之ヲ望ムモノ多キ

ハ何ソヤ村内ニ於ケル權利ノ大ナルト延キテ村
外ノ名譽ヲ博スルト又遺利ノ拾フベキモノ多キ
トニ因ル

綿會所ノ事 老人話

私ノ若イ時ノ一テムリマシタガ御大名衆ニ惡イ
風ガ流行リマシテ遊所通ヒガ盛シニナリマシタ
夫レモ始ハ御一人カニ人カ吉原へ行カレテ面白
カツタ御漸ガ御仲間へ出ルソレテハ拙者モ御供
ヲト云フ塩梅デ誰モ彼モ俄ニ釋人ニ御成リナサ
レ遊所ノ味ヲ知ラヌモノハ野暮大名ト云ハレル
位デアフタソ一デス フコデ當藩ノ今カラ三代
前ノ殿様モ盛シニ御通ヒナサレマシタ 是ハ殿

様バカリデハムリマセヌ家中一躰大ソ一ナ驕リ
テ御物入ガ追々嵩ミマシテ其ノ裏腹デ軍役ノ一
ナドハ丸デ空デムリマシタ其ノ一例ヲ申シマシ
ヨ一ナラバコ一デガガリマス 墨利加ノ黒船カ
浦賀沖ニ見ハマシタ時ノ一デシタ 京都所目代
カラ急達ガアリマシテ山崎ノ御固メヲ仰セ付ケ
ラレマシタカ何ノ一ハ無イ城内ヤ家中断ノ大騷
動デ無理算段テ一番備カ銃砲長柄ナド立派ニ打立
チマシタカ大勢ト云フ大軍シソ一ナ人ト云フ
タラ僅ヨリ無イノデス 私ハ其ノ時十六歳デ夫
後ニ取ラレマシテ行キマシタヲ物頭ノ馬印持ニ
シラレマシタ 士分ノ人モ足輕モ只見エテ張ツ

テ強バル一方デシタ 此ノ時ノ入費モ皆借財ニ
マツタソ一デス 軍用米ハ割合ニ澤山アツタ様
デスガ軍用金ト云フタラ皆無デアツタノデ何時デ
モ借財トナリマシタソ一デス 今ト御話ガ横道
ハ這入りマシタガ綿會所モツマリ藩ノ御實乏ヲ
救ハ一トテ起サレタノデス 是ハ墨利加ノ米ヲ
ヨリスワト前ノ一デス當藩バカリデ無ク何レノ
御大名モ貧乏ヲ救ハン逆色々ノ工夫ヲナサレマ
シタガ當藩ハ御領分内ニ出来マスル綿ヲ買ヒ込
ンテソレヲ京阪ニ賣リ生金ヲ持ツテ歸ツテ藩札
ノ下藩ヲ防グ一ト云フノ工夫デシタノデス此ノ
御相談ガ始マリマシテ遂ニハ御年寄衆ノ御同意

トナリマシタガ此ノ上ハ町人ニテ見込アルモノ
ヲ撰マレマシテ東ノ方ニテ矢田勤ト申ス人西ノ
方ニテ垂水ト定マリ呼出サレテ意見ヲ演ベヨト
アリマシタガ兩人共篤ト考ヘノ上御返答申シ上
ゲントテ退キ町内ノ有力者ナル田中藏一ヲ始メ
相談シタルニ是ハ藩ノ爲ニナル而已デ無イ吾々
ノ爲ニモ大ナル利益ナルベシ就テハ藩ヨリ嚴命
ヲ下シ綿ノ容賣ヲ禁ゼラレタシ綿會所ヨリ願出
ツル藩札ハ何程ナリトモ無利足ニテ貸シ出サレ
度シナド都合ヨキ條々ヲ書キ並ベテ御請ヲ爲シ
北町ニ標札ヲ掲ゲ御用綿會所ハ開カレマシタ
因ツタノハ村々ノ耕作人デシタ殊ニ因ツタハ八

木地方ノモノデシタ大抵ノ百姓ハ綿ヲ手作シマ
シタ八木綿ハ別シテ多分ノ作柄デシタガ以来ハ
外々ハ自由勝手ニ賣レマセ又厭デモ應デモ會所
ハ持ツテ来テ會所相場デ手離カネバナリマセヌ
ガ上カラ無理ヲスレバ下モ亦相應ナ算段ヲシ
テ之ヲ免レントシテ袖ノ下ヲスルヤラ隠シ作り
ヲシテ相應ニ高直賣ヲ外方ヘシタツトデス 此
ノ會所ハ中々儲ケガアリマシタ其ノ譯ハ元金ト
申シマシヨウカ元札ト申シマシヨウカ其ノ元手
ニ利子が要リマセヌ故ニ賣急ギヲセストモ宜イ
ノテ直段ノ開クマテ貯ヘルコトが出来マスナド
ノ故デアリマス 左様御一新後迄アリマシタガ

組合ノ様ナ丁ハ一切廢止セラレマシテ是モ何時
ノ程ニヤラ標札ハ取外サレテシマヒマシタ 綿
ノ種類デスカ是レハ船井郡ノ八木村及ビ具ノ附
近ニ産スル赤綿ト申スノデス是ガ京阪ニテ評判
ガ宜シイノデ思ヒ付カレタノデス 其ノ口實デ
スカ夫ハ貧民保護ナンデス 左様隨今保護ニモ
ナリマシタ假令ハ一本七十匁ニヨリ買フモノ
カ無イ 所ガ八十匁ニ賣リタイ相場モ綿ノ取入
時故下向キデアル今ニ九十匁マテ来ルトノ見込
ガアルト會所ハ綿ヲ預ケテ札ヲ借り價ノ揚ガル
ヲ待ツノデス 利子デスカ是ハ取りマセヌ具ノ
代リ利益ハ約束ニテ半額ヲ會社ヘ取りマス 頭

丹波志

取ト云フテハ有リマセヌ藩カラ小役人が二名ツ
、出張シテ井マシタ

菓子 東雲ト鳥玉 園部ノ唐板龜山ノ東雲ト相
對抗シテ名物ヲ賣ル東雲ハ館ヲ小倉ニシ皮が種
粉デ維新前ニハ一個ニ又今ハ五厘別ニ奇クモ無
シ妙モ無シ普通ノ煎餅饅頭類似ノモノデアルガ
名物ニハ名物相應ナル因縁話ノアルモノデア
ク元祿ノ頃コノ城下ニ徳右衛門ナルモノアリ家
名ヲ稻屋ト呼バリ何カナ一儲ト心掛ケ弘法大師
ニ心願ヲ込メ居タルガ一夜大師ソノ枕邊ニ立チ
告ケテ曰ハク善哉々々徳右衛門彼レ見ヨ一徳右
一覺スレバ東雲饅頭タル所ニ赤白ニ色ノ日光ア

リ是ハ不思議ト思ノ内ニ惣テ其ノ跡無シ徳右夢
現ノ間ニ考一考シテ是レゾ此ノ趣向ヲ何カニ用
ヒヨトノ御告ナラント是レヨリ種々考案シ遂ニ
之ヲ菓子ニ製シ東雲饅頭ニタルヨリ一方ヲ赤ニ
シ一方ヲ白ニシしのみト名ツケテ賣出シタル
ニ大ニ流行リ出シ四方ヘノ土産物トシテ歡迎セ
テレ店運大ニ啓ケタリ今ハ菓子屋トシテ是レナ
キ店ナキニ至レリ

鳥玉 鳥羽玉トスベキヲ鳥玉トシタルハ何故ナ
ルカ今ヲ距ル百二十年三十九年前ヨリ元祖萬屋佐兵衛ノ
製出ニ係カル一個五厘維新前ハソノ名ハ色
ノ黒キヨリ起レルニヤ或ハ東雲ノ色ニ配合セシ

ノタルニヤ

龜山町商況一般ヲ尤ニ記載ス

當藩ハ五萬石ノ高ニテ三萬石ノ實收ト見積モリ
此ノ内ヨリ人足價銀救助費銀補助銀具ノ他ノ藩
費負擔ノ分(別項所々ヲ參看セヨ)及ビ飛地領分(別項)ニテ賣拂フ
ベキ租米ト藩中士卒又ハ社寺賜給ノ米石ヲ引キ
去リ藩廳ヨリノ拵米及ビ士卒喰ヒ餘リノ拵米ノ
集散スルアリ近クハ同郡中ノ旗下士領ノ拵米ト
農家ノ賣米ヲ算スレバ十萬石ニモ尠ントシ雜穀
豆麥菜瓜果物ニ至リテモ亦巨額ヲ算シ加フルニ
北桑田郡半部根津能勢アタリヲ高業範圍トシ日
々ノ賣リ買ヒ頗盛シナリキ士族ガ公債證書ヲ金

ニ換ヘ其ノ購賣力ヲ増加シタル時ハ一時浮雲ノ
如キ盛況ヲ極メタルモ永ク續クベキ本調子ニハ
アラズ漸次其ノ經濟方ヲ誤リテ購買力ハ反對ノ
結果ソノ所有物品ヲ古道具屋ニ陳列スルノ秋ト
ナリ遂ニハ當地ヲ去リ京阪地方ハ退轉スルニ至
リ永年土地人士ノ誇トセル城地ハ取壊タレテ狐
狸ノ棲處トマデニ相成リテハ高買ノ人氣ニマデ
影響レシ士族ノ跡ヲ趁フテ住ミ慣レタル家ヲ出デ
執リ習ヒタル業ヲ捨テサルヲ得不時ニ立至リシ
モ米價ノ高騰ニ加フルニ野産林産山産等ノ諸品
ガ隨フテ高價ニナリ地價ノ上昇スル等地方ノ藩
ワル金ト農家前途有望ナル運ト相待テテ糶糶次

丹波
言

第一殖工顧客各邸ニ群カルノ景况ヲ挽回シ得ク

安政四年流行歌ノ中ニ 味立派な連も利乃字ハ

紋ぱりり 徳川將軍上洛ノ時いろは歌ノ中ニ拍原龜山藩ヲ

枯木も山乃にぎまひト評セリ 諸藩比喩ノ中ニ龜山藩ヲ以テさり下桃トセリ

龜山藩札ハ丹波半國及ビ備中領地ニ行ハル東行

シテ老ノ坂ヲ越エレバ旅人ニ嫌ハレ商人ニ忌マ

レ榎原ニ至レバ龜山ト取引スル商人ノ外ハ之ヲ

避クルヲ良策トシ桂川ヲ渡レバ之ヲ顧ミル者無

シ當時諸藩大抵驕奢ノ弊ヲ積弊力竭盡シ之ヲ救

濟スルノ便方トシテ兌換紙幣ヲ発行ス其ノ之ヲ

發行セントスルヤ先コレヲ幕府ニ乞ヒ其ノ許可

ヲ得テ初メテ着手スルナリ當藩モ亦米價下落藩

力疲弊ヲ申し立テ、之ヲ發行シ領内富有ノモノ

ヲ呼出シ厚ク其ノ主旨ヲ喻シ含メ小民ニ至ル迄

心得産無ク通用シテ滞ラザル様説キ聞カサシメ

相場ヨリ上ゲタルハ人氣ニ戻ルノ第一歩トシ藩
カノ信用ヲ失墜シタリ其ノ初メヤ銀札引換場ヲ
安町ニ設ケ銀札掛役人出張シ町民コレニ參與シ
銀トノ引換ハ請フモノニハ其ノ望ム如ク交換シ
タルモ只融通ヲ賣米ニ取リタルノミニテ生出シ
来ル金銀ノ通路アルニ非不是ニ於テ租米ヲ京阪
ニ賣リ正金銀ヲ持テ歸ルヤ之ヲ札ニ引換ヘル藩
ニ残ル所ハ參觀交代別項ニ京都火ノ番別項ニ江戸邸
資用ニ當テ折角引換ハタル銀札ハ又士族卒族ノ
手ヨリ（被藩士）買物ノ資トナリテ城下ニ落ツ藩士
モ扶持米取給金取アリテ之ヲ勘定方ヨリ請ケ取
レバナリ且ヤ藩札發行ハ藩ヲ本位トシテ立テタ

ルモノナレバ領民ノ痛苦ハ問フ所ニアラズ其ノ
札ノ備中領地ニアルモノハ一小印形ヲ捺シ其ノ
當地ニ舞ヒ戻ルヤ五分一ノ減位ヲ示ス故ニ之ヲ
所持スルモノハ往々損失ヲ招ク虞アリ之ヲ人氣
ニ戻ルノ第二歩トス亀岡藩ヲ廢シ龜岡縣トナル
ヤ領主ハ知事トナリ又一變シテ久美濱縣管轄ト
ナルニ至リテハ舊領主ノ縁全ク絶エ従前領地ヨ
リシテ維持シタリシ藩經濟ハ其ノ休ヲダニ止メ
ズナリ行クニ付キ加フルニ太政官札出デ大阪ヨ
リ千羽鶴札出デ經濟界漸ク多事多難ナラントシ
金銀貨ハ其ノ影ヲサヘ見セ又景況トナリタルハ
増發弊害ノ人氣ニ戻ル第三歩トス而テ尚ソノ増

丹波志

此ノ外ニ拾分札一朱銀貨
ニ換算ス 毫分札十倍 毫分札
一百倍ナリ
明治四年 廢藩ノ際 明治政府地
通貨即チ 太政官札ト引換ヘテ
札ヲ四半四厘ニ定メ 府廳ノ搬運
セシメタル 數ハ長柄三寸餘 棹ヲ
備中領地ニ於テ 差汗ノ萬
此外ニ
一枚ニテ



享保十五年六月四日 達金銀錢札遣有之所々 先年
相止候得共 向後前々 札遣来候所々ハ 勝手次第ニ
可仕候前々ヨリ 仕来候所ニテ 金銀札遣之儀 二十
萬石以上ハ 二十五年 二十萬石以下ハ 十五年之間
クルベク 候年數滿候テモ 猶又札遣仕度候ハ、其
節ニ至リ 御勅定奉行ハ 可承合旨 挨拶可被致候
庄村大守山室、
部ヲ考看セヨ

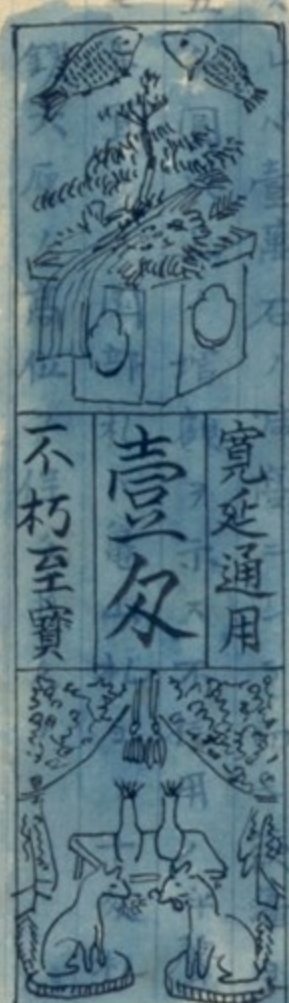
龜山藩圍叔 會津藩祖保科正之曰ハク 社倉ハ 民

ノ爲ニ之ヲ設ク 利ヲ求ムル者ノ爲ニスルニ非ズ
寛政中 松平越中守定信 所謂 樂翁公ガ 幕府ヲ主ル
ヤ 世上奢侈ノ風ヲ 矯メントテ 弊政ヲ 改革シタル
ガ 其頃 田入用ト 唱ヘテ 各地主ヨリ 出ス所ノ 資金

丹皮志

此ノ外ニ拾分札一朱銀貨
ニ換算ス 毫分札ノ十倍 毫分札
ノ百倍ナリ
明治四年廢藩ノ際 明治政府地
通貨即チ太政官札ト引換ヘテ
札ヲ四半四厘ニ定メ府廳ノ搬運
セシメタル數ハ長柄三十餘種アリ
此外ニ
備中領地ニ於テ發行シテ
一枚ニテ一

丹波



享保十
相止候得
可仕候前
萬石以上ハ二十五年二十萬石以下ハ二十五年之間
タルベク候年數滿候テモ猶又札遣仕度候ハ其
節ニ至リ御勅定奉行ノ可承合旨挨拶可被致候
庄村大守山室
部ヲ参考セヨ

龜山藩圍叔 會津藩祖保科正之曰ハク社倉ハ民

ノ爲ニ之ヲ設ク利ヲ求ムル者ノ爲ニスルニ非ズ
寛政中松平越中守定信所謂樂翁公ガ幕府ヲ主ル
ヤ世上奢侈ノ風ヲ矯メントテ弊政ヲ改革シタル
ガ其頃西入用ト唱ヘテ各地主ヨリ出ス所ノ資金

丹波

ヲ調査セシメシニ江戸中ニテ一ヶ月ノ高巨額ナ
リシカバ町奉行ニ令シテ省減セシメ巨多ノ剩餘
ヲ得ソノ三分ハ各地主ヨリ取立テガルコト、シ
一分ヲ町内臨時ノ費用ニ充テ残り七分ヲ積立テ
以テ糶ヲ貯ハ凶歉ノ用ニ供シ鰥寡孤獨篤疾ノ者
ヲ賑給セシメタリ是ヲ糶倉ノ始トス是ハ米澤ノ
上杉治憲カ領内ノ町村ニ米倉ヲ建テ、糶ヲ蓄ヘ
十五萬人カ二年坐食スルニ耐ルノ方法ヲ設ケタ
ルニ準ヒ之ヲ参酌潤色シタルモノニテ大名ヤ旗
士ノ領國采邑ニ五ヶ年間收穫壹萬石ニ對シ五十
石ノ割合モテ貯藏セシメ凶荒ニ備ヘタルナリ唐
ニ之ヲ臣下ニ責ムル而已ニアラズ幕府モ亦自ラ

之ヲ爲シ以テ模範トナレリ不幸ニシテ羊毛損亡
ノ凶作ニ逢ヘバ具ノ年ハ圍米セシメズ豊作ヲ待
ツテ其ノ歉ヲ埋補セシメ又貯藏ニ困ムモノハ幕
府ノ倉廩ニ納ム、下ヲ許シ年々新穀ヲ糶納シ舊
穀ヲ布糶ス文化元年ハ諸國豊作ニ付壹萬石ニ糶
千俵ノ割ヲ以テ貯藏スベク令セラレ此ノ藩ニ於
テハ二千石ヲ藏納シタリ明治五年ニ至リ柳原倉
庫ノ糶ヲ賣リ金七十萬圓ヲ政府ニ取レリ是ハ前
述ノ寛政度創設以來ノ貯藏ニ係ル諸藩ニ於テハ
此ノ法ヲ嚴守シタルモアリタレド大抵ハ幕政弛
廢ニ乘ニ藩費ニ充テ早ク烏有ニ歸シタルヲ多シ
トス左ニ此ノ藩ノ糶納史ヲ畧叙セン

寶曆元年十二月城詰米先年ヨリ減ジ来ル分悉ク
元高ニ復セシム
同三年四月大名ニ令シ各其ノ租米ノ十ガ一ヲ貯
積セシム
同四年二月十九日令ス置敷當年モ圍ニ置ク可キ
事 但壹萬石ニツキ千俵ツ、タルベキ事
文化元年二千石ノ内千二百石ヲ大阪城へ納ル殘
高籾八百石寛延二年正月二十三日青山因幡守ト
所替ノ時(松平家記事參看ノ)青山家ヨリ讓渡レ
ノ分右ノ高ナリ更ニ壹千二百石詰ノ足シノ令
アリテ之レヲ播磨國網干米ヲ其ノ領主ヨリ受
ケ取ル(寛延四年正月二十二日)合計二千石内千

三百七十四石一斗ヲ江戸城淺草倉庫入レト成ル
(天明三年十二月)殘高籾六百二十五石九斗淺草
藏入(同七年三月)合計二千石出拵更ニ籾六百二十
五石九斗代金江戸蓮池金庫ニテ下ゲ渡サレタル
ヲ以テ糶米シテ貯藏ス更ニ籾代千三百七十四石
一斗下ゲ渡サレ合計二千石ヲ貯藏ス二ノ九ニ在
ル土藏ハ一棟セ戸前ニテ足輕番所アリ更番シテ
四五名ツ、守衛ス
慶應年間ニハ此ノ籾無ク維新ノ際ニハ城池ヲ官
軍ノ點檢ニ供シタルモ藩用ノ米粟ノミニテ右
ノ圍籾ハ迹形モ見エズ藩費ニ流用シタルヲ前示
ノ如クナリシナラン (余部社倉米參看ノ)

可
城
志

藩カ疲弊シ藩中士卒ノ面扶持トナリ領内ノ人民ニ課スル眞如金ノ事

當藩ノ疲弊ハ元録以後諸大名士卒所人百姓カ太平ニ酔ヒ驕奢ヲ競ヒタルノ餘毒ニ加フルニ名聞

崇譽ヲ事トシタル結果ト云フ
大阪城代トハ譜代大名ガ渴望スル所ノ名譽アル

重職ニシテ大將軍ニ代ハリテ堅城ニ踞シ山陽山陰南海西海諸道ノ大名ヲシテ威下ニ服從セシム

ルニアリ自分ヨリ數倍否十倍以上ノ祿高アル藩侯モ其ノ號令ヲ仰ギ政治上京都所司代ニ亞キ副

ノルニ城番ヲ以テ外郭ヲ守ルニ二萬石乃至三萬石ノ大名ニ家アリ城代役料トシテ高三千石ヲ賜

給セテ幕臣ノ興カ十騎同心五十人アリテ配下トナル城代ハ其ノ上ニ居テ寺萬石ノ役料ヲ得又

其ノ下ニ文官トシテ大阪兩町奉行アリ其ノ下ニ又興カ數十騎同心數十人アリ寺萬石ノ役料輕カ

ラズト雖太平ノ餘弊裝飾ニ費スヲ容易ナラズ市民ハ其ノ行装ノ美不美ニヨリ服不服ノ差ヲ生ズ

ト云フニ至リ西國大名ノ大阪ヲ通過スルニ方リ重臣ヲシテ城代ノ安否ヲ問ハシムルニ相互美ヲ

競ヒ奢ヲ街ノ愚ヲ演スルニ至レリ其ノ最快適トスル所ハ巡視ノ際ニ方リ市中ヲ喝道シテ通

過スル時ニアリ町々ハ掃除ニカヲ悉シ沙ヲ布キ辻々ニ高張挑灯ヲ立テ拜看者頭顧ヲ上ニ附ケ俯

母
城
志

伏スル所ヲ悠々然トシテ睥睨シ行クナリ城代ノ
容止ハ駕輿ノ窓ヲ通シテ少シク偷視スルヲ得セ
シムルナリ松平豊前守モ此ノ榮譽ヲ希求スルノ
數ニ洩レズ大臣ノ苦諫モ功ヲ奏セズ在勤中ノ負
債ハ山積シ臣下モ繁華ノ巷ニ留連シ君臣相伴ヲ
テ疲弊渦中ニ竄入シタルゾ是非ナクレ任滿テ國ニ歸
ルヤ善後策トシテ節儉律ヲ勵行セザルヲ得ズ已
ムヲ得ズ一藩面扶持十ヶ年勵行ノ擧ニ出テタリ
面扶持トハ一家三人ナレバ三人扶持ヲ給シ五名
ナレバ五人扶持ヲ給シ其ノ家老大臣タルト足輕
小者タルト問ハズ其ノ支給ヲ同フスルヲ云フ
一人扶持ハ一日一人ノ給米黒五合トス故ニ五人

家屬ナレバ老幼男女ヲ問ハズ二升五合ノ玄米ヲ
給シ雇人婢僕ニハ給セザルナリ足輕小者等ハ慣
一來ルル活路トシテ生計ニ大差無キモ七百石千
石ノ家ヲドバ忽ニ窮シ家寶什器ノ典賣相續キテ
起コリ一藩ノ名品百什大半富商ノ庫質屋ノ店ニ
入レリ斯クノ如キ苦況十年ニシテ藩カ稍復舊シ
テ終ニ従前ノ如ク夫レノ家祿扶持米ヲ支給セラ
ルニ至レリ

寛政年間ニハ松平定信新令ヲ布キ奢侈ヲ禁ジ節
儉ヲ守ラシメ人民生計ノ道ヲ立ツレガ為ニ徳政
ト稱セラレハ所ノ足利氏遺法類似ノ方法ヲ作り
六年以エノ負債ハ悉皆其ノ約ヲ破ラシノ五年以

母
鼓
志

内ノモノハ一月ノ利子ヲ五厘トシ限年ノ法ヲ立
テ、償還セシメタルガ諸藩モ之レニ習ヒ貧民窮
士乏藩モ一時其ノ肩ヲ緩メタルニ其ノ法何時シ
ク有名無實トナリテ前示スル如キ景況ニ陥リタ
ルナリ是レ天保年間ノ事ナリキ
寛文年間一農夫アリ父母没シテ存養ヲ為スニ道
無キヲ以テ其ノ木像ヲ作り産上神ノ祠傍ニ小エ
藏ヲ定テ、安置シ日毎ニ詣リテ安否ヲ問フ其ノ
様生前ニ異ナラズ暴風雨アレバ必至リ雷震アレ
バ亦奔ッ屋根ハ漏ラガルヤ壁ハ落チガイヤラモ
問ニ命日ト益期ハ勿論毎月相望ニ之レヲ迎へ
テ家ニ祭ル其ノ前日ニハ小祭シテ告グ明日ハ必

御迎へ申サント翌日ニハ自身其ノ父ヲ負ヒ婦ハ
其ノ姑ヲ負フテ歸リ坐敷奥ノ間ヲ震掃シテニ請
ヒ供物奉事シ薄暮又送りテ土藏ニ納レ暇乞シテ
別レ去ル城主松平伊賀守忠清コレヲ聞キ偽存賣
名ノ所為ト見効シタルニ三年ヲ經テ懈ラガルト
以テ其ノ真摯ナルヲ知り其ノ所有田園三段ノ租
稅ヲ蠲免シテ之レヲ賞セリ
孝女多めハ百世西ノ屋惣セノ妻寛政二年褒賞セ
テル時ニ年三十六
文化四年秋ノ頃京都大佛邊ニテ老母子供連レノ
省ガ牛ニ突カレタルヲアリ其牛ハ西ノ岡ノ真取
ノ者ノ牛ニテ繩ヲ長クシテ追ヒ行キタルニ由リ

母
被
志

牛方ノ無調法トアリ所奉行沙汰ト為リ其ノ捌キ
ニ由リ以來洛中ニ於テ牛逐テ事相成ラズト定マ
リ既テハ丹波ヨリ京通ニノ牛モ少クナリテ木柴
炭米等ノ荷動カズ大ニ難澁スル者アリ丹波一帯
ノ風景氣ヲモ呼起コヌ有様ナルモノカラ龜山商
人其ノ他村々ノ同業者ヨリ京都所奉行所へ出願
シタル所御憐愍ヲ以テ差許シ以前ノ通り相心得
ベシトノ沙汰アリ一同大ニ喜ビ文化五年ノ春ヨ
リ丹波ノ木類ガ峠ヲ越ス_トトナリタルニ同五年
六月中頃西ノ岡ノ者ニテ牛ヲ追ヒ又人ニ怪哉サ
レ同行十八人牢舎申シ付ケラレ閏月三日西ノ岡
ヨリ六七人出張リ峠ノ平藏倉庫ノ名カノ前ニテ

火刑

丹波ノ牛荷ノ差シ止メタリ何故ニ差シ止メ
ニ由リ龜山木屋仲間大ニ難澁シ不景氣ヲ叫ブ其
ノ事何時ト無ク解ケタリ
火刑ノ事 文化四年丁卯ニ火灸ノ仕置アリ千ハ
希有ノ事ナリトテ評判高ク遠方近在ヨリ競ヒ集
マリ刑場寺川ノ前後左右ノ人ノ山ヲ築ケリ五月
六日被刑者横田庄藏ハ牢獄ヨリ呼ビ出ダサレ白
洲ニテ奉行ヨリ火灸ノ刑ニ處セラル、旨書付ヲ
以テ言ヒ渡サレ宿駕_{旅人乗用ノ岳}中ニ反縛セ
ラレ役人コレヲ嚴視シツ、町中引廻ハシ薪柴ノ
エニエゲラレ爆々ノ音ト共ニ黒焦ゲトナリテ果
テ庄藏ハ龜山藩ノ足輕ニテ長身巨軀善ク走ル

丹波志

了足輕ノ名詮自稱ニテ薄暮龜山ヲ發シ京都ニテ
 夜盜ヲ為シ贓品ヲ贗ラシ曉天マテニ歸宅シ平然
 トシテ勤務ニ就ク故ヲ以テ人之レヲ怪シマズ當
 時走ノ坂ナドノ山路ハ崎嶇羊腸沙石糞土到底一
 日ニ往返スベクモテラザル所殊ニ夜間ハ人行杜
 絶スルヲ以テ遺遇スベキモノハ山獸アルノミナ
 レバニヤ見谷ノモセラレズ番人モ氣附カザリシ
 ニヤ當番人アテ今時節ノ々々長キ間其ノ犯行ヲ
 知ルモノナカリシニ誰レ言フト無ク番人ノ耳ニ
 入り奉行ニ密告スルモノモ有リテ同心數名番人
 等曉天ソノ歸路ヲ要シテ捕縛シ直ニ牢獄ニ投入
 セラレタリ同類及ビ故買犯等ノ内偵中一夜牢番

人ノ假睡中ソノ烟草盆ノ火ヲ見テ飯喰箸ニテ取
 リ附ケ以テ口火トシ衣類ニ傳へ板ニ傳へ番人ノ
 周章狼狽スル最中ニ脱走シタルハ夜間ニテ之レ
 ヲ知りタル牢番ハ急遽ソノ迹ヲ追ヒ峠三軒家ニ
 テ追及シ格闘シテ數人ニ手負ハセ手ニ持テタル
 血痕アル長キ棒ヲ路ニ捨テ山中ニ逃ゲ延ビタル
 ガ身傷ツキ腹飢ウラ如何ニトモスルテ能ハズ
 深夜龜山ニ歸リ奉行ノ家ニ自首シタリ又入牢セ
 ラレ創傷ノ癒エルヲ待テ刑セラルベキニ又モヤ
 牢ヲ火キテ脱出シタリ再度ノ火種ハ何處ヨリ取
 リシヤ彼レ終ニ白狀セガリシト云フ
 牢燒キト破牢トノ重罪犯ナルヲ以テ公儀幕府ノ

丹波
 津和野
 志

御尋ネ人トナリ人相書ヲ以テ天下日本中ニ布告
シ搜索嚴密ヲ極メタルニ由リ之レヲ奈良奉行所
ニテ探知捕縛シタル旨京都町奉行所ヨリ通知テ
リ横田ト云フ所ノ船中ニ居タリトテ無名氏ノ歌
牢燒いて帆懸けて走る横田船

奈良で船を人々庄藏

亀山藩ヨリハ奉行水道目付同心出張シ京都六角
ノ牢屋ニ六角大宮ニテ受取り即日亀山ノ牢ニ入レ
亀山町番人川下平吉其ノ配下七人晝夜嚴監セリ
當町アソテ以未斯カル重犯ハ此ノ庄藏ヲ以テ始
ノトシ又終リトストカヤ
其ノ刑ニ就クノ日ハ白洲ニ於テ奉行以下十數名

威儀嚴重ニシテ呼ビ入レ目付ヨリ罪狀明白ニ讀
ミ聞カセ重々ノ大罪ニ付キ火炙リ申シ渡スト一
段聲ヲ張リ揚ゲタルニモ更ニ怖ル、邑無ク駕籠
ニ乗リタレバ有リ合フ人々皆舌ヲ卷キテ其ノ大
膽ニ驚ケリ駕籠ハ針金網ニテ固ク縛リ前後左右
露刃ノ槍ニテ足輕コレヲ護リ舒々町内ヲ引キ廻
ハシ辻々ニテ高聲ニ罪名ヲ高唱スル法ト罪狀ヲ
書キタル札ヲ建テ凡テ故式ニ由リテ執行セテレ
タリ刑場ニテ或ル人ノ口占トテ

天ノ網鐵の網す、繩り網

なむあみだぶの駕籠ハなまりヤ

庄藏ハ黒焦コヤクトナリテ事完ク了ル

丹波志

山城國愛宕郡田中村干菜山光福寺ハ謂ハ所ル干
菜寺ニテ其ノ開山ハ名ヲ宗真ト呼ビ道如上人ト
尊稱セラレ元ハ明智光秀ノ臣ニシテ本能寺ノ變
アリテ以來ハ痛ク世人ノ無情ヲ感ジ剃髮染衣ノ
身トナリ本来永劫ノ安樂ヲ希ク相國寺ノ側ニ一
州菴ヲ結ビ戰歿者ノ回向ヲ為シ居タルガ其ノ行
意ノ堅固清淨ナル一秀吉ノ聞ク所トナリ一日秀
吉微行シテ往キ訪フ菴主上人ハ其ノ闢白ナル一
ヲ知リ打テ驚キ且喜ビ談話ニ時ヲ移シ食時ニ為
リタレバ之レヲ饗應セント思ヘドモ差シ向クベ
キ饗味無シ己ムヲ得ズ有リ合テ大根ト干菜ノ汁
ニ尾張味噌モテ調和シテルヲ薦ノタルガ秀吉ハ

其ノ真率ニ感ジ又尾張國ハ自分出生ノ地ナルニ
想ヒ起コシ之レヲ以テ山海ノ珍味ヨリモ優レル
饗應ナリト稱ヘ十二分ニ食飲シ歸館後金銀モテ
粧飾シタル陣太鼓ヲ興ヘ念佛合稱ノ時ニハ打テ
敲キ銅鑼ニ合ハセヨトノ沙汰アリケレバ爾後毎
月ノ六齋日ニハ僧俗一齊ニ聲ヲ合ハセナマリア
イダ南無阿彌音調ニ合ハセ鳴ラステトナレリ
後世孟蘭盆會ニハ清水寺ニ大會アリ又諸方ニモ
之レヲ興行スレド追々其ノ調子ノ乱雜トナリ戲
曲トナリ行クニハ本山ヲ始メ心アル僧俗ヲシテ
聲應セシム茲ニ其ノ本式ト稱スルモノヲ叙ヘシ
住職ノ僧曲集ニ倚リ 伴僧十名其ノ左右ニ侍

丹波志

立ス

鐘方四十名 黒紋付ノ羽織ニ袴ヲ着シ其ノ後

列ニ立ツ 鐘ハスリガネナリ

大鼓方七十名 麻上下ニテ四列ニ立ツ 大鼓

ハ香吉下賜ノ品ト同シク金銀ノ粧飾アリ

調聲師 命ジテ鉦ヲ鳴ラサシム

四名ノ役 金銀ノ采配ヲ揚グ

大鼓總持 大鼓役 一齊ニ起立シ各自大鼓ヲ

打テ左ノ曲ト三座ノ打テ分ケテ為ス

白毛半拘留銘ノ曲 佛法僧三座

遂ニ惣起立ノ舞踊トナリ 數時ニシテ其ノ式ヲ

終ル 宗真ハ龜山ニテ明智ニ臣タリ故ニ此ニ出ダス

肴荷ノ一 從前丹波東部ノ需要ヲ充クス為ニハ

攝津尼ヶ崎ヲ日暮ニ出テ同國餘野ヨリ南桑田郡

ニ入り袖原笑路法貴ヲ經テ翌朝午前十時頃龜山

ニ着クヲ以テ前日漁獲ノ鮮魚ヲ龜山ノ魚肆ニ看

ルヲ得タルナリ此肴荷目方十二貫匁攝津江塚ヨ

リ尼ヶ崎へ取り出シニ行キ之ヲ餘野へ持歸ル此ノ

賃錢三貫五百文餘野ヨリ龜山迄ノ賃錢龜山札ニ

テ二十匁汽車が京坂ヲ往復スルニ際シテモ此ノ

肴荷ハ依然タリシガ汽車賃ノ低減スルヤ肴荷モ

之レニ搭乗シ京都ニ入りテ丹波へ搬運スルトト

ナレリ四十四年ニハ丹波ノ鮮魚ガ其ノ日ノ食膳

ニ上ルトトナリ伊勢若狹等ヨリモ速達セラル

丹波志

御蔭參、ノ、明和八年卯ノ春夏久旱シテ農家ヲハ
始ノ人々眉ヲ顰ノ麥米兩作ノ悲觀ヲ為シ居クル所
ニ五月廿二日子供連中老人附添、ちりげでさ、抜
けたとさ、ト唱へ龜山所ヲ西ヨリ東へ通行スル者
リ人々不審ニ思ヒ其ノ國所ヲ尋ヌルニ何鹿郡天
田郡ノ界隈ナル村々ノ名ヲ答テ其ノ目指ス所ヲ問
へバ御伊勢様へ參詣スルモノト云テ二日ヲ間テ
、少壯男子ノ一聯通過シ次デ乳吞兒ヲ抱へタル
婦女モ加ハリ老婆下婢體ノ一團通過シ皆口々ニ
ちりげでさノ文句ヲ高唱シ當所ノ旅亭ニ一宿ス
ルモアリ夜行スルモアリ之レヲ見聞シテ當所ヲ
始ノ近村ノ男女モ家ヲ抜ケ出テ遠行スルノ流行

ス是レハ先例モ有ルトテ故老ノ注意ニ由リ攝
待所ヲ町々村々ニ設ケ湯茶雜菓子草履草鞋握飯
其ノ他思ヒくノモノヲ施與スルトナレリ
當所モ近邑モ此ノ不時ノ騷ギニテ仕事モ手ニ就
カズ遊手徒食シテ路傍ニ佇ミ往來ヲ觀望羨望ス
ルモノ比々皆然リト云フ様ニテ吾ガ妻ニ於テハ
ノツクナトハト油断スル内ニ小供ヲ打テ置キ姿
ヲ見セズ用件アリテ村役ノ家ヲ訪へバ妻女出デ
來リ折角チヌガ主人ハ昨夜抜ケマレク何レ十日
位ノ後ハ歸宅致スナラシナド滑稽談失敗話ナド
笑話ト共ニ到ル所ニ喧傳セラレタルガ流石藩中
ハ紀律モアルトテ一人ノ落伍者ハ無カリシ

町
史
志

御玄猪(かげんぢよ)ノ通過 是レハ十月初ノ亥ノ日
三荷ノ辛櫃ニ奉領附キ添ヒ荷下二人當地ヲ通過ス
當城下ヨリモ人足ヲ出シ交代セシム 亥ノ日ノ御用
料ナルヲ以テ其ノ前日攝津國能勢郡木代村ヲ發シ
途中一宿モセズ未刻(今ノ午後二時)御所ニ着キ清所
御門(御臺所御門)ヨリ入り參内殿ニテ奉獻スルノ例
ナリ 其ノ所以尤ノ如シ曰ハク神后三韓征討ノ際ニ
麁阪忍熊ノ二皇子ガ凱旋ノ后軍ヲ懸一撃タントテ
兵ヲ擧ゲ此處ノ山中ニ埋伏シ皇后ヲ逐ヒ圍ミ業已
ニ危急ニ及バントスル際何處ヨリカ来ニケン山猪
猛リ追ミ麁坂ヲ喰ヒ殺シ皇后皇太子ヲ救ヒ奉レリ
皇太子即位ノ後前事ヲ思シ出テサセラレ 吉事トシ

テ紀念スベク當時供御ニシタル御料其ノ儘ノ形狀
ニテ奉ルナリ 唐櫃ノ中ニハ上器ニ赤小豆ト餅米ヲ
交ヒタル搗餅ヲ載ス是レハ猪肉ニ擬シタルモノト云
フ一説ニハ皇太子ヲ此ノ餅ニテ養ヒ奉ルルニ由ルト
云フ唐櫃ハ極小形ノモノニテ葦葉注連ヲ四方ニ張り白
幣ヲ差シ會符ヲ立ツ道中往來ノ者ハ之ヲ避ク士人ト
雖其ノ途ヲ讓レリ昔ハ十月毎亥ノ日ニ奉ルタルガ何
日ノ項ヨリカ初ノ亥ノ日一度トナレリ 昔ハ上ノ亥
ノ日ハ木代村五戸ヨリ中ノ亥ノ日ニハ切畑村八戸
ヨリ下ノ亥ノ日ニハ右八戸ノ内ノ四戸ヨリ納メタ
ルヲ以テ當地ヲ三度モ通過シタルナリ 御所ニテハ
御酒饌ノ下賜アリ是等ノ家ニハ菊ノ御紋章ヲ用テ

丹波
郡
志

ル特權アリ其ノ家ヲ門大輔(門太夫トモ)ト呼ブ是ハ
本家ナリ三所四方ノ大屋敷ヲ構ヘ威嚴ヲ示セリ
門太輔ヨリ奉リタル御餅ハ内藏寮ノ役人之レヲ受
ケ取り朝餉、御間ニ於テ御饗膳ニ登ル
幕府ニ於テモ亦此ノ式ヲ舉行ス升ハ室所將軍家ガ
諸事朝儀ヲ僭用シタルニ起因ニ徳川家コレヲ襲用
シテ慶長八年十月四日故事ニ由リ亥猪ヲ攝津能勢
ヨリ獻ズ(能勢郡ノ一部ハ丹波ナリシコト總論ニ出
タス)升ハ能勢ノ地頭堀直寄ガ天恩ヲ報セントラ玄
猪一百五十合ヲ奉レル由文書ニ見エ朝廷ニ奉リシ
モノニヤ徳川家ニテハ四品以エノ輩ニ將軍自コレ
ヲ切リテ分與シ以下ノ輩ハ自進ミ之レヲ取ルナリ

諸大名ニモ亦其ノ式ヲ行フ幕府ノ式ニ同ジ是レ
ヨリシテ天下一般ノ祝日トナリ亥ノ子ト唱ヘ餅ヲ
製シ之レヲ食フ曰ハク萬病ヲ除クノ法ナリト
支那ノ昔年十月ニハ天子居玄堂左介乘玄路駕鐵驪
建玄祈衣黒衣ナドノ式アルト禮記ノ月令ニ見エ玄
猪ノ玄モ漢學專用ノ結果コレヲ附ケタルナリ細川
家ノ茶道(肥後藩ノ茶坊主ナリ)京都ニ來リ御内縁ニ
由リ近衛左大臣基熙公ニ謁シ公ノ御茶ニ與カル公
御手ツカラ御菓子ヲ下シ賜フ基石形ニシテ色々ニ
染メタル餅ナリ猪仰セラル、様コノ餅ハ昨日御玄
猪ナル故宸宴供拜ノ餘リ戴キタル所ナレバ汝モ之
レヲ戴ケ丹波能勢ノ奉久路ノ庄ヨリ備ヘ奉レルモ

乃其子背く時ハ老クハ神佛乃孝を交け近ク
ハ而孝不忠非終非友乃罪殺さべうらさる事

附女ハ舅姑ノ事あること其乃親ノ事ある如
くまゝ一帯穢染る所を却め殿の女子取つて

ハ砂ノ男より取つて或ハ木藪を去り或ハ耕
作とゆ一畝内乃吾若みつりらまゝきり

一 百姓ハ耕作ノ精を出し種蒔肥一草ぎり其乃
時節を失ふ事して田畑を荒れしれハ定れり

年貢日滞らす由年賦を乃憂としのん是懐し
有るべし別々種作り水取り第一其れハ常

ニ種海ふれりす十戸村他村乃差別なく互
み水を譲りて一職人ハ其意ハ精力を以て高

人ハ其利を食うず其をすまひし用ひし時
ハ農上高夫者ハ己分父母高子とまごころみ父

祖乃譲りし田畑を譲ると失ふ事あるべし
昔々嫁娶を由随分種くみ計ふてし授けく家

集りしと種部ハ其けそ菜子取り其節の所子
りり茶多茶珍益うてし其まうてし用まうて

根下取すやうらず村用法海りしと托して大勢
寄合酒食ハ酔り以りざる益財とこのハ遊藝

を遊ば家業を怠り老を妨げ終ふハ生理を
失い身よを抄候し父母ハ教れ妻子を授けり

まより其可憐子ノ家定善福を成さば其分不
意下其夫乃種孫を以て可らず門長存破風不

京都府立総合資料館所蔵

振りく、村役人等、多岐、誘ふべし節目を
きき、上より、おもしろくも、是規乃、詔、後、と
くして、眼に、作る、づう、すむ、新、規、乃、社、養、停、止
す、且、お、後、と、制、ハ、優、素、を、宗、と、し、上、下、を、分、と、す
考、を、者、く、控、り、れ、ハ、御、と、度、を、越、え、と、う、浪、に、守
と、べ、し、傳、り、背、り、は、教、を、く、う、う、す、無、て、其、何、賢
馬、ハ、天、く、く、ま、け、ゆ、く、く、雨、を、れ、ハ、生、り、身、の、程
と、辨、ハ、常、に、事、足、と、極、を、却、り、て、世、と、乃、者、を、足
り、れ、少、則、り、て、外、と、求、む、く、い、ふ、く、浮、朴、乃、風、俗
を、考、ふ、ま、し、と、さ、る、

附、り、時、を、考、を、事、と、し、町、人、ハ、商、を、心、く、く、各、餘
力、を、そ、乃、り、し、た、る、業、を、以、て、生理、を、學、こ、し、中

く、忠、何、と、業、と、し、た、る、こ、と、な、く、月、日、を、送、り
ハ、於、少、者、を、み、ま、し、あ、る、べ、し、生、業、乃、役、人、紀
明、を、く、と、事、

一、村、ハ、古、耳、ハ、作、法、と、し、し、の、う、ら、ぎ、の、伊、極、ハ、泥
お、く、く、と、な、法、印、を、庸、と、し、お、け、ら、い、多、用、と、費
を、者、と、物、を、中、分、り、を、極、と、珍、と、心、し、庶、民、を、己
所、患、と、る、姓、と、な、す、ハ、尚、以、て、常、に、い、を、是、し、己
所、會、怨、と、あり、て、百、氏、を、心、た、り、情、を、く、し、む
て、子、を、く、却、く、し、て、親、を、も、ま、れ、或、ハ、や、も、め、又
ハ、か、く、己、を、し、く、ハ、長、病、を、と、り、た、り、と、不、
く、ま、し、と、ら、う、く、ま、ま、の、ハ、其、乃、一、教、ハ、云、ふ、に
乃、を、た、る、名、之、所、患、と、人、組、を、念、と、せ、り、と

京都府立総合資料館所蔵

悔り申すをぬし方角と好し婦りと遊ばす
このありは其の乃後人五人にハ分節長たる
又方右交と方と者より懇子と之を如く陳む
べし懇り言せせん訴あつべき事

附時来し後其外單しうとて依と終しゆ者他亦よ
りまゝとも知れぬも止むべし見望城節とあふれ者を
可捕らんとすててまゝとていふ事とて與ふべし性業
と存節しゆり其乃主人ニ飛あふハ分節長五人に
まゝとて其節度常とあふと遊中節度其安と節利業
事

一 旅りし病人は劍指子と懇あらば懇よりと
りて中出旅節節の居る處をらとて物と旅人

ハ宿をくつりて其節と旅人し少節こり子及そ
、可節出節ととと者あらば是亦子と其節と
旅人と遊まぐし懇子遊ふて者とくさば後節
阿ふくし是又節佛をいつそり其節と食との
方あやしと福豆山伏聖記修文、節りし日業
責人あど見ゆり、其村里に懇時と節むべし
らとて

附遠方乃旅節節の旅人こり、及なり、其
不し後く、可節出と

一 他亦しと家と極し其者他亦、福と者あら
ハ其乃出亦ととと懇とべし是又節鑄開性夜
念佛法ととぬあやつり、其節歌と岐と板と節

理有るの生島市に於て人害はしむ候に就
てかくして不可なり

附 遊女野郎停止に若他所より来るもの不可
なり

一 徳意をふさぐ御祈に言ひ判禁之若し後候に
節有るり方々中分あらば存存名を祈願よ
りま配役々々神妙々々出くべし以て控を用ひ
て徳意がましく方務中候其の節ありば難乃
理非を禱せられたるを祈願し年月を短くし
てを罷と致さく候と成候に難し節々々又
自願役人乃非我々命再々々及がれり候を
まよけざる時「願祈まべし若し候と成候

実しきと巧と己が身懸のたぬ又「造帳をん
て人の悪事を祈へ或は人命に難しき由又
「裁許するに内且裁取留置難し祈候を控
控りり候と成候なり

一 諸人廻御し第一一葉をか地をがまし
候へや女ら備は違ひ人々もまをて若候に
らんと控り候り候と成候を祈願し候と成候
り集りたる若し酒食を祈願ふ可らば常々
少分のまたり候と成候を祈願し候と成候
候人非我々作配あらば此の祈願し候と成候
候と成候を祈願し候と成候又「祈願し候と成候
たもまかり候と成候乃たぬ祈願又「常用し人

丹波志

附下着は紋有金せしお右高の着目も多し
 女子着用は日行き袴他行し帯と上着つゝ
 一 帯に附くもの
 一 男女とも玉生袖に帯り帯おし多きもの本縁
 一 女子は之より遠隔り飾りお銀細工等并絹地
 細工もこの格多花火飾り等も多し
 一 男子は之の何より帯多用し銀細工お不
 多し
 一 少児十歳迄は有金せし絹お常用の者
 一 男女たもこの日傘多用し
 一 帯は子嫁髪し

大正後料理

一 汁ニ菜 酒ニ萩 肴ニ種汁 焼物毛し
 大正後料理は、お扇子料理も多し以下
 一 何れに客より送部は焼物付し信約は付し
 一 茶白生魚お扱中も多し
 一 元彼家へ家運店借引紙
 一 太い町に空おし任せう中但し送物お
 一 男お扇子料理も以下を以てお料理し
 一 男子お帯は送物おの多し
 一 煎餅お帯は日色お銀お鳴ら紋は其所

京都府立総合資料館所蔵

欽山神社 式内 主神大國主命 相殿天照皇大神宮春日大明神熊野大權現末社白山大權現高榊大明神箱荷大明神辨財天女櫂船大明神天滿宮百太夫ニ塚アリ一ハ賴政塚一ハ鶴塚 百太夫ハ泥細工師ナリト又云フ白太夫ノ誤ナリト
郡村神祠中觀ルベキ莊嚴アリ神苑モ亦頗佳趣アリテ春花ニ秋葉ニ賞翫吟味スバシ兩部神道トナリテヨリ僧侶具ノ別當トナリテ天岡山大智院ト稱シテ社務ヲ管掌セリ天岡ハ社頭ノ山名ニシテ官司ノ氏トナスモ大智院住持ノ後裔ナルニ由ル又新坊ナルモノ有リ之ヲ面降寺ト名ヅク共ニ比叡山羅足寺ノ末寺ナリ然リト雖モ他所ノ社坊ノ

如ク内殿ニハ佛體ヲ安置セズ内佛ノ名ヲ以テ院内ニ地藏菩薩ヲ安置セリ此ノ佛ハ回祿ノ災アル毎ニ飛翔回避シタリトテ久シク所村氏子ノ信仰ヲ繫ギ本社ニ冬拜スルモノハ此ノ佛ヲモ來拜セリ院祿五人扶持即チ玄米九石一斗ニ升五合ノ年給アリ加フルニ饗者ノ喜捨亦少カラズ故ニ社頭常ニ餘裕アリ々早敷ノ年ニハ立願シ利益ヲ蒙ムルト屢次ナリシト云フ篠踊トテ篠ヲ手ニシテ踏歌スル盃盃盆會ノ慣習數十百年行ハレ維新後廢タル
口碑 天地剖判ニテ此所一大泥湖ナリ出雲大神八神ヲ黑栢嶽ニ會シテ日ハ夕水底ニ國土アル可

丹波志

シト一舟ヲ泛ベ一鋏ヲ把リ浮田峽ヲ鑿リ瀉水ヲ
落トス水涸レテ土出ヅ草木茲ニ生シ人物茲ニ産
ス之ヲたふはノ田類ト名ツケ降り居マス之ヲ鋏山
ノ神トス出雲ノ神ト同體ナリ後記續六此ノ故ニ
毎年十月神無月ニハ百萬神ハ出雲國ニ參集スレ
ドモ當明神ハ常ノ如シ故ニ當社ハ神無月トテハ
無シたふはノ記事ハ総論國名ノ所ニ記ス参照ス
ベシ八神トハ保津山本請田宮廣田田能ノ檜船宮
杉生小泉東掛ノ産土神等都テ八神ナリ黒柄嶽ハ
杉生村ノ高山ナリ浮田ノ峽ハ山本ノ溪谷ナリ其
ノ降り居マスト云フハ今ノ官居ノ所ナリ
坂上康賴即大醫丹波康賴此ノ地ヲ鎮シ崇敬深ク

醫道愈盛シナリ此所ニ樂田油田花田八日田相摸
田馬場田難田田春射田アルニ由リ八田トモ呼ベ
リ天正四年明智光秀ニ狼藉セラレテ此ノ八田
七ブ矢田判官義清ノ地主トシテ本祠ヲ崇敬
シ神祐ヲ得テ家門繁榮セリ祠下ニ矢田五郎ナ
ルモノアリ性質大膽ニシテ任依ヲ事トシ神佛ヲ
蔑視ス一日縦ニ當祠ニ昇リ神面ヲ仰キ見ルヤ月
眩シ鼻衄シテ階下ニ顛仆シ遂ニ啞者トナル
永祿三年九月寺内三郎左衛門王鼻ヲ造リテ納ム
謂ハ所ル猿田彦ノ面ナリ天正四年六月明智光秀
築城ノ爲ニ社田ヲ奪ヒ前卷社物ヲ奪フテ祠官ヲ
逐フ菱田一家ト僧房一字僅ニ存ス之レヲ新坊大

丹波志

智院トス

天正十九年金吾中納言豊臣秀秋具ノ荒廢ヲ慨キ
渡邊勘右衛門ニ命ジ修復セシメノ燈明料ヲモ寄附
ス建ツル所ノ制札左ノ如シ

掟

鍛山大明神

一社邊繫馬場中ニ牛馬事

一山林伐採竹木事

一神前可被祝詞付參錢參米可有納來

右所定如件

天正十九年五月十一日 渡邊勘右衛門尉

爲鍛山大明神御供燈明料官分内三石五斗四

升七合令寄進隔於御神前懇祈專要也

天正十九年五月十六日 渡邊勘右衛門尉

鍛山別當新坊 參

禁制 鍛山宮

一社邊之馬場中ニ繫牛馬事

一伐採山林竹木事

一取宮廻之石事

右條々所制如件

文錄四年十月日 秀次

爲鍛山大明神御供燈明料以官分内三石五斗

五升事令寄進畢 永可有社納候也

文錄四十月八日 秀次

鍛山志

當社別當新坊

法度

右意趣者於官山當番衆より薪取に由り候手堅
令法度候於自今以來竹木以下薪等取輩有る者
召搦御城へ可來との也

三月十四日

城代

官山別當

慶長十四年岡部内膳正長盛本社改造に付遷宮セ
レトス祠官ヨリ永萬年間神鬮ノ事ヲ陳述シ歛山
神ト八幡神トハ合祀ス可ラズト主張ス長盛判シ
テ曰ハク神ハ正直ヲ體トシ明鏡ヲ用トス明々相
照ラサバ正々何シゾ分カタシ棟ヲ并へ檐ヲ交へ

壯麗ニシテ示サバ神コレヲ受ケント遂ニ兩殿ヲ
新營シ其ノ中間ニハ池ヲ設ケ穿ツ是レニ由リテ
社人服シ氏子欣テ依リテ制札中ニ疊石ノ一項ヲ
加フ曰ハク

禁制

- 一 歛山社塔ノ頭ノ字山林之竹木伐採事
 - 一 牛馬山林へ放飼事
 - 一 社内疊石取事 社頭花紅葉折取事
- 右所定如件

慶長十五年庚戌三月三日岡部内膳正長盛

官山惣別當新坊乘祐

右ニ付説明社司家傳ニ曰ハク永萬元年四月八日
 天岡山上靈光四方ヲ照映ス荒塚村民認視スル所
 一神甲冑ヲ着ケ弓箭ヲ持ツ神託アリ曰ハク我ハ
 譽田神^八神^十リ跡ヲ此所ニ無レント故スト村民
 魂飛ヒ心ヲ失フ既ニシテ左右ヲ顧ミレバ一弓一
 矢アリ乃コレヲ歛山神祠ノ傍ニ置ク旬餘ニシテ
 途上老嫗ニ逢フ狀貌怪異ナリ此ノ時ニ當リ一老
 翁アリ舞ヲ禁闕ニ奏ス詔アリニ面ヲ造リソノ一
 面ヲ矢田社ニ納レヨト詔ノ如クシ之ヲ矢田新八
 幡トス^面起降寺是ニ於テ面ト弓矢ヲ以テ重器トシ
 之ヲ奉祀ス幾バクモ無クシテ戩鬪ノ聲毎夜起コ
 リ翌朝鳩ト鬼ノ屍體ヲ見ル人以テ怪トシ以爲ヘ
 ラク白鬼ハ歛山明神ノ使獸白鳩ハ八幡大神ノ使
 鳥其ノ相闘フハ兩神不和ノ兆ト之ニ由リ新宮ヲ
 杉谷ニ移シテ怪熄ム之レニ由リ毎年四月八日ニ
 神官賢木ニ錦囊ヲ掛ケ萬歳樂ヲ奏スレバ須臾ニ
 シテ囊自張ル是レ當時神意ニ從ヒ新宮ヲ移ス地
 ヲ定メントシテ山中ヲ持テ廻ハリ囊ノ具狀アル
 所ヲト定シタル意ヲ示セル式ナリ此ノ式ハ亡ビ
 タルモ鳩ト鬼トヲ以テ社紋トシ提灯ニモ繪ガケ
 ルヲゾ残リタレ
 影向石ハ赤子谷ノ上ニアリ寛統法印ノ建ツル所
 ニシテ藩儒三上龍山其ノ面ニ書ス
 神境ハ延寶四年ニ定マレ北ハ赤子谷ヨリ以西荒

一
甲



永芳寺
神光現出之處
碑高三尺寺下臨三尺寺

坂ニ至ルノ麓ヨリ嶺ヲ含ム
明治四十年ノ秋九月登臨シタルニ碑ヲ見ズ山頂
ニハ經塚アルノミ之ヲ村人ニ問ハバ谷底ニ墜キ
テ年久シト之ヲ衆ニ謀リ舊ニ復セシテヲ求ム村
人諾シ日ヲ經ズレテ碑ハ舊所ニ立テ永萬ノ候ヲ
復山上ニ留ム

傍

御鋏

四寸五分ニ三寸二分 溝が欠ノ分并ノモノヨリ深ク廣シ鋏ト云ハンヨリハ今ノ鋏ノ先ニ近シ

古言ニハ鋏ヲヌキト訓マセタルニテモ今ノ鋏ト同一物ナルヲ知ル

三個アレドモ他ハ新シキモノ、如シ中ニ純キ銅ノ交リタルモノハ尤新シキモノ、如シ

寶物

御鋏 祭禮ニ長箱ニ納リ紅袋ニテ包ミ童子之ヲ肩ニシテ行ク

鋏山神號一幅 社傳 王右衛門

八幡神號一幅 社傳 後陽成天皇宸筆

劍二振 長船吉行 來太郎 長劍 豊後守國義

牙鋏同八幡 弓三 矢 石碓 玉典 猿田彦西

上十二行 丸龜印行

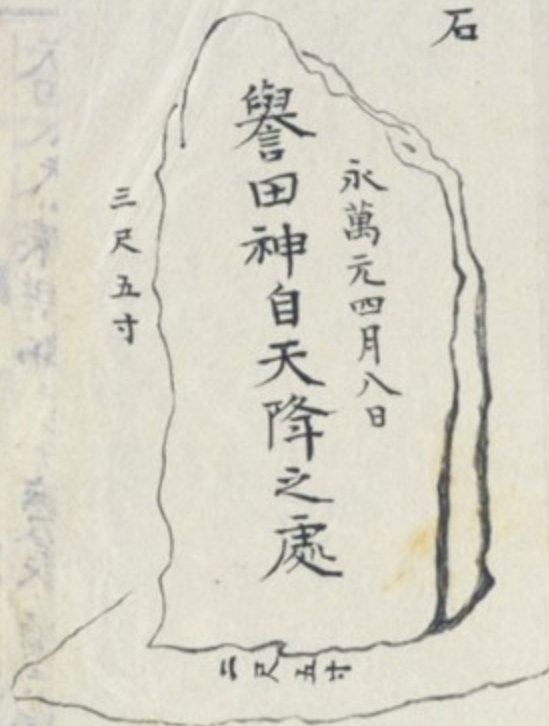
明神ヶ嶽ハ東
黒柄嶽ハ西
役小角經過ノ所

永萬元年神光出現處

影向石

永萬元四月八日
譽田神自天降之處

三尺五寸



天田大夫猿樂師ニシテ慶長ノ頃ニ猶存リテ祭式ニ臨ミテ
城下十七町村内十三町ニ輕クシテ城外四町ニ重ク同祭事ニ不權衡アリテ内外
様ニ祭費ヲ負擔スルコトナレリ

元和元年三月石燈籠奉納 近藤新三郎秀真

寛永九年湯釜三個奉納 村上是安 村上孫左衛門

領主菅沼織尚正定芳祠邊ニ於テ獵狩ニ神崇テ感シ寄進シ謝罪スル如シ

敬奉寄進

矢田八幡宮神領

矢田郷内

高拾壹石

右源家保護之靈神尊崇之至最所抽丹誠也每歲為元慶祭奠之儀
所寄附之神領永期我家之無窮仍如件

寛永十二年辛亥二月日

源姓菅沼氏織染署定芳

上十二行 丸屋印行

寛永十六年菅沼定芳銀田改檢ノ際神境ヲモ改檢
シ燈明料ヲモ寄進シ十七石二斗三升八合ノ高ア
リ之ヲ臣僚ニ令シテ保管セシム

寛文戊子三月十五日大智院茶會ノ時菅谷主稅助
晴辰ノ臣鴉澤直庵中村可直等來會スル際孩童一
右歎ヲ持テ來リ示シテ曰ハク神域ノ内ニ得タリ
ト靈物ニシテ人作ニ非ス三人之ヲ品薦シテ曰ハ
ク此ノ神間鑿ノ遺形カト之ヲ秘藏ス

奉納 錢壺

鉄山神社

右船井郡自西階村上山土人掘出之抱來於龜山城之故如件

承應元辰霜月廿八日

景元德寶	三十五文	泰平通寶	九文	大元宋寶	一文
開元通寶	九十一文	乾元重寶	四文	景國通寶	一文
至和通寶	四文	嘉祐通寶	三十六文	治平通寶	三文
大觀通寶	十二文	政和通寶	六十八文	宣和通寶	五文
嘉泰通寶	二文	嘉定通寶	二文	至元和寶	十一文
至元通寶	二十文	洪武通寶	一文	永樂通寶	二十八文
元通寶	百九十四文	元通符寶	十七文	元通祐寶	百二十七文

天元聖寶	八十九文	熙寧元寶	百廿五文	熙祐元寶	廿一文
皇宋通寶	百九十一文	天禧通寶	三十七文	紹熙元寶	一文
嘉祐元寶	二文	祥符元寶	四十二文	咸平元寶	廿四文
聖宋元寶	四十二文	祥符通寶	三十二文	正隆元寶	三文
景德元寶	十七文	治平元寶	十九文	皇宋元寶	三文
明元通寶	三文	宋元通寶	四文	開禧通寶	一文
淳化元寶	十三文	淳熙元寶	十二文	大定通寶	一文
皇祐通寶	二文	淳祐元寶	一文	紹聖元寶	五十三文
禧平元寶	十四文	景祐元寶	六文	慶元通寶	四文
海東通寶	一文	朝鮮通寶	一文		
合一千四百三十八文		右領主ヨリ社納セシ		メタル所ノ漢韓錢	

看守圓寶此ノ壺ヲ盗ミ銭ノ存スルモノ寥々々々

牛ノ玉 氷上郡民ノ獻上 大守コレヲ社納セシム

三十六歌仙畫像 領主自筆ノ歌 寛文三年寄附

神明領之事

高五石

右者爲神明御供料上矢田以領内令寄附記

寛文三年癸卯六月廿八日 松平伊賀守忠晴

上矢田村 大智院乘欽法印

奉寄附

矢田八幡宮神領 矢田郷内高拾七石餘

右源家保祐之靈廟最可歸仰之爲助庶羞之具
所寄附之
神領如件

寛文廿二年甲申四月廿八日 從五位上菅沼左近大夫源定昭

新坊乘祐

天岡山天智院ハ叡山雞足院ノ末寺ニシテ前ニ出
カセル西降院コレナリ又新坊ト云フテ前示ノ如
シ内佛トシテ地藏菩薩ヲ安置ス兩部神道ナル
ヲ以テ社常ハ圓顯笠衣ナリ祭式ニ七七條ノ袈裟
二重ノ法衣ヲ着シ乘輿ニテ供奉ス

矢田八景

天岡夏雲 天岡乃言飲そひゆらゆら二松あり松の海うららん 赤房

社頭丹楓 空乃紅霞あまの原おのこもちと花のまうさうらん 齋

大江涼月 ちやうとぬ大江の山は影をて深し凡の月を吹くこ法夜

桂峰朝霞 桂山松乃もももどきほくあつくあつの中はけり群子

慶宮初雪 あつらものたほるこつ水に慶宮山あつたれり 隆松の雪

保村歸鷺 くれはる保村の山は影をて深し凡の月を吹くこ法夜

羊山夜雨 時るのあめあれとこつ水にかつて山は影をて深し凡の月を吹くこ法夜

龜津秋霧 君ふ代の子年をこめて龜山の雪霧の舟を影をて深し凡の月を吹くこ法夜

寛政二年城主ノ自撰ニ係カル矢田二十景ハ

- | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|
| 天岡峰 | 盪錦源 | 僊迹池 | 李花蹊 | 鐺山洞 |
| 行幸山 | 鳴玉泉 | 水哉閣 | 天字橋 | 西降松 |
| 金雞山 | 手洗水 | 龍尾嶽 | 天女池 | 慶神鐘 |
| 連理叢 | 仙棗盤 | 吐月林 | 降神石 | 夜鳥墳 |

町 坂 志

山川洵美最丹州熊駕細探城外幽是爲君侯懸勝目
長教詞客酌風流 儒賢三上復謹誌
深海皆山人天得嘉永間ノ儒醫ナリ左ノニ首ア
り
神平水土理粟田奉祀崇功延喜年共仰歛山疏鑿力
地方長此戴堯天
數里城南路遷迤臨々檜柏護菴祠神靈集散風無迹
祭祀春秋例有時階下帚痕流細爐頭篆影亂遊絲放
生池上知魚樂解車莊生不我欺
每年十月 陰曆ヲ神無月ト稱スレドモ出雲國ト當
所ハ左云ハズ神在マバナリ諸神ハ出雲國ニ神集
ニ集ヒ玉ハドモ當所ノ神ハ出雲大社ト同體ノ

神ナレバナリ

矢田祭

表祭次第

九月二十日拂曉本社ニ於テ神體ヲ神輿ニ移スノ
式アリ式終リ列ヲ爲シ矢田社ヲ繰リ出ス 傘鉾
大鼓 釧鉾 寶物 神輿 供奉等正午過ル
頃御旅所ニ着クヲ以テ式終ハル
二神輿 一ハ歙山宮 一ハ八幡宮 輿丁數十名
コレヲ舁キ與刀所御旗所稻荷垣内等ノ家中町藩
所居ヲ舁キ廻ハリ夕景御旅所ハ鎮座ス コレヲ
御出ノ式ト呼ブ 此ノ日ヨリ御旅所ハ參詣スル
藩中町中ノ男女多シ

二十一日ヨリ翌日ハカケ御湯神樂絶エズ
二十三日御面掛ヶ御酒示スト稱ニ午後奥前、板敷ノ平舞臺ヲ設ケ能狂言ニ三番ヲ演ヒタルア
二十四日夜官氏子大抵参詣ス中一城下十三村
十三町年々交代祭禮ノ役割ヲ爲シ受持ヲ定ムルモノトス
二十五日早朝御旅所ヨリ列ヲ正シ矢田町ニ至リ休憩ス其ノ間ニ何町鉾何町山ト順序ヲ立テ、繰リ出シ塩屋町柳町魚屋町本町紺屋町西町北町ヲ經テ西門ヨリ城内ニ入り家中町ヲ西ノ丸ニ通り中大手門前廣場ニテ休憩ニ午飯ス 午後又列ヲ

成シ城主ノ拜所、向ヒ古世門ヲ出テ茲ニテ列ヲ解キ神輿ト獅子ハ各町ヲ奔馳シ御酒ヲ供スル家アレバ其所ニ止マリ黄昏矢田本社ニ還ル御宮移レノ式アリ神體ヲ復祭ス
此ノ日通路ニ當ル藩士ノ家ハ門ニ幕ヲ張り棧敷ヲ門階ニ掛ケテ拜視ス
三宅古世矢田京本紺屋西柳旅籠呉服ノ十町ハ擔ヒ山鉾ヲ取片付ケ神輿奔走ニ便ス

裏祭次第

擔ヒ山鉾ハ出サズ人形ノミヲ其ノ町々ニ飾リ置キ行列モ城内ニ入ラズ

寛文十年四月八日氏子等鐘供養ヲ社頭ニ行フ鐘
ノ徑リ三尺一寸高サ五尺室サ一千七百五十斤左
ノ文ハ江戸ノ儒者ニシテ法印圓實ノ友人ナリ

丹波國桑田郡歙山神社鐘銘

丹波之國桑田之郡有村曰矢田歙山社在焉此社
也延喜神名帳既載之其從來尚矣傳稱昔出雲神
降此國之別院黑柄嶺八神從之于時國中地勢不
分水脈不通余歙山神治之神鑿山本谷通水而田
畝既藝村里既宅以斯功立此社往古渺茫無載籍
之存未可考之憶夫素蓋尊巡此國使此神平水
土作大禹之業乃有其功乎此地山高谷繞川流縈
紆古木蒼鬱龜山之城峙出其畔誠是靈神之遺蹟

也社邊有一社村諺曰永萬之年有靈現八幡神光之所托也云此社歷世守斯土人無不尊崇之今城主松平氏之家臣屬士村老里民皆奉祠此社蕪蔡薦祭猶勤不怠矣維寬文十年庚戌初冬之日城主之家臣屬士及村老里民各晉議築一小樓於社邊新鑄巨鐘懸之以禱長久之福而便報刻之用請余作之銘余未到其境然畧聞里巷之談且考脫簡之餘因記一二以塞其需耳

銘曰

昔_シ儉_シ造_レ端_ヲ 周官列名_ヲ 洋々_ト 盈耳_ト 琅々_ト 調聲_ヲ
維_レ 鈇_ノ 山_ノ 社_ヲ 功_ノ 高_ノ 業_ノ 精_ニ 治_レ 水_ノ 乎_レ 土_ノ 居_レ 民_ノ 易_ノ 耕_ヲ
嗚呼大哉 為_レ 獲_レ 德_ノ 明_ニ 神_ノ 威_ノ 赫_々 光_ノ 照_レ 八_ノ 紘_ヲ

峰_ノ 巖_ノ 四_ノ 秀_ニ 樹_ノ 古_ノ 泉_ノ 清_ニ 寶_ノ 樓_ノ 于_レ 架_ヲ 以_テ 撞_レ 華_ノ 鯨_ノ
九_ノ 天_ノ 既_レ 々_ニ 萬_ノ 壑_ノ 鏗_々 豐_ノ 嶺_ノ 之_レ 霜_ニ 何_ノ 嗷_レ 自_レ 鳴_ニ
以_テ 表_レ 知_レ 刻_ヲ 繼_レ 晷_ノ 報_レ 更_ヲ 不_レ 違_レ 其_ノ 時_ヲ 神_ノ 德_ノ 影_ノ 響_ヲ
瑞_ノ 氣_ノ 是_レ 呈_ス 以_テ 祀_レ 以_テ 禱_ヲ 世_々 繁_レ 榮_ニ

寬文十年辛亥冬十月中濟

竹洞野節序并銘

西社別當天岡山而隆寺大智院

天台沙門法印圓實

町惣代年寄 吉岡義信

深海正次

杉原家夫

治工 我孫子政次

杉原家ハ杉原七郎左衛門伯耆守家利ヲ祖トス家利

母 殿 志

ハ豊臣秀吉ノ母仲女名ナカハノ姪夫ニテ尾張國清洲ノ町ニテ北ノヤクヲ商ヘリ此ノ子孫丹波ニ來リ龜山ノ事ニ與カリ功勞少カテ延寶中ノ人中項名ヲ守親ト改ム夫田山中ニ鐘鑄芝ノ名ヲ存ス此ノ人ノ遺迹ナリ鐘銘申列記ノ杉原家夫ハ其ノ時ノ名ト云フ後文鐘銘參看ノ下

鉾山神社式内

明智ノ乱ニ祭壇荒廢シ祭式行ハレズ社地ガ狐兔ノ栖所トナレルト三十餘年慶長ノ末ニ岡部長盛再興シ寛永中菅沼定芳祭田ヲ給シ承應初年松平忠晴石鳥居ヲ建テタリ

大己貴淳水大浪ヲ見テ民害ヲ除カントテ切ヲ始メ

水脈地勢ニ縁リ流ニ順ヒ之ヲ決メ其ノ巡行ニ際シ神迹ノ留マル所ハ即明神嶽ナリ後人其ノ神徳ヲ崇メ鉾ヲ以テ神主トナシ毎年十一月三日庭燎ヲ設ケ禰宜天狗ノ面ヲ被リ薪ヲ荷ヒ神徳ヲ稱賛シタリ大己貴ノ水ヲ疏スニ當リテ浮田ノ神ハ鉾ヲ主リ村山ノ神ハ蕘ヲ主リ之ヲ助ク浮田神大山咋村山神大山祇大蛇アリテ人ヲ吞ム出雲ノ神ハ神ヲ率ヒ黒栢嶽ニ至リ之ヲ斬ル流血浪ヲ遣フルヲ以テ山ヲ鑿リ水ヲ通シ國土成ル山本谷ノ浮田峽コレナリ
承應元年千原村ノ山ヨリ石ヲ採リ鳥居ヲ造リ奉納ノ下アリ其ノ文ト銘ニ曰ハク

丹州路采田郡矢田大明神者往昔靈廟也舉國
崇信之先是所建之華表日往月來柱根摧朽矣
再建以石而作久遠之什蓋此廟猶在忠晴食邑
也幸望四海泰平安民和樂銘曰

采田郡 歙山祠 辰敬禮 致祭儀

明最大 照無期 儼廟貌 存舊基

神樹蔭 長松枝 衆民樂 百福來

華表柱 白石奇 仁壽城 億萬期

承應元年十二月吉辰

丹波龜山城主 從五位下松平氏任賀守忠晴

祭禮古式 九月二十五日 二輦殿前二向一置

神官幣帛ヲ奉ス 祝辭ヲ讀ム 鳳輦ヲ出カス

蕩暮行在所ニ鎮座ス 奏樂ス 湯祭ス 俳優ス

晦日 動坐北幸スルノ式始マル 鼓ヲ擊テ衆ヲ

警ム 天狗ノ面 神馬 矛 弓 劔 白幣祠官

持之 左右供奉 八幡神輿 隨行ニ列 巫覡

社僧 長槍 郷長

以上

引山七個擔山四個船鉾一個アリ 城内ヨリ出役

アリ神輿昇ニ條目ヲ讀ミ聞カセテ後ニ式ヲ始ム

行列ガ城ノ大手門ヨリ入ルヤ城主ノ邸前ニ列ナ

ル 城主ハ玄關前ニ鋪キタル薦ノ上ニ坐シ禮鉾

ス 神輿ハ門臺ニ置ク城主禮ヲ終リ輿ニ入レバ

女輩出テ来リ更ル鉾禮ス而シテ神列次第

ニ城ヲ出ヅ 山鉾ハ城門ニ容ラズ門前ニテ其ノ
 屋根ヲ取外シ門ニ入りテ又覆フ出ヅル時又同シ
 此ノ間ニ時間ヲ消過スル多キ故其最終ハ夜ニ入
 ルヲ往々アリキ
 維新後ノ祭式 十月廿五日 山鉾 同同同 隨
 意行動

先拂 サ、ラ竹持二人 傘鉾 上下着用ノ人々 鉾鉾 同上
 弓 同同 同上 幣 同上 熾 同上 賽銭箱 同上
 鉾鉾 幣 鉾箱 鉾山神々輿 上下着用ノ人
 町旗 同同同 上下着用ノ人 獅子頭
 神官 騎馬 鉾鉾 山鉾 神像 鉾ヲ荷フ同
 以上 矢田御官御修復ノ儀ノ由リ

天保ノ頃トカヤ此ノ御宮強風暴雨ノ為ニ大破スレ
 ド誰一人省ミル者モ無ク氏子等ニ語りテモ慮スル
 者無シ年柄ノ宜シカラザルニモ由ルベケレド餘リ
 ノ事トテ社僧寛純ハ悲嘆ニ堪エズ左ノ如キ一詠ヲ
 所民夫レ々々へ配布シケレバ其ノ意ニ感動セラレ
 御修復工事成エス

矢田御官御修復ノ由事久しく成リ兼めれば
 寛純

桃ミシテ栗も三とセテ柿八とセ
 ありこやしろハいつつかならん

當番所ノ下 所々交替シテ隔年ニ祭事ヲ管掌スル
 ヲ古例トス 當日五斗計リノ剛飯ヲ焚キ五種ノ煮

町志

染ヲ添へ出役ノ人々ニ飲食セシム役人勤ムスレバ酒
ノ小言ヤ煮染ノ不味ヲ言フ升ハ別ニ得タク思フ所
アリテノ事ナレバ當番町ヨリ役人ニ贈物ミテ小言
ノ豫防策ヲ施ス是レモ亦年中行事ノ一ニ居ル維新
後ハ藩役人ノ出張無キモノカテ全町舉リテ此ノ厄
遁レテ祝セリ

天田領主領地ヲ賣ル

天田或ハ八田トモ書ケリ往昔龜山一帶ヲ華族花山
音讀ス家ノ領スル所トス該家ハ公卿ノ中ニ於テ清
華^{音讀}音讀ニ讀ハト稱スル貴族ニテ其ノ尊キト攝家ニ
亞ギ大臣ニモ成リ得ルノ資格アリ然ルニ天正元龜
前後京都ノ破滅ハ應仁ニ匹スベキ程ニテ公卿ノ衰

弊其ノ極ニ達シ往々其ノ采地ヲ公賣シ以テ衣食ニ
資セリ公領ノ公賣ス可ラサルハ法ノ定ムル所ナル
モ朝憲ノ弛廢遂ニ此ニ至レルモノニシテ時政モ亦
如何トモ為レ得ズナリ又織田右府ニ至リ之レヲ償
還スルノ道ヲ啓キ僅ニ貴族ノ面目ヲ維持セシノク
ルガ茲ニ華山家ガ其ノ厄ヲ免レ得ズ其ノ領地ヲ沽
却スルノ哀レサハ左ノ書函ニ於テ見ルベシ流石ニ
自分ノ名モ出シ兼テ臣家ノ名ヲ以テ之レヲ為セリ
亦慙々可キ哉

賣券

丹波國桑田郡八田庄領家本所之事

右八田庄ハ御當家代々相傳御知行繪旨并院宣明

鏡之仍而

御曩祖護法院内大臣殿御道蹄月浦御建立之御隱
居御領之雖然護法院應仁亂後退轉之間如元被召
還本家知行無相違とのに然而

公儀御入儀御出仕有之候間直錢拾貫文永代渡邊
六郎ニ所被賣渡實心也給旨并院宣等の院殿御判
等封裏被副之萬一御子孫由緒證殆有之違亂之族
有之者任其法可有御成敗者也仍而永代賣券之狀
如件

永正三年丙寅六月廿日

民部大輔敦直 判

渡邊六郎殿

文中ニ言フ所ノ公儀御入儀トハ室町將軍家ニ嘉儀
又ハ喪儀ナドアリシヲ云フ公儀又ハ公儀トハ將軍
家ヲ云フ一例ノ通リナリ民部大輔タル朝官ニシテ
清華家ノ臣下タルハ疑フ可キニ似タレトモ并ハ諸
大夫ト稱シ五位ノ大夫タルモノヲ朝廷ヨリ大臣家
へ裨官トシテ貸シ與ヘタル所ニラ維新明治初年マ
デ慣用セラレタリ大臣ノ函簿ニ檢非違使ヲ加列セ
シタルト同式ナリ
貞永式目第四十八條ニ曰ハク相傳ハ私領ハ一個人
ノ私領トシテ賣買ヲ許可シ恩地私地ハ之レヲ禁ス
官共ニ同況タリシニヤ其ノ文ニ曰ハク
一賣買所領之事

右ハ相傳之私領を以て要用之時沽却セーむハ
常法ナリ而して或ハ勲功ニ務リ或ハ勤勞ニ
御恩ヲ預ケ別ケたるヲ輩恣ニ賣買セーむるヲ條
所行ニ旨其科なきニ非ず自今以後造テ停止セ
うと云ふ事トシ又刑符ヲ背テ沽却セーむるもの
ハ賣人ト云ヒ買人ト云ヒ共ニ罪科ヲ處セうと云
右渡邊六郎ハ九州ノ大名ニシテ當地ニ緣故アルヲ
以テ來往シタル者ナリ六郎ヲ以テ數世ノ通り名ト
ス六郎賴方アリ六郎成一アリ美作守成一アリテ混
淆ス篠村字廣田記事ニ讓リ省文ス
應永六年十二月大内義弘足利將軍ニ反シ兵ヲ擧グ

山名氏清ノ子時清満氏等コレニ應ジ藤野源左衛門
高田某ト共ニ兵ヲ八田ニ起コス佐々木ハ原ノ輩コ
レヲ伐ツハ原上野介今川奈古屋川端三郎勝間田遠
江守等満氏ト戦ヒ死ス又富長資長資定ナルモノ満
氏ト戦フ
木曾義仲山門ヨリ五萬人京都ニ入ルヤ十郎行家ハ
數千騎ニテ宇治橋ヲ渡リ京都ニ入ル陸奥新判官ガ
子矢田判官代義清大江ヲ經テ上洛ス
右等ノ文句ニ由リ當時ヲ憶ヘバ判官義清ハ此ノ邊
ヲ領シ華山家ノ領邑トナリ渡邊ノ有ニ歸シクモ
ノ字
篠村五世山本廣田王子馬堀柏原森三宅上田中矢

京都府立総合資料館所蔵

田下天田荒塚洋法寺追分号ノ者協同シテ六郎ヨリ
買取リ右十五個村共有ノ野山トシ人民自由ニ木柴
下草ヲ刈取リタル所々ヲ明治六年協議シテ便宜上
東西ニ分ケ篠山本廣田洋法寺王子馬堀森柏原ノ八
村ヲ東部トシ古世三宅エ中下天田追分荒塚ノ七村
ヲ西部トシ猶又九年七月西部七村七分シテ各自ニ
各々規約ヲ設ケ之レヲ保護スルノ約定ヲ立テ立本
ハ斬伐セズ松茸ヲ入札セシムル等種々後益ヲ図リ
シリ

明治初年幕府ノ秕政ヲ釐革シ百事緒ニ就クヤ河川
浚渫ノ忽諸ニ附スベカラザルヲ以テ太政官ハ範ヲ
阿蘭陀ニ采ラントシ大技師テレケールヲ招聘シテ事

ニ當タラシノ東國北國ヲ檢閲シテ西下シ澱川系ニ
及ビ其ノ源流ニ芥リ當地ニ入り見テ以為ヘテク諸
溪流ノ溜沙ヲ塞止スルヲ急務トシ山間ノ樸樾ヲ斬
伐スルノ不可ヲ説キ禿山ニ樹木ヲ栽培セサル可ヲ
ズトノ説ヲ陳ベ目前ノ小利ニ走リテ今日ノ大害ヲ
招致セリト政府ノ緩慢ト人民ノ無情トヲ嘆慨シテ
府會議員政府當局者町村吏員ノ隨行者ヲ誠勅シタ
リ然リ而シテ山谷ヲ跋步臨見スルニ樵夫ニ逢ヒ其
ノ荷擔スル所ノ生薪柴ニ着目シ以為ヘテク濫伐
亂採シタルモノトシ禿山ヲ指點シテ隨行者ヲ責ム
ルニ恰モ自己所有ノ木材ヲ盜伐シタル者ニ向フテ詰
責スルガ如シ隨行者ヨリ人民ノ無知ナルヲ説ケド

モ徹底セズ悲嘆ニ續クニ罵詈ヲ以テス此ニ於テ強
クテ一農家ヲ借り休憩セシメ急ニ人ヲ奪テ採薪
者ヲ途ニ要シ其未往ヲ止ノ歸途民家ノ戶外ニ積メ
ル薪柴ヲ隠藏スハ掩蔽セシメテ以テ彼ノ矚望ニ觸
レザラシメタリ一同コレガ為ニ冷汗背ニ決ネカリ
シト云フ

威徳院藏林院 真言宗山城三寶院中興西運上人
主神ハ天満宮ニシテ道實公ヲ祀ル名ハ寺ニシテ變
ハ社奇中ノ奇トヤ云ハシ兩部神道ノ當時ニ於ケル
寺院ハ佛像ヲ以テ主體トシ配スルニ神主ヲ以テシ
社祠ナランニハ神主俾從ナルモノヲ此ノ寺ハ異様
ノ方式ヲ示ス世上看ル罕ナルモノ其ノ田緒ニ云フ

菅原道真公ノ左遷ニ遭フヤ山城西岡久世ニ休憩シ
橋上好風光ノ所ニテ携フル所ノ琴ヲ彈ズ邑長ノ其
コレヲ看テ厚遇慰藉ス公深ク其ノ志ニ感シ再期ヲ
約シテ往ク延喜三年四月其ノ園中ニ在リ一老僧
ノ來リ石ニ踞スルヲ見ル僧其ノ年ヲ以テ某ヲ招キ懷
中ヨリ一軸ヲ出ダシ與ヘテ曰ハク之レヲ秘藏セヨト
其其ノ所以ヲ問ハントシ一揖スル間ニ僧見エズ大
ニ訝リ之レヲ展開スレバ前年親睹シタル公ノ彈琴
影像ナリ某大ニ驚キ且大ニ感シ急ニ一小祠ヲ其ノ場ニ
建造シテ之レヲ奉祀シ朝夕ニ禮參ス正慶年中兵燹ヲ
避ケシガ為ニ某ノ末孫來リテ天田山麓ニ假居セリ一
夕天田ノ祠掌別當宣譽靈夢ニ由リテ之レヲ知り其ノ

事由ヲ知り其ガ奉持シ来レル尊影ヲ此所ニ安置セシム公ノ裔孫五條右大辨爲成郷高辻大内記家長郷此ノ神影ヲ拜觀シテ共ニ其ノ祖神ノ真筆ナルトテ證明シテ西郷所判ノ書ヲ下賜セリ寛延年間櫻所天皇ノ皇后モ靈夢ヲ靈驗ノ御感アリ天皇痛ク雷鳴ヲ厭ハセ玉フヲ以テ女官葉崎ノ局ヲシテ御代禱セシメ玉ヒタル後ハ雷震アルモ左マデノ御慥ハナカリシトテ爾後當社ヨリ勅許ニテ除雷符ヲ出グストトハナレリ次ニ示ス所諸天皇諸貴族ノ下賜品ヨリ視ルモ宮中華胄トノ關係淺カラザルヲ知ルベシ中興住僧西運時代ニ城主菅沼左近入天定昭ノ幼時重患ニ罹カリ醫術祈願千萬スルモ才効ヲ奏セバ生命旦夕ニ迫マリタルヤ一日

此ノ社ニ祈テシノ即驗アリ天定芳具ノ神恵ヲ謝セシガ爲ニ所領ノ寄附ヲ爲シ画師ニ命ジ定昭ノ像ヲ筆セシメ之レヲ奉納セリ菅公ノ丹波ニ於ケル關係ハ諸所ニ在リ参考アルベシ
瘡ノ宮 諸瘡病人ニ靈驗イヤチコシトテ土餅ヲ供ヘテ祈願シ平癒スレバ真餅ヲ供シテ謝賽スルノ習慣アリ何日モナガテ神佛ヲ愚弄スルモノ乎境内ニ在リ境内東西十五間南北六十四間除地山林東西二所餘南北同ジ除地各黒印ニ石免除ノ狀アリ
天正十一年十一月丹波中納言秀勝ノ下知狀ニ曰ハク

寺中屋敷之事如前々不可有別條候竹木以下違

亂有間敷候也

十一月吉日

山内次郎兵衛忠頼

判書

大音新助

判書

藏林坊

御同宿中

貴坊寺屋敷竹木伐採又、某以下違亂有間敷候
此旨聖被申付候條若於相違背輩、可為曲事恐
々謹言

天正十八五月日

石田九郎右衛門經慶

判書

山田治兵衛忠頼

判書

八田藏林坊

御同宿中

當寺居屋敷之内竹木果以下等令用捨上者違亂
有間敷候若此旨相背輩、可為曲事候恐々謹言

天正十九年八月朔日 渡邊勘右衛門 判

八田藏林坊

御同宿中

只今八田惣山を林ニ申付候此林山之内其方之
柴山北ハ限小町谷南ハ限林泉菴山々々之候
則其方ハ可相渡候如前々可被致支配者也

慶長十七年壬午正月十五日 龜山

藏林坊

天神社領之事

合前石并山林屋敷

町 史 志

右ハ八田村以領内令寄附事仍狀如件

寛永十八年八月十五日 菅沼定芳印

藏林坊ハ

領主ノ交替代替ハリ又ハ領主改名等アル毎ニ下大所ノ文面同一ニ付干之レヲ畧ス

貴船大明神蹄 後奈良天皇宸筆

天満天自在天神 後陽成天皇宸筆

愛染明王像 安阿彌作

同 作者不明

龍猛菩薩像 作者不明

不勤明王像 運慶作

弘法大師像 文覺上人作

如意輪觀音像 聖徳大師御作

辨財天皇像 運慶作

管丞相寫經

弘法大師寫經

中將姫寫經

明恵上人書

慈鎮和尚書

金吾中納言書

同下知狀數通

櫻町天皇御末廣

以上 今ヤ散亡殆ンド盡ク

町 史 志

翠岩山陽雲院 禪宗京都妙心寺末本尊華師如來
曹溪山林泉寺 禪宗京都大德寺末開山匡峯和尚
本尊千手觀音長八寸春日作

德川初代東照權現二代台德院三代大猷院ノ位牌ヲ
安置ス開基ハ岡部長盛ニシテ中興檀越ハ松平忠晴
忠晴ノ謚號曹溪寺殿前伊州松譽良光忠山大居士此
ノ號ヲ取り山號トセリ慶長十七年壬子ニ此ノ寺建
ツ碑石下リ其ノ背面ニ元ノ文ヲ刻ス

夫丹陽桑田郡龜山當城主長盛公者駿河岡部氏苗裔
世々為武門棟梁威名外光者也此故今被擇郡守以鎮
護國家依而累九層於其上安十屋於其下實是金城湯
池耳加旃造營壘山神廟以令祈主民之所願呂常祭先
祖之幽性誠現花云來菓云枝々葉々不知幾許春者乎一
日為人為境命匠者立碑文曰

吓這郡主 仁義迫身 又其稱意 野人懷惠
諸處安全 洛陽境近 花咲鳥啼 愛宕峰高
松老鶴叫 青山滿目 吟興有餘 遠公廬嶽
呂望渭濱 脩竹當門 藤蔓庵岸 澗木秋深
溪橋月涼 地興步々 遊勝箇々 至忘利路
坐絕名埃 天下佳景 古又于今 誰論之乎

元和二龍集丙辰十一月中旬日

前正法鐵山叟宗鈍暮齒八十五漫誌焉
松雲菴洋土宗當所古世稱名寺末開山創草詳テラス

京都府立総合資料館所蔵

中興飛悟和尚 本尊阿彌陀如來

一ノ堰 此ノ流域ハ杉生川寒谷川ガ合流シテ矢田川ト為ルヲ以テ急湍ノ勢アリ其ノ弊害ノ下流諸田ニ及ブ故此處ニ大木巨石ヲ投ジテ數丈ノ堰埭ヲ築キ暴瀧トシテ落下セシメ其ノ溜水ハ天田祠前ノ御手洗水トシ其ノ下流ハ天田古世荒塚ノ養田水ト為リ當町火災龜田町消防用ト為ルモノトス
社記ニ曰ハク元錄三年庚午八月十四日南山大雨一堰潰決矣松平將監築之到今既及七十年矣天田野田水竭龜山城井水洞大守命有司鑿岩掘溝而以引水人二壹萬餘夫每天賜賃米二升此鑿岩度間溝凡上下左右四尺許而長四五間也

天字橋 矢田二十景ノ一ナルト前文ニ出グセリ是レハ矢田川ニ架シタル橋ニテ左右丈餘ノ岩壁ヨリ成ル此ノ無柱橋梁ハ工學未開ノ時世ニ設計セラレタルモノトシテ當時ノ奇觀タリシナリ之レニ由リテ四軒屋ナル部落ノ往復ヲ便ニシ又山行ヲ便ニセリ

矢田溪橋之銘

龜山保正杉原市郎右衛門尉守親建之

丹川龜山之城南里餘有矢田村隔川有子村乃樵父入山之路也溪流數里千峰競秀萬壑爭流夏潦大漲數為漂溺之患冬寒最返常有徒涉之苦天正之間或人作獨木橋為洪水被墜之虞長之間大守岡部氏建林泉菴々下渡徒杠今又朽斷爾來本莊子村之民患無乘輿者尚

猪坂

矣我常欲架橋未成而止矣今茲寬文辛亥大守松平氏
改造城西之輿梁僕等賜其舊材君子之貺不宜驚肆古
橋之材不須作屋欲博散大守之澤以濟村民之憂天開
道路建橋梁者守工者之務非我分內之憂知僭罰之罪
無所逃之又予毀譽不可免也遂設匠氏之奇巧促樵牧
之筋力短梁高架柱根斜施以免大水之漂蕩也兩岸植
木一方墾田為備後世之廢朽矣七月十七日資始同月
晦日以成所謂夏潦之險寒淫之苦却得閨堂之安維時
本莊子村之民載欣々々因記之將貽來者其詞曰
谷口吐虹 維橋維水 我去人來 斷也成矣

大字猪坂 小字猪坂三宅

文化年間高百四十七石二斗三升改百五十七石八
斗八合 文久百六十一石五升七合

人戸百有餘士族ヲ除クハ平民戸七十二軒農家商
家相雜ハル

稻荷神社 式内 古稱叢稻荷俗稱三宅稻荷 古時豎
四町横町除地ナリレト云フ且ナル哉今以テ稻荷
堀内ト呼ブ地ノ頗ル廣キヲ 寬文中ノ火災ニテ
徵スベキ書類無シ此ノ祭神ハ朝廷ヨリ建テラレ
タル祀倉ヲ守ル所ノ神靈ナリ

主神 倉稻魂命 稻産靈神 豊保食命 未社
神明神社 月讀尊ヲ祭ル祀倉即今ノ三宅ト呼ブ

町 職 志

モノハ米廩ニシテ垂仁天皇御宇大和國纏向ノ都
ニ置カレ推古天皇御宇十五年之ヲ諸國ニ置カル
此所ハ孝德天皇御宇一百八十二ノ化倉ヲ天下ニ
置カレタルノ一トカヤ天正ノ兵火ハ此ノ社ヲ燒
キ此ノ倉ヲ焚キ荒廢ニ歸セシメ祠官モナク管理
人モナク地域ハ狹メラレ見ル影モ無カリシヲ德
川氏初政古迹保存ノ趣旨ヲ以テ古城一町四方ヲ
社地トシテ之ヲ犯スヲ禁ビタリ元祿元年領主久
世大和守上屋ヲ作り本社ヲ蓋ハレノ掃除人ヲ置
ク等保護ノ方ヲ加ヘタリ 叢神社ト呼ブ所以ハ
荒廢ノ極ニ雜草繁茂ノ中ニ在ル松樹一株ヲ神木
トシテ崇メタル故ニテ村名ヲサヘニ宅草村ト呼

ベリレトナシ
白狐ノ話題 本社ノ主任者金益利恭ハ篤實ナル
性モテ管絃ヲモ弄ベリ年老イタレバ社務ヲ讓リ
テ山城ノ塚原ニ假寓レニ株ノ松ヲ植エテニ松堂
ト稱シ堂内ニ老ノ身ヲ養ヒ居タリ一日一雙ノ白
狐松下ニ在リ之ニ食ヲ與ヘナドシテ親シニ弄ブ
本辻ニ住セル山伏泉藏院ノ妻ニ憑リテ白狐云フ
早ク丹波ニ歸レト寛政十年其ノ勸告ニ應シ三宅
ノ舊宅ニ歸住ス社頭ニテ奏樂スルヤ白狐ノ感聽
スルヲ看テ其ノ算策ヲ白狐丸ト名ヅケヌ 社記
ノ存スルモノ無ク祭式ノ徴スベキモノ無キヲ以
テ祭日ヲ定メ難ク如何ニセバヤト考慮スル折柄

寛政元年庵
ヲ改メ院トス

浪華ノ一神官ニ遇ニ其ノ意見ヲ求メタルニ老嫗
來リテ神託ヲ傳フ曰ハク四月十四五日トセヨト
之ニ前ノ白狐ノ丁ヲ尋ネタルニ老嫗曰ハク一ヲ
稻本大明神ト云ヒ一ヲ稻村大明神ト云フ孰レモ
御眷族ノ隨一ニテ一千年以上ノ老齡ナリト告ケ
タリ

天龍山昌壽院 禪宗 中村厚元寺末開山大嶺義

鑑和尚

地藏堂アリ 鎮守社ニハ白山大權現 妙義明神

稲荷大明神ヲ合祀ス

楠ノ墓 此ノ寺ノ林中ニ在リ小堂ノ扉上ニ菊水

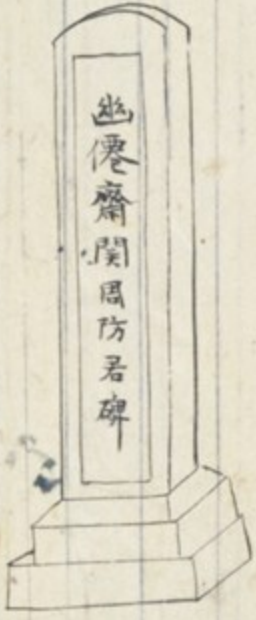
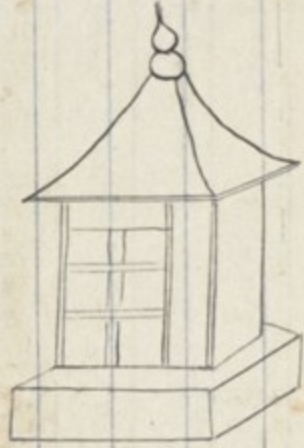
ヲ彫ル石塔高サ三尺餘其ノ中ニ在リ堂廣袤四尺

四方 或ル説ニ楠正成公ノ孫ニ関小次郎正世ア

リ世ヲ憚リ母姓ヲ冒セルナリト又曰ハク其ノ系

類ノ住所ナルヲ以テ楠屋敷ト呼ベルナリ

堂



背向ノ文 正成子正時妻者関政賢女也 正時戦死

叫 岐 志

後古郷來則龜山三宅 村而生男子名正世孫

謚不白院禪峰心雪大居士慶長九年甲辰四月十一

日 猪坂清水一名赤井ノ水ハ龜岡ヨリ篠村ハ向フ橋

畔ニ在リテ名所トモ云フ前年幕府巡見使ハ見使

以船井郡園部ノ部ノ來レル時コノ水アリヤト尋ネ

ラレタリト云フ

寺川 矢田村ヨリノ一流コノ地ニテ寺川ト呼ブ

神水ヲ寺水トスルハ異例ナリトテ之ヲ調バタル

人ニ聞ケバ御手洗川ナルヲ略シテ手洗ト云ヒ轉

ビテ寺トナリタルナリトカヤ

千本松一名野橋立 寺川ノ西側ヒニ聯ノ長松林

アリ天橋立ト見做シテ何人カバ緯^{アケ}緯^ナセシモノ以

來一箇ノ小名所トハナレリ

大字 古世村 高四百五十九石九斗三升五合改

四百七十六石二斗一升四合 文久ニ至リ増シテ

五百二十七石二升一合トナル 現今ノ東堅町横

町吳服町突抜町西堅町京町旅籠町コレナリ

形原神社 横町ニアリ 龜山侯ノ祖先ヲ祭神ト

ス松平子爵ノ東京移住トナルヤ舊臣舊民協議縣

金ニテ創建祭祀セル神社ナリ三河國寶飯郡形原

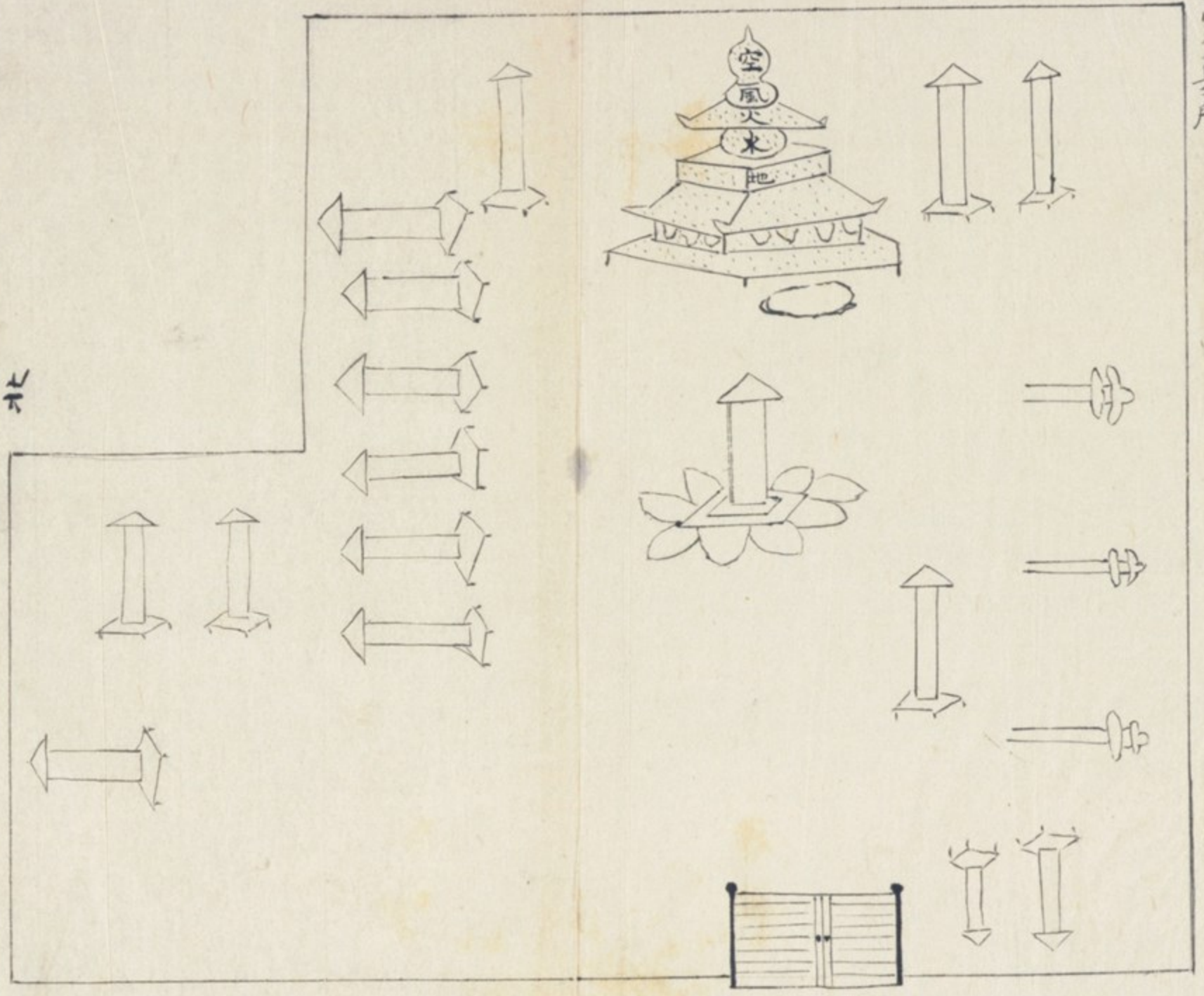
ヨリ來リタルナリ

古世

松平家墓所

東

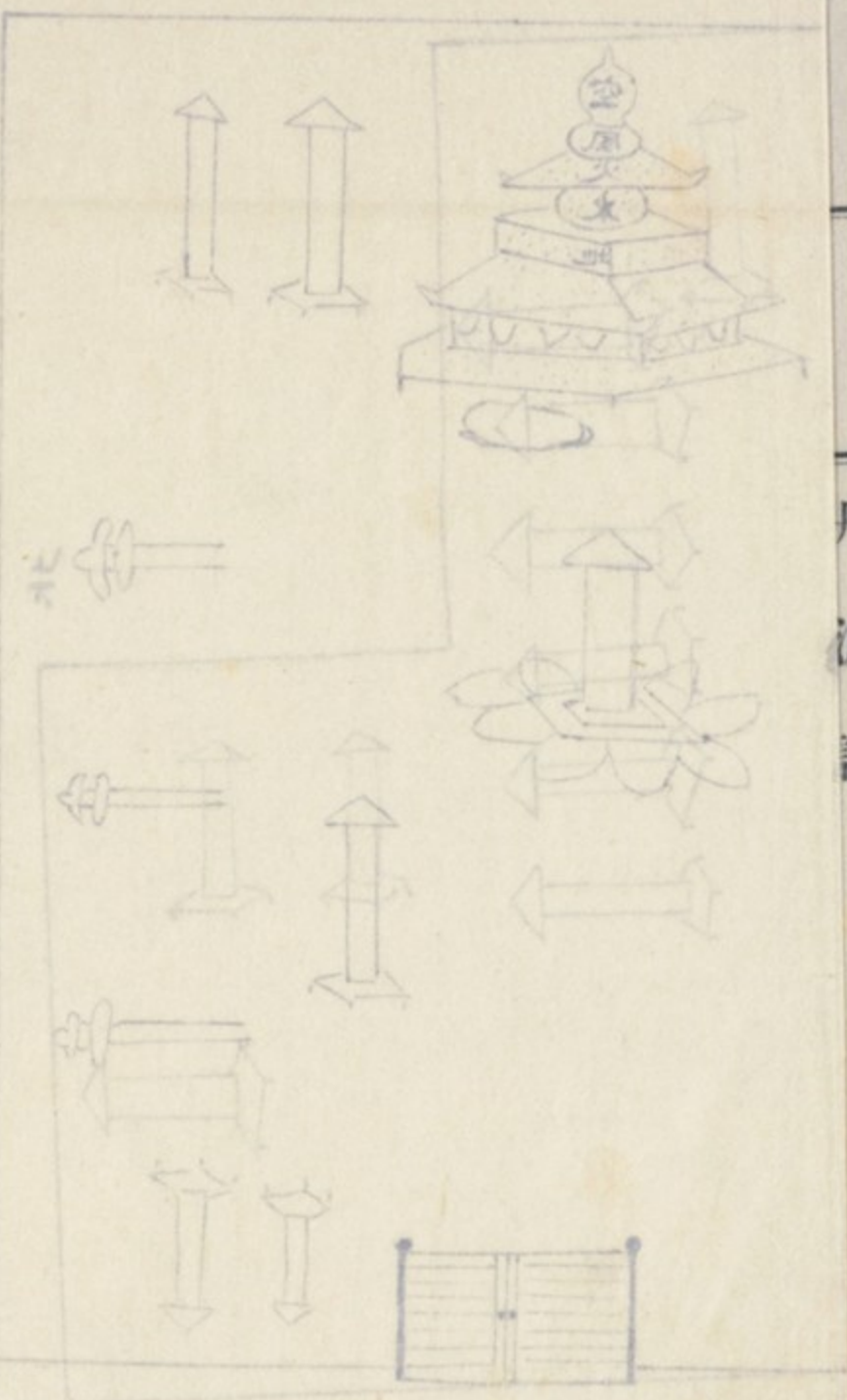
北



陳
上

京都府立総合資料館所蔵

松平家墓所



松平家ノ曩祖親氏其ノ祖先新田義貞ノ遺志ヲ繼
 ギ成サントテ歿ヲ散ジ士ヲ集ム是ニ由リ松平村
 ノ近傍往々之ニ屬シ有志ノ年少村邑ヲ取リ之ヲ
 獻テ親氏新附ノ士民ヲ撫綏ス故ヲ以テ形原以下
 八邑ヲ得タリ子孫親嗣ギ子孫和泉守信光ニ及ブ信
 光男女四十餘人子孫繁衍ス第四男興嗣形原ニ任
 シ形原松平ト呼ブ興嗣佐渡守從五位ノ叙任アリ
 之ヲ當藩主ノ始祖トシテ齋キ祀レルナリ
 寶林山光忠寺 淨土宗 京都知恩院末寺 元ハ
 三河國大樹寺末
 本尊阿彌陀如來 開山秀譽上人 塔頭紫雲山一
 行院 既ニ亡ブ久シ

町岐誌

寺祿百石徳川將軍歴代ノ位牌松平家歴代ノ位牌
金飾珊々トシテ三葵紋章七個ツ、ヲ添飾ス何者
ゾ之ヲ剥キ去ツテ其ノ數大ニ減ズ 參河ノ形原
ニモ同名ノ寺アリ初代興嗣ノ諡號光忠ヨリ米リ
寺号トセシガ形原ノ寺ハ松平氏ノ紋章利ノ字ヲ
采リ利生院光忠寺トス 境内累世ノ墓ハ篠山ヨ
リ移セルモノ在リ大名ハ移封ノ事アルニ由リ葬
ルニ銅棺ヲ用ヒ發掘運搬ニ便ス此ノ墓亦然リ壙
ニ墓ノミナラズ寺亦從テ移轉スルナリ寺墓ハ
雷門前ニ在リ

幸雲山宗堅寺 禪宗參河國新庄幸雲山宗堅寺末
本山 末寺稱號ヲ同一ニスルハ珍ラシ

本尊觀世音菩薩 開山吉山玄賀和尚 寺祿高三
石ヲ領主松平氏ヨリ給與セリ鎮守白山權現社ア
リ
藥師堂 本尊坐像山城國山科ノ日野藥師ハ有名
ナル古佛ナルガ此ノ本尊ハソレト同作ナリト云
フ 乳汁關之ノ婦人が立願シテ利益ヲ享クルヲ
日野藥師ニ同ジトラ古時賽者多カリキ山號額ハ
書家月舟ノ書 寺號額ハ文六寺凸岩ノ書藥師
ノ額亦同ジ
菅沼織部正定房ノ五輪塔高一丈骨塔高六尺五輪

大虚院殿前染織正無參園徹大居士

定房ハ寛永十一年當城主トナリ同二十年正月十
七日卒ス前文龜山城主記事ニ出ガス
菅沼左近將監忠昭ノ墓塔高六尺

淨寂院殿傑叢全英大居士

忠昭ハ定房ノ嗣子ナリ父ニ續キ當城主ト為リ寛
永二十年ヨリ正保四年ニ至リ同年九月廿一日卒
ス龜山城主記事ニ出ガス

殉死者ノ墓門光常劔俗名萩野宇右衛門利光ニ
十歳正保四年亥九月二十一日主君ト同時ニ自及
ス西向左六尺塔

良翁善張俗名青山勝次郎二十七歳同年同月同日

自又

節山一忠二十一歳同前

乳母尋椿妙貞大姉 五尺ノ塔アリ是亦殉死ヨリ

石井兵助ノ墓 ト云フモノ也ノ如シ

表面 ③ 大仙院明道智白居士

側面 本國藝州廣鳴

生國攝州大坂 不孝子石井源太建之

同 享保六亥丑稔 俗名石井熊之丞友將

聖七月二十五日 行年五十八歳卒

石井宇右衛門子三之丞半藏源藏ノ事石井兵右衛

門子兵助ノ事錯綜紛紜ニテ事情正確ナラス何處

郡上林村記事中ニ出タス參看スヘシ

與平與三左衛門ノ墓

表面

節道府君之墓

裏面ノ文

府君姓源諱廣知字與三左衛門號南宇龜山家老也其先出深溝松平氏至曾祖高嶽君改為與平氏其子義所君娶關口氏女生六子長某次曰廣種繼家無子府君者第六子也因為之嗣廣種而上其履歷行實衆所咸識今不具載府君為人恭敬直良攻武嗜文不侈第宅不淫聲色飲食器物唯任其者而晏如也而如其檢脩則戰兢自慎死而後已凡其在職四十一年終始如一天明 甲辰夏罹疾致仕迨疾病錄其生平所服瘠克訓語數十言以顧命焉同年十一月二十九日卒

予家享年六十五浮屠謚曰廓性院義山節道葬城南
宗堅寺配松平格房女生廣問知禮廣問繼為執政知
禮則出而仕

存古府君之墓 存子 與平廣問謹建

淳古府君之墓 好古府君之墓アリ

家老ヲ大夫ト云ニ府君ト云フハ皆漢學崇拜ノ餘
弊ニシテ本邦ノ制度ニアラズ

枕山先生之墓 翁山埋骨冢アリ 遜齋墓ト

アルハ異平小太郎ノ墓アリ 小太郎ノ事ハ前文ニ

出ダセリ

鳳洲先生之墓トアルハ 松崎氏ノ墓ニテ世々ノ儒

家ナリ 松崎觀瀾藤谷ノ一前ニ出ダセリ

護國山聖隣菴 禪宗京都嵯峨天龍寺末本尊華嚴

釋迦坐像開山春嶺和尚一書ニ至圓周悟トアリ 細

川政有ノニ千ト云フ明應二年地藏辻ニ小菴ヲ結

ビテ住居シテ五世ヲ經拙堂和尚ノ時金吾中納言

ヨリ境地寺祿ノ寄附アリテ今ノ所ニ移ス文祿四

年秀以ヨリノ下附狀アリ 聖ノ字ヲ栖ニ作レリ

古書中尤ノニ通テ寫ス 下文廟祐一存ノ為ニ地子ヲ免陰シテ
ルモノ一存ノ墓下文ニ出ダス

所中寺菴地子書立

一 洋土宗專念寺 一 洋土宗大圓寺

一 洋土宗壽仙菴 一 禪宗栖隣菴

一 禪宗長德寺

以上五ヶ寺

丹波志

於丹波尾山古世町

一 武石寺令寄道

又經四月八日

秀以華押

栖隣菴

改 大徳寺後ニ宗堅寺

改

山口玄蕃頭宗長
 金山玄蕃頭宗長
 後軍中納言秀秋
 平後見入丸下領主
 華部三出カス
 徳川初代將軍の家来
 有家来大村某
 通由寺領先規
 之通由被下殿領出
 之通由以テ豊臣氏
 通由降地スル代
 官ヲ以テ達セラレ
 タリ

右寺菴ハ來秋ノ米貳石ツ、毎年マ下行今日
 廓祐一存ためニ

天正廿年七月廿七日

玄蕃頭

碓石衛門反

五ヶ寺寄進米之事

- 一貳石ハ大園寺 一貳石ハ專念寺
- 一貳石ハ栖隣菴 一貳石ハ壽仙菴
- 一貳石ハ長徳寺

合拾石

石勤行并修理寺無懈怠ト云々勤者也

天正廿年七月廿七日

渡邊碓石衛門尉

總見院殿一品泰巖大居士

是レハ織田信長ノ墓ニテ臺石ノ下ニモ總見院殿

ノ四字臘氣ニ見エ五輪塔高サ三尺餘ニシテ最上

ノ一石ヲ失フ丹波少將ノ建設スル所少將名ハ秀

勝信長ノ子ニシテ豊臣秀吉ノ養子ト為レルモノ

實父供養ノ為ニ建テタル所トス此ノ人が龜山城

主トリシテ前ニ出ダセリ

瑞雲院殿黄門秀巖日詮大居士 慶長七壬寅十月

十日ト刻セルモノハ金吾中納言秀秋ノ墓ナリ

聖諦院殿廓祐一存大居士 天正十九年卯七月廿

七日ト刻セルモノハ秀秋ノ子ヲ葬リタルモノ

秀秋ハ筑前名嶋ノ城主木下肥後守家定ノ五男ニ

シテ小早川隆景ノ養子トナリニ十一歳ニテ卒ス
一時當城主タル縁故ニ由リ墓ヲ作りタルモノト
云フ
口碑ニ言フ信長ノ弑殺アルマ光秀其ノ首ヲ索ム
レドモ獲ズ齋藤利三本能寺ノ焼迹ヲ探リ求ノ白
綾ノ片袖ヲ得ラ之レテ光秀ニ示ス光秀視テ差安
シズ升ハ明智光俊ガ利三ト謀リ其ノ首ヲ匿シ一
僧ヲシテ竊ニ齋シテ此ノ寺ニ埋メシメタルモノ
若シモ其ノ首ガ光秀ノ前ニ於テ實檢セラレタレ
ニハ如何ナル罵詈褻語ノ恥辱ヲ蒙リタルヤ知ル
可ラバトテ兩人ノ所為ヲ譽ムル者アリト云フ總
論光秀記事末文參看アル可シ

毘沙門堂 本尊丈四尺傳ニ云フ運慶ノ作ニテ明智
光秀ガ尊崇シテ龜山城天守閣第二層ニ安置シタ
ルモノヲ改築ノ際ニ金吾中納言秀秋ガ此ノ寺ニ
保管セシメタルナリト此ノ外ニ歳徳神隨神隨鬼
等ノ像アリ雕刻頗巧緻ナリ
最勝山稱名寺 淨土宗京都知恩寺末本尊阿彌陀
如來 慈眼堂藥師如來地藏菩薩ヲ安置ス 神明
社庚申堂アリ末寺堅田ニアリ心行寺ト稱ス天明
三年ノ大火ニ燒亡ス
和泉式部ノ卯塔ハ東別院村ノ小泉清泉ヨリ移シ
タルモノト云フ式部ノ事ハ小泉ノ部ニ出ダス參
看スヘシ

兩角王溪ノ墓アリ王溪ノ一再出ス

靈龜山善久寺天台宗本尊阿彌陀如來一尺五寸傳ニ
云フ聖德太子ノ作ト開山淨真法師俗名稻垣太郎兵
衛尉入道淨真二尺八寸銘吉次ノ太刀ハ入道所用ノモ
ノ運如上人筆六字名號同像画アリ本堂寺號ノ額
ハ寶鏡寺某宮ノ御書 鎮守種池稻荷社アリ古時
小池アリテ農人カ耕種ヲ漬シタル所 寺今無シ
南養院 天台宗修驗派京都六角住心院末本尊
祇園牛頭天王 末社二宮大明神金毘羅大權現祠
竹林山法圓寺 真宗東派本尊阿彌陀如來開山慶
念和尚藏幅ニ聖德太子七高僧親鸞教如兩上人ノ画
像アリタリ同上

護念山善性寺 淨土宗當所專念寺末本尊阿彌陀
如來 同上

願王山阿彌陀寺淨土宗當所宗福寺末本尊阿彌陀
如來 同上

大龜山嶺樹院 禪宗曹洞派南無郡本梅村若森普

濟寺末本尊勢至觀音菩薩開山普濟二世滿菴元大

和尚画藏^像轉磨半身ノ圖傳ニ云フ顏輝ノ筆ト

地藏堂 聖所横町ノ角ニ在リ本尊ハ立像長二尺餘

長ト三尺ノ錫杖ハ源三位賴政ノ用ヒタル矢ノ根ヲ

籠ノ入レテ造レル故ニ矢根地藏ノ名アリ雲慶ノ

作ト云フ傳アル所ニ由レバ三位ノ愛臣猶早太カ

主君追福ノ為ニ旗ト矢トヲ併體ニ副ヘテ堂中

類

法然上人書

源三位	守本尊	賴政
-----	-----	----

源三位賴政之旗也高若櫻書之 治承四年五月十五日源空 ふうれいのかのみくくとふふ	南無阿彌陀佛 利叙則是彌陀佛 一聲稱念罪皆除
---	------------------------------

ニ納ノタルモノト云ノ軍旗ハ三位ガ毎戰使用シテ
ルモノニテ地ハ白絹ニ右ニ示ス所ノ文字アリ堅
三尺五寸幅七寸
縁起ニ曰ハク人皇七十六代ノ帝近衛ノ御宇主上毎
夜御惱アリ不思議ナリカナ都東三條ノ森ノ方ヨリ
黒雲一村立来リ御殿ノ上ヲ覆ヒシカバ主上甚懼レ

ナセ給ヒケレバ諸寺社ニ於テ御祈アリト雖御惱
ナシテ御平癒マシマサズ其ノ時公卿御詮議アリ定
ノテ變化ノモノナルベレ音唐ニテ金鳥ヲ射落セシ
儀モアリ武士ニ仰セテ射落サスベシトテ源平藤橘
ノ北面持名ノヲ詮議セラレ中ニモ兵庫頭賴政ハ文武ニ
道ノ達人ナリトテ賴政ヲ撰ミ出ガサレタリ變化退治ノ
教ヲ蒙リテ天ノ面目家ノ譽レ誠ニ難有ハ存セシカドモ
心易カラズ如何セント心ヲ勞マスト雖寔ニ勅諭辭シ難
ク御受申レ此ノ地藏尊ニ宿願ヲ籠メ假令如何ナル魁
魁鬼神タリトモ弓術ヲ以テ退散セシノ給ヘ別シテハ
八幡宮地藏尊ニ祈願シ御殿ノ大床ニ伺候シテ時刻ヲ相
待チ弓術ヲ行ハレケレバ忽化生ハ度ヲ失ヒ落命セシ

弓術行ハレケレバ忽化生ハ度ヲ失ヒ落命セシ

トナリ速ニ王上御安體ナラシノ玉ヲ御劔并ニ丹波
ノ國ニ領地ヲ賜ハルル仍テ弓矢ノ莊ト此所ヲ稱ス
庄ノ一賴政此ノ地藏尊ヲ深ク信仰アリ偏ニ地藏尊
ノ御加護ト思召スニ付キ御手ノ棒杖ヲ山鳥ノ羽ニテ
別キタル天ニ引替ヘテ御執物ト成シ玉ヲ夫ヨリ今
ニ至ルマデ此ノ地藏尊ハ天ヲ持ケ玉ヲ謂ハレナリ
シガ其ノ天今ハ無シ治承四年伊井阜太當所ニ此ノ
尊像并ニ御旗ヲ送り奉リ賴政ノ御菩提ヲ營マシテ
領所ノユエニ旁以テ當地ノ何某一字ヲ建立シ今ニ
安置セシトカヤ依テ世人此ノ像ヲ鶴地藏トモ稱
シ天代ノ地藏トモ稱シ奉ル云々此ノ天ノ一ハ稱
田野村鹿谷獨鉦掘山千手寺ノ部ヲ參看セヨ又當

藏尊ノ義ハ靈驗アラタニシテ感德ヲ得ルモノ國中
ニ其ノ數アゲテ數ハ難シ仍テ之レヲ畧ス勿論菩薩
ノ御事ハ一ハ女人ノ恭産ニハ身根不具三八衆病悉
除ノ御誓ノミナラズ或ハ火神水神金神ノ諸ニ現シ
テ二世ノ諸願ヲ聞キタマヒ未來ニハ六道能化ノ尊
師ニシテ救苦ノ慈悲ヲ施シ玉ハ男女童形ニ至ル
マデ此ノ尊ヲ貴ニ因縁ヲ結バズニハアルベカラ
ルナリ穴廢

于時寶永六己丑正月廿四日

丹川桑田郡天代莊古世村地藏住持

西放敬白

遊行上人が賴政ノ文字ヲ詠ミ込ミタル歌トテ此ノ

一ノ史志

寺ニアリタリト云フモノハ

六つ乃輪乃音す杖をなうす

まきよ字世乃福ふりきめん

古世所地内ニシテ隣村篠村字洋法寺小丘ノ上ニ在
ル頼政塚ノ由緒ハ左ノ如シ曰ハク源三位ノ治承役
ニ敗ル、ヤ其ノ臣隸コレヲ悵ニ三位ニ因縁アル安
穩ノ所ヲ相シ其ノ屍ヲ興シ竊ニ此ノ地ニ秘葬ス夫
代ヨリ此所ニ至ルノ地ハ其ノ領邑タルヲ以テナリ
宗廟寺前ニ出ノ僧雷峰ナルモノ其ノ所轄ナルヲ以
テ信偽ヲ決センガ為ニ之レヲ掘リ檢ベタルニ石棺
出ツ此ニ於テ多年ノ疑議ハ消散セリ丘上丘側小松
叢生シ上邊開豁風流軍帥ノ葬地佳所ヲ得タリ

心姓願詳頼政其夫
去任朝武冠之服
事不被撤覆作
仁平風射狀
大諱仲正者
欲原有勳王
止侵調馬
野瓜日

加三源



頼政塚ノ由緒ハ左ノ如シ曰ハク源三位ノ治承役
 ニ敗ル、ヤ其ノ臣隸コレヲ悵ミ三位ニ因縁アル安
 穩ノ所ヲ相シ其ノ屍ヲ興シ竊ニ此ノ地ニ秘葬ス夫
 代ヨリ此所ニ至ル、地ハ其ノ領邑タルヲ以テナリ
 宗廟寺前ニ出ノ僧雷峰ナルモ、其ノ所轄ナルヲ以
 テ信偽ヲ決センガ為ニ之レヲ掘リ檢ベタルニ石棺
 出ツ此ニ於テ多年ノ疑議ハ消散セリ丘上丘側ハ松
 叢生シ上邊開豁風流軍帥ノ葬地佳所ヲ得タリ



京都府立総合資料館所蔵

台姓源諱賴致其先出楸園至六傳至台父諱仲正者
 在任朝共遠之服台性英毅善射又工倭歌屢有勤王
 事不被擢擢作倭歌曰嘆其不遇帝見而憫之優調焉
 仁乎間射妖禁內乃有榮賜既示乎氏跋扈朝野仄目
 台繼史高倉王謀擊諸乎謀泄乃牽至東去乎知盛帥
 師泣之于莢道王師敗績台死也實沼角四年又月廿
 三日七年七十五丹州矢伐者台也采地也民傷其暴
 露收葬骸於此云釋雷岑嘗疑其妄而發之得石槨於
 是知其不誣懼^雷瘞之然復^宅此顯然自矣兵茲歲安
 永已交夏六月樹石邑民山梨和貴董其事銘曰
 惟是源台也墓骨朽名存千載安固

龜山司城

裕手敏撰并書

丹波志



原文ヲ楷書シ訓點スレバ左ノ如シ

公、姓源諱賴政、其先出桃園王六傳至公、父諱仲正者、世仕朝共武之服、公性英毅善射、又工和歌、屢有勤王事、不被擢、作和歌以嘆其不遇、帝見而憫之、優調焉、行平間射、妖禁内、乃有榮賜、既而平氏跋扈朝野、公從史高倉宮謀擊諸平、謀泄、乃奉王東奔、平知盛帥師、從之、于菟道王師敗績、公死之、實治承四年五月廿三日也、年七十五、丹州天代者、公之采地也、民傷其暴露、收葬骸於此、云釋雷峯嘗疑其妄、而發之中、得石、擲於是、知其不誣、懼而復瘞之、然後公之宅兆顯然自完矣、茲歲安永己亥夏六月、樹石邑民山梨和貴董其事、銘曰

惟是源公之墓、骨朽名存、千載安固

龜山司城松平敏撰并書

平家物語ニ賴政ハ雨中ノ鶴ヲ射テ後ニ伊豆ノ國ヲ賜ハリタルガ子息仲綱ヲ受領ニ為シ自分ハ三位トナリ丹波五箇若狹ノ東宮川ヲ知行シタリト云ヘリ五箇莊ハ船井郡ニマリ今ハ五箇庄村ト云フ右ノ碑文ハ龜山藩主ノ支族ナル松平新祐敏房ノ撰スル所ソノ號ヲ東溪トス城代家老ニシテ藩主不在ノ時ハ代ハリテ一城統帥ノ任ニ當タル故ニ司城トハ書ケルナリ

詩

中嶋漁

藩國大夫松子求立碑探得古墳丘可憐埋木英雄恨

不朽花芳春又秋

歌

荒川燾

あやめ子引ろつらむー古を苦り下す々思ひこえ
すれ

小字寒谷ハ穴太ヨリ善峯へノ順禮街道ナルヲ以テ
光忠寺ヨリ接待所ヲ建テ旅客行人ノ休憩所ト為シ
人民家屋モ明治初年マテハ四五戸残留シタルカ大
正年間ニハ共ニ無クナレリ

矢田町 古稱中矢田村 高百六十八石四斗一升

五合 改百七十五石六斗二升 百七十八石六斗

三合 文久年度 吳服町 京町

京町即今日町 此地ハ從前中矢田ノ在家ナリ

シヲ城下ノ町ト改メラレタル時村人一同喜ビ勇

ミテ曰ハク此ノ村モ今日ヨリ町トナレリト此ノ

言ノ訛リ傳ヘテ京町トナレルトカヤ

平等山正誓寺 一向宗 東本願寺末 本尊阿彌

陀如來 開山教善法師

寶物 蓮如上人筆

保科寺定祐作ノ庭園アリ數十ノ石モテ作り爲セ
リ縁櫻アリテ有名ナリシガ今ヤ亡シ何人カノ狂

丹波志

歌アリ曰ハク

ホ乃古の奇妙を量乃以てささる

南無阿彌陀佛乃誦くじひきづ

遊行上人逗留アリタル時住持ノ僧ガ上人ノ旅館
へ一枝切りテ贈リタルニ上人ノ謝セラレタル歌
アリ

より信をぬ縁を結ぶ縁松ふ之る心乃をふるくして

洗心山宗福寺 浄土宗京都智恩院末本尊阿彌陀
佛 開山然譽存部上人第五世住職江島和尚ノ尊
宗ニシ地藏堂本尊ニ尺六寸ノ靈佛行基ノ作ト傳
フルモノハ山城ノ西嵯峨ヨリ迎へタルモノト云
フ靈夢ノ話アレドモ略ス 鎮守八幡社箱荷社ア

リ此ノ箱荷様ハ東京傳通院ノ白藏主ニシテ僧衣
ノ白狐ソノ手ニ寶珠ヲ握ルモノ

寶樂寺山ハ古寺ノ迹

城山由緒不詳

城迹田中ノ丸山ハ長澤因幡守ノ居所トカヤ

威徳山寶藏寺 禪宗篠山暗龍庵末本尊釋迦牟尼

佛座像八寸開山祥山和尚 正觀音長三尺 天滿

宮社内ニアリ

天満宮威徳天神一尺三寸ノ像道真自作ト云フ相半
 ノ松寛政ニ戌年ニ枯ッ道真ト縁故アリタルモノト
 テ土人深ク之レヲ惜ノリ
 當寺ノ縁起ニ云フ菅公左遷ノ前ニ家臣春彦一日公
 ノ所在ヲ伺フニ夜ニ入り獨坐シテ祈願シ玉フ而シ
 テ又衆人ニ向テ談話セラル、様ナルモ公ノ前ニハ
 人影無シ又公ノ出デラレタルヲ見テ歸ラル、ノ姿
 ヲ見ズ其ノ他不思議ノトトモ多カリケレバ是レ只
 事ナラズト深ク感ズル所アリテ急ニ思ヒ立テ尊像
 ヲ彫刻セント香木ヲ四方ニ搜索シ之レヲ獲テ公ニ
 呈ジ其ノ意ヲ述ブ公深ク其ノ忠志ヲ好ミシ之レヲ
 手ニシ机上ノ小刀ヲ操リテ之レニ加フルヤ忽然ト

丹波國志

シテ衣冠束帯ノ狀ヲ顯ハス春彦且怕レ且欣ビ辞シ
返リ庭内ニ假堂ヲ造リテ安置奉仕セシヲ後年覺音
寺ニ移シ又更ニ此處ニ移セルナリ本郡稗田野村杵
花部落大内及ビ櫻天神ノ部等ヲ参考セヨ

報時鐘 警告鐘 吳服町ニ釣鐘アリ一晝夜ニ十二

度コレヲ打ツ當時ハ晝六時夜六時ナレバナリ城内

ニ大鼓櫓アリテ是亦十二時ヲ報ズルガ是レハ士卒

ノ登退ニ用ユルモノナレバ町人用トシテ吳服町ニ

設ケタルモノトス日ノ長短ニ関セズ曉天ヲ以テ明

六トシ次ヲ五ツ時トシ次ヲ四ツ時トシテ之レニテ

朝ヲ終リトシ正午ヲ以テ九ツ時トシ次ヲ八ツ次ヲ

七ツ次ヲ暮六トシ此ノ時ヨリ夜ノ分トス次ヲ五ツ

次ヲ四ツ次キ夜半即チ九ツトシ更ニ又八ツセツトシ

明六ツトシテ其ノ數ヲ撞ク故ニ最少ハ四ツニシテ

最多ハ九ツナリ前文領事沿革ノ部ニ出カセルガ如

ク寛永年間ニ創立シ寶曆年間ニ改鑄シタルナリ此レ

ヨリ此ノ鐘ハ警告用トナリ報時用ニハ櫓鼓ヲ以テ

スルトトナレリ初ノハ緩打シ漸次ニ急打シ終ニ又

緩打明了ニ數ヲ打ツト前示ノ如クス之レニ由リテ

城下近村共ニ時ヲ知ルナリ當時々計ノ在ル所ハ君

主ノ居間ト時計ノ間ト大鼓櫓ト一ニ家老ノ家ニア

ルノミニシテ今日ノ如ク家毎ニ之レヲ具ヘガリシ

ナリ西洋新時計ヲ用升家毎ニ之レヲ懸クルハ明治

十四五年以來ナリ

京都府立総合資料館所蔵

警察署ニ警鐘掛ケテヨリ石ノ鐘モ不用トナリ
 第一小学校庭ニ移サレタリ吳服所ニ在リタル時ニ
 鐘番人同撞役米ニ石ヲ毎年給與シタルガ次第ニ
 増シ年額五石ヲ給與シタルモ之ヲ罷メ失火ノ際
 第一番ニ懸ケ付ケ打鐘シタル者ニハ鳥目錢名一貫
 文九十六箇ヲ合ハセテ一貫文トス緋ハ製ナリヲ
 賞與シ第二番ニ來ルモノニハ三百文ヲ賞與シ
 タリ從前ノ番人ニ比スレバ非常ヲ知ルコト甚速ニ
 シテ人々コレヲ便トセリ之ヲ支配スルハ町役人
 ナリ
 町會所 吳服所ニ在リ八疊敷ト四疊敷トノ二間
 町年寄ヨリ町方惣名主ヘ申シ渡シアリ時 同心小

此ノ鳥居ノ石村郡
 西ノ諸山ヨリ採リ車
 載シテ并河村ニ及ブ
 人夫疲レテ車動カズ
 忠晴コレヲ聞ケマ
 馬ニ鞭チ馳セシム
 之ヲ聞キ士民ニホ
 走セ至リ開テ作リカ
 辨テ之ヲ引キ

頭立會ニ町年寄町人等ヘ申渡アル時 町人ヲ呼出シ
 吟味又ハ申渡アル時 町年寄ヨリ名主ヘ相談アル
 時 等ニ使用スル所トス
 今ヤ町村部落等到處ニ會所アルモ往時ハ之レア
 少シ其ノ政ハ民事寡少ニシテ議スベキ事稀少
 ナレバナリ此ノ會所トテモ一年中僅々戸ヲ開ク時
 アリシノミ
 大田ノ鳥居ハ松平伊賀守忠晴ノ建設ニ係カル
 丹州路桑田郡大田大明神者往昔靈廟也舉國崇
 信之先是所立之華表日往月來柱根摧朽矣再建
 以石而為久遠之計蓋此廟仍在 忠晴食邑也幸望
 四海太平又安民和樂銘曰 丹州大田大明神

時ヲ移スル所ニ着
録
三ノ陸ノ書
三ノ

桑田郡

欽山祠

展歌禮

致祭儀

不明最大

照無秋

儼廟貌

存舊基

神樹蔭

長松枝

衆民樂

百福來

華表柱

白石奇

仁壽域

億萬期

承應元年十二月吉辰

丹波龜山城主從五位下松平伊賀守忠晴

下矢田村 新町旅籠町柳町魚屋所塩屋所

元高四百七十七石八斗九升一合改四百四十石二

斗二升四合文久改五百七十五石三斗九升四合

旅籠町ニハ本陣脇本陣等ノ公設旅館アリ人馬

繼立所トテ運送公設車馬供給所アリ宿驛アリ

歸命山專念寺 洋工宗 京都東山黒谷光明寺末

本尊阿彌陀佛 開山源運社法山上人

徳川二代將軍台徳院三代大猷院四代嚴有院ノ位

牌ヲ安置ス領主松平伊賀守ガ祭祀ヲ委託シタル

ニ由ル高二十石ノ寄附狀アリ爾来代々ノ領主モ

之レニ準據シテ施捨シタリ金吾中納言ノ寄附狀

アリ前示 聖隣菴ノ條下ニ出タス

鑄錢ノ地藏尊像長八寸弘法大師ノ作ト云フ金昆

羅ヲモ祭ル

松平新祐ノ墓アリ新祐ノ丁前文参照ノ丁

東谿府君之墓

清教孺人之墓

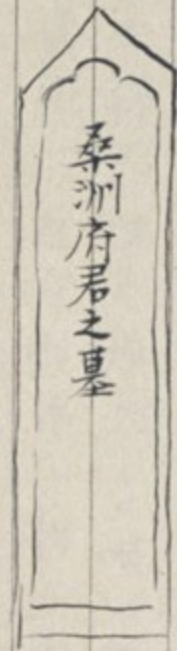
丹波志

君諱敏字子求稱新祐號東谿龜山公族大夫也本長
澤惟正次子年八歲會松平格房卒有女無男公命
令君為之嗣以與其季女配及年十七始任國政爾來
三十年綜當機務切肅頗多寬政二年庚戌歿國用告
乏公在江戶召君謀之君議革政制後績可徵乃受
歸藩施行之中途感疫歸家半月而卒實十月廿一日
也年四十七若為人俊雅好學不倦尤長吟咏有集行
于世生男壽字萬年承重葬之于藩城西專念寺先塋
之側愿為其姻私為之作銘曰 能文能武譽望夙儔
通道達政才實又優天假不拜那哲噫休名存不朽可
傳綿悠形魄既歛永安斯丘

平安 皆川愿撰并書

孝子 壽謹建

清教孺人ハ東谿ノ妻ナリ碑文ハ中嶋漁ノ手ニ成
ル漁ハ小傳アリ看ヨ
齊藤竹處ノ墓アリ藩士ニシテ畫ヲ能クス



桑洲府君之墓

碑陰ノ文

府君諱熙房字隆卿號桑洲吾龜山公族大夫也天保
九年戊戌閏四月三日病卒年五十四歿之五日葬于
城下專念寺先塋之側府君博涉該通有方略為士大
夫所稱重寬政以來國用或不足雖時行良法置之猶
至文政之始府君與大府用事爾後數年富足如初以

叫 坡 志

丙申之饑歲猶且周贍無遺焉文化中建國學唯有一
堂府君又議作二舍三門一庫增廣堂制其言曰為政
無放不如己矣及卒朝野皆哭曰慈父逝矣予其如何
其得人心如斯也府君先考及後嗣夫人氏及秩祿并
既具于誌不復贅焉將立碑也參政關君命融銘以揭
之詞曰

何其便々 乃五經笥 崇斯頌宮 豐大儲積
岷之蚩々 不樵不悴 赴々武夫 知仁與義
銘以表墓 古之遺愛

天保九年戊戌夏六月

龜山 兩角融謹撰
孝子 松平徽房建

正法山誓顯寺 粟願寺末

本尊阿彌陀如來

寺域高一石一斗除地 開山慶岸法師 顯如上人
ノ画像アリ親鸞上人ノ筆六字名跡アリ連如上人
ノ筆蹟アリ 中嶋漁ノ墓アリ碑陰ノ左ノ如也
先生姓中嶋名漁稱僊大夫雪樓其所居之跡世藩儒
學先生歷事五君每以侍讀出入風議爵至中大夫其
幼也嘗遊河內受學於那波魯堂比及中身別有所見
析衷諸註家多所著論其見可知矣平素講說盡力於
訓導性嗜酒好律醉則吟哦發憶有雪樓集若干傳于
家然著述非其好曰天下好書不少矣又刺以此覆醬
之具晚年罹脚疾曰四人假合非醫萬所治弃而不屑
今茲文政八乙酉歲春三月疾病曰歲在龍蛇固可嗟
矣八日書偈忽然而逝年八十一葬城下誓顯寺以偈

代銘 講學得壽 八十一年 適歸何者 非聖則賢

輕森野場ノ墓 辞世ノ

釋 圓壽

句ヲ刻ス曰ハク眼を返

て居ルハ三十ノ月夜ノ申

寶録山西願寺 淨土宗當所專念寺末 本尊準泥

觀音長三尺餘 左持國天右毘沙門天 各三尺餘

除地高三斗八升外二十三間八間ノ除地アリ中興

頓譽栖林和尚 鎮守社稻荷明神

本尊由緒 一條天皇ノ皇后上東門院ノ女房和泉

式部ハ併工定朝法橋ニ彫刻セシメタル三目八臂

ノ立像ナリ南栗田郡東別院村清天正年間攝津高

槻城主高山左近ノ領地トナリタル神原ハ領主カ

邪教ニ歸依シテ佛教ヲ迫害スルモノカラ此ノ名

アル佛像モ壞滅セテレンハ必定ナリ之レヲ秘ノ

置カバ後日又ト世ニ出タマフモヤ有ラントテ

大ナル壺ニ納レ之レヲ土中ニ埋ノタリ一年惡疫

流行シ死亡スルモノ頻々タルニ際シ所ノ一人夢

ノ苦ゲニ逢フ曰ハク我久シクエ中ニ在リ惡病ノ

流行ハ我ヲ忘レソルノ咎ナリ我ヲ掘リ出シテ苦

患ヲ免レヨ此所ハ善地ニアテズ北方矢田ノ里コ

ソ善地ナレ急ギ其ノ所ニ移セカシトノ佛勅ニ驚

キシニ天田ノ里人ニモ此ノ同ジキ夢ヲ見テ小泉

ノ人ニ語リシカバ双方ノ里人舉リテ供養シ參ラ

ントテ嚴ナル法施ヲ為セリ程經テ龜岡築城ノ際

京都府立総合資料館所蔵

大田ノ人々住居ヲ移轉スル折柄此ノ尊像ヲモ他
轉セントスル内一夕尊像ノ白豪光北方ヲ指シ照
ラセルニ由リ其ノ光尖ノ止マレ所ヲ檢スルニ許
多ノ柳樹アリ楊柳ハ觀世音ニ由縁ノアル木ナレ
バトテ揚柳觀音ノ其所ニ一字ヲ創造シテ之レヲ
奉安ス即チ柳町ナリ然ルニ慶長年間隣火延キテ此
ノ一字ニ及ブ火勢急迫シテ里人此ノ尊像ヲ省ミ
ルノ隙無シ必定灰燼タラント思ヒ外尊像ハ煙
燄中ニ凝立ス災後コレヲ視ルニ些ノ損傷無シ此
ニ於テ信仰者愈増シ又一宇ヲ燒殘ノ地ニ建テ、
奉安セリ慶安年中栖林沙門前示更ニ資材資金ヲ
募集シテ再建セリ

醫王谷 當時康賴ヲ呼ブニ醫王ヲ以テス人民渴
仰ノ情想ヲマシ此ノ谷ニ丹波氏ノ邸宅アリタリ
ト云フ

醫王溪畔舊蹊斜到處耕樵ニ兩家識當栽藥地如
今唯採效冬花 津甲南畝

醫王之谷碧山阿溪水風香藥州借問何人嘗住此日

東扁鵲姓丹波 中嶋 漁

こ乃谷ありあまこ乃人のいづくにたり

むろしとくまきとけくいままか 荒川 燾

醫王康賴ハ傳 附重雅忠秋雅忠忠康雅康實康。

○○○ 經康

支那ノ昔ニ後漢ノ天子靈帝ト云フガアル其ノ子

一〇〇〇

二正王石秋カアル其ノ子ニ阿智王ガアル其ノ時
ハ大亂ニテ天子サヘ危難ヲ免レザルヲ以テ阿智
王ハ安地ヲ覓メ海東日本ノ人々ラント欲シ臣民
七人ヲ隨ヘテ來朝セリ之ヲ本朝十六世ノ天皇應
仁帝ノ御宇トス天皇之ヲ愍ミ玉ヒ大和國檜隈野
ニ置キ封ジラ使臣トシ其ノ子都賀ニ姓ヲ直ト賜
フ其ノニ子山本志努ニハ坂上姓ヲ賜ニ丹波ニ置
カシメラル都賀ハ高貴王ト呼ハレ丹波ノ阿多倍
ニ居リ志努ト共ニ朝廷ニ事ヲ志努ノ子駒子駒子
ノ子弓束々々ノ子首名々々ノ子孝子々々ノ子大
國々々ノ子ヲ康賴トス
康賴矢田莊ニ居リ矢田宿禰ト稱ス丹波姓コ、ニ

起コル康賴ノ醫術ニ於ケルヤ天性ノ如ク精通セ
ザル無ク鍼術モ亦其ノ極致ニ達シ醫博士兼針博
士トナリ從五位下左衛門督ニ補セラレ永觀二年
醫心法三十卷ヲ上リ墮唐諸家ノ病原論主治法等
ヲ詳論シ藥性孔穴養生食餌ノ細目ヲ具註シ本邦
書ノ府庫ト稱セラレ子重雅清雅アリ孰レモ典藥
頭針博士丹波守トナリ侍醫ニ任ゼラル忠明ニ
至リ朝臣ノ姓ヲ賜ヒ雅忠亦博士侍醫丹波介典藥
頭ニ任セラレ又丹波守ニ昇ル承曆中高麗妃病ア
リ厚弊重辭以テ雅忠ノ來治ヲ朝ニ請フ朝廷惜ミ
テ許サズ雙鯉難逢鳳池水扁鵲豈入雞林雲ノ答詞
アリテ人口ニ膾炙シタルモ此ノ時此ノ人ノ下ニ

丹波志

社是レヨリ日本扁鵲ノ名朝野ニ遍カリシ子孫朝
臣トナリ公卿トナル尺牘ニ章和歌ニ首ヲ記ス

石决明麻子散

右其方如何可注給也藥驗不疑可試長生久視之
術也須用扁鵲之方持松子之齡也言上如件

月日

駿河權頭

典藥頭殿

西方可注進也但伊家之君以長生久視之方為秘
藏之術有年來之芳恩適仰何可在疎畧哉早以後
日可注進言上之狀如件

即日

典藥頭丹波

荷前使

丹波守宗信法眼

かこいなるさ記のまことおいとて年とらなうたつうつひま

上野駒引

同人

くもつげやせしむを記るぬらうけぬ月乃末のうらひき

人參ノ事ニ付

寶曆十三年六月本草專門家田村玄雄ハ朝鮮人參
栽培ニ堪能ナリトテ幕府ノ命ニヨリ徳川家ノ藥
園ニ之ヲ作ル丁ヲ始メタリ 是レヨリ先キ龜山
藩ハ従前ノ疲弊ヲ償ハント種々ノ計畫ヲ為シ領
地ノ産物獎勵ニ着手シタトモ大利無キヲ以テ
新ニ此ノ人參栽培ヲ始メ出雲國大原郷ニ木村太
郎左衛門アリテ此ノ事ニ精通シ大利ヲ擧ゲテ出
雲藩ヲ疲弊ヨリ救援セリト聞キ出雲侯ニ乞ヒ之

丹波志

之ヲ傳習セリ同時嘉永年間ニ山本七羊アリ亦此
 ノ枝アリ彼是參酌シテ醫王谷ニ作り出カストト
 ナレリ此ノ谷ハ丹波康賴カ藥草ヲ栽培シタル所
 ニテ藥草ノ殘類ナルヲ以テノ故ニ適當ノ地ナリ
 トシ土墻版屋ヲ設ケ之ヲ數區畫トシ土上ニ織沙
 ヲ敷キ細柵ヲ環テセテ小堀大墓ノ害ヲ防キ藩醫
 ヲシテ看督セシメ足輕ヲシテ番衛セシムル等注
 意周到ナリ數年ニシテ効績顯ハレ一本上等ノモ
 ノ金五圓乃至拾兩ニテ京都ニ條ノ藥鋪寺町ヨリ
 數十戶アリニ賣却セラレ丹波人參龜山人參ノ名
 市場醫界ニ噴々タリ然リト雖モ得失相償ハサル

人參ノ圖

花五瓣 淡紅色 白藥アリ

三極五葉
 六極八葉
 七極九葉
 等相雜ル
 極中別ニ一莖ヲ出カレ
 梢上小花ヲ簇生ス
 古无ノ談ニ二尺餘ノモノモ出テタリト



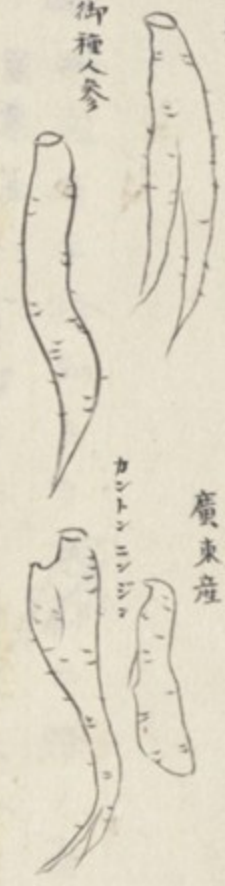
發芽後四年八九月ニ
采リ水ニ洗ヒ鬚ヲ去リ
根ヲ煮テ今ノ五分時間
冷水ニ浸シテ
後ニ乾燥ス



孩兒人參
人形テ

朝鮮モノ

御種人參



廣東産

カントニンジン

ヲ以テ惣ニ又

荒塚村	本所	細屋所	高百五十四石二斗四升
二合	改百四十一石八斗八升六合	文久改百五十九石六斗三合	
秋葉社	元祿十六年青山下野守忠重入部翌十七年秋葉三尺坊ヲ此ノ地ニ勸請ニ更ニ下矢田村ノ小坊主ガ嶽ニ移セリ		
長榮山法華寺	法華宗	京都本國寺末	寛正六丙戌年創立高一石二斗陰地
人	高祖日蓮上人像一尺三寸	身延山日髻上人ノ作	妙見堂
作	本尊長二尺	身延山日堅上人ノ	

丹波志

靈松山壽仙庵 淨土宗 京都御恩院末 本尊阿彌陀如來 除地長二十間幅十四間 高石明智光秀ノ寄附黒印折紙ニ通アリ當時ノ住職春光和尚ガ明智ト親交アリタルニ由ルト云フ 中興春光具ノ人ナリ 天滿宮画像長七寸金吾中納言筆 當寺災火ニ罹カルヲ前後三回毎此ノ画像ハ樹上ニ掛カリテ免レタリトカヤ此ノ寺舊來龜山城本丸ノ地ニアリシヲ文祿年中前田德善院ガ此ノ地ニ移セルナリ 小野木縫殿助重藤後名公知ハ國主波多野ニ屬シ波多野亡後織田氏ノ下ニ歸シ三萬石ニ封セラレ福知山城主トナリ石田三成ニ黨シテ東軍方ノ

細川刑部大輔藤孝ヲ丹後田邊城ニ改ム 天田郡福知山 三成ノ敗報ニ由リ士卒分散ス 細川越中守忠興具ノ父ヲ攻メタルヲ怒リ徳川氏ニ乞ヒ之ヲ攻伐セシメテ乞フ山岡道阿彌ハ公知ノ故人ナリ 其ノ族滅ヲ慙ニ城ニ入りテ公知ニ説キ東軍ニ降ラシム公知城ヲ出グ忠興之ニ代ハル公知龜山ニ來リ東軍ノ先鋒都督井伊兵部大輔直政ニ憑リ助命ヲ乞フ赦サレズ乃洛東淨土寺ニ自害ス時ニ慶長五年十一月十八日ナリ其ノ實龜山ノ壽仙庵ナリ其ノ淨土宗ナルヲ以テ淨土寺トシ遂ニ誤リテ京都ノ淨土寺トシモノ乎北域數十尺内ニ五輪塔ヲ立ツ寺僧北域ノ廣キヲ以テ妨礙トシ其ノ

丹波志

垣ヲ撤去ス享保十四酉年二月十七日其僧火ヲ失
シ一寺燼ニ僧焚死ス其ノ死期ハ翌十八日ニシテ
公知ノ死日ニ同ジ聞者奇異ノ感ニホタル其ノ墓
南向長廿二尺八寸臺二重高二尺其ノ傳記ハ天田
郡福知山所ノ部ニ出ダス參看スベシ

表面ノ文 故縫殿助小野木君墓

裏面ノ文 君諱公知姓小野木氏任縫殿助福
知山城主也其性惆儻而有雄畧慶長五年石田三成
矯勅主命集諸侯于濃州而舉兵君亦受其命攻田邊
城會 天王使來講和以故班師既而又欲赴濃州
爲石田氏聲援軍未發而聞其敗績居數日而山岡道
阿彌來訛君曰三成既亡矣若德川氏其德神武天之

所助蓋往歸降之乎君曰余非欲據孤城以成事時勢
迫于此耳又何爲違天以自暴乎卒然往龜山伏前田
玄以々乞降于

東照公不許而賜之死遂自裁于壽仙庵而卒乃葬焉
寶十一月十八日也越享寶己酉之春菴燬于火現住
僧春顏焚死偶與君卒日同日也先是春顏破毀其墓
因人謂其靈怒而爲之崇今茲明和庚寅之夏圓通十
世獨眼照老和尚慨然於斯乃新修墓制法號曰天真
自性又將建石于墓俾予董其事且銘焉予感老和尚
之慈建枯骨則不得辭因繫以銘々曰

攀雲附風 肇開封疆 出師未已 荐事張皇
運屬攻塹 具身終殃 居徂諸移 宅廢北荒

積怒發火 遺恨飛霜 古墳新治 其謀允臧

英靈有慰 名聲更芳 乃勒堅珉 地久天長

明和七年庚寅夏五月 塩野和貴撰

撰者ハ龜山ノ人ニシテ攝家ニ條氏ノ太夫トナリ

文化四年卒ス

鷲林山本門寺 法華宗上総國鷲巢山鷲山寺末

開山中老日辨上人 本尊釋迦如來 高祖日蓮上

人像長一尺三寸日朗上人ノ作 應仁乱ニ山ノ内

ハ移シ慶長年中本所ハ移ス

鎮守社 鷲大明神長六寸 門前ニアリ

無量山西念寺 淨土宗 專念寺末 本尊阿彌陀

如來 開山然譽湛龍和尚

追分

追分村 高百七十四石七升改二百石六斗六升二
合 文久改二百六十六石七斗三升七合西所北所
ヲ合ム

追分ナル地名ハ國々所々ニ在リ岐路ニシテ諸村
ニ通ル所ナレバ連行ノ牛馬ヲ追ヒ分ケ各自其

ノ村々ハ歸ルノ謂ナリトカヤ宗祇ノ名取抄ニ京
ヨリ五里程西ニ追分トテ宿有リト書ケルハ此ノ

所ニテ驛舎店舗ナドアリタル所ト云フ

鏡智山大圓寺 淨土宗 京都智恩寺末 開山專

譽秀光和尚 本尊阿彌陀如來

藥師堂 本尊坐像 天守臺ノ邊ニ在リタルヲ本

城築作ノ時移動セシモノト云フ

境内廿五間十七間ノ除地ナリキ徳本上人ノ名號
石塔アリ

南無阿彌陀佛

徳本

左面 徳本大和尚埋髮處
右面 千時文化六年歲次己巳春三月大國寺住職得譽誌

碑後面 碑面六字名號名蓮社瑞譽上人稱阿彌陀
佛徳本大和尚之所書也和尚早汲吉水法流而寒暑
單衣常坐不臥斷穀禁塩專修念佛四方欽其徳無不
渴仰者去春留錫當山緇素拜禮日夜不斷貧道亦親
受慈教是以請師之刺髮座之堂前建碑其側以表隨
喜報恩之志永為信入之結因者也

真言修驗宗 大鏡院

當三派三寶院御門至本從

天正十三年中興大泉坊有宋

本尊 不勤明王 役行者庚申等配祀

如意山菩提寺地藏院 本尊伽羅陀山地藏尊 長
三尺左手持ツ所ノ寶珠中ニ字賀神ヲ納ル興放大
師ノ作 弘法大師 辨財天女 稻荷大明神等ア
ノ境内免稅地廿九間ニ十八間 開山圓雅法印
地藏尊像ハ老ノ坂ナリ子安地藏ト同木同作ナリ
トテ産婦ノ信仰アリ追分ニアリタルヲ築城ノ際
コ、ニ移セルモノト云フ左ノ文ヲ見ヨ

地藏院靈像記

龜山地下追分菩提寺地藏靈像相傳中古之時大橋
氏者當秋潦大降偶望見水中有異舟就之而獲靈像
乃瓶字香火馬多靈異云妊婦奉帶禱祈用以護肚極
靡有産難因稱子安地藏嘗寺近市且發火像與人救

京都府立総合資料館所蔵

護其聲琅々聞者如盈耳不亦異哉初不審何人刺平
安造匠一見驚異曰有是哉遍照金剛手澤亡疑矣而
吾未視若此之異也而後人信其靈異有據焉寺故有
地藏記侏離之語不可讀今主僧本明豫松山人來住
持于此也則恐其久異靈亡傳迺語予修其辭予喜其
生平崇奉之勤且耳像異靈則不敢辭此請擇其異著
者而不誣者爲記若此

寛政六年十一月

藩文學 中嶋 漁

安所 舊稱安所村高二百四石六斗六升三合改二
百十六石二斗六升
南ニ安行山アリ其ノ名ハ住人ナル安倍安行ノ名
ヨリ采リ而シテ安所ハ又其ノ一字ヲ取リタル名

稱ナリ此ノ所ニアル寺ノ山殆ク安行ト呼ブモ亦
同ジ通稱西山コレハ龜岡所全體カラ見レバ西ニ
當タルヲ以テ爾呼ベルナリ之ヲ算木山ト云フハ
安倍氏カ古筮用ノ算木ヲ埋メタルニ由ルトカヤ
何故ソレヲ埋メタルカハ詳ナラズ又著山ノ一稱
アリ是レハ安倍氏カ易占ニ用エル筮著ヲ此處ニ
采リタル故トモ云フ是モ算木ニ同ジク埋メタル
カモ計テレズ此處ニ産スル著草ハ今ヤ短クシテ
且曲ガリ易占ニ用エル程ノモノ無シ昔時龜山ノ
名ノ起コリモ安倍氏カ龜トニ用ヒタル大龜ノ甲
ヲ埋ミタルニ因ミタル名トモ云フ安倍氏ノ住ミ
タル項ハ近衛大皇御宇ニテ安倍泰成ト云フ天文

博士アリテ此ノ山ノ西手ニアル星岩セツ岩ナド
七曜星ニ象リ名ヅケタルモノト云ヒ傳フ安行ハ
泰成ノ子ニテ父子ノ郷コヽニ在リタルニヤ雜水
川ノ名モ此ノ郷ヨリ流レ出ル濁水ヨリ起コリタ
リトゾ山下ノ加塚ハ七字ノ題目ヲ彫リタル石塔
建テリ龜山城ノ部ニ出カセル中嶋漁ノ詩ヲモ參
考セヨ昔々古瓦陶片ナド土中ヨリ出デタルガ今
ヤ幾亡シ著者具ノ片瓦ヲ拾ヒ得タルヲ以テ之ヲ
西光寺ニ納メタリ西光寺ハ即安行山ナルヲ以テ
ナリ明治二十五年溝瀆浚深ノ際ニ發見ミタルモ
ノナリ
安町ノ井戸掘 明和四年丁亥五月町内ノ相談始

マル升ハ一町ニ一升ガニ無ク遠ク出デ、川水ヲ
汲マサルヲ得ガルニ由ル是レ迄ハ左程ニモ思ハ
ガリシガ人口ノ増殖ト云ヒ家事ノ多クナルヨリ
之レニ困却スルモノカラ設計スルニ銀ニ三百匁
ヲ要ス當時ノ金ニテハ貳兩ニ當タルヲ以テ一時
ハ躊躇ミタルモ年柄モ善イト云フノデ一相談ア
リテ決シ一町二十戸ニ分擔シ寄附金アリ物品モ
アリテ惣計百八十一匁四分九厘ニテ一戸割九匁
八分ノ出資ニテ成エシ銀札一匁ヲ走田神社ハ願
ホドキノ御神酒料トシテ供ヘタリ其ノ設計書ノ
真書ニ先以テ事冬不成就仕目出度しトアル
ヲ見レバ一個ノ井戸モ神ニ祈ルヤラ一同ノ心配

ヤラ容易ナラザルヲ想像スルニ足ル右ニ付爲取
替證書アリ文意ニ據レバ吉助ナル者カ借地シテ
町内へ又貸シタルカ如シ地主吉助トアリ

一札之事

一此度井屋交私借長屋鋪町中へ永代借可申
事宜否明白也第一末ニ至リても台ツケ交
出入有之共少しも町内へ違乱ヤラ爲、
爲後日井屋交依て申件

明和四年丁亥六月日 地主 吉助

町内中様

一此度井屋交其之、表屋鋪町内へ借交申處実
正也井屋交分町年貢ニ計宛永代お立丁申也

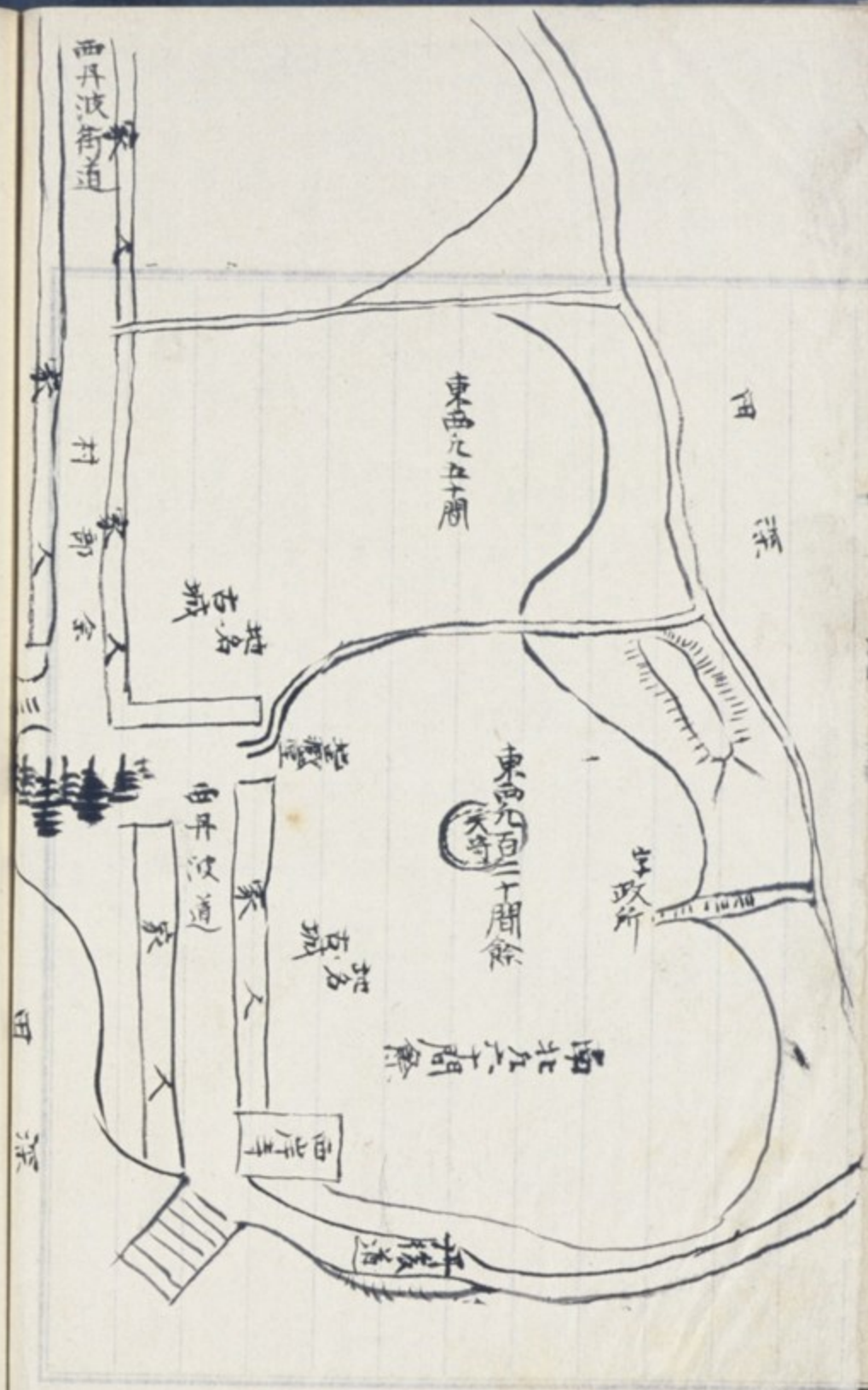
若未末ニ至リ台ツケ出入有之少無町内
少しく構い其之、下届し町年貢分後
日依而一札申件

明和四年丁亥年 町内十四人連名

地主 吉助取

京都府立総合資料館所蔵

余部町舊稱余部村此ノ村落ハ河原所茶屋ノ前町ヲ
 モ含ミ龜井郷天代莊ノ地ナリ高千二百五石四斗
 六升コレヲ古高トシ新高千二百三十六石四斗六
 升七合文久度改高千四百十九石四斗三分
 余部ハ餘部ニテ過部トモ書キ讀ミ方ハ同ジ市町民
 家ノ過餘部分ヲ住マハシメタル所ニシテ丹後ニテ
 ハ餘部ト書キ安藝ニテハ過部ト書キコンバト讀ム
 丸岡城迹 古時此ノ邊ハ松杉生ヒ茂リ深山幽谷ノ
 如クアリシガ天正年間ニハ福井因幡守貞政ノ割據
 スル所ト為リ城塞ヲ構ヘ溝濠ヲ握リ以テ一城郭ヲ
 造リ國司波多野ノ幕下ニ屬シ東軍織田方ノ勸誘ニ
 應ギカリシカバ明智光秀怒リ謂ヘテク龜山城主ヲ



始ノ四王天并河萩野波々伯部久下以下ノ大名小名
 ハ使者ヲ送り山本馬路保津川原尻以下ノ地侍ハ早
 クモ馳セ參ジタルニ福井ノミガ楯付クトハ惡ト所
 業ナリ要害ヲ恃ミ吾ガ方ヲ輕ンズルハ片腹痛シ去
 來ヤ目ニ物見セテ吳レンズルゾト明智左馬助光春
 ヲ大將トシ天正三年七月初ノ二千五百餘騎ヲ以テ
 四面ヨリ取り圍ミ試ニ使者ヲ立テ城中ニ向ハシノ
 事降參ヲ勸告セシム貞政人ヲ以テ返答セシムル様
 ハ身不肖ナリト雖源家ノ嫡流足利尊氏公ノ血統鎌
 倉管領足利左馬頭氏滿四男福井四郎滿貞六代ノ後
 裔ニ當タリ先祖以來ノ武名ヲ汚シタルト無シ何シ
 ゾ明智トカ云フ者ノ如キ名ニ無キ敵ノ言葉ニ從ハ

シヤトテ使者ヲ城外ニ逐フ此ニ於テ光秀ノ四ツ手
 シナヘノ馬印ハ城ニ向テ進ミ安行山ヨリ宇津根
 雜水川ニ至ルマテ東軍ノ殺氣愈立テ三方ヨリジリ
 ハ々々々ト城際ヘ近ツキ一度ニ鯨波ヲ揚ゲテ攻
 メ掛カル城内ヨリ之レニ應ジテ一齊ニ軍聲ヲ揚ゲ
 射出ガス矢打チ出ス丸ハ寄手ヲ惱マスト大甚シク
 攻メアグンデ見エケレバ光秀怒リテ下知スル様カ
 バカリノ小城ニ攻メアグムノアルベキヤ掛カレ
 ヲ々々ト采配打チ振リ々々々々進ミケレバ新附ノ
 案内者タル宇野島石衛門馬前ニ出デ、之レヲ押シ
 止メテ曰ハク我等ハ此ノ城ノ下能ク知り候アゾ大
 石巨多用意シアレバ堀ヲ越エルハ危ク候ノ敵ヲバ

明
 波
 志

オビキ出ダシテ之レヲ伐ツテ互シケレト云ヒ捨テ
木戸際マデ進ミ聲張り揚ゲ呼バ、リ言フ我コソハ
宇野勘右衛門ナルゾ此ノ程天下ニ取沙汰申ス織田
殿ハ東三十三國ヲ切り鎮メテ上京マシタ々更ニ西
國ヲ從ヘタマハシ為ニ明智殿ヲ御名代トシテ今コ
、ハ發向セシノ玉ヲ某ハ其ノ案内者トシテ此所ニ
在リ貴殿トハ竹馬ノ交アルヲ忘レネバ命乞シ参テ
セン猶モ降参ナセズ敵對セラル、ニ於テハ某ガ踏
ニ掛ケテ踏ミ潰サント罵リケレバ城主ノ弟彌次郎
兵倉ヨリ詈リ返レテ曰ハク何ント言フゾ山本ノ宇
野奴カ大江ノ麓ニ居テ山立テ追剥ギナド習ヒツ
テノ名ヲ惜ム武士ノ道ヲ知り辨ヘヌモ理リテリ斯

ク申スハ因幡守ノ弟福井彌次郎成重ナルゾ慾心深
キ野武士共幾千騎アリトモ何程ノ一カ有ラン十方
ハ敵散ラカセテ日向守ガ首ヲ取ラント云フマ、ニ
中堀ハ左衛門木村ハ兵衛星崎刑部左衛門ヲ先トシ
倔強ノ者百五拾人一手トナリ大城戸ヲツト押開キ
左馬助ガ三百餘騎ニテ扣ヘタル所ヘ打テ掛カル雙
方相打テ勝負附カズ諸引ニ引ク所ヘ城兵取ツテ返
シ外ノ敵ニハ目ヲ掛ケズ光秀ノ本陣八百騎ニテ扣
ヘタル所目掛ケテ進マントス東軍ノ諸手コレヲ見
テ四方ヨリ取り捲キ餘サズ打テ取ラント圍ミ攻ム
因幡守城樓ヨリ之レヲ見テ彼レ討タヌナ者共トテ
自分出テ、救ハントス例ニ在リ合フ福井與市政照

同新兵衛以下打ツテ出テ左馬助が陣ヲ貫キ光秀ノ
本陣目蒐ケテ驅ケ往クテ敵ノ脇備横槍ヲ入レ十文
字トナリ双方打チツ打タレツ敵ノ多勢ニカ無ク城
兵退キ城ニ入ラントス付ケ入りセヨヤ者共ト敵將
ノ下知ニ應ジ群リ來ル堀ヨリモ堀ヨリモ門ヨリモ
追ヒ追リテ込ミ入り外丸ハ早危ク皆二ノ丸ハト引
キ揚ゲ強弓ニ名ヲ得タル福井喜之助吉行ハ敵ヲ殺
傷スルト無數ニテ敵モ早朝ヨリノ疲勞ト思ヒレヨ
リモ城兵ノ抵抗強キ為ニ一時攻メアゲンデ見エケ
ル所ニ搦手方ノ東軍明智次右衛門齊藤四藏之助松
田太郎左衛門甚木主計等ノ透間モ無ク打チ掛ケ々
々々々銃砲モテ攻メ入ラントスル折柄大平ノ味方

攻メアグミタリト聞キ関村上廣澤木村等ノ面々驅
ケ付ケ見レバ味方ノ本陣色ノキ立ツテ逆寄セノ為
ニ四五段計リ引キ揚グルノ已ムヲ得ガレ様ニテ味
方ノ軍ニ於テハ彌次郎成重ガ百餘騎ニ打チ成サレ
城ニ入ルベキ機ヲ失ヒ松林ヲハ楯ニ取り一息ツイ
デ扣ヘクルガキツト向フヲ見テ曰ハク今見ル水色
ノ旗ハ近藤藏之丞秀政ハナラズヤ勢ノ程百騎ハカリ
ト賞エタリ去来打チ散ラセト真一文字ニ打チ懸ケ
ル是レ皆新平ノ兵ナレバ無ニ無三ニ切り蒐カレ
秀政ノ一族郎黨死傷二十餘人コ、ヒ松田七郎左衛
門ハ無双ノ大カ者ニテ數度ノ高名アリタルガ此ノ
日ハ黒草絨ノ鎧ニ同ジ毛色ノ冑ヲ戴キ三尺許ノ大

太刀ヲ佩キ粟毛ノ馬ニ跨リ八尺許ノ筋金打チタル
鐵棒ヲ提ゲ後レ馳セニ馳セ来リ多勢ノ内ヘ割ツテ
入り拂ヒ打テニ打ツ程ニ甲ノ鉢ヲ割テレ諸足ヲ拂
ハレ杯シテ成重ガ郎等ヲ打チ惱マサレ四度路ニナ
リテ引ク所ハ秀政百騎許ニテ追ヒ附キ々々々々討
ツ程ニ成重ハ五十騎許ニ打チアサレ最早是レマデ
ソト某ハ腹センゾ汝等暫時防天セヨト命ジ郎等ノ
戰鬪スル間ニ其ノ行ク衛ヲ闇マセリ此ノ間ニ搦手
ノ勢ハ松田明智齊藤ガ采配ノ下ニ門ヲ破リ堀ヲ越
エ我モ々々ト乱レ入ル城主ハ之レヲ見テ今ハ叶ハ
ジ恨ノシキハ國司ノ合カセザルトヨトテ近習ノ士
ニ防箭射サセ己ハ空室ニ入り先其ノ女房ヲ刺シ殺シ

屏風障子ニ火ヲ附ケサセ床几ニ僂リテ割腹シ烟焰
ノ中ニ消エニケル傍ニ侍ル士三十餘人我後レジト
自裁シ相共ニ真黒焦トハナリ了シメ寄手ハ火ノ起
コルヲ看ルヤ込ミ入り々々々々我レ一ニト高名シ
大將ノ見参ニ備ヘ或ハ生捕降参ノ者ヲ古世ノ本陣
ニ引キ持チ行キ殆令一發一度ニ勝鯨波ヲ揚ゲタリ
ケル此ノ戦ハ前晚ヨリ翌四日未刻ニ午後マデ炎天ノ
カ攻トテ人馬共ニ疲レ爰處ノ木蔭彼處ノ岸下ニ太
刀モ打テ棄テ兜モ脱ガ捨テ其ノ鼙聲ノ四方ニ聞コ
エルモノカテ戦後ノ有様見ントテ来リシハ供女子
ノ曰ヘル様哀レ昨日余部ニテ打タレタル人々ノ百
人許モ茲ニ居タラシニハ明智殿ノ此ノ兵共ハ粉ナ

微塵ニスベキモノヲ枕木ニテ云ニ歩ミケレドモ
其ノ耳ニ入ラバエソ前後モ知ラズ眠リケル

余部ノ舊家ニ能勢ト云フガ在ル萱葺ノ門ヲ存ス
且其ノ家ハ亥ノ子ノ萩ノ餅ヲ作ラズ其ノ故ハ落
城ノ日ナレバ祝ハズト歴史ト口碑ノ相違ハ往々
免レガル所ナルハ世上定評アリ福井ノ正系アリ
クルモ明治中ニ亡ブ

園田彦次郎良正ハ盆踊リ見ントテ近村ニ赴キ其ノ
歸途ニ福井土佐上下五六輩大川ヲ渡ルヲ見テ是レ
落人遁ガスマジ打テ取ラント近寄レバ土佐モ心得
タリト渡リ合フ園田ハ名アル強カ者ナレバ土佐ハ
一撃ニ仆ケタリ園田ハ其ノ首ト家来共ノ首トヲ

獲ヘ光秀ノ本陣ニ到リ實檢ニ備フ光秀大ニ感ジ當
坐ノ儀美トシテ太刀一振黄金五枚八木ニ百俵ヲ與
ヘ重ネテ野々口西藏坊村上和泉ヲ以テ呼出クシ一
千石ヲ給シ臣列ニ加ヘタリ

茲ニ物ノ哀レヲ遺セルハ因幡守カニ兒ニゾアル十
一歳ノ福市ト八歳ノ徳光九ハ助太郎藤太郎ノニ士
ニ扶ケラレ軍敗レ城燒カル、時朝隅ノ石垣ヲ跳ビ
下リ小川ノ端ヨリ大川堤ニ出テ逃ケ迷フ夫人小兒
婦女ト共ニ保津ノ方ヘト走り四人ハ保津山ノ大目
離レト云フ崖ヘ登リ城ノ火燭ヲ目下ニ見テ兄ナル
福市ノ云フ様ハ親様違一門ノ人々ハ皆討死自害ナ
ド任給フナラニ羨シクヨ哀レ一ツ烟トナリタラン

ニハ斯カル憂目ハ無キモノヲ惣ニ誘ヒ出ダサレ死
 スニ死ナレヌ苦シカヨト泣キ出ダセシカバ皆諸共
 ニ泣シ伏シタリ二臣ハ夜ノ明クルヲ待ナ里ニ出テ
 食物ノ用意ニ取り掛カリシ其ノ間ニ兄ノ云フ様
 ハ二人ハ如何ニモシテ吾々ヲ取り立テ世ニ在テセ
 ント思フベシ然レドモ今更本意ヲ遂ゲ得ベシトハ
 覺エズ雜人ニ見付ケテ耻ヅカシメラレシヨリハ
 死ヲルコソ善ケレ我ハ斯處ニテ自害スベシ徳光之
 レヲ言ハセモ果テズ言ヒケルハ泣ヲ押シ止メテ然
 テバ二人腹切ラント言フニゾ兄ハ莞爾ト打テ笑ヒ
 能クモ言ヒテ流石ハ父君ノ御胤ナリ去リナガラ
 御身ガ腹切ルト覺束無シ我カ手ニ掛ケテ得サセン

トテ帯ビ居タル小刀ヲ手ニ取り鞘ヲ拂フテ其ノ胸
 元ヲ差シ通シテ殺シケル斯クシテ福市ハ其ノ込
 キ骸ヲ抱キ揚ゲ父君母君一門ノ人々モ定メテ待テ
 玉ヲラシ追ヒ付キ参ラセシ死骸ノ體ヲラク見苦シ
 ケレバ人ノ言ハシモ如何ガナリ取繕ヒテ得サスベ
 シ其ノ後我モト獨リ言スル所ハ二臣ハ少シノ食物
 ヲ持テ返リ此ノ體ヲ見テ茫然タリ福市コレヲ見テ
 我モシ成長ノ身ナリセバ親ノ饑ヲ撃ツベキニ却少
 ニテ思フモ能ハズ今ニモ見顯ハサレナバ打首ニテ
 モセラル可シ其ノ辱カシメ逢ハザル内一時モ早
 ク父君ノ御側へ行カバヤト言フヤ否早足ニテ走り
 行き遙向フノ谷間へ跳ビ下リ小鯨ガ瀧へ真逆様ニ

叫
 駭
 志

身ヲ投ゲ見分ケモ付カヌ淵ノ水屑ト消エ失セリ
二人ハ詮方無ク木ノ葉木ノ枝カキ集ノ徳光九ノ死
骸ヲ焼キ共ニ其ノ迹ヲ追ヒ自殺セントセシガ待テ
シハシ明智ニ一箭ヲ送り責ノテモノ思ヒ出ニセシ
ト伴テテ山ヲ下リ心ヲ協ヘテ敵ヲ覘ヒシカドモ其
ノ隙ナキモノカテ何レヘヤ行キケシ其ノ片便リダ
ニ無カリケル城主ノ墓標ハ何人ニ由リテ建テラレ
シニヤ其ノ命日ナル天正三年二月廿九日鐫リ
依正院殿義元勇亭大居士
ト判シ長興寺ニ其ノ所ヲ遺スハ誰ガ葬リタルモノ
乎或ハ助太郎藤太郎輩ノ為セシ所カ長興寺門前
其ノ標示アリ

承應三年古城ノ天守臺ヲ取壊テ壕淵ヲ平田ニシ元
和七年人家ノ増加スルヲ以テ余部新町トシ更ニ河
原町ト改稱シ昔日ノ郊墟ハ今日ノ街衢トナル
天保初年所ノ醫者若林元齡邸内ニ新井ヲ鑿ツ六間
以下ニ於テ朽木ヲ出グス是レ天正年中城塞ノ遺物
ナルベシトテ保存ス
方向山西岸寺 淨土宗 西町大圓寺末 本尊阿彌
陀如來 藥師堂 藥師觀音同龕西國三十三所ノ二
十七番 開山正譽眼西和尚
聖ガ芝 由緒ニ云フ人皇六十二代村上天皇ノ御宇
ノ時トモ桓武天皇御宇ノ時トモ云フ傳フル悲話ハ
奥州岩城判官將氏護訴ノ為ニ筑紫ニ逐ハレニ子テ

リ安壽姫津塩丸ト呼ブ或ル時ニ子其ノ母ニ問フ朋
友皆父母アルニ我等何故父君無キ願ハクハ之レニ
逢ハセ給ヘト母ハ之レヲ聞クヤ涙ニ咽ビツ、語グ
ルニ事ノ由ヲ以テスニ子ハ父君ノ安否ヲ聞カマホ
シク西國ニ赴カント云フニゾ母モ亦兼ネテヨリノ
思フ所ナレバトテ三人ハ習ハヌ旅路ニ上リタルガ
越後ノ直井浦ニテ惡徒ニ誘拐セラレテ山岡大夫ナ
ルモノ家ニ賣ラレ更ニ母ハ佐渡次郎ナルモノニニ
子ハ宮崎三郎ナルモノニ轉賣セラレニ子ノ舟ハ母
ノ許ヲ離レテ丹後ノ由良ニ入り山椒大夫ノ手ニ買
ハレ哀レ母子ノ音信ハ知ル由モ無クニ子ハ刈草薪
取リ水汲ミ麥搗キ等ノ使役ニ従事シ悲シキ月日ヲ

知ラヌ所ニ送り居タルガ大夫ノ三男某ハ父ニ勝ルノ
無精漢ニシテ婢僕ヲ酷使スルト牛馬ノ如クスニ子ハ
軟弱ノ質ニテ堪エ得バクモアラザレバ一夜相語り
如何ニキシテ此ノ苦患ヲ脱セント泣ク々々夜ニ乘
ジ和江ノ國分寺ニ投ジ其ノ苦衷ヲ訴ヘテ救助ヲ乞
フ寺僧中ニ高野ノ聖トテ厚德慈心ノ居合ハスアリ
兼ネテ山椒大夫ノ富裕ニシテ無慈悲惡道ナルヲ聞
キタルトトテ命ニ換ヘテ救ヒトラセント急ニ之レ
ヲ隱匿シ古葛籠ニ容レ小屋ニ平ルス山椒大夫ハ其
ノ丘子ト若者ヲ引キ連レ来リ求ムトモ得ズシテ
他ニ去ル翌朝早ク聖ハ其ノ葛籠ヲ却シ之レヲ背ニ
負ヒ人目無キ所ハ少マセ村落ニテハ之レヲ脊ニシ

山ニ寐ネ野ニ臥シ漸ニシテ此所マデ来リ今ハ危難
モ無カル可シトテ或ル茶屋ニ入り緩ルニ旅路ノ
疲労ヲ忘レタリ是レヨリシテ其ノ葛籠ヲ卸セル所
テ茶屋ノ前トハ呼ビテセリトカヤ夫レヨリ聖ハ京
都ニ向ヒ朱雀ノ權現堂ニ入り又ニ子ヲ京ノ東ナル
大悲閣ニ入レ僧ニセバヤトスル折柄上卿梅津院ナ
ル人未リ清水ノ觀世音ニ一子ヲ祈ルニ子ノ囑エニ
在ルヲ見ルニ夢中見タル者ナレバ聖ニ乞フテ伴ヒ
歸リ朝ニ請フ諸卿之レヲ信ゼス之レヲニ子ニ亂ス
ニ子其ノ母ヨリ聞ケル所ヲ以テ對テ是レニ由リ勅
許ヲ得テ舊地ニ還住スルトトナレルカ津塩トテ
テ丹後ニ官使トナリ母ヲ索ノテ之レヲ佐渡ヨリ

迎ヘ相薦ヘテ國分寺ニ詣テ謝恩喜捨シ山椒大夫ト
三郎五郎ノ二子ヲ誅シ之レヲ鋸引ニシタリトカヤ
小説的口碑此ノ如シ明治初年ニハ其ノ芝アリシ
ガ今ハ水田トナリテ迹方無シ山椒トハ其ノ辛味
ヲ采リ惡罵シタルモノ其ノ實ハ三所ノ莊園ヲ有
シタルヨリノ名ナリト云フ
田養水ノ赤川 往古ハ一大潜水ニシテ巨蛇住ミ人
民ソノ害ヲ買フ伊達忠衡コレヲ殺ス其ノ血ヤカテ
一筋ノ流レトナル名ノ起コル所以ナリ忠衡ノテハ
宇津根ノ伊達神社由來中ニ出タス
天王山長興寺 禪宗曹洞派京南八幡神庭寺末開山
心法米波和尚 千手觀音堂福井因幡守墓等アリ

京都府立総合資料館所蔵

新家

前文參看アルベシ

八幡社 天神社 兵庫寺址 庚申堂迹等余部地

内ニアリ

小字新家 新家村高百三十六石五斗 此ノ地ハ

余部ノ出作新村ナリ古書アリ文ニ云フ

余部村高之内新家村跡役赦免之證文

餘部村高之内百三十五石八斗一升一合ハ當辰
年より出屋鋪定免五ツ取ニ相定其上跡役赦免
ニ等也

寛永十七年

古田久右衛門印

辰五月朔日

海北太郎右衛門印

菅沼治左衛門印

走田神社

走田神社 主神 鷄萱葺不合尊 右彦火々出見
 尊 左玉姬尊ヲ祀ル式内神社ナリ主神ハ御童形
 ニシテ何日何人ノ作レルカ詳ナラズ勸請時代履
 歴等知ルニ由無シ祠官ハ權頭ト呼ブ 社境東西
 五十間南北七十間ノ除地
 葺不合尊ノ生レマスヤ御母玉依姬夫火々出見尊
 ニ戒メ來リ見ル勿ラシム然ルニ夫若ハ竊ニ覗ヒ
 玉フニ龍ガ兒ヲ育ツルナリ龍見ラル、ヲ怒リ海
 ニ入ル云々此社ハ其ノ御三方ヲ祀レルナリ何レ
 モ御木像ニシテ兩部神道當時ハ木尊ヲ辨財天女
 トシ脇立ヲ觀世音守敏トシ神名ハ七滅シ其ノ祭
 日モ七月二十一日トシテ辨天祭ヲ行ヒ九月十八

日ニ觀音ヲ祭リ十一月五日ニ守敏ノ法要ヲ修メ
 タリ
 走田古語 往古本社飼養ノ馬一説ニハ繪馬或ハ
 木馬トモ曰フガ毎夜走出シ其ノ行路ヲ同クスル
 モノカラ蹄迹相襲ギ相産ナリ終ニ一小細溝トナ
 リ社境ノ湧泉コレニ由リ流レ田ニ灌ギ夏苗ヲ養
 フテ乾涸セズ農民以テ神德ノ致ス所トシ終ニハ
 社名トナレリ毎年二月八月午ノ日ヲ以テ溝洫ヲ
 浚滌シ白豆ヲ水煮ニシテ神前ニ供ヘ神酒ト共
 ニ之レヲ氏子ニ頒ツノ例アリ靈馬ニ報恩ミタル
 事ノ遺レルナリ維新後十月廿五日ヲ以テ町祭ト
 定メタルヲ以テ右ノ三祭日ハ止メラレタリ當社

叫 殿 志

加塚

ヨリ出ヅル神輿ト騎馬ノ神官ハ安町ヲ限リトシ
テ引返ス他ノ行装ハ無シ
加塚ノ塚ハ土饅頭ノ上ニ三思萬靈碑ヲ載ス余部
合戦ノ屍骸ヲ埋葬シタル假冢ナリト云フ安倍安
行ノ假塚トモ云フ
余部酸棗 酸棗一名玉母珠又ハ金燈籠トモ云フ
東京ニテハ丹波ホウブキト呼ビ以テ海酸棗ニ分
カフ此ノ地ノ一大名産トシテ四方ニ搬出ス其ノ
地味ニ適スルニヤ捨テ育チモスル况テヤ田野ニ
栽培スルニ於テオヤ一莖九顆ノモノヲ最上品ト
豊作ノ年ニハ一莖數十顆ノモノアリ近年虫害ニ
罹カルト頻々皮囊ヲヒテ蚊蚋ノ如クナラシメ中

實乾枯シテ復昔日ノ如キ好結果ヲ奏セズ七月九
日攝津ノ中山親音ノ法會ニハ古來必需品トシテ
數萬石ノ輸出アリタルガ年ヲ逐テ減少スルノ
傾アリ明治十五年頃ノ相場一莖八錢維新前ニハ
一顆五毛五文ハ一莖四厘五毛
大江資衡字維圭號玄圃ハ伏水ノ龍草廬ノ門人十
六子ノ一ナルガ左ノ詩アリ

恭賦金燈籠奉獻

京極親王殿下伏希電矚 大江資衡

花開碎白吐芳鬚枝上無囊美玉朱皮弁城々遙玳
瑁燈篝灼々席珮瑚月明玉母來呈壽露冷洛神時
獻珠憐子長爲曳裾客平臺秋色日陪趨

鬼燈や世帯若房ハ知らぬ妻 丹痴

福井丹波守 前ニ福井因幡守アリ後ニ福井丹波
守アリ一ハ戰場ニ罪無キ者ヲ殺シテ身亦死シ一
ハ病アル者ヲ生カセテ世ヲ永クス丹波守前名終
吉名ハ需孫光亭寶曆三年癸酉ニ生誕ス幼少ヨリ
濟世救人ノ思想ヲ抱キ早ク家ヲ出デ、京醫諸家
ニ出入シ意ヲ得ズ懊悩スル間ニ自得スル所アリ
初メテ門戸ヲ啓キ草根木皮ヲ自己ノ意思ニ從フ
ヲ應用シ古方ニ據ラズレテ醫治シ往々適中レ門
前患者ヲ以テ盈ツルニ至ル日野從一位資校御延
キテ治病セシメテ即效アリ出デ、朝ス孝格天皇
驚キ問ハセ玉フ御ノ病重キニ非ズヤ何レゾ相見

ルヲ得ルノ早キ御奏ス所醫終吉ナルモノハ神
醫ナリト時ニ天皇御體衰憊ナルヲ以テ曲藥頭治
療シ奉レトモ寸效無キヲ以テ終吉ヲ呼ビトノ御
意アリ御諸大臣ト議シ從五位下ニ叙シ拜診セシ
ム診斷諸醫ト異ナリ僅ニニ包藥ヲ進メ奉リテ御
體輕減シ數日ニシテ全癒シ玉フ御床拂ノ日ヲ以
テ丹波守曲藥頭ニ任セラル人ヲ以テ康賴ノ再生ト
ス時ニ賀茂季鷹ハ歌ヲ以テ岸駒ハ画ヲ以テ丹波
守ハ醫ヲ以テ平安京都ノ三大老ト稱セラル弘化
元年正月十九日九十二歳ニシテ卒ス
著者ノ祖父ハ日野家ノ庶流ナル松波ト云フ北面
ノ武士家ヨリ出デタル人ナルニ由リ日野家ニ出

丹波守ト相知リ遂ニ相互親シク交ハリ其ノ
行爲ヲ物語リ著者ニモ聞カセヌ曰ハク我ハ醫道
ヲ知ラザルニ由リ其ノ病症ノ觀察カヤ投藥ノ適
否ハ之レヲ評シ得ザルガ其ノ治法ヲ推察スルニ
第一ニ病者ノ神經ヲ沉静セシメ深ク己ヲ信ゼシ
メテ後之レヲ安慰スルニ在リ其ノ一例ヲ示サン
ニ門庭室屋ヲ清美ニシ身體衣服ヲ麗整ニシ來者
ヲシテ一瞥敬服セシムルニ在リ其ノ病者ニ對ス
ルヤ曰ハク汝ノ病ハ此ノ丹波守ガ受ケ負フタゾ
ヤ案ヅルナト皆治々トシテ去ル果シテ其ノ輕減
治愈スル神速ナリキ上ハ宮中ヨリ下ハ貧民ニ至
ルマデ上下貧富ヲ論セズ一心治療ニ從事シ良藥

ヲ用ヒテ多服セシメズ只濟世救人ヲ以テ自己ノ
樂トス日々日暮家ニ歸ルヤ裏門ヲ開キ煎餅ヲ大
道ニ撒キ兒童ノ集リ拾フヲ見テ終日ノ勞ヲ忘ル
居宅ハ上京元誓願寺大宮東ニアリ其ノ開業當時
ハ羽織ヲ着シ惣髮頭ニシテ樸質風采揚カラザリ
シモ一朝御醫トナリ袴着用兩刀ヲ佩ビ長棒四枚
肩ノ乘輿侍輿ノ僕從儼然タル體裁京都ノ醫者ヲ
誇ルモノ先ヅ指テ此ノ仁術家ニ屬ス
深海善左衛門 寛政年間ニ於テ龜山ノ奇持者ト
シテ稱セラル近江ノ佐々木氏ヨリ出デ父元陳河
原町ニ來住シ醬油製造ヲ始メ品精ニシテ價廉ナ
リ利益月ニ増シ役僕歳ニ加ハリ買人常ニ庭ニ溢

ル毎夜僮僕ニ筆算ヲ授ケ身亦共ニ働キ町事ヲ顧
ミ紛議ヲ判シ凶年救貧ノ術ニ當タリ田主ノ範ヲ
ス藩士ノ貧困ヲ濟ヒ社事寺事周旋至ラザレ無シ藩
主賞譽ニ過スルニ士人ヲ以テス賞詞アリ

河原町 善左衛門

其方儀身行凶友家内を治め下人等を善く導き
多年のを長し貧乏者を救ひきし事業は出物
多奇持よりその用益より多産ある字他り帯刀
は 所忽々 弥善心を以て事業出物多奇也

文正月

文化元年甲子五月廿一日歿ス享年七十三積善ノ
餘慶其ノ子善左衛門ノ勤王家ナル事頼三樹ヲ助

ケタルト久美濱縣ニ登用セラレタルト子孫繁衍
スル等ノ事逐一記載スルニ違アラズ大塩平八郎
ノ扇面揮毫ヲ藏ス平八郎ノ事ヲ揚ケル前年此家
ニ來寓シタリトノ説アリテ其ノ書數葉アリタル
モ嫌疑ヲ惧レテ燒棄シタリト云フ光忠寺所藏ノ
一幅モ此ノ時ノ手揮ナラシ宿院西光寺ノ墓ニ左
ノ刻文アリ

深海知足翁墓碣

翁姓源諱教綱知足其齋名丹波龜山人其先蓋出千
淡海鷓鴣氏父元陳居城北河原街以釀造爲産家頗
饒富兄高剛好方以醫爲業及父死翁承其家不追末
利先業是守其製愈精於是年深海氏之醴醬聞四國

京都府立総合資料館所蔵

家乃益富僮僕亦多晝則令之出賣夜則聚以教書計
申以孝順之事諄々乎不倦殆如塾師之於徒第也翁
明事情廉取予莫市井儉利之風凡鄉鄰有事必剖析
利害推其赤心往々帖服而去往年米粟騰貴餓莩相
接翁爲發倉廩以賑給之一鄉賴以安寬政中龜山侯
聞其行事召而賞之令帶刀以比士人文化元年甲子
五月二十五日歿享年七十三闔鄉莫不痛惜妻藤木
氏生一男一女男名氏壽夫以兄子高邦爲嗣高邦葬
諸城西々光寺先塋之側因其通家鶴飼楠陸請曰先
父雖側陋竊慕君子之風苟得一言以勒貞石則榮幸
何加焉余識楠陸三十年故不敢辭而爲之銘々曰
偉矣此翁 言行閤々 能居其室 波及其隣

雖在市井 抑君子人

文化四年丁卯六月

孝子高邦建

阿波文學

藤原 憲撰

平安

石原恭貌書

余部村社倉米記事 前示ノ藩園米参照ノ下
玄米壹百參拾石餘此ノ元米高ハ詳ナラズ藩廳ヨ
リ支給シタルモノヲ高持百姓ニ割リ當ラ、貸シ
付ケ其ノ返米ト利米トヲ合ハセタル高ナリト云
フ其ノ高持ニ貸シ與ハタル理由モ詳ナラズ或ハ
凶年ニ際シ給助シタルモノ半或ハ利殖ノ爲ニ元
米ヲ強貸シタルモノ半明治二十二年六月所村制
改正セラレ龜岡町制ノ成ルニ當タリ余部モ其ノ

町ニ併合シ經濟ヲ共同スルヲ以テ右ノ積五米ヲ
 町ノ基本財産中ニ組入ル、トナレリ
 一 玄米貳石五斗 右社倉米利米ノ殘餘
 一金六拾四圓八拾錢 此ノ米拾石八斗六升
 右ハ明治十四年八町(市字)道路修繕ニ係カル補
 助ノ内ヲ同十八年ニ下附セラレタルモノト同
 二十二年六月社倉米ヲ田中數之助ガ買受ケタ
 ル内特志ヲ以テ余部ハ惠與シタルモノトノ合
 ハセタル額ナリ
 一 在米高拾三石三斗六升此ノ利米三石二斗一升
 米一石ニ付キ二升ノ割ニテ同二十二年ヨリ三
 十三年ニ至ル十二ヶ年ノ利米ナリ

一 同拾六石五斗七升 同四十三年在米高ニテ利米
 六石六斗二升八合 糶喰雇人給料ヲ引ク
 一 同貳拾三石一斗九升八合
 一 同貳拾貳石六斗四升 現在高 此ノ内ヨリ儲
 倉新設費拾參圓七十二錢ヲ引クマキノ所同十
 四年ヨリ二十二年ニ至ルノ實米利子ト余部ハ
 新入者ノ加入金アリタルトヲ以テ之レニ當テ
 社倉米ニハ手ヲ着ケズ 社倉米看守人ニ名ア
 リ交代勤務ス
 小字宇津根舊稱宇津根村高二百九十石五斗三升
 文久改正二百九十一石八斗五升五合二勺
 氏神 大井神社 並阿ニ在リ

式内 伊達神社、法藏寺境内ニ在リ祭式七月ニ
十三日火焚十一月二十三日
口碑ノ傳アル所ニ據レバ履歷左ノ如シ
陸奥ノ國司藤原秀衡ノ三男泉三郎忠衡ガ京都ヲ
守衛スルノ五箇年ニシテ此ノ地ヲ朝宿邑トシテ
別館ヲ建テ時々此ノ賜地ニ來リ休止ス村長ノ女
ノ殊色アルヲ看テ入レテ妾トシ娠ムアリ任滿テ
東歸スルニ當タリ路程ノ遙遠ナルヲ以テ携フ可
ラズトテ鎧刀黄金ヲ頒與シテ曰ハク腹中ノ子若
男兒ナラバ鎧刀ヲ證據トシ黄金ヲ旅費トシテ機
ヲ昏テ奥ニ下レ如女子ナラバ黄金ヲ嫁資トシテ
他家ニ與ハ鎧刀ハ汝ノ家ニ置ケトテ村長某ニ命

ジ別ヲ惜ミ東歸ス月滿ナテ女子産マル年長ジ同
村某氏ニ嫁ス鎧刀ヲ引出物トシ黄金ヲ裝貫ニス
女子ハ父ヲ想ヒ妾ハ夫ヲ戀ヒ庭内ニ小祠ヲ造リ
二人拜祀是レ最ム即伊達神社コレナリト云フ然
ルニ延喜式神名帳ニ此ノ社名アリテ緣起業既ニ
具ハル何人カ此ノ小説ヲ擬作シテ後人ヲ惑ハセ
ル赤川ノ豪傑物語ト相似タル無根ノトニヤ
赤川ハ宇津根ト余部トノ間ヲ流ル、小渠ナリ口
碑ノ傳アル所左ノ如シ
此ノ川流ノ源池ニ大蛇アリ時々出デ、人ヲ吞ム
是レニ由リ行道杜絶ス伊達忠衡之レヲ聞キ單身
來リ窺フヲ數夜偶然相遇フ之レヲ刺ス數刀蛇仆

京都府立総合資料館所蔵

レテ流血數町ノ川ヲ成ヌ由リテ名ト爲ル 丹波
ノ國名モ是レヨリ出ヅトノ誤説ハ判シテ終論ニ
出タス

太白山法藏寺 淨土宗 山城禪林寺末 本尊阿
彌陀如來

修驗道正藏院京都聖護院宮ノ配下ニレテ山伏コ
レヲ掌ル 開基ハ 正統法印祭ル所ハ 牛頭天
王右ニ從行者左ニ不動明王

大鹽騷動
御光中水野越前守殿所渡所書付 大目付ハ
當二月十九日不容易及在大坂市中所ニ放火致
及訛妨々之大坂所多行但與カ大塩平八郎孫ニ

但カ力大塩孫ノ助同濟ノ助同組同心渡邊
良右衛門曰彦司裁在石門曰重友鍋五郎伴重友
旗五郎等ノ人相書

大塩平八郎

- 一年齡四十五六歳
- 一 顔細長く色白き方
- 一 眉毛細く薄き方
- 一 額開き自代高き方
- 一 眼細くつらみ方
- 一 鼻平辨
- 一 耳平辨
- 一 舌舌さきやうき方
- 一 唇高き唇用 喉取付胃 舌平隆起
- 一 其餘若用少少方

- 一年齡廿七八歳
- 一 顔短く色黒き方
- 一 大塩孫ノ助

一 せい 俵き方 一 昇 葦 葺

一 男毛 石き方 一 歯上 向 杖 おれ有き

一言 舌 辭き方 一 長 市 用 ぬおふ

(四名い 分ハ 畧ス)

右に 通し 者 共 於 有き 長所 多 並 早 大 坂 町
より 所 下 下 出 々 限 並 賜 じ ち 知 づ 可 否
四 々 々 々

大塩 平八郎 事件ハ 今 猶 丹波 人ノ 口 碑ニ アルヲ 以
テ 之ヲ 畧ス 其ノ 事ヲ 舉ゲル 前ニ 當國ニ 來リタル
下ハ 龜岡 所 深 海 方ニ アル 口 碑ト 扇 面コレヲ 證ス
且 同 町ヨリ 田能 村今ノ 内 榎 田ハ 越エル 辻 堂ニ 住 居
レ 井タル 老 尼ハ 平八郎ト 關 係アリタルモノ、由

ニテ 七言 絶句ノ 一幅ヲ 秘藏セリ 落款ニ 洗心洞主
後素トアリ 田能村ノ 部ヲ 参看セヨ 檉村ハ 南 栗 田
郡ニ 屬ス

春日 社 笹山ナ 大元 元 箱 荷 垣内ニ 在リ 安永 八

巳亥 年 五 月 十 九 日 此 地ニ 移々 笹山ノ 産土 神ナ

レバナリ 祈願 所 寶藏 院 城ノ 鬼門 相殿 八幡ハ

高槻ノ 産神 相殿 今 官 洛 北ノ 神社 二 條 城 邊ノ

産神ニ

大先 達々 ラン 下ヲ 希 望ス 寶藏 院ニテハ 格 式 不

十分ナルヲ 以 藩ヨリ 納金シテ 寶成 院トナリ 大先

達トナル

八上ヤニ 藩主ノ 第 乱 妨人

寶藏院

長松山 涼光寺蓮花坊 聖護院官御直末 中

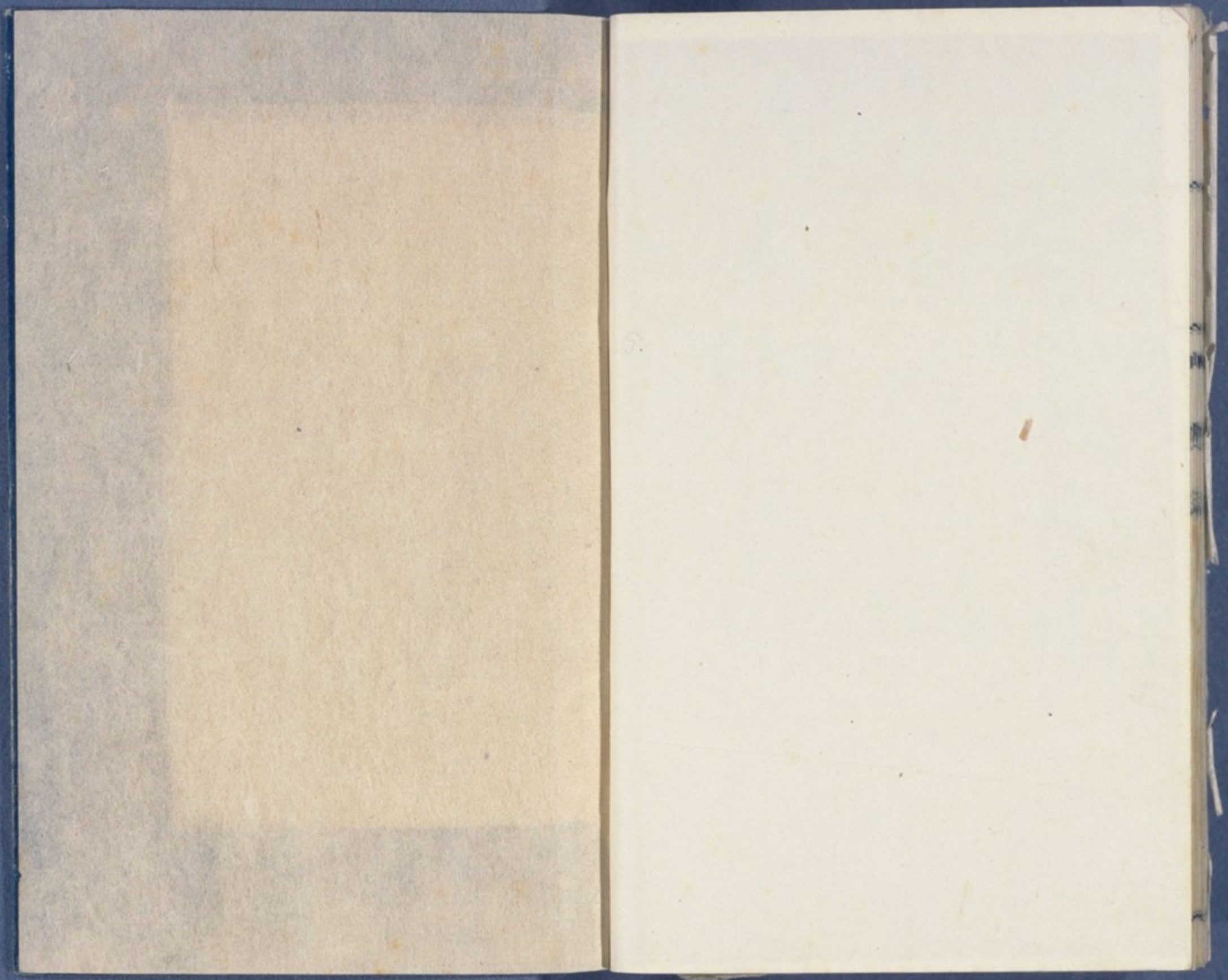
興權大僧都源光 本尊青面金剛童子 二尺 天

王寺ノ庚申ト同作 大黒天 出山ノ釋迦 牛玉

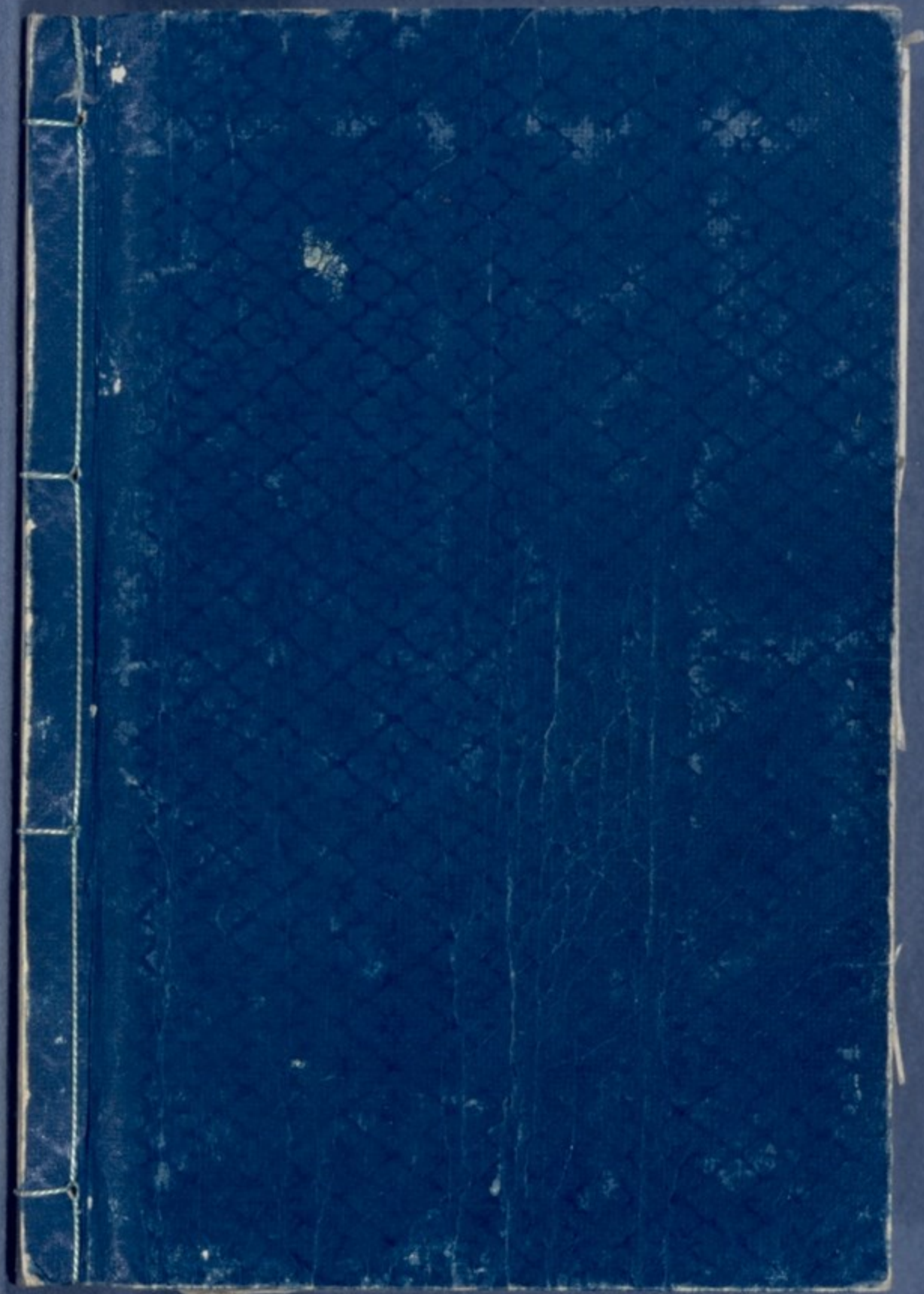
天駒ノ臥 相殿出世稻荷 左右ニ金毘羅現天満宮

美女御前ヲ疔瘡 不動石 泉水ノ中ニアリ 五尺

ノ立石 竈ノモノハ瘡ヲ疔ム



京都府立総合資料館所蔵



京都府立総合資料館所蔵